

Wizard Wars —現代魔
術譚—

空色悠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天が人に与えた力『魔術』。

その力は永い人類史の影で、幾度となく戦争を引き起こして来た。

数千年を超える時を経て尚続く『魔術師』達の戦いが、一人の少年によつて転換点を迎えるようとしていた。

少年とその仲間達が辿つた激闘の軌跡を綴る現代魔術譚、開幕——
セクション1 『魔術学園2046篇』

異空間に構成された『魔術都市・東京』に存在する、現代の魔術師養成機関『国立東帝魔術学園』。新たに入学した少年春川 日向は、思惑渦巻くその場所で次世代の魔術

師達との戦いに身を投じる事になる。

そして彼等を狙い、ある『魔術結社』もまた動き出そうとしていた——

※この物語はフィクションです。実在する人物・団体・宗教・国家とは一切関係ありません。

「小説家になろう」様、「カクヨム」様、「アルファポリス」様にもマルチ投稿しています。

▽なろう版

<https://ncode.syosetu.com/n9255ho/>

Twitter開設しました。

<https://twitter.com/sorairoharuka> | W

目次

設定集

登場人物 ※随時更新 | 1

用語解説 ※随時更新 | 15

セクション1 『魔術学園2046篇』

第1話 『Wizards Wars |

現代魔術戦争』 | 22

第2話 『Wizards Schoo

l | 東帝魔術学園』 | 35

第3話 『Exorcised Swor

d | 退魔ノ剣』 | 52

第4話 『Kick Strike

蹴撃一閃』 | 62

第5話 『Armor Knuckle

| 機甲の拳』 | 77

第6話 『Mad Snake | 狂え

る戦蛇』 | 94

第7話 『Golden Leo | 金

獅子』 | 106

第8話 『Appearing Sha

dow | 顕れし影』 | 120

第9話 『Black Beast |

黒き猛獣』 | 133

第10話 『Outsider | 来訪

者』 | 152

第11話 『Circumstance

第17話『Invading Sal』	254	第25話『バトルロイヤル』	413
第16話『King of Blaz』	241	第24話『東帝戦開幕』	394
第15話『Reason Living』	226	第23話『進化への助走』	374
双属性魔術師』	226	第22話『再会と報告』	357
第14話『Dual Wizard』	207	第21話『高次魔術訓練』	339
急転』	207	第20話『東帝十席』	325
第13話『Sudden Turn』	287	ネクストフェイズ』	304
187	287	第19話『Next Phase』	287
Friends 信じる友』	170	iving 生きている意味』	287
第12話『Believable』	170	第18話『Meaning of L』	269
s 境遇』	170	amander 火竜襲来』	269

第26話『最強』	『包圍網』	—	431
第27話『風神雷神』	—	—	448
第28話『インビジブル・バレット』	—	—	466
第29話『現在地』	—	—	484
第30話『1日目、終了』	—	—	501
第31話『十席集結』	—	—	512
第32話『絶対防御術式』	—	—	525
第33話『強さの在り方』	—	—	549
第34話『黒獣咆哮』	—	—	568
第35話『テレポーター』	—	—	583
第36話『飛斬改式剣術』	—	—	596
第37話『エンターテイナーズ』	—	—	—

第38話『セカンド・ブレイズ』	—	—	609
第39話『相棒対決』	—	—	623
第40話『炎刃乱舞』	—	—	664
第41話『龍炎天閃』	—	—	682
第42話『訣別、急襲』	—	—	696
第43話『二つの脅威』	—	—	720
第44話『ワンダー・アンダー・ラン ダーズ』	—	—	742
第45話『軍師』	—	—	759
第46話『蛇の道』	—	—	779
第47話『目醒め、羽搏く』	—	—	806

第48話 『氷刃闇翼』

第49話 『決勝戦』

第50話 『業火墜星』

第51話 『幻炎、鬼王』

825

846

860

875

設定集

登場人物 ※随時更新

《東帝学園・新入生》

春川 日向

東帝魔術学園に入学した少年。忍者の末裔である祖父から教わった体術と火属性魔力による身体強化で戦う。明るく屈託の無い性格で誰とでも友好的な関係を築けるが、喧嘩っ早いトラブルメーカーでもある。紅色の髪と瞳を持つ。一年生。身長170cm。

御剣 伊織

魔力を一切持たない、特異体質の少年。魔術が使えないが、驚異的な身体能力と剣術を駆使して戦う。クールな性格に見えるが仁義と礼儀を重んじており、筋の通らない事を嫌う真つ直ぐな一面も持ち合わせている。紺色の髪と瞳を持つ。一年生。身長172cm。

藤堂 天音

日本魔術界に於ける名家『藤堂家』の第三子として生まれた少女。八つ全ての属性性

質と膨大な魔力を持った『神童』として東帝に新入生首席で入学する。プライドが高いが、研鑽に一切の妥協をしない努力家としての一面も持つ。金色の髪と虹色の瞳を持つ。一年生。身長158cm。

スメラギ
皇 啓治

日本最大の軍事企業『皇重工』の御曹司。卓越した格闘技術と、無属性魔力による身体強化で戦う。女好きで軽薄な人物だが、幼い頃魔術師に救われた経験があり人々を救う『ヒーロー』になるべく努力している。茶色の髪と瞳を持つ。一年生。身長177cm。

クウジョウ
空条 沙霧

名家『空条家』出身の少女。相伝術式の一つ『障壁術』を継承しており堅固な防御力を誇る。引っ込み思案で内気だが心優しい性格で、幼馴染の天音を慕っている。水色の髪と瞳を持つ。一年生。身長160cm。

ウルシマ
漆間 創来

喧嘩好きな不良少年。鋸のような大剣と闇属性の魔力を武器に戦う。粗暴で好戦的な性格をしており、入学早々に事件を起こし謹慎させられていた問題児。黒色の髪と瞳を持つ。一年生。身長176cm。

イチモンジ
一文字 陣

関西弁と糸目が特徴的な少年。器用貧乏を自称しており、射撃、拘束、幻術など多様な術式を巧みに操りに操り戦う。陽気で社交的な性格のため、情報通で噂話にも詳しい。緑色の髪を持つ。一年生。身長169cm。

更科サラシナ 風オキ

小柄で無口な少女。『隠密』ステルスという特殊な術式を持ち、加えて魔術による高速移動と二本のナイフを用いて戦う。常に眠そうにしているが、口を開くと意外と毒舌。灰色の髪と瞳を持つ。一年生。身長145cm。

天城アマキ 鎧ガイ

名家『神宮寺家』傘下の『天城家』出身の少年。光属性の魔力と槍術を駆使して戦う。穏和な性格で向上心の強い人物。黒色の髪と瞳を持つ。一年生。身長175cm。

《生徒会執行部》

黒乃クロノ 雪華ユキカ

『女王』の異名を持つ生徒会長。大鎌と氷・闇の二属性魔力、そして『催眠術式』ヒプノシスフォーミュラを操る。『黒乃財閥』の令嬢であり、妖艶な容姿と優れた人身体術を有する。漆黒色の髪と瞳を持つ。三年生。身長165cm。

白幡シラハタ 千聖チサト

猫耳が付いたフードパーカーを着た、生徒会副会長を務める少女。習得難度の高い

『術式付与』^{エンチャント}を操る、サポートに長けたプロフェッショナル。明るくマイペースな性格で、常に棒付きキャンディを啜えている。白金色の髪と水色の瞳を持つ。三年生。身長

157 cm。

一条ハル^{イチジョウ}

生徒会執行部書記を務めるツインテールの少女。状況に応じて二丁拳銃^{ツインマグナム}と戦斧^{バトルアックス}を使い分けて戦い、また火属性魔力を有する。雪華に心酔しており、彼女に敵対する者には容赦しない忠実な部下。赤色の髪と瞳を持つ。二年生。身長159 cm。

九重絵恋^{コノエ}

生徒会執行部会計を務めるポニーテールの少女。長剣と水・雷・氷の三属性魔力を駆使して戦う。ハルの親友で、控えめな性格ながら優秀な人物として多くの人間から信頼を寄せられている。金色の髪と青色の瞳を持つ。二年生。身長162 cm。

《風紀委員会》

神宮寺奏^{ジングウジ}

『剣鬼』と恐れられる風紀委員長。魔力保有量が少ないながらも武術全般の達人であり高い戦闘能力を持つ。眼鏡を掛けた端正な容姿に厳格な性格の人物で、主に女子から絶大な人気を集めている。黒色の髪と瞳を持つ。三年生。身長169 cm。

如月亜門^{キサラギ}

風紀委員会の一人であり、『風神』の異名を持つ学園最速の男。かつて関西最強と謳われた『如月兄弟』の双子の兄。風属性魔力と双剣術による『如月二刀流』を用いて戦う。一年時は好奇心の赴くままに様々な問題を引き起こす異端児だったが、奏によって風紀委員会に入れられて以降は一応更生しているらしい。翡翠色の髪と青色の瞳を持つ。二年生。身長187cm。

如月 キサラキ 士門 シモン

風紀委員会の一人であり、『雷神』の異名を持つ『如月兄弟』の双子の弟。雷属性魔力と双剣術による『如月二刀流』、そして大剣による『如月一刀流』を駆使して戦う。兄の亜門同様に常日頃から騒ぎを起こす問題児で、彼もまた奏によって半強制的に風紀委員会入りさせられた。金色の髪と茶色の瞳を持つ。身長188cm。

湊 ミナト 紅輔 コウスケ

風紀委員会の一人。ライフルを武器とする狙撃の名手ながら剣技にも秀でたオールラウンダー。取引によって生徒の不祥事を握り潰す事もある食えない男で、如月兄弟とは委員会に入る以前からの悪友。ウルフカットの黒色の髪と赤色の瞳を持つ。一年生。身長182cm。

《保健委員会》

綾坂 アヤサカ 未来 ミライ

『聖母』と謳われる保健委員長。医学科に所属しており、優れた回復魔術を操る。雪華に並ぶ美貌を持ち、また柔和な性格で多くの生徒から人気を集めている。琥珀色の髪と瞳を持つ。三年生。身長162cm。

《大文字一派》

大文字ダイモンジ 獅堂シドウ

『金獅子』の異名を持ち、不良集団『大文字一派』のトップに立つ男。大剣と雷属性の魔力を用いて戦う。凶暴な性格で、荒くれ者達を束ねる学園随一の武闘派。黒色と金色の髪に黒色の瞳を持つ。三年生。身長196cm。

諸屋モロボシ 敦士アツシ

眼鏡を掛けた優等生のような風貌ながら、不良集団に属する人物。優れた知能と魔術の才能、そして洗練された格闘技術を持つ大文字一派のNo.2。クールな性格で常に冷静沈着。黒色の髪と瞳を持つ。三年生。身長178cm。

蛇島ヘビシマ 司ツカサ

学園屈指の戦闘狂たる大文字一派No.3。片手斧と『反射術式』リフレクトフォーミュラが付加された盾を用いて戦う。凶暴な性格で戦い以外の事柄にはほぼ興味を示さない。白色の髪と赤色の瞳を持つ。三年生。身長175cm。

壬生ミミブ 閃九郎センクロウ

大文字一派の一人。剣術に長けている。中性的で整った容姿を持つ少年。董色の髪と瞳を持つ。二年生。身長167cm。

愛染アイゼン 光陰コウイン

大文字一派の一人。優れた後方支援役。不良集団に見合わない穏やかな性格。臙脂色の髪と瞳を持つ。二年生。身長177cm。

斯波シバ 一太郎イチタロウ

大文字一派の一人。格闘術に秀でる。仲間からはイッチと呼ばれている有名な喧嘩師。灰色の髪と黒色の瞳を持つ。二年生。身長180cm。

鬼丸オニマル コージ

大文字一派の一人。拳銃を武器とする。ジーコの愛称で親しまれるムードメーカー。金色の髪と黒色の瞳を持つ。二年生。身長176cm。

《無所属・一般生徒》

天堂テンドウ 蒼アオイ

『剣聖』の異名を持つ学園最強の人物。万物を斬り裂く術式『斬界』を操る。自由奔放な性格で気分屋だが、その実力はプロをも大きく凌駕する程。薄茶色の髪と瞳を持つ。三年生。身長181cm。

ステイブ・ジャクソン

武者修行を目的に来日した留学生。剣術と魔術を組み合わせて戦う。勤勉かつ実直な性格で、蒼の弟子かつ彼の右腕として常に付き従っている。金色の髪と碧色の瞳を持つ。二年生。身長186cm。

結城 ユツキ 結弦 ユヅル

普通の高校生活を送っていた時にスカウトされ、二年から東帝に編入した異例の経歴を持つ生徒。極めて希少な『空間転移』テレポルトの術式を操り、ナイフとハンドガンを用いて戦う。その能力の有用性から魔術管理局の任務に度々協力している為、学園に不在の時が多い。黒色の髪と瞳を持つ。三年生。身長166cm。

風切 カザキリ アラン

キヤップとスカジャンが特徴的な少女。幻術のスペシャリストであり、学生ながら魔術管理局の捜査に協力する事もある。神出鬼没な変人として知られているが、意外と気さくな性格の人物。浅葱色の髪と瞳を持つ。二年生。身長160cm。

古田 フルタ 徹彦 テツヒコ

天然パーマが印象的な少年。かつてある組織に誘拐され『術式移植手術』を施された過去を持ち、それによって得た『絶対防御術式』が体表に常時展開されている。怠惰な性格で何事にもあまりやる気を示さない。黒色の髪と灰色の瞳を持つ。二年生。身長169cm。

《教員陣》

桐谷 キリタニ 恭夜 キヨウヤ

東帝で教師を務める青年。世界最強の魔術師の一人と言われており、圧倒的な実力と実績を持つ。飄々としており掴み所の無い人物だが、魔術教育の腕は確かであり多くの生徒から慕われている。黒色の髪を持ち、常にサングラスを掛けている。25歳。身長

189cm。ランカーウィザード S級魔術師。神宮寺 ジンクウジ 澄香 スミカ

東帝の学園長を務める女性。『藤堂流』と『如月流』の二大流派から免許皆伝を受けた剣豪。美しく聡明な人物で、生徒を正しい道へと導くべく心血を注いでいる。右目付近に刀傷があり、銀色の髪と紫色の瞳を持つ。32歳。身長170cm。

万丈 バンジヨウ 大和 ヤマト

東帝の主任教員を務める男性。様々な魔術に精通する万能の術師でありながら、格闘や射撃などの戦闘術にも優れている。寡黙で大柄な体格のため怖がられる事の多い人物だが、性格は至って穏やかで温厚。朱色の髪と茶色の瞳を持つ。36歳。身長195

cm。

冴羽 サエバ 怜 レイ

理論講義や魔術科学を担当する眼鏡を掛けた教員。優れた頭脳を持った理論派だが、

劍術にも長けており戦闘能力も高い。冷めた性格と思われているが、実は面倒見が良
い。濡羽色の髪と青色の瞳を持つ。26歳。身長159cm。

久世 宗一
クセ ソウイチ

術式技能を担当する指導員。氷属性魔力を自在に操り、学生時代は天才魔術師として
有名だった。長い前髪で目元を隠しており、ミステリアスな雰囲気纏っている。白色
の髪と水色の瞳を持つ。23歳。身長178cm。

篠宮 楓
シノミヤ カエデ

主に医務を担当する教員。ハイレベルな回復魔術や術式付与を操り、後方支援に於い
て他者の追従を許さない実力を有する。可憐な容姿と柔らかな物腰の美女。胡桃色の
髪と瞳を持つ。27歳。身長161cm。

《魔術師協会日本支部》

鬼龍院 王我
キリユウイン オウガ

魔術師協会日本支部の支部長として君臨する老年の男。恭夜の師でありかつては東
帝の学長だった伝説級の魔術師。圧倒的なカリスマ性と武力を備えた偉丈夫。暗赤色
の髪と瞳を持つ。72歳。身長185cm。S級序列第1位。

《魔術管理局》

沢村 秀一
サワムラ シュウイチ

魔術師協会日本支部の内局『魔術管理局』の魔術捜査課に所属する人物。能天気な性格の昼行灯。知略に長けた技巧派だが、優れた格闘技術も兼ね備えている。不真面目で胡散臭い印象の男だが、数々の現場を潜って来た経験と高い指揮力を持った極めて優秀な魔術師。焦茶色の髪と瞳を持つ。36歳。身長183cm。A級。

速水 流星ハヤミ リウウセイ

管理局の魔術捜査課に所属する人物。物干し竿のような刀身の長い太刀を自在に操る剣豪。女性問題が絶えない流麗な美青年だが、優れた戦術眼を持った切れ者でもある。藍色の長髪と瞳を持つ。26歳。身長182cm。A級。

帯刀 達也タテワキ タツヤ

管理局の魔術捜査課に所属する人物。体術と剣術に長けた近接戦闘のエキスパート。切れ長の目が特徴的で、口数が少なく落ち着いた性格の持ち主。紺色の髪と赤色の瞳を持つ。29歳。身長177cm。A級。

北斗 玲王ホクト レオ

管理局の魔術捜査課に所属する人物。高い戦闘能力と知力を併せ持ったエリートであり、魔術、格闘、射撃、剣術の全てで高水準を誇る。冷徹な性格で規律を重んじている。枯梗色の髪と瞳を持つ。22歳。身長176cm。B級。

本郷 塔子ホンゴウ タコ

管理局の魔術特務課に所属する人物。管理局屈指の怪力を誇る武闘派で最前線での戦闘を得意とするが、頭も切れる。無骨な性格の若き豪傑。黒色の髪と瞳を持つ。23歳。身長183cm。B級。

ヒイラギトシヤ
柁 俊哉

魔術特務課に所属している本郷のバディ。天才的な魔術の才覚を持ち、精密な魔力操作に於いて右に出る者はいない程の腕を持つ。整った顔立ちに飄々とした性格で、速水と女性人気を二分している。山吹色の髪と瞳を持つ。19歳。身長176cm。B級。

《刻印結社》

グレン
紅蓮

刻印結社の最高幹部、『番号刻印』の『N.O.7』。『火竜』の二つ名を持ち、強力な火属性魔術を操る。気性が荒く、残虐非道なテロリストとして国際指名手配されている。かつてはゲリラを率いて世界各地の戦場を転々としていた。深紅色の髪と瞳を持つ。20歳。身長178cm。

バスター

番号刻印の『N.O.5』。爆発的な衝撃波を放つ『衝撃術式』を駆使し肉弾戦で戦う。傲岸不遜な性格と巨軀を誇る暴君。黒色の髪と瞳を持つ。35歳。身長201cm。

デイエス

番号刻印の『N^{フォー}O. 4』。触れた物を朽ち果てさせる『^{エンドフォーミュラ}朽化術式』を操る。無気力な性格の破壊主義者の少年。黒色の髪と紫色の瞳を持つ。14歳。身長160cm。

フェイスレス

番号刻印の『N^シO. 6』。一度見て魔力に『触れた』相手の術式を模倣^{コピー}する体質を持つ。善悪の基準を持たない、良くも悪くも無邪気な少女。亜麻色の髪と金色の瞳を持つ。11歳。身長140cm。

クロツク

番号刻印の『N^{エイ}O. 8』。『時間操作術式』が付加された懐中時計型の『^{アーティファクト}魔術的遺物』の適合者。自由行動が多く、自身の興味が常に最優先の放埒な美女。茶色と青色の髪と金色の瞳を持つ。肉体年齢26歳。身長170cm。

JOKER

番号刻印の名を与えられた幹部内で、唯一数字を持たない『N^{エク}O. EX』。しかし番外ながらも、幹部達を取りまとめるような役割を担っている。大鎌と魔力が付加されたトランプを主な武器とし、幻術や瞬間移動に変身術式など手品めいた魔術を操る。^{ピエロ}道化のような仮面と服装を纏っており、性格は不気味なまでに陽気。?歳。身長175cm。

ゼロ

存在しない筈の『^ナ番号刻印N^ズO. 0』。ロープを纏いフードを被った、全てが謎に包ま

れた人物。『デアストロイファオームユラ破壊術式』を操る。?歳。身長約185cm。

《その他》

ミラーージュ
陽炎

ファイヤーバタールン

炎の紋様の入った仮面を着けた、正体不明の人物。魔術師達によって構成された、犯罪集団の主犯格の一人。?歳。身長約170cm。

用語解説 ※随時更新

《戦闘術》

『魔術』

人間の体内に宿るエネルギー『魔力』を用いて『術式』を組む事で、人智を超えた現象を引き起こす技術の総称。脳内演算図式アウトライン・イメージに沿って魔力を組み立てる『構築』と、それを術式として起動し放出する『展開』の二段階の手順によって発動する。

『魔力知覚』

常人には不可視のエネルギーである『魔力』を認識する、五感に続く第六の知覚能力。これが発現した人間は、魔術師としての素質を有する者と見做される。

『汎用魔術』

先人達によって理論体系メソッド化された事で、発動方法が確立された魔術。従来の魔術の発動に必要とされていた、複雑な儀式などが簡略化されている。『強化術式』と『形成術式』の二種類が存在し、訓練を行えば万人が使用可能。『属性性質』を付与する事も出来る。

『強化術式』

身体や道具に魔力を纏わせる事で、強度や性能を上昇させる術式。以下一覽。

『アームズ纏』 身体の部位や武器に魔力を纏わせ、強度を上昇させる。

『ストライク撃』 拳や脚などに魔力を纏わせる事で、打撃威力を上昇させる。

『ソニック瞬』 脚などの筋肉組織を魔力で強化し、敏捷性や移動速度を上昇させる。

『ヒール癒』 対象の体力を自然治癒力へと変換し、傷を修復する。別名『回復術式』。

『エンチャント術式付与』 他者へと強化術式を施す技術。術式効果を遠隔伝達させる必要があり、極めて習得難度が高い。

『エンチャント術式付加』 武装を始めとした、物体への魔術的效果の付加。

『形態変化』 全身に鎧のように魔力を纏う事で、基礎戦闘力の上昇効果や様々な追加能力を得る。高度な技術であり使用者は限られる。

『モールドフォーミュラ形成術式』

魔力を体外に放出し固化する事で、様々な形状の物体を型作る術式。以下一覽。

『ブラスト弾』 弾丸を形成し撃ち放つ。

『シールド盾』 防壁を形成する。

『バンド縛』 拘束など様々な用途を持った帯を形成する。

『セイバー刃』 刀刃を形成する。

『イリュージズ幻』 半実体を伴った幻像を形成する。通称『幻術』。

『特殊魔術』
アビリティマジック

汎用魔術よりも多様な現象を引き起こす魔術。習得には適性や固有体質なども関係しており、誰でも扱える汎用魔術とは異なり使用できる人間は限られている。以下一覧

(随時追加)。

『反射術式』
リフレクトフォーミュラ

物理攻撃・魔力攻撃を反射する障壁を形成する。使用者：蛇島司。

『隠密術式』
ステルスフォーミュラ

自身の姿を透明化する。使用者：更科凧。

『属性性質』

人体に宿る魔力に先天的に備わっている性質。火・水・風・土・雷・氷・光・闇といった自然物質などを模した八種類があり、これらのいずれの性質も備わっていない場合は

『無属性』となる。

『退魔一刀流』

魔力を一切持たない御剣伊織が魔術師と戦う為、桐谷恭夜との修行の中で編み出した剣術。伊織の超人的な身体能力と反射神経、そして技術によって、『術式を構築する魔力の物質的結合の切断』、つまり魔術を斬る事を実現した。

『藤堂流』

剣術と魔術を融合させた戦闘術『魔術剣』の一大流派。古くからの歴史を誇る名門であり、現代に於いても数多くの高名な剣士を輩出している。

《地域》

『魔術都市・東京』

東京の『裏側』の次元に、魔力によつて構成された異空間都市。周囲には結界が張り巡らされており、そこへ移動する為には都内各地に設置された転送門ポータルゲートを潜る必要がある。日本の魔術的主要施設が集中しており、魔術そのものと同様に都市の存在は一般社会には伏せられている。魔術を操れる人間の多くはここで暮らしているが、『表』の世界で生きている魔術師も一定数存在する。

《組織》

『東帝魔術学園』

東日本に於ける、魔術師養成機関としての機能を有した高等学校。魔術師協会日本支部が運営しており、国内中の魔術師としての素質を持った少年少女をスカウトし育成している。

『魔術師協会』

世界各国の魔術師による国際互助組織。魔術師資格ウィザード・ライセンスを発行している。国連と協定を結んでおり、世界中に支部が存在する。イエルサレムに本部が設置されているイスラエ

ルと国連安保理の五カ国、そして日本を加えた七カ国は、『七大支部』として国際社会でも一際強い影響力を密かに有している。

『MAGIC CONTROL AGENCY
魔術管理局』

魔術師協会日本支部の内局として存在する魔術警察機関。略称MCA。魔術都市内の治安維持を担っており、また日本国内全域に於ける魔術犯罪及びテロの捜査や取締を行なっている。

『刻印結社』

世界各地でテロを扇動しているとされる、国際的な犯罪組織。目的や規模など情報のほぼ全てが謎に包まれた実態不明の魔術結社だが、世界で危険視されている数多くの国際テロリストが属している事が確認されている。『番号刻印』^{ナンバース}と呼ばれる、強大な力を有した数名の最高幹部が存在する。

『皇重工』

日本最大の魔術軍事企業。『セイバース・カンパニー』、^{スプリム}『S・エンタープライズ』、^{ロックハート}『R・Hインダストリー』と並び世界四大軍需企業の一角に数えられている。CEOは皇嵐士。

《家系》

『魔術旧家』

優秀な魔術師を多く輩出している、若しくは魔術界の発展に大きく貢献した家系・血脈。魔術社会に於ける特権階級であり、多大な権力と影響力を持つ。

『神宮寺家』

影から日本を支配し続けて来た、最古の魔術旧家。神道や陰陽道と言った日本古来の魔術的ルーツを持ち、一族の人間の多くが膨大な魔力と属性性質を有する。現代の魔術社会に於いても、多くの名家を傘下として従えており絶大な影響力を誇る。京都に存在する神宮寺宗家は保守的な派閥を形成しており、王我を長とする革新派筆頭の魔術師協会日本支部とは対立している。

《道具》

『魔術工学』

機械工学に魔力のエネルギー理論を組み込んだニューテクノロジー。極めて高度な技術であり、大部分は魔術都市内でのみ運用されている。

『魔術武装』

魔力を動力源とする機械武装及び近代兵器の総称。魔力を弾丸へと変換する銃器や刃を形成する武器など、様々な種類が存在する。

《その他》

『秘匿原則』

魔術師協会によって制定された国際魔術法の一つ。これによって、特例許可が降りた場合を除き一般社会での魔術使用は固く禁じられている。

セクシヨン1 『魔術学園2046篇』

第1話『Wizards Wars — 現代魔術戦争—』

『魔術』。

宗教・神話・伝承の中にのみ存在するとされた神秘を引き起こすその超常の力は、歴史の裏側——この世界の影に確かに実在していた。

始まりの預言者モーゼスが民を導いた聖地『イエルサレム』をその叡智を以て統治し、全ての魔術の礎を築いた『全智の魔術王』ソロモン。

救世主キリストを始祖とする『聖神教』の系譜を受け継ぎ、偉大なる魔術師マーリンを従え教会騎士団の原形を作り上げた『聖剣の騎士王』アーサー・ペンドラゴン。

強大な力を振るい永い人類史にその名を刻んだ英雄達は皆、『魔術』を操る人間だった。

しかし、人には過ぎたその力はやがて世界に戦火を巻き起こす事となる。

『魔術師』は国家間戦争に於いて、近代兵器をも凌駕する脅威として在り続けた。しかしその戦乱の時代は、一人の魔術師の出現によって終わりを迎える。

世界を蝕み大戦を扇動していた巨悪の存在を暴き出したその人物は、悪意に対抗する

力を持った人間達の意味を束ね『魔術師協会』を創設した。

そして、時は現代に至り。魔術師達による戦争は、新たなステージへと動き出していた。

◇◇◇

肉を殴り潰す、鈍い音が薄暗いビルの一室に響く。意識を飛ばされフロアの床に転がされた男達の上に立っていたのは、その拳から敵の物と思しき血を滴らせる紅色の髪の少年だった。

「チツ……いつの間に紛れ込んでたかと思えば……何が目的なんだテメエ!!」

その少年を包囲していた男達の内一人が、既に半数以上の仲間を沈めた彼に銃口を向け恐々としながら叫ぶように問う。この男達は、法に反する闇取引——即ち犯罪をここで行おうとしていたが、誰も気づかぬ内に入室して来ていた謎の少年が突如として介入して来た事で完全に状況を混乱させられていた。

「目的ってそりや……アンタ達、身に覚えあんだろ?こんな暗エトコでなんかコソコソやってりや、後ろめてエトコやってんだろって。俺でも分かるぜ」

「ツぎけてんのかッ!!」

「バカ!撃つんじゃねエ!!」

嘯くように告げられたその言葉に、男達の一人が激昂し仲間の制止も聞かず構えていた銃を発砲する。それに続くように周囲からも一斉に弾丸が放たれたが、不敵な笑みを浮かべた少年の姿はその場から掻き消えた。

次の瞬間、包囲していた筈の男達が全員一斉に吹き飛ばされる。目にも止まらぬ高速移動で銃弾を回避した少年によって一瞬にして殴り飛ばされたのだと男達が気付いたのは、壁に叩きつけられ意識を失う直前の瞬間だった。

「……やはり学生とはいえ侮れないわね、『魔術師』は」
「ん？」

その時、少年の背後から新たに入室して来ていた人間の声が掛けられる。振り返るとそこには、声の主と思われる女性と筋骨隆々とした外人男性の二人が立っていた。

「アンタ誰——」

身に纏った何処かの学園の制服についた汚れを軽く払いながら、少年が口を開いたがその言葉は轟音の中に飲み込まれる。

女性の隣にいた男の掌から、不可視のエネルギーを収束し放たれた砲撃が少年が立っていた場所を吹き飛ばし、その背後にあったフロアの壁をも破壊していた。

「あつぶね……オッサンゴリゴリの近接型かと思つたら、意外と魔術もイケる感じ？」
しかし少年は先程と同様に高速移動で、『魔術』によって生み出された砲弾を回避し別

の場所に姿を表す。

『身体強化』ね……やるじゃない。けど、これは子供の喧嘩とは別物なのよ。大人の『戦争』の一端に首を突っ込んだ事……後悔させてあげるわ」

女性の言葉と共に、首を鳴らしながらゆっくりと歩みを進め始める男。その両腕には、謎の記号によって構成された文字列が浮かび上がっていた。更に一步踏み出すと共にその紋様は弾け、強力なエネルギー『魔力』へと変換されながら男の腕力を強化していく。

「おー、やっぱり格闘ステコロもイケんのね。いーじゃん、楽しくなつて来た」

そう言いながら少年もまた、右腕へと『術式』を展開しながら歩き出した。魔力により強化された、両者の拳が繰り出される。

二つの魔術は、凄まじい衝撃を伴い激突した。



『国立東帝魔術学園』。

日本の首都である東京都の、裏側の異空間に創り出された『魔術都市・東京』。その中央部に位置するこの学園は、東日本各地から素質を持った人間をスカウトし教育を施し

ている『魔術師』の養成機関である。

そしてその正門通りに、一人の少年が足を踏み入れていた。

「……広すぎんだろ……」

紺色の髪を持ち腰に二本の刀を携えた少年が、眼前に広がる巨大な学園を見渡しながらそう呟く。彼の名は御剣ミツルギ 伊織イオリ。今日からこの東帝学園に所属する事となる、新一年生の一人だった。

(つーかあの人の地図が雑過ぎんだよ……!!)

伊織は手に持ったメモ用紙を見ながら、心の中で悪態を吐く。いかにも適当に書かれたようなその見取り図は、彼を東帝に入学させた『ある人物』に事前に渡されていた物だった。

目的の場所を探し、正面ロータリーの周辺を歩き回る事数分。

(……ダメだ、全く分からん)

広すぎる敷地の中で完全に目的地を見失った伊織は、中央噴水広場のベンチに腰掛けながら天を仰いだ。

「あー、クソ……」

「……ねえ、そこのアンタ」

その時、何処かから声を掛けられそちらの方向へと伊織が視線を向ける。そこにいた

のは、伊織と同様に東帝学園の制服に身を包んだ一人の少女。金色の髪を持った彼女は首にチョーカー、耳には幾つものピアスを着けていた。

「道、迷ってんの？ さっきから同じトコばつかグルグル回ってたけど」

「あー……まあ、そんな感じだ……学園、あんま来た事無エからよく分かんなくてな」

初対面の相手にいきなり自身の窮状を言い当てられ、伊織は何とも言えない表情で力無く頷く。

「どこに行きたいワケ？」

「一年の男子寮なんだけどな……知ってるか？」

伊織がそう質問すると、少女は指先から線状の魔力を放出しながら伊織の真後ろの方角を示した。

「あっちにずっと真っ直ぐ進めば、寮棟が見えて来るわ」

「マジか……！ 助かったわ、ありがとな」

それを聞いた伊織は先程よりも幾分表情を明るくしながら立ち上がると、少女に礼を述べると歩き出そうとする。

「……ちよつと待って」

「どうした？」

その時、再度声を掛けられ立ち止まった伊織が振り返った。

「……アンタ、全く魔力が無いように見えるんだけど……何者なの？」

魔術の素養を持つ人間に備わった、五感に続く第六の感覚能力『魔力知覚』。人体内や空間内に存在する魔力を感知するその能力が、伊織が一切魔力を保有していない事を少女に教えていた。

「疑つてんのか知らねエが……別に俺は侵入者でも何でもねエよ。ちゃんと正規の手続きで入学したここの生徒だ、ほらよ」

警戒しているような様子の少女に、伊織は襟元から校章を外すとカード型の学生証へと変形させ彼女へ見せるように差し出す。カードから投影された立体画像ホログラムによる補足情報も相まって、伊織が紛れもなくこの学園の生徒であるという事は明白だった。

「悪かったわ。疑つてたワケじゃないんだけど……でも、なんで……」

少女は伊織へと謝罪するが、それと同時に新たな疑問が生じる。魔術師に不可欠な筈の力を持たない人間が、何故この学園への入学を許可されたのか。

「まあ、気になるか……俺は——」

そこで一度言葉を区切ると、伊織は刀の柄に手を置きつつ不敵に言い放つ。

「——魔術師が相手なら、誰が相手でも敗けはしねエっただけだ」

「っ……!!」

その言葉を受け瞠目する少女に背を向け、今度こそ伊織は立ち去った。暫くの間言葉

も無く少年の背中を見送っていたが、やがて少女も踵を返し歩き出す。

彼女の名は藤堂^{トウドウ} 天音^{アマネ}。

入学前能力測定にて全新生トップの成績をマークした、『神童』と謳われる一年最強の天才魔術師だった。

◇◇◇

「なっ……冗談でしょ……」

女は眼前に広がる光景が示す事実を、全く受け入れられず呆然とそう呟いていた。たった今激突した二人の魔術師。鍛え上げられた肉体と技術を有していた筈の歴戦の魔術傭兵は——学生の少年に、一撃の下殴り倒されていた。

「ちったア面白くなんのかと思つたら……全然大した事ねーじゃん」

ヒビ割れた床へと顔面からめり込み気絶している男を見下ろしながら、紅髪の少年は拳に付いた血を拭う。化け物じみた戦闘能力を見せつけられた女は、こちらへと歩き出した少年に後ずさりながら嘆願の言葉を口にした。

「わっ……悪かったわ。私は、ここから何もせず撤退する、貴方には一切危害を加えないと約束するわ、だから、お願い、待って！」

圧倒的な強者への、恐怖。怯えの感情が？き出しにされたようなその声に、少年は一つ溜息を吐きながら拳に集めていた魔力を解いた。次の瞬間。

『ダークフラスト』
『闇弾』

女の手から、黒い魔力で形成された弾丸が撃ち放たれた。不意打ちによる魔力弾を受け、少年の身体は一瞬で吹き飛ばされる。

「ふふ……敵に情けは禁物でしょ……所詮は学生、素人ね」

先程と一転して、冷徹な声音でそう吐き捨てる女。ほくそ笑みながら、その場を後にしようとする。

「はは、確かに」

その瞬間女の耳元に聞こえて来たのは、吹き飛ばした筈の少年の声だった。同時に首元への手刀が、女が振り返るより早くその意識を刈り取る。倒れ伏した女の前方には、少年への弾丸を受け布切れと化した彼の制服の上着があった。

身代わりによって自身への攻撃を回避する、『空蟬』。日本で『忍法』と呼ばれる、戦闘術の一つだった。

「はー、成敗成敗」

ビル内部にて犯罪者集団をたった一人で制圧した少年だったが、その背後で何者かが立ち上がるうとしてしている気配を察知する。

「あれ、オツサンもう意識戻ったんだ。やっぱタフだね、見た目通り」

流石に戦闘不能な状態である事は確かだろうが、自分の渾身の一撃を受けて尚向かって来る相手のタフネスに少年は軽く驚きを見せた。しかしそれでも甚大なダメージを与えた以上、下手な手は打つて来ないだろうと油断していた少年。男がコートの下に、大量に忍ばせていた爆弾を目にするまでは。

「……えっ」

一瞬思考が止まるが即座に状況を理解した少年は、足元に転がっていた女を抱え上げるとをガラス張りの壁を蹴り破り外へと飛び出した。それと同時に、男が魔力で着火させた爆弾が全て一斉に炸裂し凄まじい風圧が吹き荒れる。

「おいおいおいマジかよッ!？」

猛烈な爆風に背中を押されながらも、咄嗟に路肩に停まっていた乗用車を見つけその上へと着地した。

「うおお……犯罪者の覚悟ヤッバ……」

つい数秒前まで自分達がいたビルから炎と黒煙が立ち上っている光景を見上げなが

ら、少年は啞然とした表情でそう呟く。その周囲に今度は、装甲服を纏い自動小銃で武装した謎の集団が突如として現れていた。

背部に『MCA』と表記されたその武装集団の奥から、黒いスーツに身を包んだ一人の中年男性が歩み出てくる。

「オーイオイ坊主……オメーちつと派手にやり過ぎだろオ」

「や、俺じゃねーから。なんか知らんオツサン達^が怪しいコトしてたからとりあえずボコったんだわ。そしたらなんと自爆して来やがつてよ。とりあえず首謀者^{アタマ}つぽいヤツ一人引つ張つて来たつーワケ」

「マジか………ま、取り敢えず^ご苦勞だったな。よくやつた。『縛^{バインド}』」

少年から事の顛末を聞かされた男性は、労いの言葉と共に指先から魔力で形成された帯を放ち流れるように彼を拘束した。

「え、この流れで……ここは俺お手柄^てって場面じゃねーの？どゆこと？」

「あー、オマエ知らねーのかもしれないけどな、いくらココでも公共^{魔術都市}の場で無資格魔術使用はフツーに禁止されてつから。まア詳しくは局で聞^{シヨック}くわ、『衝^弾』」

そう言う^と男性は、限界まで威力を弱めた魔力弾を少年の額へと的確に命中させ一瞬で彼の意識を飛ばす。魔術師としての熟達した技能を見せた男性は、依然として炎上しているビルに目を向けながら背後の部下達へと声を掛けた。

「おーし、さっさと事後処理済ませて撤収すんぞオー。その坊主は車両に放り込んで
 けー女の方はガチガチに縛っとけーい」

目を回しながらアスファルトに突っ伏すこの少年の名は、ハルカワ春川 ヒナタ日向。今日から東帝
 魔術学園の生徒となる筈だった彼は、上京初日から『魔術管 Magic Control Agency 理 局』に補導される
 事となった。

◇◇◇

「ハツハツハ、入学式すつぽかして事件にツツ込んで、挙句管理局に御用だろ？もう問題
 児とかいうレベルじゃねーだろソイツ。しかも推薦入学者つーのが拍車掛けてるし
 な」

「笑っている場合ではないだろう、お前が担当する生徒だぞ。大体問題児云々など、お前
 が言えた事ではない」

東帝学園の教員棟にて、廊下を歩く二人の教師。ゲラゲラと笑っているサン格拉斯を
 掛けた青年桐谷 キリタニ キヨウヤ 恭夜に、大柄な体躯の男性万丈 マンジヨウ ヤマト 大和が厳しい言葉を掛ける。

「現場出張つてんの沢村さんっしょ？まアあの人が上手いコトやつといてくれんだろ」

恭夜は共通の知人の名を挙げながら、樂觀的な態度を崩さず愉快そうに笑っていた。
 そんな事を言い合いながら巨大な扉の前に辿り着いた二人は、個人魔力認証によってセ
 キュリティをクリアし『大会議室』へと入って行く。そこには既に、様々な分野のエキ

スパートである東帝学園の教員陣が一堂に会していた。

「おーおー皆さんお揃いで……」

そうぼやく恭夜の視線の先には、巨大なモニターが展開されている。そこに映し出されていたのは、今回の議題の中心と思われる三人の新入生のデータだった。

膨大な魔力を自在に操る金色の髪の少女。剣術だけで魔術師を圧倒する紺色の髪の少年。そして、全身に炎を纏った紅色の髪の少年。

次世代を担う若き魔術師達の姿を見ながら、恭夜は静かに笑みを浮かべていた。

第2話『Wizards School —東帝魔術学園—』

「……なんでこんな事になっちまったんだろな……」

「しゃーねーだろ、今更グダグダ言ってもどーにもなんねーよ。楽しんでこーぜ」
「テメエが楽しめんのは他人事だからだろオが」

樂觀的な日向の物言いに、伊織が腹立たし気に言葉を返す。

今二人が居るのは、東帝学園の『闘技場』のワンサイド。そして伊織はこれから一対一の模擬戦に臨もうとしており、日向は入場直前の彼に一声掛けようとゲート付近へやって来ていた。

「まあ……やるからには勝てよ」

「……当たり前だ」

ニヤリと笑いながら突き出された日向の拳に、自身の拳をぶつけ合わせた伊織は入場ゲートを潜り闘技場へと足を踏み入れる。

全方位を取り囲んだ観客席から、響いて来る歓声。向かい側では、既に入場して来ていた伊織の対戦相手が彼を待っていた。

新入生最強と目される少女。

「……まさかお前と戦う事になるとはな……」

「アンタがあの時言った言葉を……ここで撤回させる」

天音から放たれた挑発的な言葉を受けながら、伊織もまた好戦的な笑みを浮かべつつ腰の刀へ手を掛ける。

「面白エ……あの時の義理はあるが、敗けてやるつもりは更々無エぞ」

第一学年能力順位1位『藤堂 天音』VS同学年能力順位4位『御剣 伊織』。

学年屈指の実力者として注目されている二人の対戦に、多くの生徒達が興味を示し衆としてこの闘技場へと足を運んでいた。

遂に戦いの幕が上がる。その発端を知るには、数日前に遡る必要があった。



「オラア!!」

その声と共に、魔力で強化された脚力による前蹴りが繰り出された。強烈な一撃を、相手は手に持った刀の腹で防ぎ止めるがそれでも大きく後退する。

「ヒューッ、やるじゃねーの」

蹴りを放った少年、春川 日向はそう言いながら両の拳に魔力を集めると再度突撃し

た。

「……フツ！」

対して刀を構えた少年、御剣 伊織は小さく息を吐き出しながら鋭く刃を振り抜き迎撃する。

現在この訓練室ではクラス1-Aの戦闘演習が実施されており、生徒達は対一での模擬戦を行っていた。

多くの現代魔術の基盤となっている『汎用魔術』。その内の一つであり日向が得意としている『強化術式』は、魔力によって身体機能や物体強度を上昇させる効果があった。打撃威力を強化する術式『撃』を、日向が保有する魔力に備わった『火属性』の性質が異なる術式へと派生させる。

強化術式×火属性魔力

『炎撃』

右腕全体へと纏った魔力を火炎へと変換しながら、その拳を眼前の相手へと叩き込む日向。

しかし伊織はその炎の拳撃を、刀の峰で受け止め滑らせるように後方へと受け流す。同時に鳩尾へと肘打ちを炸裂させ、更に全身をバネのように振らせ撃ち放った回し蹴りで日向を大きく吹き飛ばした。

剣術と体術のコンビによって痛烈なカウンターを喰らい跳ねるように地を転がる日向だったが、驚異的なタフネスで平然と起き上がる。

「まだまだア!!」

またしても何の芸も無い突貫。と、見せかけて何かを仕掛けようとしていると読み警戒する伊織。日向は基本馬鹿だが戦闘のみに関しては相当に頭が切れるという事を、まだ短い付き合いながら伊織はよく理解していた。

地を這うような低い姿勢からの突進で肉薄し、そこから全身を反転させ撃ち上げるようなサマーソルトキックを繰り出す日向。人体の急所である顎をピンポイントで狙って来たその蹴りを、伊織は大上段から振り下ろした一刀で迎え撃つ。

しかし右脚と刃が衝突する寸前、日向の掌からジェットのように放射された炎が強引な方向転換させその身体を伊織の上方へと飛び上がらせた。行き場を失った剣撃を地へと叩きつけた伊織の上空から、必殺たり得る爆炎の一撃を振りかぶる日向。

(入ったー!!)

完全に不意を打ったと確信した日向が、その炎拳を振り下ろす。瞬間、日向は顎に強烈な衝撃を受け宙を舞っていた。刀を振り切った伊織の姿が視界の端に映り、返す太刀で放たれた超高速の峰打ちによって自分が吹き飛ばされたのだと察する日向。

脳が揺らされ今度は立ち上がれない日向の様子を確認した伊織は、勝負ありと判断し

刀を収めると彼の元へと歩み寄った。

「生きてるか？」

「おー……くっそー、なんで読まれたんだ」

「蹴りの速^{スイングスピード}度が若干遅かったからな、引き戻そうとしてるのが直前で分かった。それと、移動の為の左手に意識を向けさせねエために右に派手に魔力を集めてたんだろオが、『右か上に飛ぶ』っつー当があの特店で付けばギリギリ対応は出来る」

日向は大の字で寝転んだまま、最後のフェイントを伊織に見破られた事を悔しがっている。周囲でその模擬戦を見ていた他の生徒達は、二人のハイレベルな戦闘技術に感心したような視線を向けていた。

「オラ、立て」

「やー、完敗だわ。流石俺の相棒」

「誰がだ」

軽口を言っている日向に手を貸し、立ち上がらせる伊織。同じクラスに属するこの二人は、学生寮の個室が隣同士だったという事もあり入学して以降共に行動する機会が多かった。とは言え会ってたかだか数日で相棒認定までして来る日向の距離感には、伊織も少しばかり辟易していたが。

「やーっと昼飯だなー。午後からの授業って何だっけか」

「術式理論講義」

「あー、あの眠いやつか……」

「テメエは座学全般そうだが」

そう言いながら日向と伊織はその場所を後にしようとしたが、隣の訓練室から響いて来た轟音に気が付き足を止める。他の生徒達に混ざって二人もそちらを見に行つてみると、そこには五人を相手にたった一人で圧倒している少女の姿があった。

彼等と同じく、クラス――Aに所属する彼女の名は藤堂 天音。新たに学園へと入学した一年生らの中でもトップクラスの実力を持つと言われており、尚且つ魔術社会で大きな影響力を持つ名家の一つ『藤堂家』出身の人間である事も有名だった。

多対戦を終え訓練室から出て行くこうとしていた天音だったが、退室直前にふとギヤラリーの中に紛れていた伊織の姿を見つけ一瞬鋭い視線を向ける。そしてすぐに、何事も無かったかのように立ち去って行った。

「……なア伊織」

「何だ」

「オマエ最近あの不良ガールにめっちゃガン飛ばされてるよな。なんかキレさせるようなコトでもしたんか？」

「一切心当たりが無エ。そもそも関わりすら殆どねえんだがな」

「ほとんどつつーと?」

「入学式の日に道聞いただけだ、別に大した事じゃねエだろ」

「お礼言った?」

「俺の保護者かテメエは……言った」

その様子に気付いていた日向は、何か事情があるのかと伊織に尋ねる。しかしその返答は、至つてぶつきらばうな物だった。

◇◇◇

「おーつす不良ガール。ん?オマエ意外とジャンクフード好きな感じなんだ。まー俺も好きだけど」

4号館と5号館の最上階を繋ぐ連絡通路に設けられた、学園を一望出来る屋外テラス。そこでバナラシエイクのストローに口を付けていた天音に声を掛けたのは、彼女と同じチェーン店から買って来たと思われる大量のハンバーガーを抱えた日向だった。

「……別に私、校則違反とかは何もしてないけど」

「や、ゴメン。めっちゃ見た目の偏見イメシだけで喋ってた。氣イ悪くしねーでくれ」

やや不服そうな言葉を返しながらフライドポテトを摘んでいる天音は、その整った容姿も相まって昼休み中の今も多くの人目を引いていた。しかし天音の金髪は地毛であり、ピアスやチョーカーなどのアクセサリー類も東帝の校則では特に禁止されていな

い。

そんな彼女へ軽く謝りながら、テーブルを挟んだ向かい側に座った日向は豪快にバーガーへとかぶりついてた。

「んっ、うつま……あのさ、天音は伊織のコト嫌ってんの？」

ムシヤムシヤと昼食を食りながらもいきなり本題へと入って来た日向に、天音は少し面食らいながらも返答する。

「……………アンタは割と仲良いわよね」

「まー、寮の部屋隣だしな。で、どうなん？」

「別に……………嫌いってワケじゃないわ。ただ……………少し、興味があるだけ」

「あーそう言う感じ？なんなら今スグ呼んでやろうか？」

「やめて。アンタが想像してるのとは違うから」

日向を睨みながら、提案を即刻却下する天音。

「……………魔力が無い人間が、なんでここに入学出来たのか……………気になってるのは、それだけよ」

「ほーん……………強エからじゃね？」

天音からの疑問に日向が返したのは、至ってシンプルな答えだった。

「俺まだ一対一でアイツに勝ったコトねーし。強エヤツが多けりゃ、学園にも色々良い

事あんじゃねーのか？」

「そんな単純な話だったら良いわね……」

天音はそう呟きながら、制服の袖ボタンの横に取り付けられた超小型プロジェクト
からホログラムを投影する。そこに表示されていたのは、彼女の学年内での能力の
順位を示す数字だった。更にその下には、順位の算出基準である4桁の数字『S W
ポイント』が映されている。

SWPは東帝ヘスカウトされた入学者に事前試験として課せられた『能力測定』での
得点と『講義並びに演習』での評価成績の合計を数値化した物であり、生徒にとっては
学内での自身の現在地を測る指標となっていた。

「おーすっげ、もう1500超えたのかよ。2000とかすぐいくんじゃね？」

「アンタもあんだだけ授業中寝てんのに、ほぼ戦闘演習だけで900取ってんのは相当だ
と思うけどね……」

まだ入学して数日にも関わらず、天音のSWPは学年トップどころか上級生達にも迫
る1596点。推薦入学者の日向は能力測定を免除されておりその代わりの特別得点
と戦闘演習で高いポイントを獲得していたが、ほぼ全ての講義で爆睡している為座学の
評価点数が著しく低く学年順位が伸び悩んでいた。

「てかアンタ……5限の術式理論の予習やったの？今日小テストあるけど」

「は？……ウツソだろヤベーじゃん伊織のノート見ねーとヤベーヤベー、俺ちよつと行くわ。ありがとな、んじや」

天音の言葉を聞いた日向は、一瞬完全に停止し手からバーガーを取り落とす。すぐにそれを拾い上げ口の中に詰め込むと、頬をパンパンにしながら席を立ち慌ただしく席をテラスを後にした。

しばらくその騒がしい後ろ姿を見ていたが、やがて学園の外の風景へと視線を移す天音。その一連の様子を、魔術によって強化された視力で遠巻きに見物している『誰か』がいた。

◇◇◇

「……入学早々、中々人気になってんじやねーかお前。色んなトコで色んなコに噂されてんぞ」

「また『覗き』っすか。いい加減趣味悪いって気付いた方が良いつすよ」

教員へと与えられた私室から学園全体を魔術で『視』通していた――A担当教員桐谷恭夜は、来客用のソファに腰掛けた伊織から辛辣な一言を返されていた。恭夜は伊織を東帝へ入学させた張本人であり、この二人は実は数年前からの付き合いなのだがそれを知る人間は少ない。

『家柄』も『魔力』も無エ人間が学園クに居るつっクコトが、排外的な保守派の『名家』連

中からすりや気に入らねエんでしようよ」

伊織が冷淡な声で口にした『名家』という言葉は、魔術社会に於ける貴族の特権階級と言える『魔術旧家』を指していた。それは遙か昔の時代から多くの優秀な魔術師を輩出している家系の事であり、その旧家出身の人間は学園内部でも一般生徒より様々な面で強い影響力を有している。

しかし彼等の一部には行き過ぎたエリート思考によつて生徒間の身分格差の助長を招くような者が存在しており、また伊織のように高い実力を持った一般生徒を目障りに思う人間も少なくなかった。

「だったらよ、その下らねエ風潮を払拭すべく……お前、『開幕戦』出ねエか？」

「『ポイント変動制』解禁のアレっスか？嫌ですよ面倒クセー……何で俺が？」

「毎年学年順位が上位の奴が、初戦を派手に盛り上げるっつーのが恒例なんだよ。A組No. 2のオマエならその点申し分無エしな」

その時告げられた恭夜からの提案に、伊織は露骨に嫌そうな顔をしながら手首の小型投影機プロジェクトからSWPを映し出す。伊織のポイントは1264点、このポイントは一年の中では第4位でありA組の中では二番目に高い実力を持つ事を示していた。

ちなみにD組に所属する第2位の生徒は開幕戦出場を辞退し、E組の第3位の生徒は入学初日に乱闘騒ぎを起こし現在謹慎中の為伊織が繰り上げられたのだと恭夜が補足

する。

そしてポイント変動制とは模擬戦によって生徒間のSWP移行を可能とする『決闘制度』の事であり、これによって学内競争を加速させ更なる実力向上を図るという東帝の教育政策だった。

「……一応聞きますけど、相手は？」

「オマエが俺は魔術師相手なら負けねエとか大見得切ったヤツ」

「アンタどつから……!？」

「ハハツ、俺には何でもお見通しなんだよオ。……ま、アイツに勝てば旧家共はまとめて黙らせられるぜ？まア天音自身は連中と違って良い奴だからちよつと気の毒な気もするけどな……自信が無エワケじゃねエだろ？」

恭夜が名を口にした少女は、数値上は伊織よりも格上。しかし、伊織の表情に焦りは見えない。

「……ちなみに天音はこの話、何も言わずに乗ってきたぞ。アイツはお前と白黒つける気満々らしいが……どうする？」

ニヤつきながら恭夜は、逃げ場を失わせるようにそう告げる。その手回しの早さに、伊織はどうとう観念したかのように一つ息を吐いた。



そして、現在に至る。

闘技場にて対峙していた両者は、決闘開始のアナウンスと同時に動き出した。

「おー始まった。んで、センセーはこんなトコで何ひてんの？」

「おっ、やるな日向。この幻術見破ったのはお前で二人目だ」

そんな中観覧席に戻って食堂から買って来たポップコーンを頬張っていた日向は、隣に座っている人物へと声を掛ける。黒い髪にサングラスを掛け、日向と同じように東帝の制服を身に纏った少年。彼の正体は、変身の魔術によつて生徒へと姿を偽装した恭夜だった。

「んー、勘つつか。強エヤツの気配で分かった」

「野獣かお前。まア、面白エ騒ぎはいつだつて最前列で観戦に限るだろ。そういう事だ」

「野次馬根性極まってんね」

恭夜は完璧に学生達に扮して歓声をあげている一方で、ドサクサ紛れに日向のポップコーンを横から摘み食っている。

伊織は一刀を抜き放ち、ゆつくりと歩を進め始める。対して天音は丸腰。しかしその全身からは、今にも解放されんばかりの膨大な魔力がオーラのように立ち昇っている。

「日向はどつちが勝つと思う？」

「……天音だろ」

「へエ……そこは相棒とは言わねえんだな」

「うん……伊織は近接戦闘はクソ強エよ。けど、天音にはそもそも近付けねエだろ。単純に相性が悪い」

意外そうな恭夜を尻目に、あくまで客観的な予想を述べる日向。同時に天音の指先へと魔力が収束し、伊織はそれを察知して地を蹴った。

強化術式と並ぶもう一つの汎用魔術、『形成術式』。その中でも多くの術師に用い

られている攻撃術式『弾』が、天音によつて『爆発』と『加速』の性質を付加され撃ち出された。

形成術式×火属性

『爆速弾・十連』

十発同時に放たれた爆炎の弾丸が、不規則な軌道を描きながら次々と襲い掛かる。縦横無尽にフィールドを走り抜けながら、追従する爆撃全てを紙一重で躲して行く伊織。しかし距離を詰められるより速く、天音は新たな魔術を展開していた。

”風属性” 攻撃術式

『陣戦風・四連』

しかし新たに天音が繰り出した術式の属性は、先程の『火』から一転し『風』。

「出た……」二つ目だ」

天音の魔力によって形成された四つの竜巻が伊織へと襲来する中、日向はそう呟く。

◇◇◇

人間が体内に保有している魔力には、『属性性質』と呼ばれる自然属性を模したかのような性質が備わっている場合がある。これには火・水・風・土・雷・氷・光・闇の八種が存在し、この中のいずれの性質も持たない魔力は無属性に分類される。魔力を用いて術式を発動する際に属性を付加するこの性質は、本来一人に一つ備わっているかどうかといった希少な物。しかし魔術師として優れた素質を持った人間の魔力には、二属性以上の性質が発現するといった事例も決して多くはないが存在した。

そして、天音の魔力に備わった属性性質の数は八つ。

即ち彼女は、世界でも僅か数名しか確認されていない『全属性魔術師』の一人だった。

◇◇◇

猛烈な暴風は間合いを詰めようとする伊織を、壁のように阻みながらその退路をも着実に断ちつつあった。

日本魔術界の至宝たる、八属性魔力を自在に操る『神童』。その力の前に一方的に追い詰められつつある伊織の姿に、多くの観衆は天音の勝利が近付いていると半ば確信していた。

「あーそつか……：そーいやお前はまだ見たコト無かつたんだな。アイツの本^{伊織}当^織の^織本^織当^織の^織劍^織術^織」

「本当の……？ どういう意味だよ？」

「まア見てろ。そろそろ出して来るぞ」

しかし恭夜は依然として劣勢である筈の伊織へと、期待するかのような眼差しを向けている。その視線の先で、伊織は新たな動きを見せた。

吹き荒ぶ烈風の包圍網を横へと飛びながら突破すると、フィールド右側から大きく弧を描くように疾走し接近を試みる。その先には既に、背後へ回り込もうとする伊織の動きを読んだ天音の罠が仕掛けられていた。

雷属性攻撃術式

『速^{ポルトランサー}戟^{ランサー}雷』

予め空間内に収束させていた第三の属性魔力を、詠唱によって起動し一瞬で術式へと変換する。

風の壁によって絞られた、逃げ場の無い一本道。誘いこまれたと気付いた時には既に、発動した神速の雷槍が伊織へと撃ち込まれていた。

回避不能の一撃が迫る。誰もが勝敗は決したと思っていた、その瞬間。

「退魔一刀流——」

天高く刃を掲げた、大上段の構え。

「ツ!？」

瞠目する天音の先で、その一刀は渾身の力を以て振り下ろされた。

「—————
『峽谷』』」
キョウコク

直後、轟音と共に雷撃が二つに分かたれ弾け散る。伊織の剣は、一瞬の内に『魔術』を斬り裂き両断していた。

「マジかよ……」

刀一本で魔術を迎え撃つという離れ業を目の当たりにして、言葉を失っている生徒達の例に漏れず日向もまた絶句していた。誰もが驚愕する中、伊織を知る恭夜だけは当然のような口ぶりで日向へ声を掛ける。

「アレが『退魔一刀流』……アイツが魔術師と戦う為に、自分の力で編み出した武器だ」
剣術

第3話 『Exorcised Sword』 — 退魔ノ劍

—

『退魔一刀流』。

それは魔力を持たない伊織が、魔術師と互角に渡り合う為に作り出した劍術。鍛え抜かれた超人的な膂力と驚異的な反射神経によって『術式を斬る』という芸当を可能にしたこの技は、伊織にしか扱う事の出来ない対魔術特化戦闘術だった。

◇◇◇

『強エからじゃね?』

かつて日向と交わした言葉が、天音の脳内に反芻される。

魔力が無い筈の伊織がこの魔術師の学園への入学を許可された理由を、日向はあの時正確に言い当てていた。圧倒的な戦闘能力。『強さ』とは魔術の世界に於いて、『家柄』よりも『魔力量』よりも遙かに価値を持つ圧倒的な真理だった。

当然の事実を今更再認識していた自分への苛立ちを?み込みつつ、舌打ちと共に新たな魔術を展開する天音。

氷属性攻撃術式

アイシクルバスター
『瀑氷道』

第四の属性を有した魔力によって生み出される、膨大な質量を持った氷の奔流。更にその術式の直撃を待たず、天音は魔術を追加展開する。

無詠唱で放たれた無数の爆速弾と陣戦風は、大きく迂回するような軌道を描いて伊織を背後から急襲した。

「クソ……!!」

咄嗟に繰り出した無数の剣撃で応酬し大半を撃ち墜とすが、撃ち漏らした魔術の余波によって体勢を崩される伊織。そこには既に、瀑氷道が伊織を呑み込まんと迫って来ていた。防御は間に合わないかに見えたが、伊織は振り抜いていた刃を返す。

「——退魔一刀流・『打鐘』ダシヨウ」

そして振り向き様に、刀の柄頭を巨大な水流へと叩き込んだ。

激突が生み出した凄まじい衝撃が、空間中へと走り抜ける。大きく押し込まれ足で闘技場を削るようにして後退する伊織だったが、その一撃は強烈な魔術の勢いを完全に殺し切っていた。

「アレ止めんのかよ……!?!」

そう言う日向の視線の先では、猛攻を凌ぎ切った伊織が反撃へと転じる。行く手を塞

ぐ巨大氷塊を一瞬で斬り崩した伊織は、それを足場に一気に距離を詰めるべく駆け出した。次々と襲い来る魔力弾の全てを最低限の動きで躲しながら最短距離を突き進むが、その経路ルート自体が天音の配置した巨大な罠。

伊織が斬り裂き踏み越えて行つた氷の残骸へと、天音が魔力を投じる。フィールド内に散らばっていた全ての氷塊は、新たな術式の触媒へ変化した。

氷属性攻撃術式

『氷斬崩閣』
キャスルスラッシャー

全方位から出現した氷の刃が、一斉に伊織を貫くべく襲い掛かる。その全てを受け切る事は出来ず、斬り裂かれた各所から鮮血が噴き出した。

それでも執念と不屈の眼光を宿した剣士は、決して立ち止まる事無く疾駆する。

「伊織は……」強エ”な」

日向の口から不意に溢れ出たその言葉に、笑みを浮かべながら恭夜は頷いた。

「魔術師に勝つ」……その意志の強さなら、アイツはこの場に居る誰にも負けねエよ」

◇◇◇

『藤堂一門』。

魔術旧家の一つであるその家系は、長い歴史と多くの門弟を有する魔術剣の一大流派

『藤堂流剣術』の本元だった。

その藤堂家にて『八属性魔力』という魔術師としての類稀なる才覚を持つて生まれ、歴代最強の劍士としての将来を囑望されていた天音。

しかし彼女は、『劍の才能』に恵まれなかった。また彼女の身体は弱く、劍士としての戦い方に耐える事も出来なかつた。

『お前に戦う資格は無い』。父から放たれたその言葉は、失望されたという事実を突き付ける重い鎖のように天音の心を縛り続けた。

そして彼女は、自身がどれだけ切望しても手に入れられなかつた劍才モノだけを持つた少年と出会う。

◇◇◇

この魔術師の世界を、劍術だけで戦つて行く事がどれだけ厳しく過酷な道かなど解つていた。それでも、その力への強い羨望を抑える事は出来なかつた。

しかしそれ以上に。

自分のように諦める事も、投げ出す事もせず戦いと向き合い続けている彼の姿に。『弱さ』を浮き彫りにされているように感じた。

だからこそ、自分が歩んで来た道を。血の滲むような努力と共に磨き続けて来た『強さ』を、否定させない為に。

(一)でアンタに——)

「——敗けるワケには、いかないのよ……!!」

戒めのように吐き出した言葉と共に、掌の中へと魔力を集め押し固める。既に伊織は、あと数歩踏み込めば刃が届く距離まで迫って来ていた。

ホルトランサー セクスタブル
『速戟雷・六連』

全ての術式を一つに束ね、渾身の電撃を炸裂させる天音。対して伊織も最後の一步を踏み切り、その刀刃を一閃させた。

刹那の交錯。

観衆が見守る中、静寂に包まれた闘技場で最初に動いたのは伊織だった。

地に膝を突き、ゆっくりと倒れ伏す。刀だけは強く握り締めたままだったが、雷に全身を貫かれた伊織は完全に気絶していた。

「……つーコトは……」

「よく見ろ、日向」

戦いの勝者が決まったかと思われたが、日向の言葉を遮った恭夜が両者を注視するよ
うに示す。それと同時に天音が着けていたチョーカーが碎け散り、彼女自身もまた支え
を失ったように揺れ動き地へと倒れ込んだ。

居合の峰打。伊織がすれ違い様に放った最後の一撃は、天音の首筋を正確に捉えていた。

双方が意識を失った事で、強制的に戦闘は終了となる。一気に闘技場全体を包み込む、爆発のような歓声。

藤堂^{第1位} 天音と御剣^{第4位} 伊織の戦いは、引き分けという形で幕を下ろした。

◇◇◇

「おー、ここに居たのかお前」

屋上へやって来た恭夜は、一人で魔術都市を眺めていた天音へと声を掛けた。回復術式による処置を受け天音は一足先に意識を取り戻したが、伊織は未だに医務室のベッドで爆睡している。そんな彼を叩き起こそうとした日向は、教員から羽交い絞めにされ止められていた。

暫し沈黙が続いていたが、やがて天音が背後に立つ恭夜へと話し掛ける。

「……失望しましたか？」

「んなこた無エよ。アイツ^{伊織}はプロとも張り合えるだけの力量を持つてる。良くあそこまで戦えたモンだ」

「……4位相手に押し切れなかった時点で、もう私の負けです」

「キビシーね、自分に」

天音以外だったなら間違い無く完敗していただろうと健闘を称える恭夜だったが、彼女の表情は依然として優れないまま。

「……私は、剣を捨ててここまで死ぬ気で突き詰めてきました……圧倒的な力魔力があれば、剣士なんて簡単に捻じ伏せられるって信じてたんです。けど結局は、自分が強くないって事を確認させられただけだった……私は、アイツに敗けただけじゃなくて……自分自分が乗り越えられなかった、『弱さ』にも敗けたんです」

止め処なく溢れ出る、抑え切れない感情を吐露して行く天音。それを静かに聞いていた恭夜だったが、やがて彼女が言葉を吐き終えると口を開く。

「伊織な、アイツ……魔術都市出身なんだよ。この街で魔術が使えねエ人間がどういふ扱い受けるかはオマエも知らねエワケじゃねエだろ？」

「っ……はい」

「色んな選択肢があつた中で、一番苦しい道をアイツは選んだんだ。生き抜く為にあの剣術を編み出して、死に物狂いで戦い続けた。何度も魔術師の世界に叩きのめされて、それでもアイツはこの街を出て行こうとはしなかった」

微かに笑いながらそう言う恭夜の横顔は、どこか誇らしげにも見えた。

「お前ら二人は、対極に見えてよく似通ってる。アイツも天音も、まだ逃げ出さずに戦っ

てるだろ?」

そう言つて天音に背を向けると、恭夜は屋上を後にする。

「弱さを受け容れて初めて、見えて来る強さの形もある。大いに迷えよ、若人。お前らは

—— まだ強くなれる。

彼が残したその言葉を聞き、零れ落ちそうになっていた涙を乱雑に拭いながら天音は立ち上がった。遠くを見据えるその瞳からは迷いは消え、湛えていたのは強い決意だ
け。

魔術だけを持つ天音と、剣術しか持たない伊織。二人の道は、未だ始まったばかり
だった。



「いやー、今年のルーキーは逸材揃いだわ。特にあの二人、組めば蒼とも良い勝負すん
じゃねーの?」

後日恭夜は、東帝学園学長室にてそう語っていた。

「……要件は何だ」

「澄香さんさー、マジで話を端的にしようとするクセ直した方がいいよ？もつと会話を
楽しまねーと人生も楽しくなんねーんだからさ」

恭夜へ短くそう告げたのは、東帝学園の学長を務める女傑、神宮寺ジングウジ 澄香スミカ。右目に走
る鋭い刀傷が印象的な美女だった。

澄香に無言で睨まれた恭夜は、渋々といった様子で雑談を切り上げ本題に入る。

「……あいつら二人も含めて、この時点でもう一定の戦術レベルに到達してる一年が何
人かいる。今後の成長度合いによるけど、もつと前倒ししても良いかもしんねーぜ？
カリキュラム
指導計画」

「……何が言いたい？」

「分かってるクセに〜」

ケラケラと笑いながらも、サングラスの下から澄香へと向けられた恭夜のその瞳には
鋭く本質を見通すような光があった。

「今年是新入生からも何人か選抜して、高次魔術訓練を受けさせるべきだ」

東帝学園へと集う新星達。彼等を取り巻く思惑は、物語を更に加速させて行く――



ボイスチェンジャー
変声機を介していると思われる、不気味な機械音声が暗中に響いた。

「——いえ、まだ『火の属性人柱』は確認出来ていません。ですが必ず居る筈です、この学園に」

「ええ……『退魔ノ剣』と『全属性術師』に関しては、我々の脅威たり得る事はまず無いかと思われまます」

「今後また動きがあれば報告します」

第4話 『Kick Strike — 蹴撃一閃 —』

「いやー、こないだのはスゲー戦いだっただわ。お前も一躍有名人だな」

「こんな状況望んでねーんだよバカ」

多くの生徒達が往来する廊下を歩いていた日向は、その隣を歩く身体の各所に包帯を巻いた伊織に話し掛ける。先日の模擬戦で、学年最強と目されていた天音と引き分けた伊織。すぐにその噂は広まり学園中から注目される事になったが、彼の表情は不機嫌そうに見えた。

「大体、勝たねエと意味無エんだよ。半端な決着のせいでポイントも大して奪れなかった。骨折り損じやねエかクソが」

「骨折してたのか？」

「違エよバカ。……何にせよ、次は勝つ」

「そうか、頑張れ」

強い目的意識を感じさせる声音でそう言い放つが、対する日向は能天気な様子で応える。しかし、毎日を愉快そうに過ごしているこの少年の普段の行動についてふと考える伊織。

戦闘演習こそ好成績だが学業には全く意欲を示さず、学校生活に於ける明確な目標も定めていないように見える。日向は魔術都市に生きる魔術師の家系でもなければ、都市の外で魔術の才能を見出されスカウトされて来た訳でもなく、ある人物からの推薦で東帝に入学したらしい。

自分からこの学園に来ようとするような強い意志も無かつたらしいが、そんな人間が伊織や天音に迫る実力を有しているという事は考えてみれば少し妙だ。日向には何か、この場所にやって来た理由はあるのだろうか？

「……っか、オマエは何で——」

伊織が日向へ問い掛けようとしたが、その時廊下の奥から物々しい騒めきが聞こえて来る。目を向けると何やら人混みが出来ているようだったが、向こう側の様子は見えな
い。

「ん？なんかザワついてんな。行ってみよオゼ」

「やめとけ……オマエが騒ぎにツッ込んだらロクなコトにならねエだろうが」

日向が面倒事トラブルに近付けば、如何にもならないどころか寧ろ事態が悪化するであろう事は想像に難く無い。しかし日向が一度興味を示してしまえばほぼ止める事が出来ない事を、まだ短い付き合いながら伊織はよく分かっていた。



中央大回廊を我が物顔で闊歩する、複数の男女による生徒の集団。他の生徒が慌てて開けた道を満足気に進んでいく彼等は、名家出身の人間達だった。

「あつ……！」

そんな中、名家の集団が通る道避けようとしていた一人の女子生徒が、手元から一冊の本を取り落とす。

(……トロいなア……)

しかしそれを彼等は立ち止まるどころか苛立ったような様子で、その魔術書を踏み付け通り過ぎて行つた。そして少女がショックを受けたような表情で本を拾い上げると、ようやく彼等の内の一人が振り返る。

「ちよつとキミー、危ないよ？廊下の真ん中でチンタラしてちやダメつしよ。氣いつけないと」

その身勝手な言い分に少女は黙り込んでいたが、彼とその仲間達は見下すような視線と共にクスクスと失笑を漏らしていた。

魔術社会に於いて、『血筋』という要因フアクターが持つ意味合いは大きい。そしてこの東帝に通う学生の半数近くは、魔術旧家出身の人間だった。彼等は自分達の持つ権力を理解しており、中には弱い立場の人間へと横暴に振る舞う者が一部ではあるが存在する。

教育機関が目指すべき実力主義の体制と対立する悪しき社会的因習が、少なからず学園の陰に蔓延ってしまったという現状がここにはあった。

「ボクらに迷惑掛けないように、もっと慎重しく過ごす事を薦めるよ」

理不尽な言葉と共に、陰湿な失笑を漏らしながらその場を歩き去ろうとするその集団。周囲の何人かはその様子に気付いていたが、旧家の人間に楯突けばまともな学園生活は送れなくなると分かっている為に誰も手出し出来ず見て見ぬ振りをするしかない。

「いやいや、謝れよ」

しかしその時、名家の集団の中心に何の前触れも無く突然一人の少年が姿を表す。まるで忍者のようにどこからか湧いて出た紅髪の少年こと日向に、最初は啞然としていた男達だったがすぐに我に返った様子で声を上げた。

「なっ……そもそも誰だお前。一年か?」

「俺は春川日向、よろしく。ってそうじゃねエわ、お前ら謝れって。その子の本思いつきり踏んでただろ」

「はア……? アンタには関係ないでしょ……!?」

「うん、関係ねーとかはどうでもいいんだわ。俺は、お前らが悪イコトしてたんだから謝れつつってんの」

名家の彼等を全く恐れる様子もなく堂々とした態度を取っている日向を、周囲の生徒達は驚愕しながらも注視していた。しかし日向を囲んでいた内の一人が、痺れを切らしたように掴み掛かる。

「なんで俺達がテメエらに謝る必要があんだア、あ?」

その瞬間。

明らかに自分より体格が大きい筈の男子生徒を、反対側の壁まで殴り飛ばす日向の姿を彼等は目撃した。いきなり下級生に一発KOされた仲間を見て、気が動転したのかも。う一人が背後から日向へ殴り掛かろうとする。

「コンの野郎オオツ!!」

しかし今度は横から割り込んで来た新たな少年が、男の手首を掴み捻り上げた。

腰に刀を携えたその少年・伊織は、男が走って来た勢いをそのまま利用して一回転させ背中から床へと叩き付ける。衝撃で呼吸が止まったその男の顔を踏み潰すという、流れるような凶悪コンボで相手を制圧する伊織。

先程まで高慢な笑いを漏らしていた名家の人間達は、一瞬にして青褪めた様子で後退っていた。

「思った通りに騒ぎをデカくしてんじゃねエよバカが」

「あーうん、まア成り行きだわ」

相変わらず平然としている日向の後頭部を叩きながら、伊織は周囲の状況を把握する。誰かに踏まれたようなボロボロの本を抱えた少女が視界の端に映り、たった今自分が転がした男やその仲間達が何をしたのかを大方察知した。

「なっ、何なんだお前ら……!!? こんな場所で身体強化魔術なんて、風紀委員に見つかったら停学だぞ!! 分かつてるのか!!」

取り巻きを叩きのめされた男は、伊織へと脅すように声を荒げた。校内では魔術を使った戦闘行為イザコザ・乱闘は御法度であり、東帝の校則によつて固く禁じられている。

「何勘違いしてんのか知らねエが……俺もコイツも魔術なんざ使つてねエよ。第一、風紀の連中呼ばれて困るのはテメエらの方だろ?」

しかし男は誤解していたが、日向と伊織は魔術など使つてはおらず『素』の身体能力だけで彼等を圧倒していた。当然ながら、二人は校則に抵触していない為一切の非は無い。愕然としている男へと、伊織は蔑むような視線を向けながら言葉を続ける。

「どうせ大方、『家』の力でも振り回して下らねエ真似してたんだろうが。テメエらみてエなダセエ面汚しが『旧家』なんざ名乗つてんじやねエよ」

「言わせておけばッ……!!」

名家のプライドを傷つけられ男子生徒の一人が激昂しかけるが、それより速く伊織が

男の顎を蹴り上げ天井近くまで吹き飛ばした。

「クズが……それ以上胸糞悪イツラ見せんじやねエよ。さっさと消え失せろ」

「ホラホラ、逃げる前に早めに謝つといた方がいいぞ〜」

魔術社会の階級制度を物ともしない実力で、彼等を容易く捻じ伏せた伊織と日向。二人に恐れをなしたのか遂に、名家の人間が一線を越えた。

「身の程知らずが……調子につ、乗るなよオ！」

情けない叫び声を上げながら、戦闘禁止の空間にも関わらず男は二人へと魔術を放つ。日向と伊織は簡単に躲すが、その背後には本を抱えた少女が怯えたようにしやがみ込んでいた。

「ツ!!」

二人がしまったと思つた時には既に、魔術は少女の眼前。

しかし次の瞬間、割り込むように一人の影がその場へ躍り出た。そして、目にも止まらぬ速度でその脚が振り抜かれる。

繰り出された一発の蹴撃は、放たれたその魔術を弾き散らしていた。

一撃で魔術を掻き消す、強靱な脚力。少女を守るように立ち塞がっていたのは、何処かから現れた謎の少年だった。

「おいコラ……どこで戦^やり合オがテメエらの勝手だがな……流れ弾でレイに危害を加えるつてのはオカシイだろオが……!!」

乱入して来た謎の第三者——茶色の髪を持ったその少年は、名家の集団へと歩み寄って行く。

そして彼の脚が僅かに『ブレた』瞬間、男達だけが地に叩き付けられていた。一撃の下に彼等が蹴り倒された事は、最早言うまでも無い。

残りの女子達は男達には目もくれず、怯えたようにその場から逃げ出していく。

「さて……残りはテメエら二人か」

「ちよつと待て。俺達は関係無——」

茶髪の少年は振り返ると、伊織と日向へ鋭い視線を向けた。誤解の気配を感じた伊織は口を開きかけたが、問答無用と言わんばかりの速度で飛び蹴りが放たれる。伊織は咄嗟に防御したが、日向は完全に不意を突かれ掌底で吹き飛ばされていた。

「何が関係無エんだ？テメエらの下らねエ喧嘩にあるオコトか女性を巻き込みかけたのは事実だろうがボケ」

「話ぐらい聞けやテメエ……叩ツ斬んぞコラ」

「やれるモンならやってみる包帯野郎が。テメエのチャンバラがどの程度か見せてもらいてエモンだなオイ」

伊織に勝るとも劣らない、高い格闘能力を見せる少年。胸倉を掴み合い至近距離で睨み合う両者だったが、そこへ息を切らしつつ戻って来た日向が割り込み強引に二人を引き離した。

「ちよーつと、落ち着けお前ら二人……なアお前、そんなに俺達が気に食わねエなら……あつ歯ア抜けた……闘技場、行こうぜ。そこでならいくらでも相手してやるよ」

「何だと……?」

日向からの突拍子もない提案に、一触即発だった伊織達が思わず手と口を止める。茶髪の少年へと日向は、珍しく冷静な声で話し掛けた。

「ココで俺たちが暴れたら、もつとメンドクせエコトになんだろ?ならお互い遠慮無くブン殴れるトコで戦り合った方が、多分後腐れとかもねーだろ」

「……確かにな」

魔術を使わないとはいえ、ここで派手に戦闘を行なっていれば生徒会や風紀委員に目を付けられる可能性もある。状況も把握した上での日向の言葉に伊織は納得し、少年も周囲の生徒を巻き込む事はよしとしないようにで渋々了承した。

「……仕方ねエ。正々堂々『決闘』でブチのめしてやろうじゃねエか。テメエも包帯野郎

もなア」

「伊織は俺より強エからな。アイツと戦いてエなら、まずは俺と勝負してもらうぜ」

少年と日向はそう言い合いながら、近くの窓から躊躇無く下層の中庭へと飛び降りて行く。伊織は結局大きくなってしまった騒ぎに舌打ちしながらも、二人を追い掛けようと歩き出した。

「あつ、そつ、そのつ……!」

「ん? あア、お前か。アレはあのバカ共が勝手にヒートアップしただけだから、お前が気にする必要はねエよ。テキストに殴り合わせときやその内頭も冷えんだろ」

その時、本を抱えた少女が伊織に声を掛け引き止める。自分を横暴な名家から守ってくれた二人が、あらぬ誤解を受け決闘にまで発展してしまった事に戸惑っていた少女。しかし心配いらないと軽く告げた伊織は、彼女を置いて闘技場へと向かって行った。

補足だが、日向達の喧嘩に乱入して来た少年の名は皇スメラギ 啓治ケイジ。クラス1—Bに所属する、学年能力順位『5位』の人物だった。

◇◇◇

「まさか、アンタも東帝に来てたとはね……沙霧」

「えへへ……うん。知らない人ばかりだったから、天音ちゃんが同じ学校に居てくれ

て本当に嬉しかったなあ」

廊下を並んで歩いていたのは、天音と水色の髪を持った少女。

彼女の名は空条クワンゾウ 沙霧サギリと言ひ、I—Bに所属している天音の幼馴染だった。そして沙

霧は日本魔術界で藤堂一門と並ぶ程の影響力を持った魔術旧家、『空条家』出身の人間でもある。名家同士という繋がりもあつたがそれ以上に、優しく穏やかな性格の彼女は天音が心を許している数少ない友人だった。

「それにしても、『生徒会』の人達から呼び出されて……何なんだろうね」

「さあね……でも私もアンタもやましいコトなんて何もしてないんだから、ビクビクする必要は無いでしょ」

「そうだけど、やつぱり緊張するよ……」

久々の再会を喜びつつも二人が向かっていたのは、学園の秩序を守る組織の本部たる『生徒会室』。名指しで呼び出された彼女達に心当たりは一切無く、沙霧は少し怖がつていた。生徒会室の巨大な扉の前までやって来ると、天音は躊躇無く部屋へと入室して行く。

「失礼します」

「し、失礼します……!」

その中で天音と沙霧を待っていたのは、四人の少女達だった。部屋の両脇にはそれぞ

れ、赤髪のツインテールと金髪のポニーテールが特徴的な二人の女子生徒が控えている。

中央のデスクには、猫耳の付いたパーカーを被り棒付きキャンディを啜えた少女が腰掛けていた。そして席を立ち二人を出迎えたのは、艶やかな黒髪を長く伸ばした美貌の少女。

彼女が学園の生徒達を統率する組織『生徒会執行部』を束ねる『生徒会長』、黒乃クロノ 雪華ユキカ だった。

「よく来てくれたわね。初めまして、藤堂さん、空条さん」

「……どうも」

「初めまして……!」

「フフ、そう固くならなくて大丈夫よ。絵恋、二人にお茶を入れてもらえる?」

雪華は微笑みながら金髪の少女へと指示を出しつつ、天音達を来客用の席へと案内する。席に着いた二人へティーカップが行き渡ると、雪華は改めて口を開いた。

「私は黒乃 雪華。この学園の生徒会長をやっているわ」

「私はねー、白幡 千聖! 副会長だよー。んで、そっちの赤い髪のコが書記の一条 ハルで金髪のコが会計の九重 絵恋。よろしくねー」

雪華の挨拶の直後に、デスクに座ったパーカーの少女白幡シラハタ 千聖チサトが二人へと自己紹介

する。赤髪の少女一条イチジヨウ ハルはそちらを一瞥するのみで、金髪の少女九重コノノエ 絵恋エレンは柔らかな表情で一礼した。

「……藤堂 天音です」

「空条 沙霧です！こちらこそ、よろしくお願いします……」

「うんうん、よろしくねー天音っち、さぎりん！」

二人も自分達の名前を返すと、雪華は笑顔で頷き千聖は早速彼女達に渾名を付けている。

「いやー、それにしても天音っちは『1位』でさぎりんは『6位』っしょ？すごいなー、あたしなんか一年の頃の順位30とかそこから辺よ？」

「懐かしいわね……フフッ」

「いえいえ、私なんて天音ちゃんに比べたら全然で……」

千聖と雪華は自分達の新入生時代を思い起こしつつ、事前にリサーチしていた二人の能力順位について言及した。沙霧は謙遜していたが、学年上位に食い込めるのはこの東帝全体の中でも際立った実力を持つという紛れも無い証明である。

「……黒乃会長は世間話をする為に私達を呼んだんですか？」

その時、天音が発した言葉が場の空気を一瞬で凍り付かせた。

「え、あーいや、その……」

（うつわあく、天音つちめつちや尖つてるウ……こりやハルとは嘸み合わなさそうだな……）

喋っていた千聖は突然の指摘を受け、冷や汗を流しながら言葉を詰まらせる。後ろを見てみるとハルが無言で太腿のガンホルスターへ手を伸ばしており、それを絵恋が諫めていた。二年生のハルは雪華や千聖など生徒会の先輩を慕っていたが、彼女らに失礼な態度を取る人間には本当に容赦が無い。

「……ごめんなさい、藤堂さん。私はすぐ本題に入っても良かったんだけど、千聖が新生の後輩とお喋りがしたいって聞かないから……」

「えっ、あたしの所為になる感じ!?つかそんなコト言つてくない!?!」

突然空気を悪くした責任を押し付けられた千聖が傍から見たら面白い程に狼狽えていたが、雪華は彼女に見えないようにハル達へ小さく舌を出していた。

淑やかそうな人物に見えて意外と悪戯好きという、年相応な一面も持つ雪華。相変わらず慌てふためきながら、三年生にも関わらず天音やハルの顔色を窺っている千聖。その状況に耐えられなくなったように沙霧は小さく吹き出し、雪華によつて上手く毒気を抜かれた天音は静かに溜息を吐いた。

張り詰めていた空気を和ませた雪華は、拗ねて体育座りしている千聖を放置し二人に

向き直る。

「それで、話っていうのはね……二人さえよければ、私達がいる『生徒会』に入るつもりはない？」

第5話『Armor Knuckle 一機甲の拳一』

雪華から語られたのは、天音と沙霧を生徒会執行部へ迎え入れようという内容だった。

「えっ、でも……私達、まだ一年ですけど……」

「学年なら気にする必要は無いわ。私達が求めているのは、優秀な成績と実力を伴った人材だから。その点二人は申し分ないと私は考えたんだけど……今の二人の率直な意見を聞かせてほしい。入りたいと思うか、それとも否か」

高く評価されているという事は喜ばしい事なのだろうが、他の生徒達の学園生活を左右する程に重要なその役職に自分が相応しいのかと逡巡する沙霧。

「私は……」

沙霧が返答に迷っていると、隣にいた天音が彼女に代わって開口した。

「二つ聞かせて下さい。私達を勧誘したのは、旧家の人間だからですか？」

思惑を鋭く突いてくるように投げ掛けられた天音の問いだったが、雪華は表情を崩さずに言葉を返す。

「……それは全く関係無い、^{家柄}とは言い切れないわ。でもそれは貴女達なら、他の名家出

身の生徒の模範にもなってくれるんじゃないかと思つての事だったの。貴女達を利用するような意図は無かつたのだけど、気を悪くさせたなら謝るわ。ごめんなさい」

頭を下げた雪華に、沙霧が慌て戸惑いながら天音へ視線を向けた。

「だけど私達の目的は、一人でも多くの生徒が魔術師としてより成長出来るよう手助けする事。それは信じてほしい。……貴女達がもし力を貸してくれるなら、とても嬉しいわ」

しかし頭を上げた雪華は、笑みを浮かべつつも真剣な声音でそう言い切る。

「……『生徒会執行部』の役割は、生徒達の学園生活を支援する事。その一点に於いて、雪華達は真摯かつ誠実に職務と向き合っているように沙霧には見えた。」



「あの野郎『5位』か……」

闘技場上空に、魔術によって浮遊している巨大モニター。そこに表示されている闘技場利用者のデータを見ながら、観覧席の伊織が呟く。

能力順位は自分より下だったが、啓治の実力を侮るつもりは無い。順位はあくまで魔術師としての能力の基準にしかならず、『強さ』の指標とは別物であるという事を自分自

身が天音との戦いで証明していたからである。

対して日向の学年能力順位は現在『7位』。しかしこちらも座学の壊滅的な授業成績に足を引っ張られている為、日向本来の実力を測る目安としては当てにならない。

一年の中でもランキング上位の二人による対戦カードに、やはり多くの生徒が興味を持ち観戦しに来ている。そんな中、フィールド上で日向と対峙していた啓治は優れた視力で観客席の伊織を見つけると中指を立てて来た。

(次・は・テ・メ・エ・だ)

啓治の口の動きを読み解いた伊織は、今すぐ乱入しようとした自分を何とか律して剣呑な視線を返す。

「うおーっ、俺決闘って初めてだ!」

「ハッ、ブツ倒される前に精々その景色を焼き付けておくこつたな」

「なア、敗けた方が食堂でメシ奢るってどうだ?」

「その生意気な口二度と聞けねエよオにしてやんぞコラ……!!」

一方で闘技場での模擬戦が初めてである日向は、高揚した様子でしきりに周囲を見渡していた。自由すぎる彼の物言いに、啓治は軽く苛立っているように見える。

第一学年能力順位『第5位』皇 啓治VS同学年能力順位『第7位』春川 日向。

戦闘開始のアナウンスと同時に、両者は全速力を以て相手への最短距離を突進した。卓越した体術使いの日向を相手に、真つ向から接近戦を挑もうとしている啓治に軽く驚きを見せる伊織。日向は自身の魔力を拳に、啓治は右脚へと収束させ纏わせた。

強化術式×火属性魔力

『炎撃』

強化術式×無属性魔力

『撃脚』
ゲツキヤク

己の肉体を魔力で強化し戦う『近接戦闘型魔術師』。奇しくも全く同じ戦闘スタイルであった二人は、互いの武器を振り抜き真正面から激突した。生み出された爆発的な衝撃が吹き荒れるが、日向は止まらず更なる連撃を叩き込み啓治を吹き飛ばす。

しかし啓治は地に倒れる事も無く、平然とした表情で体勢を立て直した。

(何発かガードされたか……？つーか硬ってエ……)

戦闘が始まれば一切の感情は排し、冷静に相手の力量を推し量る高い集中力を見せる日向。

攻撃は幾つか入った筈にも関わらず、地面を殴ったかのように手応えが無い。啓治の高い防御能力と魔力を纏わせ的確に弱点を守る技術は、格闘戦に於いて相当に厄介だっ

た。

「試しに喰らってはみたが、この程度か……右手だけで充分だな」

対して啓治は余裕の表情と共にそう言い放つと、制服の袖を捲り右腕を曝け出す。そこに着けられていたのは、機械的なデザインのブレスレット。更に懐から同様のデザインのメリケンサックを取り出すと、それを右手で握り込んだ。

『『アーマー・ナツクル』、アクティブーション起動』

【使用者認証・ARMOR KNUCKLE】

啓治によって声紋認証が為されたその二つは、機械音声を響かせながら変形・展開・そして合体し右腕全体を覆う手ガントレット甲となる。

国内最大規模の魔術軍事企業『皇重工』の御曹司、皇 啓治。

彼は、魔力のエネルギー理論と機械工学が融合した学術分野『魔術工学』の天才だった。

「さて……一つ、ブチかますか」

魔力を動力源とする機械武装『魔術兵装』。自身の手で開発した魔術兵装『アーマー・ナツクル』を纏った、啓治のその拳が開かれる。

「『機甲』——」

機械的な手甲が装着された啓治の右腕へと収束する魔力を察知し、警戒しつつも迎え撃つ構えは崩さない日向。しかし魔力で強化された脚力による高速移動で、一気に肉薄し啓治が距離を詰める。

「——『徹拳』」

繰り出された装甲の拳は、日向の防御を掻い潜りその腹部へと叩き込まれた。

「グッ……!!」

（重てエ……!!しかも速エな……!!）

想定を凌駕する一撃を受けながらも、日向は鋭い反撃の回し蹴りで牽制しつつ距離を取る。啓治の右腕に纏われたその武装は、攻撃の威力と速度を大きく引き上げる性能を有しているようだった。

相手の情報をインプットし直そうとするが、日向に戦術を再構築させる間も与えず再度間合いを詰める啓治。

（クソ……また来るか……!?!）

アーマーを装備した右のストレートを警戒し、日向は両腕を交差させ防ごうとする。

「残念、っつちだ」

しかし啓治は日向の意識から外れていた、装甲を着けていない左の拳に魔力を集中さ

せていた。虚を突いた逆方向からの一撃が、日向のから空きの脇腹へと打ち込まれる。

強化術式×無属性魔力

『撃拳』^{ゲッケン}

そして防御が緩んだ日向の顔面へ、追撃の膝蹴りを炸裂させる。装甲を身に纏う事で攻撃力・防御力を底上げするこのタイプの魔術武装は、啓治の高い格闘技術と抜群の相乗効果を生み出し彼の戦闘能力を大きく引き上げていた。

地面を転がる日向だったが、ダメージを感じさせない身軽な動きですぐさま立ち上がる。

「イイね、面白くなってきた」

「フン……『頑丈さ』はお互い様、ツてか」

これだけの猛攻を受けながらも、平然と鼻血を拭っている日向の驚異的な耐久力。啓治は軽く驚かさながらも、依然として余裕を崩す事は無く再び日向と激突する。

「ヒヤヒヤさせやがって……」

そして観戦していた伊織は、防戦一方かと思われた日向が少しずつ押し返しつつある事に僅かに安堵するような表情を見せる。

(それにしてもアイツ……)

しかし伊織の優れた洞察力は、日向の身体に生じている彼自身すら気づいていないで

あろう小さな変化に違和感を覚えていた。

楽しげな笑みを浮かべながら、啓治と激しい戦いを繰り広げる日。

(『眼』の色が、変わってねエか……?)

紅色の筈の彼の瞳が、黒く染まり始めているように見えた。

◇◇◇

生徒会室を後にした天音と沙霧は、並んで回廊を歩いていた。

「……生徒会の誘い、どうする?」

雪華から生徒会への加入を打診された天音達。対して二人はすぐには決断出来ない
と返し、その回答を保留していた。

「断るわよ。他の人間の面倒まで見てるような時間は……私には無い」

同じ部屋に居て分かったが、彼女達全員が魔術師として相当な実力を有している。生徒会に入り雪華達と行動する事で、自分を成長させ得るメリットがあろう事は薄々感じ取れた。

しかし天音には、己の力のみで研鑽を重ね強くなる方が性に合っている事もまた自覚していた。

「アンタこそ、保健委員会の話……受けるの?」

天音からの問いに、沙霧は考えに耽るように黙り込む。思い起こされるのは、退室間際に千聖から放たれた言葉だった。

『そう言えばさ、さぎりんって回復術式使えるんだよね?』

部屋の隅で小さくなっていた千聖は、突然気を取り直したように立ち上がると沙霧へ近づいて行きながらそう質問する。回復術式とは相手を治癒する術式であり、適性のある者に使用出来ない高難度かつ希少な魔術だった。

『っ、はい。一応……』

『だったらさー、保健委員会とかは興味無い? あそこもさぎりんみたいに優秀なコは大歓迎だろうし』

千聖が口にした『保健委員会』とは、生徒達の健康管理や治療などといった医務全般を担当している組織である。そしてそのトップである保健委員長と千聖はクラスメートラしく、一度話をするのとはどうかと提案された。

『まあ、気乗りしなかったら断ればいいし。可愛いし優しいコだから、全然緊張しなくていいよ☆』と評されるその委員長を、後日千聖によって紹介してもらった沙霧。

「まだ分かんないかな……委員長の人と会ってみてから、またちゃんと考える」

「そう……まあ、私に気を使う必要は無いから。アンタが入りたいんだつたら、執行部だつて良いと思うわよ」

「うん……でも、天音ちゃんと一緒じゃないときつと楽しくないから……多分、入らないかも」

「……………好きにすれば?」

照れ隠しのように天音が顔を背けると、沙霧は小さく笑いながら頷いた。

「あつ、あのつ……!!」

その時突然、一人の女子生徒に背後から声を掛けられる。駆け寄つて来た彼女は、かなり焦燥した様子で沙霧へと話し掛けた。

「B組の、空条さんですよね…………?」

「え、そつ、そうですけど…………私がどうかしました…………?」

かなり逼迫しているようなその声に沙霧は狼狽し隣の天音も訝し気な表情を浮かべていたが、次に告げられた言葉に二人は驚かされる事になる。

「お願いします、貴女と同じクラスの皇君を止めてください…………!!私の所為で勘違いさせちゃつて、今A組の人と闘技場で大喧嘩してるんです…………!!」

◇◇◇

繰り広げられる、激しい肉弾戦。

互いに一步も退く事無く、凄まじい乱打ラッシュを相手へ叩き込む。両者の連撃は加速し続けていたが、戦況が変化しつつある事に啓治は気付いていた。

先程から、日向の動きのキレが異常なスピードで上がり続けている。

(さっさとケリ着けた方がいいかもなア……!!)

戦いの中で急速に上がっていく日向のギアを危険視した啓治は、戦闘を早期決着させるべく『奥の手』のカードを切った。

「アーマー・ナックル、『最大出力』」

啓治の声を発動のキーとして、手甲内部に充填されていた全魔力が一撃の威力へと変換されていく。一発限りの切り札とは、繰り出すタイミングをミスすれば自身を窮地に立たせかねない諸刃の剣。

しかし啓治は一切の躊躇無く、渾身の力を以てその鉄拳を撃ち放った。日向もまた、魔力によって生み出した火炎を右腕へと一点集中させる。

衝突した二つの拳が、空間へ轟音を響かせた。

武装の全性能を解放した啓治の一撃によって、粉碎されたかと思われた日向の右手。しかしその拳撃を日向は、同じ拳ではなく開いた五指で掴み止めていた。

骨は碎け筋組織は断裂しその右腕は使い物にならないように見えたが、攻勢に転じた日向は止まらない。右で受け止めた手甲へと炎を纏った左の連拳を叩き込み、更に腹部

へと膝蹴りを炸裂させる。しかし啓治もまた左の掌底で日向の顎を撃ち上げ、双方は互いに大きく吹き飛ばされた。

「クソ……イカレやがった」

連撃を受け損傷した事で排熱しながら機能停止した手甲を、悪態を吐きつつ取り外し地に投げる啓治。相対する日向は、顔や腕から血を滴らせながらも心の底から闘いを愉しんでいるような目をしていた。

「まだまだ、こっつからだろ……!!」

「人間かよテメエは……!?!」

想定以上の身体強度を見せながら突進して来る日向へ、唸りながらも脚に魔力を集め高速移動を発動させる啓治。相手の二段蹴りを裏拳と掌底で弾いた日向は、左脚へと魔力を収束させ蹴りによる『炎撃』を繰り出した。

血飛沫を撒き散らしながら徒手空拳で打ち合う二人の姿は、最早魔術師の姿から逸脱しているようにすら見える。そんな拮抗した実力の均衡を破つたのは、日向の方だった。

頬を掠めるような啓治の右ストレートを紙一重で躲すと、その右腕と胸倉を両手で掴む。そして魔力を頭部へと集中させた日向は、渾身の頭突きを叩き込んだ。

「く……!!」

額から派手に血を噴き出しながら、頭を割られるような衝撃に膝を突く啓治。しかし日向は止まる事無く、更なる追撃で眼前の相手を叩き潰そうと拳を振り上げている。

——日向の様子が明らかにおかしい。まるで自分を見失っているかのようにはいへ没入しすぎており、今にも啓治へ大怪我を負わせかねない一撃を放とうとしていた。

「流石にヤベエだろあのバカ……!!」

理由は不明だが暴走の兆しを見せている日向を止めるべく、伊織は横に立て掛けていた刀を掴むと立ち上がる。闘技場の戦いへと割り込むべく観覧席からフィールドへ飛び降りようとしたが、その寸前に伊織の肩を後ろから誰かが掴んだ。

そこにいたのは、伊織と同じクラスに所属する金髪の少女。

「藤堂……!?!」

「やっぱりアンタ達絡みの騒ぎだったってワケね……」

「離せ、このままでとアイツ日向相手を殺しちまうぞ……!!」

「大丈夫、春川は沙霧が止めるから。アンタはただ任せて、黙って見てて」

珍しく冷静さを欠いたような声を上げる伊織だったが、天音は信頼するような視線を闘技場へと向けながら落ち着くよう促した。

炎が渦巻く日向の拳が振り下ろされる。しかしその一撃は、啓治の前に突如出現した『魔力の障壁』によって阻まれた。

形成術式×水属性魔力

『水 甲盾群』
アクア・エルシールド

高度な防衛術式は、日向の猛炎から啓治を完全に守り切る。しかしその魔術の発動者は彼ではなく、その後ろに立つ水色の髪 of 少女だった。

「空条さん、どうしてここに……!？」

振り返った啓治は、突然背後に現れた自身のクラスメートの姿に驚きを隠せずにいる。

「よかった……間にあって」

対して沙霧は心の底から安堵したように、そう声を漏らした。

◇◇◇

沙霧の介入によって決闘の勝敗はドロートとなったが、結果として日向達と啓治の間に生じていた誤解は彼女が連れて来た少女によって解かれた。

まず経緯としては

①日向と伊織は名家の生徒達の理不尽を正す為に彼等を派手に蹴散らしたのだが、その内の一人が魔術を発動。

②その射線上にいた少女を啓治が守ったのだが、日向達の喧嘩に無関係な少女を巻き込んだと誤解した。

③その結果として、日向と啓治による決闘が勃発。

④しかし実際には日向達の行動は少女の為であり、それを啓治に伝えるべく彼と同じB組の沙霧に仲裁を頼んだ。

簡単に言えば、これが今回の騒動の顛末である。

巻き込み掛けたのは事実であるため啓治は謝る気など更々無さそうだったが、沙霧に『誤解だったとはいえ、先に手を出しちやつたのは皇君だから一応謝っておいた方がいいよ』と言われると日向へ深々と頭を下げた。あまりにも女性ファーストな性格の皇啓治という男に、天音は少し気味悪がっていた。

一方直接戦っていないとはいえ、煽るだけ煽られたままで依然として腹立たしそうな様子だった伊織。しかし自身の度を越えた暴行も名家の逆上を招いた原因であり、こちらにも非があると分かっていたのか何とも不服そうな表情で矛を収めた。

「なア啓治、食堂行こうぜ」

「なんで俺がお前らと……」

「いーじゃねーか、俺クツソ腹減ったし。ホラ、お前もだぞ伊織」

「フザけんななんでコイツと……」

男達三人は結局のところ気が合う部分もあったのか無かったのか、揃ってその場を去っていく。しかし、彼等の背中を見送る沙霧の表情は優れない。

「……アンタ、色々気にしすぎ」

彼女は今回の戦いの発端が自分達と同じ名家の人間だったという事を憂慮しており、それを察した天音は気に留める必要は無いと沙霧に告げる。しかし彼女の顔は、最後まで曇ったままだった。

そして『魔術旧家』を巡る懸念は、新たな騒動を巻き起こす。その中心に居るのはやはり、学園随一の問題児^{トラブルメーカー}たるあの男だった。



闘技場で行われている模擬戦は、生徒間の戦術ノウハウ共有という名目で学園ネットワークを介してリアルタイムで配信されている。

「蛇島さん、闘技場の配信見ました？なんか聞いた話によると、素手で殴り合ってる一年がいたらしいっすよ」

携帯端末で動画を見ながらそう言ったのは、東帝学園旧校舍裏の通称『スラム街』と呼ばれる場所に屯していた学生達。制服を着崩した俗に言う『不良』と呼ばれるような

人間達からそう声を掛けられたのは、殴り倒され気絶している者達が積み上げられた山の上に腰掛けた白髪の少年だった。

「おおいオイ、バカ言っちゃいけねエよオマエ。我らが東帝魔術学園は何時からファイトクラブになっちまったんだ？あ？」

蛇島と呼ばれたその人物は、直前の喧嘩で拳に付いた血を払い落としながら問い返す。

「春川つてヤツらしいっス。しかもソイツ、名家の連中を廊下で殴り飛ばしたとか」

「お اون!? そりゃア有望株じゃねエの。ンなら、生徒会のクソ共に引き抜かれる前に……」

赤色の瞳を持ったその男、蛇島^{ヘビシマ} 司^{ツカサ}は狂気的な笑みと共に立ち上がった。

「二丁、叩き潰しに行ってみよオカ」

動き出す、新たな勢力。魔術師達は、幾多もの思惑を抱えこの学園で交錯する。

第6話 『Mad Snake —狂える戦蛇—』

生徒会副会長、白幡 千聖の朝は早い

訳ではない。

模範たるべき生徒会執行部の一員にも関わらず、雪華やハル、絵恋と比べて彼女の一日の流れはルーズだ。まず8時45分頃に起床、この時点で既に遅刻確定コースである。

顔を洗い着替えるといつもの棒付きキャンディを啜え、軽い足取りで女子寮を出る千聖。教員からのお叱りの言葉を聞き流し友人と談笑しながらの授業を終え、親友が待つ生徒会室へと急いだ。

「ゆーきかつ♪なーんか浮かないカオしてんねっ」

入室すると何やら難しい顔で書類と向き合っている雪華を見つけ、背後から抱きつく。

「千聖、貴女また遅刻したそうね。冴羽先生から聞いたわよ」

「うへえー怜ちゃん雪華にだけはチクっちゃダメだよ」

雪華からの咎めるような言葉に、千聖は口を尖らせていた。

「……少し気がかりだったの。今日から蛇島君が復学するらしくて」

「あ、そーなの？ アイツ戻って来たんだ。また賑やかになるね〜」

雪華が口にした懸念とは、彼女達と同学年のある生徒について。言及されたその人物は、校内で度々暴行事件を起こす問題児でありその都度停学処分を下されていた。

「また何か騒ぎを起こさないか心配だから、一応風紀委員会にも警備強化を要請しておいたんだけど……」

「んー、まあ大丈夫じゃないの？ 二、三年はほぼ全員司のヤバさは分かっているだろうし、ましてや一年にアイツと戦り合うような度胸あるコなんていないっしょ〜」

千聖は楽観的だったが、雪華の胸に残る一抹の不安は消えない。

そしてやはり、彼女達の見通しは甘かった。天性のトラブルメーカーたるあの男の存在を、二人共考慮していなかったのである。

◇◇◇

環状に建設された八つの連結本館の裏側、演習場へと続く連絡橋にて対峙する二人の人物。

片方は彼自身も与り知らぬ所で話題に上がっていた男、蛇島 司。そしてもう片方は、何人もの男達を殴り倒し足元に転がしている御剣 伊織だった。

「見ねエツラだが……一人残らず返り討ちたアやるじゃアねエの」
「……コイツら噓けてきやがったのはテメエか」

真つ向から睨み合う二人のこの状況は、僅か数分前に端を発する。

『オイそこの一年坊。オマエ、「ハルカワ」って野郎知ってるかア？オレ達ちよーつとその一年に用あつて探してんだけどよオ』

居残り補習を受けさせられている日向と、自販機の横で待ち合わせていた伊織に掛けられた声。彼の待ち人を偶然探していたのは、見るからに柄の悪い学生の集団だった。よく見ると彼等が着崩しているのは伊織と同じ制服であり、東帝の生徒である事が分かる。

（あのバカはいつでも騒ぎの渦中に居やがるな……）

呆れるように溜息を吐く伊織。しかし降り掛かる厄介事の火の粉を払っておいてやろうと考える程度には、彼は友人思いな少年だった。

『……さアな。ま、知つてもお前らに教える義理は無エよバカ』

伊織は一切怖気付いた様子も無く、周囲を取り囲む男達へ淡々と告げる。

見るからに下級生と思しき生徒から放たれたそんな挑発的な言葉を、俗に『不良』と呼ばれる彼等のような人種が素通りさせる事はまずあり得ない。すぐに逆上した何人

かが伊織へ殴り掛かり、そのまま乱闘へと発展する。

ただ彼等にとつての誤算は、魔術を使わない身体能力だけの喧嘩に於いて伊織はこの学園で最強格の人間だという事だった。

数分後。刀すら抜かず体術だけで不良達を捻り潰した伊織は、気絶していた一人の頬を軽く叩きながら尋問していた。

『おい、起きろコラ。テメエら何が目的であのバカを探してる』

トラブルの根幹を探るべく伊織が情報収集を試みていた、その時。

『ッ!?!』

背後に迫り来る凄まじい殺気を半ば本能的に察知し、咄嗟に頭を下げ躲す伊織。その上を唸るような風切り音と共に、何者かが振り抜いた足刀蹴りが通り過ぎる。紙一重で回避しそのまま距離を取った伊織の前に現れていたのは、白髪と赤眼を持った少年だった。

攻撃直前まで気配を完全に殺し、身体能力を魔力によって一瞬で強化する技術。この男が周囲に転がっている不良達とは一線を画した実力を持つという事を、伊織は感じ取っていた。

「喉けたっつーよりかよー、闘技場でスパークキング紛いの殴り合いやってたとかいうオ

モシレー一年を探させてたんだわコイツらに。その様子だと、テメエ何か知ってるクセエな」

「つまりテメエがこの連中の親玉って事か」

彼こそが日向を探していた不良達のリーダー格であると知り、その目的を突き止めるべく伊織は更に問い詰めようとする。しかしその白髪の男——蛇島は、突如として戦意が無い事を示すように両手を上げると提案をしてきた。

「ま、——じゃア人の目もある。『風紀』の連中に見つかんのはお互いウマくねエだろ。場所オ移そうや」

着いてくるならテメエが知りてエコトも教えてやんよ、と告げて来る蛇島。？は言っていないように見えた事に加え、彼と自分が本気でぶつかれば大きな騒ぎを引き起こす激しい戦いになるだろうと伊織は分かっていた。

◇◇◇

「いやあ、先日はどうも御迷惑をお掛けしました。空条さん、そして藤堂さん。その節は本当にありがとう」

「あー、迷惑なら現在進行形で掛けられてるから。アンタホントに鬱陶しいからそろそろ離れてくんない？」

授業を終え講堂から出て来た天音と沙霧へ話し掛けていたのは、廊下で待ち構えてい

た啓治だった。

先日勃発した誤解を発端とする日向との決闘を仲裁した二人に、度々感謝と共に礼を述べていた啓治。対して天音は、女であれば誰にでも甘く軟派で気障ったらしいこの男が正直な所苦手だった。ただ昔から人見知りだった沙霧に親しい友人が出来た事は幼馴染としては喜ばしい事であり、啓治が悪い人間ではない事も分かつていたため邪険にも扱えない。

「それにしても、いつも空条さんから聞かされているよ。強く美しく聡明、自慢の友人だとね。こうして話せている事がとても光栄さ」

「アンタは他人に何こつ恥ずかしいコト言つてんのよバカ……」

「らつてえほんふおのふおとらよお……」

啓治からB組での様子を聞かされ、天音は沙霧の頬を引つ張りながら追及する。

「……それはそうとして。最近分かつてきたが、この学園には俺達が思つてる以上に物騒な連中が多い。二人共、どうか気を付けてほしい」

その時ふと神妙な顔つきになった啓治は、二人へ忠告するようにそう切り出した。しかし一切意に介さず、平然と言葉を返す天音。

「余計な心配ね。大体、こないだアンタが勘違いした時の連中みたいなのは、自分達より格上の旧家相手には食つて掛かったりするよな度胸無いわよ」

「……いや、俺が注意すべきと思ってるのはソイツらじゃないんだ」
「どういう事？ 皇君」

藤堂家と空条家は共に、並み居る魔術旧家の中でも更に一際大きい影響力を有する。同じ名家の横暴など恐れる理由は無いと一蹴する天音だったが、啓治が警戒しているのは別の人間達だと言う。沙霧に問われ、啓治は続けて口を開いた。

「この間、学園の事情に色々と通じてるヤツと知り合ってたね。ソイツの話によると、この学園には旧家の人間達に反発する生徒の集団があるらしいんだ」

「……………」

胡散臭い噂話としか思えない天音だったが、啓治は至って真剣な様子で続ける。

「俺も最初は半信半疑だったんだが、どうやら実体は有るらしい。聞くとその連中は、生徒会や風紀委員会相手にも平気で暴力沙汰を起こすゴロツキの集まりだそうだ」

「そんな人達が居たんだ……でも、退学させられたりしないのかな？」

「……どれだけ素行に問題があっても、東帝^{トウテイ}では術師として有望だったらある程度黙認されるってコトでしょ」

「ああ。まア度を超えてる人間は停学させられたりもしてららしい」

旧家体制や生徒会と敵対する『不良集団』の存在を啓治から明かされ、表情が固くなる沙霧。天音は怪訝そうな顔のまま沙霧の疑問に答え、啓治がそれを補足する。

「その中でも、特にネジが飛んでる人間が三人いるらしくてな……」

◇◇◇

「なアオマエ、魔術旧家の連中についてどう思う?」

東帝学園には、現在使用されていない『旧校舎』が存在する。その裏側には、金属廃材や鉄骨を魔術で組み上げ造られた不良達の根城『スラム街』が建設されていた。

自分をこの場所へと連れて来た蛇島にそう訊かれ、伊織は一瞬考え込むがすぐに言葉を返す。

「……別段何も思う事は無エな。ただ、旧家であろうとなかろうと、下らねエクソ野郎ならブツ潰すだけだ」

「成程なア……」

そう言い放った伊織に、蛇島は背を向けたまま言葉を続ける。

「そんな下らねエクソ野郎共の大多数が、大した実力も無エクセしてこの学園にのさばってるのはオメーも知らねエワケじゃあるめエ。しかも生徒会や風紀のクソ連中はコレを黙認してるときた。……オカシイとは思わねエか? 魔術師オレ達の世界ってのは、実力至上主義で有るべきとは思わねエか?」

「……お前さつきから何が言いて——」

「分かった! わーかつたよせつかちだなテメーはよー。じゃア率直に言つてやる。……」

”お前ら”、俺と組んでアイツら潰さねエか？

蛇島から伊織へ告げられたのは、唐突な提案。

「お前や春川が持つてる”魔術を使わねエ武力”、つーカードは、この学園に風穴ブチ開けられるジョーカーだ。うまくやりや風紀の奴等も出し抜いて、名家連中をブチのめして追い出せる」

名家が力を持つこの体制を、学園から一掃する。明かされた蛇島のその目的に、自己や日向が必要である理由は理解出来た。

「話は終わりか。……確かに俺もアイツらは気に食わねエが、自分からコトを起こす気は無エよ。向かってくるヤツがいるなら、相手になるけどな」

しかし伊織は、蛇島が目論む学園内部の派閥抗争に同調する気も無いと返答する。

「ゴタゴタに巻き込むなら、俺や日向じゃねエ別の奴にしてくれ」

徒党を組むつもりは無いと蛇島に背を向けた伊織は、スラムを後にしようとして歩き出した。

「あー、そおか……なら、こっからは俺の私用だ」

しかしその背後から、何かを引き摺り出すような金属音が響く。ガラクタの中から伸びていた『武器』の柄を、蛇島が掴み引き抜いていた。

「ちツと遊んでけよ、剣術使い」

「……テメエ、最初からそれが狙いか」

振り返った伊織が目にしたのは、『片手斧』を手にした蛇島の姿。彼のもう一つの目的は自分と戦う事だと察し、伊織もまた一刀を抜き放ち相對する。

「いや、さつきまでのハナシは忘れてもらつて構わねエゼ。テメエとは純粹な斬り合いを……愉しみてエ、だからかなア!!」

蛇島が地を蹴り、同時に伊織は刃を振り下ろした。

◇◇◇

「蛇島司と諸星敦士、それと大文字獅堂。コイツらがその集団の中でも飛び抜けて厄介なんだが、魔術師としての実力がある以上学園も迂闊に手を出せないらしい」

不良軍団の中でも一際危険と目される三人の学生について、啓治は更に続ける。

「特に大文字は、連中の中でも群を抜いてイカれた人間だと聞いている。……戦闘だけなら、黒乃生徒会長より上つて噂もあるくらいだ」

「!!」

「あの人より……!?!」

啓治の言葉に衝撃を受ける沙霧と天音。實際に対面し雪華の持つ膨大な魔力を感知した経験がある二人にとって、彼女と並ぶ強さの学生がいるという事は俄かには信じ難かった。

この学園には未だ、彼女達の見知らぬ実力者が潜んでいるという事実には愕然とさせられる。

◇◇◇

「ハハッ、呆れる程タフじゃねエのオイ。まア、そうこねエと張り合いも無エがな……!!」

愉快そうに笑う蛇島の前では、額や腕に刃を受けた伊織が片膝を突いていた。強力な剣術と体術を操るにも関わらず、近接戦で圧倒され劣勢に立たされている伊織。自分を防戦一方にまで追い込む蛇島のその強さに、伊織は違和感を覚えていた。

(クソ、どうなってる……仕掛けがあんのはあの盾か……う！)

視線を向けるのは、蛇島の手ラウンドシールドに構えられた円盾。地面に転がっていた所を蛇島に蹴り上げられ左手に収まったそれには、何らかの魔術が付加されているようだった。

「まだへばってくれんなよオ……？この程度で幕引きなんざ、そんなつまらねエこた無エからなア」

振り抜かれた蛇島の斧刃と、迎え撃つ伊織の刀刃が衝突する。連撃を弾き、受け流した伊織は反撃の一刀を振るうが、その刃は蛇島の盾によって文字通り跳ね返された。

「ッ、またか……!!」

渾身の剣撃をまたしても完全に『反発』させられ、体勢を崩した伊織へと追撃を放つ

蛇島。

「そんなに気になんなら教えてやろうか、コイツこの盾のカラクリ」

辛うじて刃を躲し距離を取った伊織に、盾を警戒されていると見抜いた蛇島は自らその能力を明かす。

「コイツには、『リフレクトフオーミミュア反射術式』を纏わせてある」

「アビリティマシツク特殊魔術か……!!」

蛇島が盾に付加している『リフレクトフオーミミュア反射術式』。それは誰もが使用出来る『汎用魔術』とは異なり、その術式に適性がある者にしか扱えない『特殊魔術』の一種だった。

「自分からタネ明かすたア、余裕ブツかましてやがんなテメエ」

「この程度、バラした所でテメエにやどオにも出来ねエよ」

「上等だコラ……後悔、すんなよ……!!」

依然として優勢の蛇島は、手の中の斧を投げ回しながら挑発的な言葉を投げ掛ける。対して伊織は獯猛な闘志を瞳に宿らせながら、ギラついた笑みを浮かべ再び刀を構えた。

第7話『Golden Leo —金獅子—』

『リフレクト・フォーミュラ反射術式』の能力は、”物理的・魔術的な攻撃を反射する障壁の形成”。

即ち蛇島が盾で受けた攻撃全ては”自動的に相手へのカウンターに変化する”という、近接戦闘に於いて途轍も無く強力な術式だった。逆に攻撃手段が剣術もしくは体術に限られる伊織にとっては、この上無く相性が悪い。

しかし、どんな術式にも弱点は存在する。事実反射術式には、盾の表面を覆う程度の面積しか障壁を形成出来ないという欠点があった。それを数度の打ち合いで見抜いた伊織は、防御の隙間を縫うように無数の連斬を放つ。

ただ問題は蛇島が相当な近接戦の名手であり、全ての剣撃が彼の斧と盾によつて捌かれていくという事。

斬り合いならば誰にも遅れは取らないと自負していた伊織だったが、東帝にはそれを打ち破らんとする手練れが存在している。流星は日本最大の魔術学園といった所か。

最も、そうでなければ——

「——倒し甲斐無エよな……!!」

「何をゴチャゴチャと……言つてんだア!」

不敵に笑う伊織へと、荒々しい声と共に斬り掛かる蛇島。

その一撃に対し伊織は、受ける寸前で自身の刀を手放した。

「!?」

瞠目する不良達を傍目に、更に一步鋭く踏み込んだ伊織は蛇島の右腕を掴み上げる。そして一気に間合いを詰め、蛇島の顔面へと連続ストリートを叩き込んだ。

柔術、そして格闘術。体術の達人たる日向に勝ち越す、伊織の実力もまた伊達ではなかった。

「ちったあ効いたかコラ……」

そう言いながら伊織は、連撃と同時に蛇島の手から奪い取った片手斧を投げ捨てる。一方ここに来て初めて明確なダメージを受けたにも関わらず、蛇島の楽しいげな表情は崩れない。

「ブン殴り合いを所望かア……いいぜ、乗ってやる」

血反吐を吐き捨てながら蛇島は、自身のアドバンテージである筈の盾を放り投げる。この男、骨肉を削り合う闘いに愉悦を見出す生粋の『戦闘狂』だった。

結局彼等は何処まで行っても、『言葉』でも『魔術』でもなく『拳』でしか語り合えない。



そしてここにも、口より先に手が出るどうしようも無い人間が一人。

「つかしいなア、アイツどこ行つたんだ……?」

やっとの思いで補習を終わらせた日向は、伊織との待ち合わせ場所へと向かったのが自販機横に彼の姿は無かった。

伊織が約束を破る筈は無いのだが、学園中どこを探し回つても見当たらない。いつもの事案に戻ってみるかとも思ったのだが、恭夜が以前言っていた『絶好のサボり場』をまだ見に行っていないと気付く。

そうして日向が足を運んだのは、1号館と並び連結本館中最大規模を誇る8号館の屋上だった。

常人では動かす事すら儘ならない、超重量の鋼鉄扉を『炎撃』で蹴り破る。そこに広がっていたのは、東帝学園と魔術都市の両方が一望出来る光景だった。

「すっげ……景色イイじゃん……」

思わずそう呟きながら日向が屋上へ足を踏み入れようとした、その時。

「——止まれ。それ以上踏み込むな」

突如真横から鋭い刃が現れ、日向の鼻先へと突き付けられる。視線を巡らせるとそこには、金髪碧眼の外国人のような容姿の少年が立っていた。

「オーイオイ……お前ジャパニーズサムライを盛大にカン違いしてんだろ」

「何……?」

刀を手にしているその人物の流暢な日本語に対し、日向は半笑いを浮かべながら両手を上げる。

「出会い頭にそんな物騒なモン向ける文化は……無エつつつてんだ、よッ!!」

僅かな警戒が緩んだ一瞬を見逃さず、日向は自身に向けられた刃を蹴り上げた。刀は手放さなかつたが体勢を崩した少年の頭上を、跳躍で飛び越え屋上に降り立つ日向。

「いきなり何なんだオメー。外国人だからつてなア、許されるコトとそうじゃねーコトはあんだぞコノヤロー」

「黙れ。今この場所は『師匠』が使っている以上立ち入り禁止だ。師匠の眠りを妨げる者は何人たりとも許さん」

「あー確かに、サイコーの昼寝スポットだよなココ……つてちげーだろオイ。屋上はみんなのモツ、あつぶねエな!」

日向が不平を最後まで言い切るより早く、少年が斬り掛かって来る。研ぎ澄まされ一切隙が無いその太刀筋から、彼の剣士としての力量を日向は即座に察知した。しかし、日向が一方的に押されたままの筈もない。

「はなッ、しをッ、聞けテメエ!!」

間隙無く浴びせられる刃を掻い潜り、強烈なソバットを少年の腹へと叩き込んだ。日

向の蹴りは腕利きの魔術師すら、防御する間も無く吹き飛ばす速度と威力を誇る。

その一撃を、少年は左手で掴み止め完璧に防ぎ切っていた。

「ッー！」

「この程度か？」

僅かに動揺を見せる日向へと、攻勢に転じた相手が右手の刀で斬り上げる。咄嗟に半身を捻るが、劍撃が日向の前髪を掠め斬り飛ばした。

大きく飛び退りながらも、脳裏に過る考え。

(コイツ……めっちゃ強くな……？つか俺より強くな……？)

劍技、反応速度、防御能力。少年の卓越した戦闘技術を目の当たりにしながら日向は、自分は今相当な実力者を相手取っているのではないかと思いついていた。

「口程にもないとはこの事だな……!!」

「うっせエな……ナメンじゃねエぞ!!」

少年が刀へ魔力を収束させていると察知し、日向も右腕へと魔力を集中させる。繰り出された刃と拳が、互いの身体へとぶつかり合う寸前。

「やめろステイプ」

金髪の少年の背後から、制止の声が掛けられる。ステイプと呼ばれた彼の後ろにいたのは、眠たげに後頭部を掻く茶髪の少年だった。

「お前な……人払いなんかする必要ねーつつつたる？」

「申し訳ありません。……出過ぎた真似をしました」

「まあいいよ。つーかお前相手にそこまで凌ぎ切るツて、中々やるじゃねーの」

その人物から軽く咎められ、高圧的な態度から一転し丁寧な口調で頭を下げるステイブ。恐らく彼の言っていた『師匠』と思われるその少年は、日向に感心したような視線を向けながら歩み寄って来る。

「大丈夫だったか？いきなり悪かったな」

「あー、うん。いや、いいよ別に」

「そうか。……お前見ねエカオだけど、まさか一年か？」

「おー、そうだよ」

「マジかよ!?ルーキーなのにコイツから一太刀も喰らわなかったってか!スゲーなオイ！」

日向はまだ一年だという事を本人から告げられ、驚きを隠せずにいる少年。その隣でバシバシと背中を叩かれているステイブは、やや不機嫌そうな表情だった。

「……御言葉ですが師匠、俺はまだ全力の半分も出していません」

「ハハッ、拗ねんなよ。オマエが強エのは充分わーってるから。……んで、何しに来たん
だ？」

ステイプをフォローした少年は、屋上にやって来た理由を日向に問う。

「や、友達^{ダチ}と待ち合わせてたんだけど、ソイツがどこにも居なくてさ。屋上^コに来てんじやねーかと思つて探してたんだけだ」

「へエ……どんなヤツだ？」

「刀二本持つてて、髪が青いやツなんだけど……」

「成程な……分かった。ちよつと待つてろ」

「……え、何する気だ？」

「困つてんだろ？ 見つけてやるよ、お前のダチ」

そう言つて少年は目を閉じると、『魔力知覚』の感知範囲を学園全体をカバーする程の広さまで展開した。驚異的とも言える探查能力見せつけられる日向だったが、伊織について一つ伝えそびれていた事を思い出す。

「あ、でもソイツ魔力が無エんだけど、それでも見つかりそうか？」

「へエ、珍しいヤツだな。なら、魔力が無くて気配だけ有る場所つてコトか……お、ヒツトした。居たっばいぞ」

搜索条件を再設定した少年は、然程時間も掛けずに容易く伊織の現在地を見つけ出した。

「マジかよ。スゲーな……!!」

今度は日向が驚かされる番だったが、少年がふとその表情を顰める。

「あー……でもなんかソイツ今、めちゃくちやピンチだ」

◇◇◇

「オイ……あの一年、蛇島さんとマトモに戦り合ってたぞ……!!」

「何者だよアイツ……!!?」

そう言いながら驚嘆している不良達の視線の先には、先程とは打って変わって血を吐き膝を突く蛇島の前に立つ伊織の姿があった。

剣術から体術主体の超近接格闘戦にシフトし、蛇島を相手に互角以上に渡り合っていた伊織。しかし想定以上に自身の流血が多く、これ以上長引けば戦況は不利に傾くという事も理解していた。

「——ウラア!!」

魔力を纏った蛇島の拳が撃ち放たれるが、最低限の動きでそれを受け流す。そしてその手首を掴んだ伊織は、相手を豪快に地へと投げ倒した。

”反射障壁が無い場所への攻撃”に加えた、その防御を突破するもう一つの方法。それは“投げ技”だった。どれだけ蛇島が障壁で身を守ろうと、伊織の臂力でその体ごと壁や地面に叩きつけてしまえばある程度の衝撃ダメージは通る。

背から激しく打ち付けられる蛇島だったが、それでも戦いへの愉楽と優勢の余裕を浮

かべた表情は変わらない。あと数撃入れば伊織は限界を迎えるであろう事を、蛇島は見破っていた。

全身のバネを稼働させ、跳ね起き様の両足蹴りを伊織の胸元へ叩き込み吹き飛ばす。咄嗟の防御も間に合わずまともに喰らい、ガラクタの中へと突っ込みながらも何とか停止した。

—— 上がる息と滴り落ちる血が、戦いを白熱させ続けている。しかし両者は次の一撃が、最後の交錯になるだろうと無意識に感じ取っていた。

蛇島は残存魔力を右腕へと集中させ、伊織も全ての力を拳に込める。地を蹴ったのは、双方全くの同時だった。拳が振り抜かれる直前、伊織の眼が僅か一瞬だけ蛇島の顎へと向けられる。

その視線が陽動フエイントであり、彼の本当の狙いは胸元ホテイブローへの一撃だと蛇島は看破していた。相手の意識を割かせる『目線のフエイント』。その癖と傾向を戦いの中で見抜いていた蛇島は、それを逆手に取り腹部に反射障壁を展開した。

伊織の一撃を跳ね返し、同時にカウンターで仕留める。蛇島の策が伊織を叩き潰すべく襲い掛かった。二人の拳が、交差する。

しかし——

(クソ、しくじったな——)

——蛇島へと撃ち込まれたのは、顎下から叩き上げるようなアッパーだった。

蛇島が搔かれたのは『裏』の『裏』。伊織はフェイントを見破られた事を見破っていた。視線を用いて防御を胴体へ誘導させ直前で狙いを顎へと変えた事で、完全に不意を突かれた蛇島は殴り飛ばされる。

ノックアウトされ倒れ伏す蛇島の前で、傷だらけになりながらも確かに立っている伊織。その姿は、御剣 伊織が蛇島 司に勝利したという揺るぎない事実を周囲の人間へと示していた。

「蛇島さんが、敗けた……!?!」

「どうなってるんだよ……!?!何なんだよコイツ……!?!」

一年生が蛇島に勝利したという信じ難い決着に、不良達の誰もが動揺している。しかし一人の人物がスラム街へとやって来た事で、その空気が一変した。

「……何の騒ぎだ」

その声と共に、姿を現した一人の男。次の瞬間、この場に居た不良達の全員が一斉に立ち上がり頭を下げた。

「お疲れ様です!!」

そこに在ったのは、圧倒的強者への『畏怖』のみ。彼等の先に居たのは、巨大な体軀と金髪を持った学生だった。空間を押し潰さんばかりの重く濃密な魔力が、彼の全身からオーラのように溢れ出している。その威圧感を形容するならば、正しく『黄金の獅子』と言った所か。

東帝学園内部にて生徒会と対立する武闘派集団『大文字一派』のトップ、ダイモンジ大文字獅堂。シドウ獅堂。

（桐谷先生が言っていた『三強』の一人か……なんつータイミンで来やがる……）

自身の元へと歩いて来る獅堂を、霞む視界で捉える伊織。

「……蛇島やったのはテメエか」

「だったら……どうした……」

獅堂からの問いに荒い息と共に応えるが、伊織は立っているのがやつとの状態である。その言葉を受けた獅堂は、身体から沸き立っている魔力の波を一際大きく揺らめかせた。何らかの魔術の発動準備かと思われたが、対処しようにも伊織の意識は既に遠のき始めている。

(クソ……ガード、しねエと……)

頭では解つていても、体が指一本として動かせない。力尽き倒れ込みそうになった、その直前。

「~~~~~アアアアあああ!!!」

徐々に大きくなっていく叫び声と共に、スラムの遥か上空から一人の少年が落下して来る。

「あ……?」

その声に反応し上を見た獅堂へとその勢いのまま蹴りを叩き込んだのは、旧校舎上の連絡橋から飛び降りて来た日向だった。

命知らずにも程があるその行動に、不良達は一人残らず度肝を抜かれる。そんな中獅堂の巨軀を押し返すように蹴り飛ばした日向は、背後でふらついていた伊織に声を掛けた。

「あー死ぬかと思った、つて伊織イお前自販機のトコで待つとけつつつたる! 何してんだこんな所で」

「うるせエ耳元で叫ぶな……」

「つかオマエいつつも気付いたらボロボロになってんな」
「ほっとけ……」

何とか無事着地出来た事に安心している日向の前で緊張の糸が切れたように座り込む伊織だったが、乱入者へと獅堂は訝し気な目を向けている。

「誰だテメエ？」

「あ？見りや分かんذار。コイツの相棒だよ」

「ちげエ……」

日向の獅堂への返答を、仰向けに地へ倒れ込みながら否定する伊織。

「コツチの人間がやられてんだ……タダで済むとは思ってねエだろうな」

「どオセ先に手エ出して来たのはテメエらの方ذار。伊織は自分からフツ掛けたりはしねエよ。それでもコイツに喧嘩売るってんなら……俺が相手になってやる」

獅堂の迫力に一切臆する事無く、日向は堂々たる態度で睨み返しつつ言葉が続ける。その宣戦を受け、獅堂は蛇島と同様に愉快そうに笑みを溢した。

「氣イつけろ日向……ソイツ、多分東帝で一番強エぞ……！」

「ハハッ。だつたら……倒せば俺が最強つてコトだな」

伊織から自分にだけ聞こえる声でそう伝えられるが、その忠告に日向は寧ろ揚々としながら拳を掌へ打ち付ける。

雪華が懸念していた事態が、今正に現実となる。春川日向と大文字獅堂。学園を騒がせる二人の悪童が、このスラムの地で激突した。

第8話 『A p p e a r i n g S h a d o w — 顕れし影—』

「オオツラアツ!!」

「ヌウン!!」

日向と獅堂が繰り出した拳撃が、轟音と共に衝突する。並の体格にも関わらず相当な筋力を有する日向だったが、獅堂の腕力はそれを遥かに凌駕するレベルだった。例え魔力で強化し補ったとしても、単純な身体能力の差は簡単に覆せるものではない。

「どっ……わアアア!?!」

完全に押し負け吹き飛ばされる日向だったが、持ち前の強靱なタフネスですぐさま飛び起き再度突撃する。

「まさか頑丈なだけが、取り柄ってワケじゃねエだろオナ……!?!」

「つたりめエダツ!!」

獅堂は豪快なラリアアットで迎え撃つが、両手から続け様に火炎を噴射し空間を跳ね回るように方向転換する日向。そしてその顔面へと飛び膝蹴りを撃ち込むが、獅堂はそれを額で受け止めていた。凄まじい膂力バワーのみならず、日向以上の耐久力をも内包した岩盤

の如き頑強な肉体。尋常ではない獅堂の身体強度フィジカルに、大抵の攻撃ではダメージを与えられないと察する。

(クツソ硬ツてエな……!!)

「だったら……!!」

しかし能力で相手に劣っていようと、機転次第でどうしても攻略出来ると日向は知っていた。右腕付近へ魔力を集めながら、距離を取りつつ日向は術式を構築する。試した事は一度も無い技だが、実戦投入するなら今こそこの上ないタイミグだ。

——インスピレーション着 想を得た元は、伊織との戦いで天音が見せていた雷撃の槍。

火属性攻撃術式

『戟衝破』ゲキシュウハ

拳を振り抜くようなモーションから撃ち放たれたのは、燃え盛る爆炎のレーザーだった。

あくまで格闘主体の戦闘スタイルだった日向が、少し前から感じ始めていた『遠距離攻撃』という手札の必要性。伊織や啓治のような自身と同格の『近接型』に優位を取るため日向が編み出した飛び道具は、獅堂との間合いを一瞬で潰す。

この距離で手は出せないと踏んでいた獅堂へ直撃した熱線は、その巨体を大きく後退させた。

「グツ……どオやら威勢だけじゃねエみてエだなア……!!」

獯猛に笑いながらも獅堂は、その豪腕で戟衝破の炎を振り払い掻き消す。そして、全身から放出させていた魔力を明確に術式の形へと組み上げた。

遂に解禁されるその魔術の属性は、罅割れるような異音と共に空を駆け巡る黄金の『雷』。

強化術式×雷属性魔力

ゴウライゲキ
『轟雷撃』

(速エ——)

光属性と並び、八大属性中最速の展開速度を誇る雷属性。その電撃を纏った拳が、日向の防御を潜り抜け猛スピードで叩き込まれた。吹き飛んだ日向の身体は、スラムの壁を勢い良く突き破る。

「終わりかア……?…?…?こんなモンじゃねエだろ!」

それでもやはり、崩れた瓦礫の中から日向は飛び出して来た。自分で殴り飛ばしておきながら怒鳴り声を上げている獅堂へ、目にも止まらぬ連撃を繰り返す。

眼に黒色の光を宿した日向は、炎だけではない謎の魔力を纏い始めていた。

◇◇◇

生徒会執行部と並び、強大な権限を有する組織『風紀委員会』。治安維持を目的とした

場合に限り学園内での魔術行使が認められている彼等は、多くの学生達から恐れられていた。

規則正しい隊列を組み肅々と廊下を進むその集団の姿に、生徒達は慄くような視線を向けながら道を開けている。

「あー奏さん、なんか一年がスラムで暴れてるらしいっすよ。しかも聞いたカンジ、大文字も出てきてるっぽいです」

その中の一人が、先頭を歩く女子生徒へと軽い口調で報告した。それを受け端正な容姿と冷淡な雰囲気併せ持ったその少女は、一瞬だけ忌々し気な表情を浮かべると吐き捨てるように呟く。

「漆間の件と言い、今年の一年は異端ばかりか……」

眼鏡を掛け黒髪を束ねたこの人物の名は、ジングウジ神宮寺 カナデ奏。制服の上からでも分かる細く

も鍛え上げられた肢体を備えた彼女は、精鋭揃いの風紀委員を束ねる高い戦闘能力を持った学園屈指の実力者だった。

「突入するぞ。今日こそ奴等を、一人残らず拘束する」

長たる奏の命を受け、風紀委員会もまた動き出す。スラムにて繰り広げられる戦いは、更なる激化の一途を辿ろうとしていた。



(あの時と同じだ……!!)

獅堂へと猛攻を叩き込む日向の、瞳の色が変化している。伊織はそれを見て、日向と啓治が戦った時にも同じ事が起きていたと思いついていた。

更に今回はそれだけでない。黒とも紫とも違う『暗い色の魔力』が、日向の身体から漏れ出している。火属性とは明らかに性質が違う様子だが、彼から二つ目の属性魔力を有していると聞いた事は無い。闇属性と似ているように感じるが、それともまた別物に見える。

「なんだそりやテメエ……闇属性も使えんのか？」

「あ？何言ってる、だアツ!!」

日向を相手取る獅堂もそれに気付き始めていたが、肝心の本人は一切気に留めていない。獅堂を打ち倒す事だけに、全ての力を向けているようだった。

鬨ぎ合う二人の魔力の余波が、雷火へと形を成し空間中へと張り巡らされていく。弾け回る電撃と荒れ狂う猛炎が、戦いを繰り広げる両者の周囲各所で暴発し続けていた。

「何っー戦いだよ……」

そんな怒涛の攻防に誰かが呟く中、獅堂は右腕全体へと渦巻くような雷を纏わせ渾身の手刀を振り下ろす。それを日向は、魔力を極限まで収束させた掌底で迎え撃った。

「ゼリヤアアアアツ!!」

「グッ……オオオオオツツツ!!!」

魔力が一際巨大な爆発を引き起こし、火柱のように巻き上がる。日向は今度は吹き飛ばず、その凄まじい威力を完全に受け止め切つて相殺していた。

（何だ、今の一発……凄エ魔力集まった気がする……!!!）

その時日向は自分がたつた今繰り出した一撃が、普段と明らかに手応えが違った事に気付く。通常の炎撃よりも多くの魔力を集中させ、遙かに高い威力を叩き出せた。

「……何か掴んだみてエだなア。やるじゃアねエか」

獅堂もそれに気付いたようで、窮地の中で急成長を見せた日向へ純粹に称えるような言葉を放つ。

「この最高の戦い……もっと、楽しもオゼ!!!」

「おオよ!!」

互いを強者と認め合いながら、彼等の戦いは際限無き高みへと登り詰めようとしていた。

「獅堂!」

スラムに響く、制止の声。獅堂と日向が目を向けるとそこには、眼鏡を掛けた一人の

少年が立っていた。その生徒は不良達と違つて制服を一切着崩しておらず、このスラムに見合わぬ優等生のような風貌をしている。

「神宮寺だ。……残念だろうが、今日はここまでだな」

「あー、そオか……………クソがツツ!!!……………分かつた」

彼の名は、大文字一派”No. 2” 諸星 敦士。その口から告げられたのは、風紀委員長である人物が学園内戦闘を制圧すべくここへ乗り込んで来ているという事だった。

邪魔が入った事に対し、怒りのままに壁を蹴りつける獅堂。しかしやがて自分を落착かせると、スラム中に怒号を轟かせた。

「ハアアアア……………解散すツぞオ!!」

「はいー」

それを聞いて不良達は、各々が壁を越え、塀から飛び降り、一斉にこの場から散開していく。そして歩いて行く獅堂の後ろで、諸星が日向達へと声を掛けた。

「如月達が出て来たら面倒だ。お前達もついて来い」

「え、来いってドコによ?」

伊織に肩を貸していた日向は、諸星にそう訊き返す。

「抜け道教えてやるつつつてんだよ。早くしろ」

振り返りながらそう応えた獅堂が、その足元にあつたマンホールを力任せに蹴り破つ

た。

◇◇◇

「おースツゲエ……ここに繋がってんのか！」

複雑に入り組んだ地下道を駆け抜けた日向達一行は、魔術都市の大通りへと続く裏路地に降り立った。風紀委員を撒いた事を確認すると、獅堂と諸星は路肩に停められていたバイクに近づいていく。

「今日はハンパなトコで止めちまったからなあ。近エ内に仕切り直そオヤ」

「おー、いいよ。またやろオゼ」

喧嘩の中で完全に意気投合した様子の獅堂と日向。しかし日向の興味深そうな視線に気付いた諸星が、自身の物と思しきバイクへ跨りキーを回しながら声を掛ける。

「……気晴らしと言っては何だが……お前達、どうする？」

「うっははははは!!超気持ちいいなア!!!」

「オイ暴れんなバカ!っーか立つな!」

日向は獅堂のバイクのリアシートに跨り、風を切り裂くようにして魔術都市を爆走していた。後方へと景色が吹き飛んでいくような爽快なスピードに、身を乗り出しながら

大笑いしている日向。

「お前らの事は気に入ったぜ。何かあったら、オレが手エ貸してやつからよオ」

「おーマジか！あんがとな！」

「つつても今回の件は、テメエらんとコの連中から手エ出されたんだがな……」

獅堂からは頼もしい言葉が放たれていたが、諸星の後ろに座る伊織はあまり快く思えない様子である。

「司はケンカぐらいしか生き甲斐の無いヤツでな……面倒に巻き込んでしまつて、悪かつた」

「仲間なのに結構ボロクソ言つてんな……別に、アンタが謝る事でもねエだろ」

諸星はそんな伊織に対し、戦いを仕掛けた蛇島に代わつて詫びを入れていた。更に蛇島の行動への釈明をするかのように、諸星は続ける。

「アイツは俺達の中でも特に、旧家の連中を嫌つていてな。腕の立つ人間を力で従えて、奴等や生徒会を攻撃しようと躍起になっているんだ」

「……アンタ達も同じ考えなのか？」

「……全てを否定はしない。些か強引だが、司のやり方が完全に間違つていとも思わないしな。単にアイツが暴れただけの時もあるだろうが……」

一度言葉を切つた諸星は、揺るぎない意志を感じさせる声で伊織へと告げた。

「ただ……理不尽なルールで縛ろうとしてくる奴等には、俺達は従わない」

「ツ……!!」

歪んだ体制に抗う者達が、此処にも確かに存在している。その事実には、伊織は無意識に笑みを溢していた。

「まあ、細けエこたどオでもイイからよオ。コイツ倒したら次はオマエとも再戦だ、さつさとケガ治せや」

「待て待てなんでオレが敗ける事前提なんだコノヤロー」

「あ？俺に勝てる気でいんのか」

「やってみねーと分かんねーだろがい！」

そんな伊織とも決闘の約束を取り付けようとしている獅堂だったが、その後ろでは日向がやいのやいのと文句を言っている。

「あー、それとお前ら。誘われても生徒会には入んなよ？喧嘩はお互い、自由な立場じゃねエと楽しめねエからな」

獅堂が日向と伊織へと、そう忠告していたその時。

『コラアーそのバイク二台止まれエーイ』

「チツ………管理局か」

サイレンを響かせながら背後から追走して来た緊急車両に気付き、諸星が舌打ちしな

がら更にアクセルを噴かし加速する。

『ノーヘル信号無視速度違反、今日も元気にやってんなアお前らー』

「……アンタらまさか常習犯か？」

「道交法は現行犯じゃなければ問題ないからな。掴まつてる、飛ばすぞ」

「バツカ、いきなりブン回すな……!!」

諸星の見た目に反して頭の悪そうな言い分に、啞然としている伊織。その横では獅堂と日向が、ゲラゲラと爆笑しながら危険運転を繰り返していった。痛快なエンジン音を轟かせながら、無法者達のバイクは街を疾走する。

—— 彼等の自由を奪う事は、何者にも出来はしない。



『KEEP OUT立入禁止』のバリケードテープが張り巡らされた事件現場。封鎖されたビルの前では、複数の男達が口論している。

「いきなり出て来て問答無用で追い出すとは……アンタ方ちよつと横暴が過ぎるんじゃないですか？」

「……ですがこれは決定事項です。この事件は、我々『魔術管理局』の管轄となりました。お引取り下さい」

刑事と思しき男達の抗議に淡々と返答したのは、黒のスーツを身に纏った謎の集団だった。

そして、建物内部にて。

部屋の天井まで血が飛び散っている凄惨な光景を目にしながら、一切動揺した様子もなく静かに視線を巡らせている一人の青年。『魔術管理局魔術捜査課』に属するその人物北斗^{ホクト} 玲王^{レイオ}は、床に手を当てると何かを探るように目を閉じる。

「はいお疲れーお疲れー遅くなりましたアーツとオ……どうだー北斗、進んでるか？」
その時彼に背後から声を掛けたのは、遅れて現場入りして来た中年男性だった。北斗の上司であり、同様にスーツを着たその男の名は沢村^{サワムラ} 秀一^{シユウイチ}。

「……お疲れ様です。軽く視てみましたが、これまでの事例^{ケース}と同様です。複数人の魔力痕がありました。組織的な犯行と見て間違いないかと」

「今月入つてもう三件目、か……つたく物騒な世の中だなアオイ。……んで、ホトケさんはどうだった」

冷静な口調でそう報告した北斗は、続けて沢村へと検証結果を告げる。

「今回も遺体に闇属性の残滓がありました。……恐らく、同一犯です」

「マジかア………キナ臭エコトになつてきやがったなアもオ……」

それを受け沢村は、厄介そうに悪態を吐きながら乱暴に頭を搔いていた。——その言葉が示していたのは、捜査線上に浮かび上がる『魔術連続殺人犯』の存在。

影に潜む『意思』が、その姿を顕すべく動き始めていた。

第9話『Black Beast —黒き猛獣—』

「獅堂？あいつフツーにいいヤツだったぞ」

非公式の決闘で日向があの大文字獅堂相手に引き分けたという噂は、どこから漏れたのかすぐに学園中に広まった。同級生達は興味津々といった様子で取り囲んでいたが、当の日向はケロリとしており普段と何ら変わらない様子である。

彼等だけでなく伊織や天音、啓治や沙霧も含めた一年生達は今、制服から訓練用の体操服ジャージに着替えた状態で演習場へと集められていた。

「それにしても春川君、凄いやね……毎日何かしらの事件に関わってるし……」

「アレは巻き込まれてるんじゃないやなくて、アイツ中心に騒ぎが起きてんのよ。ホント、よくやるわ……」

波乱な学園生活を送っている日向に、純粹に驚いている沙霧と完全に呆れている天音。

「でも注目度で考えたら、生徒会にスカウトされたりもしそうじゃない？風紀委員会にも、かなり変わってるけど実力だけで選ばれた人達がいるらしいし……」

「まア、あの副会長あたりなら面白がつてやりそうだけどね……話題性と戦力があつて

も、あんな爆弾を抱え込むデメリットがデカすぎるでしょ。持て余すに決まってる」
「それは確かに……」

日向を飼慣らせる人間など、この学園に居る筈がないという天音の私見。

「あーユキカさん達のトコのやつ？こないだ食堂でメシ食ってたらあの人ら来たぞ？勧誘」

「え!？」

「は!？」

そんな会話をしていた二人へと、いつの間にも人混みから抜け出して日向が何の気なしにそう告げた。驚愕する沙霧と天音に、日向は更に続ける。

「まーメンドくさそうだったからフツーに断ったけどな！あつはつはグホツ、えつ、なんで……!？」

自分の事は呼び出しておきながら日向には直々に会いに行つたという雪華の行動に、天音は少しだけ腹を立てていた。ただそれをわざわざ口に出すのも癪なので、爽やか畜生スマイルで大笑いしていた日向の脇腹を肘打ちでど突く。

倒れ伏し悶絶している日向を見下ろしながら、啓治は思案するように顎に手を当てていた。

「コイツで引き分けなのか……『学園三強』などと担がれてはいるが、思いの外大した事

もないらしいな。その大文字とやらは」

「フン……まあ安心しろ。テメエじゃそもそも相手の土俵にも立てねエからよ」
「……あ？」

啓治の言葉を聞いていた伊織からの挑発に、すぐさま超至近距離での睨み合いへと移行する二人。

「不良軍団のNo. 3にギリ勝つた程度で調子に乗ってんなアコラ」

「ハッ、偉そオなコト言うならまずはオモチャみてエな武装無しで日向に勝つてからにするんだな」

「ンだとテメエから今すぐこの場でブチのめしてやるオかこのカスが」

「出来もしねエコト言ってるじゃねエぞタコが真ツ二つにされてエかテメエ」

「あ、天音ちゃん……」

「ほつとけばいいのよ。アレは逆に仲良い証だから」

最早犬猿の仲という言葉でも片付けられない程に、伊織と啓治は気が合わないようだった。殺伐とした雰囲気撒き散らしながら唾み合っている二人に、沙霧は心配していたが天音は全く関心を持っていない。

「ハイハイそこまでやで。メンチ切り合うにしてもこんなトコでやらんでもええやろ、皆んな怖がつてるやんけ。ちよつとキミらガラ悪すぎんねん」

「ツ、一文字か」

「……誰だお前」

その時、今にも殴り合いを始めようとしていた二人の間に割って入る一人の少年がいた。緑色の髪と細い糸目が特徴的なその少年は、どうやら啓治とは以前からの知り合いらしい。

「ボクはC組の一文字陣。キミとは初めましてやね、御剣伊織くん。ヨロシク」

その人物、イチモンジ一文字陣ジンは関西弁で伊織へと話し掛ける。

「キミとそこにおける春川くん、こないだボクのクラスのコが絡まれとるトコ助けてくれたらしいやないの。ボクが言う事とちやうかもしれんけど、ホンマおおきにな。あの子も感謝しとったわ」

「あー、あん時のか……まア、気にすんな」

あれだけ険悪な空気を放っていた伊織だったが、陣から厚く礼を述べられ毒気を抜かれたような表情になっていた。

「……コイツがアンタの言つてた情報通つてヤツ？」

「ああ、そうだね。まア悪い奴ではないから、警戒はしなくていいよ」

天音の小声の質問に啓治が答えていると、それに気付いた陣がそちらへも笑顔を向ける。

「学校の中のウワサに関してやったら、何でも聞いてもらってかまへんで。まア今もっぱら、キミら五人のハナシで皆んな持ちきりみたいやけどな」

「私達の……?」

「せやせや。今日の試験、センサー方も期待しとるみたいやで」

「ちよつと待て……試験……?俺なんも勉強してねーんだけど……」

「つーかオマエはいつまで寝てんだ」

沙霧は驚いていたが、彼女ら五人が一年の中でも特に注視されていると教える陣。その言葉通り周囲の生徒は、学年屈指の実力者達に興味を示しているようだった。一方で陣の言葉の一部に寝転がったまま反応する日向だったが、伊織に蹴り起こされようやく立ち上がる。

「やーあやア、よく来てくれたなルーキー諸君」

その時、何も無い筈の空間から突如として姿を現す一人の人物。東帝学園の教師たるその男、桐谷 恭夜は魔術を用いて派手に登場するとこの場に集った生徒達を見回す。

「そのこの腹が痛そうな日向然り、何で朝っぱらからこんなトコ来てんのかわかんねーって顔のヤツがちらほら見受けられるなーア」

「うん、なんでだ?つーか試験って何のコトよ?」

追試とかねーよな?と脇腹をさすりながら聞いて来る日向に、ニヤニヤとした笑みを

向けている恭夜。

「オメーの大嫌いな筆記じゃねーから安心しろい。……今日は皆大好き、魔術の実践演習だ。それもタダの演習じゃねエ、各々が別のメニューに取り組んでもらう」

「別メニュー……?」

「そうだ。お前らが入学前に受けた能力測定、覚えてるか?アレには試験として不適格な部分の一つあったんだ。誰か分かるか?」

天音の疑問の声に応えながら恭夜は、『能力測定』について言及しその問題点を問う。それに対して回答すべく、口を開いたのは啓治だった。

「それぞれの生徒独自の特殊技能を評価する項目が無かったコト、か……?」

「その通り!イイ着眼点だ、冴えてんな啓治」

「ま、当然ですかね」

「ケツ」

恭夜の意図を読み取り得意気な啓治に、不愉快そうな目を向ける伊織。

能力測定はあくまで基礎能力を測る事に重きを置いていたため、各パラメータがバランス良く高い程評価されやすい傾向にあった。逆に一芸に特化した術師は得点を取り難いものになっていたが、今回の演習では画一的な採点基準が廃止される。

「例え全能力がオールラウンドに優れていようと、確固たる固有能力強みが無エヤツはこの

先通用しねエ。今日オマエらがやるべきコトはもう分かったな？

——魔術師としての自分だけの武器オリジナリティを示せ」

魔術の種類は千差万別。人の数だけその性能は異なり、一つの型に嵌まる事は無い。己だけの価値を示せと、恭夜は一堂に会した学生達へと呼び掛けた。

◇◇◇

「ほんなら、お互いベスト尽くそうや。また後でな」

「おう。じゃーな、陣」

陣と日向は一言そう交わすと、それぞれの試験が実施される場所へと歩いて行く。直前まで六人で談話していたが、日向・伊織・啓治と天音・沙霧・陣はそれぞれ三人ずつ同じグループに振り分けられたようだった。

「コレどういうカンジで分けられてんだらうな」

「大方、術式の『射程』だらうな」

グループ分けの基準について日向が疑問を発するが、それに啓治が応える。彼の予想通りその基準は、用いる魔術が効果を及ぼす影響射程距離範囲だった。

日向や啓治のような身体強化によって近接戦闘を行う者達、そして中・遠距離攻撃を武器とする天音や後方支援を得意とする沙霧。言われてみれば確かに、その規則性パターは分かり易い。一人一人の能力に適したメニューが課されると恭夜は言っていたが、どのよ

うな物かと話し合っている内に日向達の演習区画へと到着する。

そこには何故か、オーバーサイズの上着を着込み大の字で爆睡している小柄な少女がいた。

「え……何してんだコイツ……」

「おオーイ、生きてつかー!」

「退いてろバカ共。お嬢さん、こんな所で寝ていては風邪を引かれますよ。如何されました?」

「……んあー……もう、朝……」

三人から声を掛けられ、灰色の髪を持ったその少女は眠そうに床から起き上がる。かなりブカブカだが日向達と同じジャージであり、東帝の一年生であるという事だけは確かだった。

「恭夜さんに……『オマエは絶対寝坊するから、朝までココで寝とけ』って言われてさー……」

「マジかよ……最低すぎんだろあの人」

「別に……あたしはどこでも寝れるからいーけどね……」

目的地で一晩中寝て待たせるという、恭夜の鬼畜ぶりにドン引いている伊織。しかしその少女は事も無さげにそう言うと、ポケットから取り出したゼリー飲料を一瞬で吸い

尽くしていた。

◇◇◇

演習場各所で、一年生達は遺憾無くその実力を発揮している。その姿を別室からモニターで審査している、五人の”試験官”。

「ヘエ……見所ありそうなのが何人かいるじゃない」

「だろ？今年の一年は最近でも特に有望な世代だよ」

そう口にしたのは、眼鏡と白衣が特徴的な女性冴羽^{サエバ} 怜^{レイ}だった。彼女は東帝学園にて、魔術科学や術式理論を担当する講師である。

冴羽の発言に恭夜が応えると、その横で同じくモニターを見ていた万丈 大和が口を開いた。

「……にしても、高次訓練に参加させる一年を選抜する為にここまで大掛かりな演習を企画するとは……よく神宮寺学長を説得出来たな」

「まあね。ムチャ言ってる自覚はあったから、ソコントコは俺も頑張ったわ」
東帝の主任教員を務める彼からの言葉に、僅かに苦笑する恭夜。

今回の大規模演習を本来の授業計画を変更してまで実施した事には、ある理由があった。それは7月に行われる二、三年主体の『高次魔術訓練』に、例外的に参加させる一年生数名を選抜する為。そして学園長である澄香から提示された条件は、恭夜を含めた

五人の教員によつて技能試験の形で彼等の力量を見極める事だった。

「ま、澄香さんを納得させられたのは、一年の皆がこうして優秀だったからつてもデカかったね」

「……アンタそんな謙虚な事言える人間だったんだ」

「俺そんなに人でなしだと思われてんの？」

冴羽からの皮肉に苦い顔をする恭夜だったが、今度はカーデイガンを羽織つた女性から声を掛けられる。

「でも、得意な分野を披露してもらうつて凄く良いアイデアだね。今後の授業計画にも生かせそうだし」

「そゆトコ気付いてくれる楓さんホントすぎ」

恭夜の軽々しい言葉を笑顔で聞き流す彼女の名は、篠宮 楓。医療魔術を操る養護教諭として、東帝学園の医務全般を担っている。

「お前はと思う、久世」

最後に万丈から意見を求められたのは、これまで沈黙を守っていた白色の髪の青年。

「うん……七人、かな……」

魔術技能指導員を務めるその人物、久世 宗一は長い前髪の隙間から青色の瞳を覗かせつつそう言った。彼の見立てに同意するように小さく頷きながら、恭夜は映像を切り

替え七人の生徒を映し出す。

そこには、彼等一年生の中でも際立って高い能力を持つ者達の姿があった。

まず一人目は、唯一無二の能力である剣術のみで他を圧倒する少年。

「クソ……フザケたコト考えやがって……!!」

伊織はメニニューを考えたと思しき恭夜へ悪態を吐きながら、全方位から迫り来る無数の魔術を尽く斬り裂く。彼に課されていたのは、『一発でも被弾したら即失格』。しかし周囲の生徒から放たれる全ての術式は、その刃に捌かれ伊織へ届く事はない。

「退魔一刀流・『富嶽』^{フガク}」

上空から降り注ぐ魔術が、斬り上げられた一刀によって両断され弾け飛ぶ。

【御剣伊織】

学年『4位』（SWP：1672点）

『学園全体で見ても随一の近接戦闘能力を持つ。また座学成績も非常に優秀であり、第一学年の主力として申し分無し。』

次は、演習場から離れた場所にて工具を手に行っている少年。

「何故俺がこんな地味なタスクを……」

そんな言葉を口にししながら啓治は、次々とやって来る生徒達から魔術兵装を受け取っている。啓治へ課せられたのは戦闘に関するメニューではなく、『魔術兵装の即時整備・高速修理』だった。

「皇！魔力弾が詰まっちゃまって制御出来ねエ！頼む！」

「おオソコ置いとけ、2分で仕上げといてやる」

「皇君！私の剣から魔力が全部漏れちゃう！」

「それは大変だ！任せてくれ、すぐに直して見せるよ。あ、銃はやっぱ5分後になるわ」「俺の方が先に言ったんですけど!?!」

演習から一時離脱して来た生徒達が代わる代わる彼へと修繕を依頼するが、その全てを流れるような作業速度での確にこなす凄まじい技術力を見せる。

【皇 啓治】

学年『5位』（SWP：1597点）

『高い格闘能力を有するが、魔術工学分野にも長けている。優れた知識と技術を持った貴重な人材。』

そして、中距離にて魔術による射撃戦を展開する二人。

「ハツハアーツ、流石やね沙霧ちゃん！」

「まだまだ、です……！」

無属性魔力×形成術式

『縛』&『弾』
バインド
ブラスト

陣が魔力によつて生み出した拘束帯を沙霧の右脚へと絡み付け、更に追撃の魔力弾を撃ち放つ。しかしそれとほぼ同時に、沙霧も術式を発動していた。

水属性魔力×形成術式

『流 盾』&『水戟槍群』
フロアシールド
アクアスピアーズ

『流動』の性質を付加された魔力障壁が弾丸を受け流し、反撃の水属性の槍が陣へと撃ち込まれる。

「どおわツ!!さっきから中々エグい攻撃して来るやんけ……!!」

慌てて回避行動を取る陣だったが、躲し切れない数発は咄嗟に展開した魔力の盾で防御していた。撃ち合いの間合いを主戦場とするタイプの二人に提示されていた課題は、見ての通りの『乱射戦』。戦況は火力に長けた沙霧が優勢を保ちながらも、手数と手札に長けた陣にのらりくらりと流され押し切れない様子である。

【空条 沙霧】

学年『6位』（SWP：1544点）

『高度な障壁形成術を持ち、防御能力に優れている。攻撃術式もレベルが高く、能力バランスが良い。回復術式の使い手。』

【一文字 陣】

学年『16位』（SWP：1066点）

『場面に応じて多種多様な魔術を使い分ける、非常に高い対応力と状況判断力を併せ持つ。訓練で手を抜きがちなため注意が必要。』

一方で、『近接戦』をフィールドに身体強化で戦う二人。

「くっそー、また消えやがった！どこだア！」

「――うんだよ」

叫ぶ日向の背後から、突如姿を現した灰色の髪の少女が峰打を炸裂させる。1―Fクラスに所属する彼女の名前は、更科^{サランテ} 凧^{ナギ}。訓練用のナイフを手先で弄んでいるその少女は、『姿を消す』^{透明化}能力である特殊魔術、『隠密術式』^{アブリイマジック}の使い手だった。

「こんな強エヤツがまだいたとは……やっぱこの学校は面白エな!!」

「ふふん、セケンの広さをおしえてあげよー」

体勢を崩し突つ伏していた日向だったが、楽しい表情と共に起き上がると再度凧へと挑み掛かる。対して凧もまたそれに応えるように、小さく笑いながら地を蹴り迎え撃

つ。

【春川 日向】

学年『7位』（SWP：1502点）

『高い潜在能力を秘めるが、精神状態に実力を左右されやすい。また学業の成績が最悪であり、嚴重指導が必要。』

【更科 凧】

学年『10位』（SWP：1201点）

『学年中一人だけの特殊魔術持ち。高速移動と併用するといった工夫を自ら考え出すなど、独創性にも長けた逸材。』

しかし、その中でも一際強大な存在感を放つ少女がいた。

雷属性魔力×形成術式

タワーバーストライトニング
『雷 建 砲 塔』

全身から爆発的な魔力を立ち昇らせていた天音は、その全てを収束させ一気に天へと解き放つ。『最大出力での魔力放出』。彼女の能力の高さを理解しているからこそその、端的に提示された恭夜からの課題で天音は十全に実力を発揮していた。

轟音と衝撃を伴い放たれた砲撃は、さながら天を衝く雷の塔。その光景から、彼女が

一線を画した圧倒的な才能を有している事は明らかだった。

【藤堂 天音】

学年『1位』（SWP：2037点）

『八つの属性性質と膨大な魔力を持つ。歴代最高峰の能力値を誇り、その実力は学生の規^{レギュレーション}格を凌駕している』

「A組とB組の五人はいいとして、残りの二人は中々珍しい顔ね」

「んー、まあアイツらは普段結構サボってるから目立たなかつただけだな。実際陣と風は、啓治とか沙霧と同じレベルの力は持つてるよ」

モニタールームにて冴羽は七人の中で少し順位が低い陣と風について言及するが、二人は順位以上の実力を有していると恭夜が告げる。

「でも更科はともかく一文字は、アンタが言つてた『特筆^{オリジナル}すべき武器』が見つからないけど。」

「いやいや、あそこまで器用だとアレはもう才能の一つだよ。なあ?」

「俺とか大和さんも、彼と似たような戦型^{スタイル}だしね……」

恭夜は冴羽にそう返し、隣にいた久世も彼の言葉に同意していた。

「それにしても、A組から三人も出てるのが凄いやね。桐谷君のクラスでしょ?」

「まあね。つつても、伊織と天音はともかく日向がなア。アイツめちやくちやムラっ気だからな。蒼とか亜門と同じタイプだ」

篠宮は恭夜の教え子であるA組の三人に目を付けるが、恭夜は渋い表情を浮かべている。伊織と天音は学年の中でも別格の強さを見せているが、日向はかなりの気分屋でありポテンシャルの100%を発揮出来るのは極稀なようだった。

「てか、タイプで言うなら昔のアンタでしょ」

「え、俺あんな奔放だった? 宗一、オマエどう思う」

「俺が入って来た時にはもう恭夜さん先輩風吹かしてたから分かんねーわ……」

「シバくぞお前」

鼻で笑っている冴羽に、恭夜の学生時代を知る篠宮と万丈が肯定するように頷く。同じ東帝の後輩だった久世に目を向けると、予想外の方向から皮肉を刺して来ていた。

「……今日欠席の天城も含めて、選抜者は八人といった所か?」

「あーいや、ちよつと待って大和さん。今遅刻してんだけどさ、実はもう一人居るんだわ。候補」

試験演習も終盤へと差し掛かっていたが、総括しようとしていた万丈が恭夜が遮る。

「多分アイツ、そろそろ来ると思うよ」

誰の事を指しているのか分からない様子の四人に、恭夜はモニターへ視線を向けるよう促した。

◇◇◇

異常事態の発生は、試験の全行程が終了しようとしていた時だった。魔術による物は異なる轟音が響き、それと同時に演習場の扉が蹴破られる。

突然の出来事に生徒達は騒然としていたが、そこに現れたのは彼等と同じ服装をした黒髪の少年だった。彼は一言も発さなまま周囲を見回していたが、やがて一人の少女に目を留める。

「一番強エのは……お前か？」

謎の少年が目を向けていたのは、この場の魔術師の中で最も強い力を持つ天音だった。天音が口を開くより早く、少年は高速移動によって突進する。攻撃意思を示すかのように、彼の手には一瞬で構成された『閻属性』の魔力剣が握られていた。

「あつぶねエー！」

しかし天音へ振り下ろされたその刃は、二人の間に割って入った日向によって防ぎ止められる。両拳による白刃取りで、謎の少年の剣を殴り折る日向。更に左右から、天音の危険を察知し動いていた伊織と啓治が挟撃する。

伊織の刃と啓治の蹴りを、少年は魔力で強化した両腕で弾き返しそのまま距離を取った。

「レディにいきなり襲い掛かるとはどう言う了見たメエ！今すぐ死ぬかコラア！」

「蛇島と同じ匂いがすんなあの野郎……」

「司の方がまだ見境あるだろ……いや大して変わんねエか」

激怒している啓治、戦闘狂の気配を感じ取る伊織、そして知り合いを思い出し笑っている日向。三者三様の反応を見せながら、天音を守るように立ち塞がる。彼等と対する少年は、口角を吊り上げ鋭い眼光を宿していた。

「ゴタゴタ言っつてねエで掛かって来い……まとめてツブしてやるよ」

全身から魔力を放つその姿は、猛る黒き牙獣の如く。

【ウルシマ漆間 ソウライ創来】

学年『3位』（SWP：1762点）

『???』（謹慎解除後のためデータ無し）。』

第10話『Outsider』——来訪者——

「よし、そんなじゃ記念すべき『選抜クラス』初ミーティングだツ！楽しくやってこオゼ！」

『一年選抜試験』から数日後。教壇に立つ恭夜の前には、教室各所の席に転々と座る八人の生徒の姿があつた。

春川 日向、御剣 伊織、藤堂 天音、皇 啓治、空条 沙霧、一文字 陣、更科 凧、漆間 創来。

彼等は先日 of 試験にて魔術師としての実力を示し、本来二、三年次生しか認められない高次魔術訓練への参加を特例として許可された者達だつた。

「なーセンセー、これから授業つてどうすんだ？俺らはこのクラスで受けるの？」

「いや、まだ今は週何回か集まるくらいだからな。授業は自分達のクラスで受けてもらつて構わねエよ。ただ、呼び出しにはキツチリ応じるよオに」

日向からの疑問に、今はまだあくまで準備段階であり選抜クラスの本格始動はしばらく先だと答える恭夜。

「まア今日は顔合わせみてエなモンだ。つっても、殆どの奴らはお互い知り合つてるだ

ろうけどな。仲良くすんだぞ〜」

そう言つて生徒達を一瞥する恭夜だったが、彼等の表情は様々だった。普段と違うクラスに物珍しげな日向。それを見て愉快そうに笑っている陣。睨み合っている伊織と啓治。緊張している沙霧。爆睡している風。読書をしている天音。

「うんうん、個性があつて良い事だ。んじや、俺これからちよつと会議あつから。各自で自己紹介くらいはやつとけよ〜」

一切まとまりの無いクラスに満足気に頷いた恭夜は、魔術によつて忽然とその場から姿を消した。が、その数秒後に再び魔術で教室に姿を現す。

「あーそうだ、忘れてたわ。日向、オマエに話があるからちよつと来い」

「え、なんで俺——」

そう言つて恭夜の手から放たれた魔力による帯が、一瞬で日向の身体に巻き付く。そして日向が応えるより早く、恭夜は彼を連れてまたしても掻き消えた。

騒がしく去つて行つた二人に陣や沙霧は唾然としていたが、その時派手な音を立てながら啓治が椅子から立ち上がる。とうとう伊織と取つ組み合いにでもなるのかと思ひながら、そちらへ視線を向ける陣。しかし彼が歩いて行つたのは、教室の端の席で一言も発さず座つていた少年の元だった。

クラス——Eに所属している彼の名は、ウルシマ漆間 ソクライ創来。つい先日まで謹慎処分を受けて

いた為、彼と知り合っている人間はここにはいない。

「おいテメエ……どのツラ下げてココに居んのか知らねエがな……まずは謝らねエといけねエ人がいるんじゃないのか？」

「……………」

怒気を帯びた声で啓治はそう言い放つが、見下ろされている創来は依然として黙ったまま。

「藤堂さんに一言の詫びも無エとはどういうつもりだつて聞いてんだよ！」

啓治が追及していたのは、選抜試験終盤に創来が天音に斬り掛かった件についてだった。

あの直後に演習場に現れた恭夜によって一旦その場は収められたが、創来の戦闘狂じみた危険行動に憤慨していた啓治。しかし創来は何の関心を見せる様子もなく、啓治を無視して席を立った。

「テメエ……!!」

「待つて、皇」

いよいよ啓治が胸倉を掴み上げようとしたが、その時天音が冷静な声で彼を制する。読んでいた本を閉じた天音は、創来へ淡々とした口調で言葉を掛けた。

「アンタが私と戦いたいなら、いつでも掛かって来ればいいわ。相手になってあげる」
 余裕すら感じさせるような態度で受けて立つと告げられるが、やはり創来は反応を示さず彼女を一瞥して教室を出て行った。

「くっ、良いのか藤堂さん」

「別に、私は何とも思っていないから」

創来から何の謝罪も無い事に啓治は我慢ならない様子だったが、当の天音は平然としながら読書に戻っている。

「伊織くんはどう思う？」

「^{藤堂}アイツが良いつつってんなら、好きにさせりやいいだろ……」

剣呑な雰囲気の中で陣に声を掛けられるが、どちらの立場につく気も無いと返す伊織。魔術の訓練機関であるこの学園に於いて、強い人間が勝負を挑まれる事など珍しくも無いのではないかと伊織は考えていた。

そしてここまでの騒ぎを一切意に介さず、凧は机に突っ伏し続けている。その横で沙霧は、前途多難と思われる選抜クラスの今後を憂うように創来の背を見送っていた。

◇◇

「え、マジで何だよ。補習とか追試だったらこんな無理矢理連れて来なくても受けるけど俺」

「普段からそういう心構えなのは良い事だが、お前はまず授業で50分起きとく事から意識してこうな」

教室から連れ去られた日向は、恭夜によつて魔術で縛られ引き摺り回されていた。

「まあ実を言うと、お前に創来の事を任せてエんだわ。あの一匹狼が選抜クラスに馴染めるよオに、上手く取り持ってやってくんねーか？」

「俺が？別にいいけどさ、なんでよ」

恭夜が口にしたのは、日向とは選抜試験で初めて出会った創来について。その頼みを了承しながらも、日向が恭夜へ理由を問う。

「お前とアイツには共通点があるからな。まず一つ目、アイツはお前と一緒にこの街の外から東帝に入つて来たんだ。俺がスカウトしたんだけどな」

「へエ、そうなのか。出身の話とかあんましねーから知らなかったわ」

「お前は気にしねエだろうけどな。まあ、ヨソモンアウトサイダー同士仲良くやってくれってこつた」

「スツゲー身も蓋もねエ言い方すんじゃない」

魔術都市の外部から入学した者同士という、思わぬ共通点を知らされる日向。

「それからな、日向お前入学式来なかったろ」

「あー、あん時か。サワムラさんに捕まった日」

「あの日、創来も式に出て来なかったんだ。しかもその理由がな、アイツどこをどう迷つ

たのかスラムに真っ直ぐツつ込んだらしくてよ。獅堂達とバチバチに暴れてやがったんだわ」

「アイツも獅堂と戦^やり合ってたのか……!」

「んで、乱闘騒ぎで奏に捕まって入学早々謹慎喰らってたつーワケだ。〃入学式スツぽかしコンビ」、オマエら結構氣イ合おうと思うぞ?」

学園屈指の問題児二人を組ませるといふ、正気の教師とは思えない悪魔のような提案をしている恭夜。しかしやはり日向の表情は、いつもと同じ期待感に満ちた楽し気なものだった。

「それじゃ、早速オマエにミッションを課す。……創来を探して来い」

「は?」

そう言つて急に立ち止まった恭夜は、扉のような建造物の前で日向の拘束魔術を解除する。それは、魔術都市各所と東京都を次元トンネルで繋ぐ『転移門』ポータルゲートと呼ばれる物の一つだった。

「いやー、アイツしょっちゅう魔術都市から抜け出してるらしくてな。夜までにどうにかして見つけてくれ」

「成程、分かった」

「オマエのその学力と比例しない理解の速さはホント素晴らしいな。捕まえたら連絡し

ろ、迎え寄越すから」

「おっけ」

二つ返事で引き受けた日向は恭夜に送り出されるまま、転移門へと飛び込んで行く。

◇◇◇

『何で、お前は違うんだ？』

『怖いよ』

『気味が悪い………』

『来るな!!』

『———この、
??????????
………!!』

この街に戻ってくる度に、思い出す忌まわしい記憶。声と共に脳裏を過るフラッシュバックを追い払うように、小さく頭を振る。無数の人々が行き交う交差点。その中心で、一人立ち止まる。

周囲の誰もが、同じ顔。特徴が無いという、特徴を持つている。彼等は知らない。人と違うというだけで、虐げられている人間がいる事を。人と異なっているという事を、

棄てた彼等に解る筈も無い。

『——次のニュースです。先日□□区の自宅マンションで、△△ホールディングス代表取締役の××氏が、遺体で発見されました。警察は殺人事件として捜査を進めていますが、これまでの事件との関連性は不明です』

街頭の大型ビジョンを見上げると、巷で連続殺人と噂されている事件が報道されていた。

「おー、やーつと見つけたぞ」

「ッ!!」

その時、背後から突然誰かに声を掛けられる。振り返った漆間 創来が目にしたのは、自分と同じ教室にいた紅色の髪の少年の姿。

「ほれ、オマエも食うか？ おやつタイム」

そう言いながらバナラシエイクを嚙っている彼が差し出して来たのは、一つのハンバーガーだった。

魔術で強化した身体能力によって、とあるオフィスビルの屋上に無断で登った日向と創来。日も沈み始めた夕方の街を見下ろしつつ、屋上の縁に腰掛けた二人はハンバー

ガーにかぶり付いていた。

「……なア、お前さ。戦いとか喧嘩すんのが好きなのか？」

日向は開口一番、デリカシーの欠片も無い質問をぶつけて行く。しかしそのような雑な切り込み方も気にしていないかのようには、創来は静かな口調で言葉を返した。

「……別に、好きでも嫌いでもねエ。俺はただ、強くなりてエだけだ」

「へエ……そうか」

創来から告げられた行動原理は、思っていたよりもずっと単純な物。強くなるには自分より強い人間と戦って勝つしかないというその考えに、日向は既視感を覚える。己を鍛えるために努力を惜しまない人間達が、自身の近くにもいるという事を思い起こしていた。

「だつたらさ、今度俺ともやろうぜ。闘技場で」

「……別にいいが、お前強エのか？」

「オーイオイお前ナメてんな？ 一応獅堂とも引き分けたぞ俺」

「なつ、ホントか……!?!」

「おう。ほんで伊織は司に勝った」

その強さをよく知る人物の名前が、日向の口から出て来た事に驚く創来。

「まア、馴れ合えなんて言わねーケドさ。せつかく選抜クラスとやらにも一緒に選ばれ

たんだ。どオセなら、お互い楽しくやってこーぜ」

「……あア」

ニヤリと笑い掛ける日向に、創来が小さく頷く。初対面は中々物騒な出会い方だったが、存外話を通じる人物であった事に日向は内心小さく安堵していた。

（思ってたより良い奴じゃねーか……獅堂といい、ヒトは見かけによらねーってホントだな爺ちゃん……）

人の本質を見抜く『心の眼を鍛えろ』と、祖父から口喧しく言われていた事をふと思いつく日向。何はともあれ恭夜からの依頼も完遂し、一件落着かと日向が思っていた、その時。

「ッ!!」

「え、オイオイオイちよつと待て待て!! どうした!？」

街を見ていた創来が食べ掛けのハンバーガーを放り出し、突然ビルから飛び降りた。慌ててそれをキャッチした日向だったが、創来は既にビルの壁面を垂直に駆け降り始めている。

「何考えてんだアイツ急に……!!」

追い掛ける日向だったが、直前の創来の横顔に見えた強い『何か』の感情が彼には理

解出来なかつた。

◇◇◇

街の大通りから少し外れた、路地裏の影。そこで壁際に押しやられていた一人の少女を、複数の女子高生が取り囲んでいた。

「アンタさア……何回言つたら分かるワケ?」

皆同じ制服を着ている彼女達の内、一人が高圧的な口調で口を開く。

「人の男に色目使うなつてさア……アタシ言わなかつたつけ?」

「私は……何も……」

「何もしてないつて?よく言うわ……アンタが近くにいただけで、ウチらの男が目移りするの自分のせいじゃないとでも言うワケ?ねエ!」

日常のフラストレーションを吐き捨てるかのように、暴力的な声を発しながら少女の髪を掴む女子高生。

「このピアスもさア……男が寄つて来てんの分かつて付けてんでしょ?狙つてんのか知んないケド、そーいう魔性ぶつてんのマジで死ぬ程キモいから。つーか……もう学校来んなよ。殺すよ?」

痴情の一端などとは片付けられない程、醜悪に歪んだ鋭い言葉。少女は乱暴に詰め寄せられながらも、抵抗する素振りを見せずされるがまま。人と向き合うという気力が、最

早彼女には残っていないのかもしれない。

「——オイ」

しかしそこに現れる、新たな人物。声が出た方向に目を向けた少女達が見たのは、自分達と同年代と思しき一人の少年だった。

「は……？何？誰アಂತア」

黒色の髪、鋭い瞳、見慣れない制服。その少年に向かつて、何の関心も無いような声を掛ける女子高生。しかしこちらへ歩いて来る彼の表情には、底知れぬ感情が隠されていた。

「……………何でお前らは、そんなに簡単に傷つけられるんだ……………」

「え？」

「自分達と少し違うだけの他人を……………どうして、そんなに許せねエんだ……………教えてくれよ。なア、オイ!!!」

叫びと共に叩きつけられた拳が、轟音と共にビルの壁を打ち砕く。そうして少女達は漸く気付いた。突如現れたこの少年が、計り知れない憤怒を自分達に向けている事に。

「ちよつ……………何コイツ、なんかヤバいつて……………!!!」

「もう行……………!!!」

常人離れたその異常な腕力に、恐怖を覚えた少女達は逃げ出そうとする。しかし少年の身体から溢れ出す不気味なオーラが、彼女達の足を動かす事を許さない。

「人と違うってコトが悪なのか……う？なア、答えてみるよッ!!!」

少女達の眼前へと辿り着いた少年が、握り締めた拳を振り上げる。

「創来!!」

その背後から、彼の名を呼ぶ声が路地裏に響いた。しかし、拳は止まる事なく振り下ろされる。創来はその右腕を、彼の横に現れていた少年が同じ右腕を交差させ受け止めていた。日向によって辛うじて拳が少女達に届く事は無かったが、それによって生じた風圧が吹き抜ける。

「やめとけ……もう充分ビビらせたら……」

日向からの落ち着かせるような言葉を受け、静かに彼の腕を振り解く創来。恐怖と衝撃の余り少女達は呆然と立ち尽くしていたが、日向はそちらを振り返ると明るい声を張り上げながら手を叩いた。

「ハイハイ、解散！撤収！コイツに殺されんぞ!!」

その忠告に彼女達は、半ば取り乱しながら今度こそ逃げ出していく。しかし壁際でしゃがみ込んでいた少女は、日向と創来を睨みながら小さく呟いた。

「余計な事、しないですよ……」

それだけ言い残し立ち上がると、二人を見向きもせず立ち去って行く。その瞳に宿っていたのは、諦観めいた暗い感情。すれ違い様に日向の魔力知覚は、その少女が人より少しだけ強い魔力を有している事を感じ取っていた。

◇◇◇

授業が行われている教室の、窓際の席。日向は外の景色を眺めながら、昨夜交わした恭夜との会話を思い出していた。

創来と共に魔術都市へ帰還した後、恭夜と二人になった日向は路地裏での出来事を報告した。

『成程な……まあ、アイツも似たような境遇で思う所があつたんだろ……』

『……アイツ、昔なんかあつたのか?』

創来が怒りを顔にしていた事には、彼の過去に何か関係があるのかと問い掛ける日向。

『……向表側ここの世界だとな、魔力を多く持つてる人間ってのは異端なんだ。疎まれ、怖れられる……アイツの場合は生まれた環境も悪くてな。随分長い間”そう”だったらしい』

強大な魔力を身に宿す者は、本人の意思とは関係無く周囲に影響を及ぼしてしまう。魔術都市と異なり魔術が”得体の知れない力”である現代社会にとつて、創来は異質な存在であり虐げられる立場の人間だった。

あの時日向達が守ろうとした少女に、創来はかつての自分を重ねていたのかもしれない。少なくとも、彼が抱えていた怒りの心情の意味を知る事は出来た。

だが魔力を持つ人間であっても、日向や創来のように東帝に入る事が出来るのは『戦える魔術師』としての素質を見込まれた者だけ。彼女のような人間全てを保護する事は出来ないという事は、恭夜に伝えられずとも薄々理解していた。

『創来はこれからも、怒りのやりようが無工場面にきつとブチ当たる。だからそんな時、アイツとぶつかり合えるような……対等な「理解者」^{ストッパー}でいてやってくれ』

『……ああ、わかった』

恭夜の言葉を、真っ向から受け止め頷く。それは自分にしか出来ない役割だと、日向は解っていた。

そうして現実に戻った日向だったが、ふと視界の隅で中庭を歩いていた創来を捉える。

(授業中に何してんだアイツ……)

そんな事を考えながら、次の瞬間日向は窓から飛び降りていた。隣の席の伊織は最早、何を言う気も起きないような表情。

「この術式を構成する要素として考えられるのは……端の席で爆睡してる春川！何だと思おう——」つて、え？アレ、どこ行つた？」

教壇に立っていた冴羽が振り向き様に日向を指名するが、彼の席には誰も座っていない。

「……あのバカなら、たつた今そこから飛び降りて行きました」

「授業中に何してんだアイツ……!!」

うんざりするような伊織の言葉に冴羽は青筋を浮かべつつ、空中に術式を描いていた魔術杖を固く握り締めていた。

◇◇◇

「んで、怜さんの授業から脱走してからまだ帰つて来てねーと」

「漆間を追わせたのはどうせアンタの指示でしょうが」

再び選抜クラスに招集された伊織達だったが、それに応じたのは六人で日向と創来の姿は見えない。

「まあいいや、その内アイツらは戻つて来んだろ。それより今日は、俺からオマエらに紹介したいヤツがいる。オーイ、入つて来ーい」

しかし恭夜は二人を待つ事無く、今日の本題に入る。その合図の声と同時に、廊下で待たされていた一人の人物が教室へと足を踏み入れた。

体格も雰囲気も、至って普通の男子生徒。これと言った特徴の無いその少年は、穏やかそうな笑みを浮かべつつ小さく頭を下げる。

「今日からこのクラスに加わる……新！クラスメートだッ！」

「初めまして。D組の天城 鎧です。別日の選抜試験で合格して、このクラスに入れてもらえる事になりました。宜しくお願ひします」

選ばれた人間だけが集う場所に、新たに来訪した少年天城^{アマギ} 鎧^{ガイ}。彼の存在が、どのような変化が齎すのか。それを知る者は――

【天城 鎧】

学年『2位』（SWP：1876点）

『??。』



「弱者達は、今も苦しんでいます」

「……………」

「何の罪も無い人々が、蹂躪され悪意に晒され続けているのです」

「……………」

「彼等を救う事が出来るのは、貴方だけです」

差し出される、黒き剣。復讐と怨嗟を宿したその刃は、確かな意思によって掴み取られた。

第11話『Circumstances — 境遇 —』

「くたばれクソツタレがアツ!!」

「テメエが死に晒せ!!」

激しい罵倒と共に、衝突するガントレットと刀。

「これで九戦九分けやであの二人……」

「競り合ってんねー」

いつまで経っても勝負の付かない、互角の接戦を繰り広げる啓治と伊織を陣と風が遠巻きに眺めている。選抜クラスに属する彼等は今、演習場にて戦闘訓練を行なっていた。

「本当に凄いね、あの二人……!」

「ああ……アイツらは……ハア、マジで強エぞ……!!特に、殴り合いなんかはな……!!」

先日新たにこのクラスに加入した少年、天城 鎧は白熱した戦闘を展開する伊織と啓治に感嘆の声を漏らしていた。その隣では天音に模擬戦で完敗した日向が、息を切らしながら大の字に転がっている。

「そーいや、鎧は何で今まで登校してなかったんだ?」

「そう言えば春川君にはまだ話してなかったね。僕は生まれた時から病気がちでね……東帝に入学してからも容態が安定しなかったんだけど、最近は良くなって来てね。やつと登校出来るようになってき」

「へえ……つつても、休んでばっかなのに『2位』って相当強エな、オマエも」

これまで鎧が入退院を繰り返していた事を告げられるが、にも関わらず学年上位に残り続けている彼の實力に日向もまた感心していた。

「いや、まだまだだよ。早く僕も追いつかないと——」

鎧がそう言いかけた時、隣の訓練室から模擬戦を終えた沙霧と天音が戻って来る。片や髪や服が全体的に乱れており、片や涼しい顔で訓練前と一切変化のない様子。勝敗については、直接聞くまでもなかった。

「沙霧も敗けたか」

「うん……頑張ったんだけどね……」

沙霧はかなり疲れた表情で日向に言葉を返すが、天音は平然としながら鎧へと目を向ける。

「次はアンタの番よ。天城」

「……分かった。胸を借りるつもりで、戦わせてもらおうよ」

天音から模擬戦を申し込まれ、少し緊張した面持ちを浮かべながらも承諾する鎧。

「頑張つてね、天城君」

「2位の力見せてくれ！」

「レッツぎよくさーい」

「天音ちゃんの洗礼楽しんで来いや。骨は伊織くんが拾ってくれるで」

「オイ勝手に決めんな一文字！」

「余所見してんじゃねエぞへボ剣士！」

「ハハ……」

沙霧や日向の応援、風や陣の冷やかしめいた激励を受けながら、鎧は苦笑を零しつつ訓練室へと入って行く。

「沙霧はどうだった？」

「私は天音ちゃんの雷属性にはほぼ一方的にやられちゃった……春川君は？」

「俺も天音の氷にボコられたわ……やっぱ俺達は相性がな〜」

天音に敗れた沙霧と日向は、自分達の模擬戦の内容をフィードバックしていた。一つだけの属性による術式を主な武器として戦う二人は、天音のような複数の属性を使い分けるタイプとは相性が悪い。ましてや天音が操るのは八大属性全てであり、沙霧の水属性には雷属性、日向の火属性には水属性で対応し彼等の魔術を完封していた。

「せめて俺達にももう一つ属性があればな……お、鎧達が入って来た」

日向が見ていた巨大モニターに、隣の訓練室に入って行った鎧と天音の姿が映し出される。天音は普段と同じく武器を持たないスタイルだったが、対して鎧の右手には西洋型式の騎上槍ランスがあった。

「天城君、槍使いなんだね」

「俺は武器の扱いダメだなー。剣も銃も」

鎧が持つ武装について言及する沙霧と日向。伊織などと同じく、鎧の戦闘スタイルも武具を用いた近接型かと予測していた。

訓練が開始され、天音と鎧が同時に動きを見せる。先手を取ったのは、やはり天音。

火属性魔力×形成術式

『エクストロースフラスト
爆速弾』

超高速の炎弾が撃ち出されるが、鎧はそれを振り抜いた槍で迎え撃ち叩き落とす。更に続けて天音が風属性の無数の弾丸を放つが、それらも槍で弾き飛ばし、最後の一発は魔力によって構成した盾で防ぎ切った。

そこからかさず槍を突き出すようなモーションを繰り返し、反撃の術式を構築する。

光属性魔力×形成術式

『グロリアス・ホーン』

鎧が有する属性性質は『光』。槍の動作によって指向性を与えられた魔力が、聖獣の衝角の如き刺突を形成し撃ち放たれる。武器によって制御された魔力の槍撃を、天音は足元から一瞬で生み出した氷壁で防ぎ止めた。

その上空から天音へと飛来する、魔力によつて形成された無数の『柱』。鎧が放ったそれらは天音の周囲へと突き刺さり、格子のような光の牢獄を創り出す。

光属性魔力×形成術式

『ホーリー・ジェイル』

しかし魔力の牢が天音を完全に封じ込むよりも、彼女の対応の方が速い。天音は術式を介さずに直接闇属性魔力を放出し、爆発的な威力で光牢を吹き飛ばした。

「……やるじゃない」

油断無く騎上槍を構える鎧へと、天音は不敵な笑みを見せる。

「天音が笑つてら……」

戦闘中に天音が見せた表情に、日向が意外そうな声を零した。

「天城君も、天音ちゃんと一緒に昔は身体が弱かったらしいからね……」

「沙霧もそのハナシ聞いてたのか？」

「うん、春川君がいない時にね。……二人とも、それを乗り越えて来たんだよ。天音ちゃん、共感する所があるんじゃないかな……」

幼い頃から天音を知る沙霧は、小さく微笑みながら彼女の心中を推し量る。同じ苦しみを乗り越えて来た好敵手の出現が、彼女にどのような影響を与えたのかは解らない。だがその瞳は、以前よりもずっと先を見据えるようになっていた。

『境遇の理解者』。

沙霧の言葉を聞いた日向が思い出すのは、以前恭夜と交わした会話。そしてここにはいない、一人の少年の事だった。

「つーかよ……創来はどこほつつき歩いてんだろオナ？」

「確かに……最近来てないね、漆間君」

ここ数日姿を見せない創来について言及する二人。授業時間中も度々講堂から抜け出しているようで、どこかへ歩いて行く創来を遠目に見つける事が多くなっていた。

「こないだ尾けてみたんだけど、途中で見失っちゃまってな。何してんだらうな？アイツ」

「……心配だね……」

う。少しだけ不安そうな表情を見せる沙霧だったが、日向は彼女を励ますように明るく笑う。

「まあ、沙霧はあんま心配すんな。アイツもその内戻つて来んだろ」

◇◇◇

演習場ロツカールームにて。

訓練を終えて日向達が帰っていく中、伊織は一人演習場に居残っていた。自己鍛錬を済ませた後訓練用の刀を壁に立て掛け、上着のフアスナーを引き下げながら長椅子に腰を下ろす。

啓治との戦いは、結局十戦十分けで決着がつかなかった。日向や陣、凧とも戦い完勝したが、彼等も着実に成長し続けている。魔力の無い伊織が彼等と並んで戦つて行くためには、己の技術を磨き鍛え上げる他に方法は無かった。

しかし、伊織の表情に焦りは無い。研鑽はいずれ必ず自身の力へ変わると、彼は知っていたからだった。

「……………お疲れ様」

ロツカールームに響く、少女の声。入口へと目を向けると、制服に着替えた天音が扉に寄り掛かっていた。

「おう。……お前、まだ帰って無かったのか」

「うん。少し、術式を調整してた」

「……そうか」

他愛の無い会話の後、ロッカールームに沈黙が広がる。別に気まずい間柄という訳でも無いが、特段親しい訳でも無い。しかし激しい戦いを繰り広げた経験はあるという、かなり変わった関係性の二人だった。

「……ねえ」

「ん？」

「……今度、もう一度私と戦ってくれない？」

その時、天音から落ち着いた声でそう告げられる。

「……いいいぜ。お前とは早エ内にもう一度、ハッキリ白黒つけてエと思ってた」

彼女が示した再戦の意思に、小さな笑みを浮かべながら伊織もまた同意した。

「ありがと。……これ以上、遅れをとるつもりは無いから。アンタにも、春川にもね」

「……お前の先を越したつもりも無エけどな」

不敵な表情の伊織に、天音は微かに口角を吊り上げながらもロッカールームを後にする。その背中を見ながら、伊織は彼女もまた少しずつ変化している事を感じ取っていた。

以前は常に張り詰めたような空気を纏っていたが、今の天音にはそのような『余裕の無さ』が見えない。天音の変化には、彼女に食らいつくべく努力している一人の少年が影響を及ぼしているのかと伊織は考えていた。

(……天城の影響か……?)

◇◇◇

遠くで街の喧騒が聞こえる、薄暗い深夜の路地。高架下のトンネルへと続く道を、一人の少年が歩いていった。

「オイ、漆間」

背後から掛けられた声に、創来が振り返る。そこに立っていたのは、彼も見知った人物だった。

「よく抜け出しているとは聞いてたが……」

その少年、皇 啓治は創来を軽く睨みながら言葉を放つ。

「お前がどこで何をしてよオが、お前の勝手だ。好きにすりやいい……けどな」

鋭い目で真つ直ぐに創来を見据え、啓治は続けた。

「空条さんや春川は、お前を心配してる。あの二人の信頼を裏切るようなマネしやがったら……俺はお前を許さねエ」

日向と沙霧が、度々姿を眩ませていた創来を案じていた事。それを察していた啓治は二人の意思を伝えるため、彼を追い掛けて魔術都市から出て来ていた。

「……チツ。柄にも無エコト言わせんなクソが……」

自分には関係の無い事に首を突っ込んだかと、舌打ちしつつ創来に背を向ける。伝えるべき事は伝えたとして、啓治はその場から立ち去ろうとした。

しかしその時、背筋に刃を沿わせるような殺気を感じ取る。振り返った眼前には、正にその刃が啓治の瞳を斬り裂かんと迫っていた。

咄嗟に距離を取る啓治だったが、右目の下に刃傷を受けそこから血が噴き出す。

「デメエ……何考えてやがる……!!」

突然の凶行に走った創来の右手には、どこから取り出したのか一本の剣が握られていた。全てを呑み込む暗闇のような、漆黒色の刃を備えた剣。そして創来の目には、暗く禍々しい光が湛えられていた。

「……………何も力も、恵まれた才前に……………何が、分かる……………」

「あア……………!?!」

創来は断続的な声を発しながらも、その刃を振り上げ更に斬り掛かる。

「傲慢な人間が……………弱者を、虐げてるんだ……………奴等を、止めるには……………す、しか——

——

「ッ、お前……………まさか……………!?!」

剣撃を魔力で硬化させた両腕で受け止めた啓治は、掠れた声で創来が放った一言に瞠目していた。啓治の脳裏に浮かぶのは、『表』の東京にて発生していた連続惨殺事件。

魔術都市に流れていた断片的な噂の情報しか知り得なかったが、現代科学では立証出来ない点の多い不可解な事件らしい。しかしその事件に、魔術師が関わっていたとしたら———?

手にしている『魔剣』が力を与えているのか、創来の連撃は振るわれる程にその鋭さを増して行く。対して啓治は動揺が響いているようで、防戦一方の劣勢を強いられてい

た。

(クソ、ナツクルを持って来なかったのは失敗だった……!!)

連続斬撃を弾き、受け流しながら、修理中だったため学園の自室に置いて来た
アーミーナツクル 魔術武装について思い出す。しかしそんな事を考えている間に、状況が好転する筈も無い。

無属性魔力×強化術式

『ソウケン双拳』

闇属性攻撃術式

『ダークネススカリバー』

「目エ覚ませやコノ……バカ野郎がツ!!」

「ツ……………!!」

啓治の両拳が腹部へ叩き込まれ、創来の刃が肩口を斬り裂く。両者の渾身の一撃が互いを吹き飛ばすが、より傷が深かったのは啓治の方だった。

地を転がった啓治は血を吐きながらも立ち上がろうとするが、ダメージが大きく視点が定まらない。そこへ更なる追撃を与えるべく、創来が一步踏み出そうとした。

無属性魔力×形成術式
チエインバインド
 『連縛』

創来の全身を、何処かから出現した幾つもの拘束帯が縛り付けその動きを止める。

「ピンチみたいやね、啓治くん。助けに来たで」

「お疲れケージ。ボコられてんね……」

そんな緊張感の無い言葉と共に現れたのは、啓治の友人である二人の少年と少女。一文字 陣と更科 凧だった。

「一文字、更科さん……!!どうしてここに……!?!」

「いやア、ボクらも創来くんが気になって追い掛けて来とったんやけど、まさかこんなコトになるととは……」

自身の拘束術式を破ろうとしている創来へと、軽い口調とは裏腹に警戒の視線を向けている陣。

「……認めんのは癪だが、俺達学生にどうにか出来るレベルじゃねエ。管理局プに連絡を……」

「いや、それはナシやな」

「は?!?!何でだよ……!?!」

啓治は最早事態は自分達の手に余ると判断しようとしたが、陣はその選択肢を却下した。

「考えてみてや。ここで管理局に捕まれば、創来くんは『表』での魔術使用で罪に問われる。……そしたらもう、学園には戻って来れへんかもしれんで」

「けどな……アイツは……!」

魔術都市以外の場所で術式を用いる事は、『魔術法・秘匿原則』により固く禁じられている。創来を止めるには、彼を犯罪者と断ずる以外に手立ては無いと考えていた。

「啓治くんは、創来くんが連続殺人の犯人やと思つとるん?」

「ツ、それは……」

「ボクは、なんかの間違いやと思うで」

しかし陣は、啓治の疑念を真つ向から否定するようにそう告げる。その隣の凧も、意思は同じようだった。

『——^{アイツ}創来さ、結構優しいヤツなんだよ。なんつーか……伊織とかと同じだ。お節介? お人好し? なんだよな、ハハ』

日向が言っていた言葉が、啓治達の記憶の中で呼び起こされる。あの屈託の無い少年は、^{創来}仲間を絶対的に信じていた。

「日向クンは信頼に足る人間や。せやったら、日向クンが信じる創来クンのコトも、信じてみてエエんとちやうかな。少なくとも、ボクはそう思うで」

事件の全容を知り尚且つ創来が捕まらない為には、彼を正気に戻す他に道は無い。陣の言葉を受け、啓治は既に腹を括っていた。

「……5分持ち堪えてくれ。少し、休む……」

「OK OK、啓治クンみたいな正攻法やと戦術的にキツイやろ。ボくら『搦め手チーム』に任せとき」

「そのコンビ名は流石にヤなんだけど……」

陣と凧に戦いを託した啓治は、少しでも体力を回復させるために倒れ込むように寝転がる。そして創来の手に握られた、異質なオーラを放出し続けている漆黒の剣を指差した。

「それと……漆間をおかしくしてんのは、多分あの『剣』だ。アレをアイツの手から引き離せ……」

「了解」

啓治の推察に陣と凧が頷き、それと同時に創来が拘束を打ち破り咆哮を上げる。突っ込んで来た創来の刃を、凧が両手に構えたナイフで防ぎ止めた。

大上段からの衝撃を、双刃に滑らせ受け流す。そして体勢を崩した創来の背後へと、

掻き消えるような速度で回り込む風。

強化術式

『ソニック
瞬』

瞬間速度では日向のそれをも上回る高速移動で、創来の周囲を縦横無尽に疾駆し次々と斬撃を浴びせて行く。

「初手は急所外すのがジョーセキ……」

敢えて急所を外したのを絞らせない風の連刃に、腕や脚を斬り裂かれていく創来。次第に苛立ちを見せ始め、力任せに魔剣を振り抜く。

「アカンなア創来クン……大振りや」

風がスウエーで刃を躲し、その隙を逃さず陣が縛^{バインド}で再度創来の右腕を拘束した。そして後退する風と入れ替わるように、無数の魔力弾が創来へと襲い掛かる。

無属性魔力×形成術式

『チェイン
弾』

しかし降り注ぐ爆撃を斬り払いながら創来は、煙の先に風の姿を捉え再び突進した。魔剣の切先が届こうとした時、今度は高速移動ではなく、景色に溶け込むように”風の

姿が『消失』する。

『アビリティマシク
特殊魔術』『ステルスフォウミュラ
隠密術式』。

彼女だけの固有能力によって姿を消した凧が、創来の背後上空へと現れた。魔力を纏った凧の右脚が、創来の側頭部へと蹴り下ろされる。

「帰る場所を守る戦いつてのも……楽やないなア……」

戦いの最中、誰にも聞こえない声で陣は小さく呟いた。

第12話『Believable Friends

—信じる友—』

父親は、母親や幼い自分に平気で暴力を振るう人間の屑だった。

今では、不気味で得体の知れない力を宿した自分を、本能的な恐怖から虐待していたのだと分かる。しかし父親はある日、何がきっかけだったのかは分からないが一線を越えようとした。殴られ続けていた母親を守るために、初めて明確な意思で『力』^{魔方}を使つた。

必死だった。やがて父親だった男が動かなくなつた時、母親はもう自分を見てはいなかった。

『——この、化け物……!!』

人と違う自分は、肉親にすら恐れられる存在だったのだと知つた。

そこから先は、碌に記憶が残っていない。

程無くして自分は、少年院に入れられる事になった。見捨てられた事など、言われるまでも無く理解していた。

半ば屍のように生き続けていたが、ある時転機が訪れる。自分を訪ねて来た、一人の男との出会い。サングラスを掛け常に飄々と笑うその青年は、『魔術師』と名乗っていた。

『——お前が、漆間創来だな？』



叩き込まれた風の蹴撃によって、創来の体勢が大きく揺らぐ。しかし剣を地に突き立て踏み留まり、反撃すべく魔力を拳へと集め撃ち放った。

闇属性魔力×強化術式

『イヴルストライク』

闇属性の一撃を風は両足蹴りで受け止めるが、勢いを殺し切れず大きく吹き飛ばされる。空中に投げ出される風だったが、そこへ『縛』を応用した魔力の帯を放つ陣。それ

を掴んで体勢を立て直した凧は、着地と同時に再び地を蹴る。

(俺も寝てる場合じゃねエ……!!)

啓治は肩の傷を抑えながら、創来を翻弄する二人の高い戦闘技術に刮目していた。陣の卓越した支援能力サポートに、その即興の連携に難無く合わせる凧の対応力。しかし創来の武力は、それすらも凌駕しようとしていた。

最短距離を超速で駆け抜けた凧が、懐へと入り込むべく肉薄する。そこに完全にタイミングを合わせて来た創来が魔剣を振り下ろすが、陣の方が一手速かった。事前に仕掛けていた魔力盾が、凧の前に展開される。

防御を陣に任せた凧が創来の剣撃を掻い潜り、その鳩尾へと突き刺さるような肘打ちを炸裂させた。小柄な凧が創来の躯体を吹き飛ばす程の威力を叩き出す、その時戦況に突如異変が生じる。

創来の魔剣から、爆発的に溢れ出す魔力。黒く蠢くその魔力が、体表へと収束していき。

その姿は、全身に刃を纏った漆黒の猛獣のように見えた。

闇属性魔力×強化術式

『ダークナイトモード』

「なんだあの姿……!?!」

異様な変貌を遂げた創来は、目を見開いている啓治達へと襲い掛かる。その速度は、異常なまでに上昇していた。

「更科さん!」

驚異的な加速に風の反応が一瞬遅れるが、咄嗟に動いた啓治が彼女を突き飛ばす。腹部へ魔力を集中させるが、創来の剣撃は啓治の防御を易々と斬り裂いた。

「ッ、啓治……!」

風がここに来て初めて焦りの声を上げるが、彼女達を援護すべく陣が次々と魔力弾を撃ち込む。鬱陶しそうに陽動射撃を払い退け、創来は陣へと一瞬で距離を詰め斬り掛かった。

陣の胸元へと、深々と突き刺さる漆黒の刃。

「!!」

啓治と風が息を呑むが、創来の前に立っていた陣の姿は『透き通っていた』。

「残念、ハズレや」

そして創来の背後から聞こえてくる、たった今胸を貫かれた筈の少年の声。

無属性魔力×形成術式

『幻』
イリュース

魔力によって『幻像』を創り出していた陣は、それを囿にした隙に新たな術式を構築していた。陣の指から放たれる魔力の弾丸。しかしその速度は、通常の『弾』ブラストを遥かに上回っていた。

無属性魔力×形成術式

『狙撃銃弾』
スナイプブラスト

貫通力をより強化された一条の魔光弾が、剣を持った創来の右手を正確に撃ち抜く。そして右腕を抑えた創来は、遂に握っていた剣を地に落とした。

しかし魔剣を取り落として尚、創来が纏っている異質なオーラは消えない。

『剣の影響じゃ、ねエってコトか……!?!』

夥しい量の血を流しながら、息も絶え絶えに啓治が呟く。落とした剣には目もくれず、咆哮を上げ本能のままに疾走する創来。陣が『盾』シールドを形成し啓治を守るが、創来はそれを素手で引き裂き突き破る。

攻撃力、耐久力、速力、全てが強化されたその形態は、創来の戦闘能力を異常なまで

に引き上げていた。凧は蹴りによつて壁際まで吹き飛ばされ、陣は拳を胸元に叩き込まれ殴り飛ばされる。

「クソ……コレが、テメエの意思か……？」

睨み上げながら啓治がそう問うが、創来が口を開く事は無くその瞳にも感情は見えない。彼等の願ひも虚しく、その拳は無慈悲に振り下ろされた。

水属性魔力×形成術式

アクアシエルシールド

『水 甲 盾』

闇を纏つたその一撃から、啓治を守る魔力障壁。創来の拳を防ぎ止めたその少女は、彼等の背後から姿を現す。

「ごめんね、皇君。遅れちゃつて」

「空条さん……!!」

更に沙霧の隣には、もう一人の少年の姿が見えた。

「連れて来てくれたみたいやな、沙霧ちゃん……!!」

胸を押さえ血を吐きながらも、陣が勝機を見出したように小さく笑う。新たにその場に現れた少年、春川 日向は創来へと一歩ずつ踏み出した。

「創来……」

啓治達が固唾を飲んでその動向を注視しているが、創来は日向の声に反応を見せない。

「……俺はさ、お前とは生まれも育ちも違う。……本当の意味で、お前の『理解者』にはなれねエのかもしれないエ」

日向の歩みに合わせ、創来もゆっくりと進み始める。

「……けどな。もしお前が、道を踏み外しそうになったら……全力でブン殴って止めてやる。理解者としてじゃねエ……友達として、お前を絶対引き戻してやつからよ」

小さく笑った、日向。それと同時に、創来が最後の一步を踏み込んだ。

「沙霧!!」

「はい!!」

突進して来る創来に迎撃の構えを取りながら、日向が沙霧へと叫ぶ。名を呼ばれた沙霧は日向の眼前に、五つの魔力障壁を直列に展開した。

水属性魔力×形成術式

『甲 盾・五重』
シエルシールド クインタール

沙霧が発動した防御魔術は、創来の攻撃と闘ぎ合いながらも一枚ずつ破られていく。しかし日向には、その数秒の時間が稼げれば充分だった。

両腕へと収束する炎熱。幾度と無く戦う中で、日向は啓治の『技』を自身の型へと取り込んでいた。

火属性魔力×強化術式

『ソウレットハ
双烈破』

最後の障壁を砕き割った創来へと、渾身の力を以て叩き込まれる二つの拳。啓治の『双拳』を模して編み出された爆炎の諸手突きは、豪快な威力で創来を吹き飛ばした。跳ねるように地を転がった創来の身体は、やがて仰向けになって止まる。

「……………目エ覚めたか？」

激戦を繰り広げていた創来を下し、打ち倒した日向。彼の言葉に、創来は静かに応えた。

「……………あア……………ありがとう、日向……………」

そして、己を顧みず自分を救い上げてくれた友へと、創来は伝える。

「……………啓治……………陣……………凧……………沙霧……………ありがとう……………」

「……ケツ……感謝しろバカが……」

「ハハッ……ホンマやで……」

「一件、落着……疲れた……」

「うん……!!」

啓治達は悪態を吐きながらも笑みを溢しており、沙霧は小さく涙を浮かべながら頷いていた。



それから。

沙霧の回復術式で傷を誤魔化し、密かに魔術都市へ帰還した六人。啓治だけは相当な重傷を負っていたので仕方なく東帝の医務室へ運び込んだが、医務員の篠宮には陣が巧妙な話術で『乱闘騒ぎに巻き込まれた』と信じさせていた。とにかく多芸な男である。

後日、包帯を全身に巻き付け登校した来た啓治は、意趣返しのようにニヤついていた『初代包帯野郎』伊織といつも通りに喧嘩を繰り返していた。

沙霧や陣はクラスの雰囲気明るくなった事を手放して喜んでおり、凧は普段通り机にヨダレを垂らしながら爆睡している。

そして欠席せずに毎日姿を見せるようになった創来は、ある日恭夜に呼び出されていた。

誰もが日常を取り戻しつつある中、日向は――



「なあ、オ勘弁してくれよオ怜ちゃあくん」

「黙れ。今日という今日は逃がさないわよ。てか誰がそんな呼び方許した？」

「公認つつつてたぞ？千聖ちい。パイセンが」

「アイツ……!!」

サボリ常習犯だった日向は遂に冴羽に捕らえられ、椅子に縛り付けられた状態で強制補習の刑に処されていた。昼寝、脱走、無断欠席と罪状を重ね過ぎた故の自業自得である。

一時間後。

「終わった！もう終わったから許してくれエエエエ!!」

「せめてドアから出て行け!!」

死に物狂いで課題を終わらせた日向は、逃げるように窓から飛び出して行く。くたび

れ切った叫び声を上げながら校舎の外壁をよじ登り、連絡通路の屋外テラスに降り立った日向。

そこにはテーブルに着いて、魔術書を広げ勉強していた鎧の姿があった。

「補習お疲れ、春川君」

「おーお疲れ……怜ちゃんスパルタすぎて今回はガチで死にかけた……」

鎧の向かいの席に腰掛けた日向は、机に突っ伏しながらそう返す。

「……最近、色々大変だったみたいだね」

「あー………まアな。もう今は大丈夫だ。ちゃんと、一段落ついたから」

啓治の大怪我や、創来の変化。自身の預かり知らぬ所で何かしらの事件が起きていた事を、鎧は周囲の空気から薄々察していたようだった。

「詳しくは聞かないけどさ。春川君が、解決の立役者だってコトは何となく分かるよ。流石だね」

「いやーハツハツハよせやいハツハツハまアそんなコトはあるんだけどなハツハツハ」

日向はすっかり気を良くしていたが、鎧は至つて真剣な様子で言葉を続ける。

「春川君には、皆に同じ方向を向かせる力があるよね。真性の『リーダー』としての素質があると思うよ」

「そうか？リーダーだね………つつつても、皆をまとめたりつつーコトなら天音とか伊織

の方が向いてそうだけどな」

「確かにあの二人も実力的にはリーダーとして申し分ないね。けど、人を『巻き込んで』引き寄せる」影響力”は、春川君だけのカリスマなんじやないかな？」

「神妙な雰囲気を感じ取った日向が真面目な表情になるが、鎧は新たな質問を投げ掛けた。

「春川君はさ……どうして東帝に入学したんだい？」

「んん？どオしたよ急に」

唐突かつ意図の読めない質問に、軽く面食らっている日向。

「いや、最近色んな人に訊いてるんだよね。……この学園には、確かな志を持ってここに来た人が沢山いる。僕はいつも、その人達から学んでばかりなんだ。だから、その原点がどこに在るのかを知りたくてさ」

「オマエ普段からそんなコト考えてんのか。マジメだなア……ボケつと過ごしてるよオなヤツだって沢山いると思うけどな」

茶化すような日向に、軽く笑顔を浮かべる鎧。

「——御剣君はね、剣を極めてどんな魔術師よりも強くなる事が目標らしいよ。そうして、この世界の『力』は魔術だけじゃないってコトを証明するって言ってたんだ」

「へエ……なんか、アイツらしいな」

「皇君は、魔術工学の知識をもっと深めて、より多くの人を助けられるような開発をした
いらしい。勿論、魔術師としてももっと強くなるつもりだつてさ」

「あー、アイツ頭いいしケンカも強エもんな。将来とかちやんと考えてんだな」

「空条さんは、もつと障壁術と回復術を磨いて、お姉さんみたいな多くの人を救える魔術
師になる事が目標なんだつて」

「アイツねーちゃん居んのか。多分スゲー魔術師なんだろオナ」

「一文字君は、海外で使える魔術師資格を取つて、悠々自適に暮らしたいつて言つてた
ね」

「ははっ、何だよソレ。とか言つときながら多分、アイツもどつかで何かしら人助けして
ると思うぜ」

「……更科さんは、行方不明の友達を探す為に、魔術捜査官になろうとしてるらしい」

「……そうだったのか。まあ、アイツにも色々事情はあんだろな」

「藤堂さんは、最強の魔術師になる事……それだけだつて言つてた。皆、明確な目的意識
を持つてたよ。……尊敬出来る人達だ」

「確かに、アイツらが皆スゲー奴つてコトに関しちや同意見だ。ところでよ」

「鎧が明かした彼等の行動指針に、日向も興味深そうに聞き入つていた。

「オマエはどうなんだ？何の為に学園に来たんだよ？」

その時日向から返された問いに、鎧は微かな笑みと共に答えとなる言葉を紡ぎ出す。「そうだね……僕が目指してるのは、簡単に言ってしまうえば『魔術』を広める事だよ。魔術を知らない、『表』の世界にもね」

「ソレは……ルールを変えちまうってコトか？」

「理解が早いね。そうだよ、僕は魔術法を変えたいと思ってる」

明かされた鎧の目的は、魔術法の改正による『魔術の公表』。それは、一人の学生が掲げるには余りにも大き過ぎる理想だった。

強大な力である魔術の歴史には、これまで幾度となく戦争に利用されて来た負の側面が存在する。その為、術師による国際組織である『魔術師協会』は、魔術都市以外での魔術使用を禁じる『秘匿原則』を制定した。『魔術』の存在そのものを、一部魔術師の人間達を除いた世界の人間から隠したのだ。

「勿論、魔術の存在が明るみに出ればどんな事が起こるか、そもそもそれがどれだけ難しいのかも解ってる。けどそれ以上に、やる価値のある事だと僕は思ってるんだ」

「なーるホド……まア、突拍子ねーなと思うが、お前アタマ良いしな。なんか考えあんの分かる」

「うん。魔術には、危険性以上の可能性が秘められてる。人々の未来を、より善い方向に向けられる力がある筈なんだ」

人智を超えた神秘の異能には、人々を傷付ける以上に救う力が有ると力説する。かつて病魔を乗り越えた鎧は、現に魔術によって切り開かれた『未来』を生きていた。

「まだ僕に、それを実現するだけの力は無い……だから、S級魔術師を目指してるんだ」

『S級魔術師』。

魔術師協会が発行する『魔術師資格』は、当人の能力・実績に基づくA・B・Cのランクに分けられている。しかしその上には、極めて高い魔術師としての能力を持つ者のみに与えられるもう一つのランクが特設されていた。S級資格を有する魔術師は、現在世界に15名存在している。そしてランク内での実力が拮抗しているAとC級と異なり、S級には明確な序列順位ランキングが設定されていた。

絶対的に強く、優れた術師である彼等には、その圧倒的な武力に裏付けられた強大な権力が与えられている。その地位を手に入れれば、魔術社会に大きな変革を齎すであろう鎧の理想も現実味を帯びて来る。

「正直途方も無いけど、学園で皆から色々な事を学んでいけば、手が届く気がするんだ。」

皆は、僕には無い物を持つてるからね」

不断の努力を支える伊織の『精神力』。

夢を追い掛ける為の啓治の『知力』。

慈愛の心の礎たる沙霧の『人徳』。

一つの視点に囚われない陣の『自由さ』と『賢明さ』^{クレバ}。

目的の為の手段を編み出す凧の『獨創性』。

頂点に立つ者としての天音の『矜持』。

そして、無自覚に人を束ね同調させる日向の『人間性』。

伊織達の能力を吸収する事で、鎧は更なる自身の成長へと繋げようとしていた。

「へエ……なんつーか、壮大な夢だな。俺は爺ちゃんに言われて、高校くらいは出とくかって思っただけなんだけどなア」

「……春川君は、そんな受動的な人間には見えないけどね。じゃないと、御剣君達と互角に渡り合える程強くなれる筈がない」

日向は困ったような表情でそう告げるが、鎧はそれがこの学園に来た本来の理由ではないと即座に見抜く。日向の力は、強い意志の基に培われ鍛え上げられた物だと気付いていた。そして日向は、遂に観念したかのように口を開く。

「……………分かった、話してやるよ。俺はさ、——」



魔術管理局から呼び出された創来は、取調室にて恭夜と相対していた。心当たりと言え、日向達と戦ったあの件しかない。

「……………言い訳はしねエ。俺はアイツらを傷付けた。……罪は、償う」

「バーカ、違エよ。お前を呼んだのはそういう話じゃねーから安心しろい」

しかし咎を受けるとばかり思っていた創来に、恭夜は愉快そうに笑いながら言葉を掛ける。

「オマエを暴走させてた『魔剣』も現場から回収したし、オマエがこれまでの連続殺人の犯人じゃねエつつーコトも調べは付いてる」

「……………でも俺は、『表』で魔術まで使って——」

「それも、魔剣に付加されてた精神操作術式が原因だつて鑑識から聞かされたよ。だからお前は無罪、潔白だ。けどな、ソレを未遂で止めたのは……………日向や啓治だ」

一度言葉を切った恭夜は、真摯に創来と向き合いながら続けた。

「アイツらは、お前が犯人な筈は無エつてバカみてーに信じてブツかって来てくれたん

だ。そんな友達^{ダチ}、そうそう居ねエモンだぜ？……だから、もしお前に後悔やら感謝やらがあんなら、今度はお前がアイツらを助けてやれよ」

「……………あア。分かった」

「よし、それでいい。……………そんじゃ、本題に入るか」

小さく笑いながら頷くと、恭夜は一枚の写真を創来に提示する。

「単刀直入に訊くが……………オマエ、誰からこの『剣』を受け取った？」

そこに映っていたのは、創来を凶行へと走らせた一振りの剣。

「……………炎の模様が入った、仮面を被ったヤツだった。名前は、『陽炎』^{ミライージュ}って名乗ってた」

「炎の、仮面か……………」

『表』の東京で、魔力を持つてる人間を迫害してるヤツを殺す事を持ち掛けて来やがったな。仲間は近くに何人か居たけど、詳しくは思い出せねエ」

創来へと接触した、『犯罪集団』の輪郭が浮かび上がって来る。これまで起こった事件の被害者が、”魔力を持つ人間を私的に虐げていた事”、そして”現場に複数の人間の魔力痕が残っていた事”も、創来の証言と一致していた。

これらの事から『陽炎』^{ミライージュ}というその犯罪者が、この連続殺人事件に深く関与しているのは間違いないだろう。

「それから、多分あの陽炎ってヤツはNo. 2だ。ボスじゃねエ。アイツは、誰かから指しを仰いでた」

更に創来から伝えられる、犯罪集団を統率する謎のリーダーの存在。姿を見せず犯罪者達を陰から指揮する、その狡猾な手腕は相当に厄介な物と推測出来る。

「成程なア……だそうだとサムムラさん」

一通り聞き終えた恭夜は、背後のドアへと声を掛けた。それと同時に扉が開かれ、一人の男が入室して来る。

「情報提供には感謝する。出前でも取ろうかと思つてたトコだが……ちつとばかり面倒な事になった。今日の所はオマエらもう帰れ」

「ん？何かあった？」

管理局の魔術捜査課課長、沢村 秀一の登場に物々しい雰囲気を感じ取りながらも、恭夜は緊張感の無い声を上げていた。

「オマエにはもう視えてんだろ。……四人目が出た。これ以上、悠長にしてる時間は無エ」

沢村から告げられたのは、新たな魔術殺人の発生。

——
終わりの見えない事件は、最悪の展開へと動き出そうとしていた。

第13話『Sudden Turn —急転—』

食堂での夕食を終え、大浴場で風呂に入って来た日向は、

「やー、今日も何事も無く終わりましたなアー」

「寛ぐなら部屋に帰れテメエ」

伊織の寮室にて、スナック菓子片手に横になっていた。啓治は未だ治療が続いており病院へ、陣は夜の散歩、創来は恭夜と共にどこかへ行っているようで、暇を持て余した日向は伊織の部屋に転がり込んで来たという訳である。

「つーか夜だけでもまだ全然みんな学校いるよな」

「お前もヒマなら演習場でも行つて来たらどうだ。誰かしら居んだろ」

「そオだなく……なんか今日はあんまし気が乗らねエヤ」

窓から一望出来る学園の景色は未だ煌々と明るく、多くの生徒が各棟に居残り訓練している様子が伺えた。

「面白いや明日、天音との模擬戦だよな。やっぱ緊張したりするか？」

テレビのリモコンを手に取りながら日向が言及したのは、遂に前日となった伊織と天

音との再戦について。以前の『開幕戦』にて熾烈な決闘を繰り広げた二人に、日向のみならず多くの生徒が注目していた。

「別に誰が相手だろうと、やる事は変わらねエ。全力のアイツを倒して、勝つだけだ」
「作戦とかあんのか？」

「無エな……強いて言うなら、アイツの術式を片っ端からブツた斬つてくコトぐらいか」
「めっちゃめっちゃIQ低そうな脳筋節である程度何とかなりそうなのがスゲエよなア」

「喧嘩売ってるか？」
「いやめっちゃ褒めてる」

自身の得物である刀を入念に手入れしている伊織に軽く睨まれながら、笑い混じりの声で日向が返す。リモコンを操作しチャンネルを変えると、東京を騒がせる連続殺人のニュースが扱われていた。

「そーいやお前さ……いっつも一本しか使わねーのに何で二本持つてんだ？」

その時日向は、ふと生じた疑問を伊織に放つ。伊織が常に腰に備えている二刀は、侍のような『打刀』と『脇差』からなる『大小拵え』ではなく、同じ長さの二本の打刀。しかし戦闘に於いて伊織は一刀流の剣術しか用いておらず、二本目の刀を抜いている場面を日向は見た事が無い。

「呪い的な魔術で封印されてて二本目は抜けねエ……みたいな妖刀だったりすんのか

？」

「バーカ、んなワケねエだろうが。俺はそんな妙な武器には頼らねエ」

伊織は淡々とした口調で返答しながら、二本目の刀の手入れに入る。日向が見る限りではそれらの刀は二本とも極普通の日本刀であり、何か魔術的な効果が付加されているような物には見えなかった。

「片方しか使わねエのは、単純に——」

伊織がその理由を口にしかけたが、日向の携帯端末から鳴った着信音に遮られる。

「おー、わり。電話だ……沙霧からだ。珍しいな？」

画面に表示されていた連絡して来た相手は、二人の隣のクラスに所属する少女だった。通話ボタンを押した日向は、寝転がったまま端末を耳に当て口を開く。

「ほいほーい、どした？……んん？……や、知らねーケド……うん、今一緒に居っから聞いてみるわ」

「……………どうした？」

最初は普段通りのヘラヘラとした表情だったが、次第に神妙な面持ちになっていく日向。異変を感じ取った伊織へと、沙霧との通話を一旦中断した日向が問い掛ける。

「お前さ、天音が今日どっか行ってんのか見た？」

「藤堂が……？いや、見てねエ。アイツがどうかしたのか？」

「いや……沙霧と今日の夜会う約束してたらしいんだけど、いつまで経っても来ねエ上に連絡も取れねエんだとよ」

告げられたのは、僅かな不穏さを感じさせる報せだった。

◇◇◇

そして日向と伊織は今、夜の魔術都市を疾走していた。日向は火属性魔力による飛翔で、伊織は純粹な脚力で、ピルの外壁や標識などの立体物を足場に街を駆け抜けて行く。あの後沙霧に会いに行つた二人は、天音の行方を探すべく寮を抜け出していた。沙霧には学園周辺を任せ、日向と伊織は魔術都市の中央街へと出て来ている。

「単にアイツが約束忘れてるっつーだけなんじゃねエのか？」

「そうだったらそれで別にいいけどな……」

心配が杞憂に終わる可能性もあったが、最も親しい筈の沙霧との約束を天音が反故にしたという事に日向は妙な胸騒ぎを覚えていた。同様の違和感は伊織も感じているように、文句を言いつつも眼下の街を見渡しながら天音を捜している。

天音が沙霧を蔑ろにするとは、どうにも考え難かった。

「クソ、桐谷先生が居れば一発で見つかるんだらうけどな……」

恭夜の視力強化魔術ならば、この広大な魔術都市からも即座に天音を見つけ出せるのだらうと呟く伊織。しかし屋上に一度降り立ち携帯端末から連絡を試みるも、恭夜から

の応答は無く留守電メッセージのアナウンスが流れるのみ。

東帝の教員としての職務だけでなくプロの魔術師としても多忙なようで、恭夜はこうして連絡がつかなくなる事が度々あった。

「チツ……このまま捜しても埒が明かねエぞ。一旦『表』に出てみるか?」

天音が魔術都市の外に出ているのではないかと疑う伊織だったが、日向はまだ搜索を諦めていないように見える。

「獅堂に聞いてみよう。アイツ沢山仲間いるし、ひよつとしたら誰か見かけたヤツがいるかもしれないエ」

◇◇◇

「およー? さぎりんじゃん。こんな夜に何してんの?」

「あつ……こんばんは、白幡先輩」

ゲームセンターから寮へと帰って来ていた千聖は、誰かを捜すように学園周辺を歩き回っていた沙霧の姿を見つけ声を掛ける。パーカーとイヤホンを身につけコンビニ袋を持ったラフな格好の千聖に対し、沙霧は不安げな表情で口を開いた。

「その……天音ちゃんと今日の夜、会う約束してたんですけど……連絡がつかなくて」

「天音つちが? なるほど……そりやちよつと心配だね。捜してんの?」

「その……そんなに大袈裟な事じゃないと思うし、余計なお世話かもしれないんですけど……ちよつとだけ、心配で……」

そう口にした沙霧の顔を、千聖は両手で挟みながら小さく笑った。

「あのね、さぎりん」

「ふあつ、ふあい……」

「友達思いな所は、さぎりんのとつてもいい所だよ。だから、そんな風にネガティブに考えちゃダメ」

頬を撫で回され唾然としている沙霧に、千聖は微笑んだまま言葉を続ける。

「それに、天音っちはさぎりんとの約束を理由もなく破るようなコじゃないでしょ？不安になるのも当然だよ」

「まあ私はよく約束忘れちゃって奏とか雪華にドヤされてるけどねー、と軽口を言いながら携帯端末を取り出す千聖。そして端末を操作し、ある人物へと連絡を取り始めた。「ちよつと待っててね、今から人探しめっちゃ得意なヤツ呼んであげるから。」

——あー、もしもし蒼？今アンタどうせヒマでしょ？」



—— オツラ死ねゴラア!! ——

—— 殺すぞダボがアツ!! ——

—— 御剣か。どうした? ——

「……どうも、諸星さん」

「アツシ君おつかれー。獅堂と司もその辺いんの? 喧嘩中?」

伊織の端末から諸星へと連絡すると、マイク越しに獅堂と司の荒々しい叫びが断片的に聞こえて来た。

『春川も居たのか。まア、そんな所だ。今「表」に出て来てたんだが、湾岸の近くでバカ共が絡んで来てな。久々に「遊んでる」』

どうやら大文字一派の面々は『表』の東京へ繰り出しているらしく、そこで荒事に身を投じているようだった。彼等に喧嘩を仕掛けてしまった一般人の不良達には、同情するしかない。

「表に出てるなら丁度いい。他の連中に、今日の夜藤堂を見たヤツが居ないか訊いてみてくれねエか?」

「あー、天音のコトな。アツシ君天音分かる？」

『一年の藤堂の事なら、知らない奴の方が少ないだろう。何だ、行方不明にでもなったのか』

伊織達からの問いで即座に状況を理解しながら、仲間達に確認を取る諸星。

『悪いが、こつちに見た人間は居ないらしい。そつち魔術都市に戻る前にこちらでも少し捜してみるが、あまり期待はするなよ』

「おつけ。助かるわ、ありがとな。それとアツシ君さ、——」

天音の目撃情報は無い事を聞いた日向は、諸星へともう一つ問い掛ける。

「——東帝の屋上で寝てるヤツのコト、知ってるか？」

「……………？」

『……………天堂に会ったのか。確かに、アイツの魔力知覚なら見つけられるかもしれないが……………』

日向は以前屋上で出会った、強大な魔力深知覚知を持つある少年について思い出していた。面識の無い伊織は話が掴めない様子だったが、諸星は恐らく三年生と思われるあの男について心当たりがあるらしい。

『簡単に力を借りられるとは思わない方がいいぞ。アイツは相当気紛れだからな』

そう言い残し諸星は、日向達との通話を切った。結局、天音に関する手掛かりは未だ

に見つかっていない。

「空条と合流して、情報を整理した方がいいかも……」

一度学園に戻るべきかと伊織が考えていた時、今度は日向の携帯端末から小さく受信音が響く。立体ディスプレイを投影すると、そこには差出人不明の一通のメールが届いていた。

メールを開封し、その内容を目にした日向は――



魔術都市のインフラを稼働させるエネルギー、その管理・制御を行なっている『工業地帯』。

無数の工場やプラントが立ち並ぶその場所の一角で、一人の少女が傷を負い倒れ伏していた。その少女――藤堂 天音の前には、炎の紋ファイヤーパターン様の仮面を着けた謎の人物が佇んでいる。

更にその人物の背後には、資材に腰掛けた一人の少年の姿があった。

「やはり藤堂家の『神童』と言えど、貴方の前では一介の術師に過ぎないようですね」

ボイスチェンジャー

変声機越しと思われる、仮面の人物の不気味な機械音声にも背後の少年は反応を見せない。暗闇に隠れその表情は見えなかったが、沈黙を守っていた少年は腰を上げると天音へと歩み寄り始めた。

そして、その手に握った一本の槍を天音へと向ける。収束していく魔力によって、形作られていく光の槍撃。

光属性魔力×形成術式

スラストホーン

『穿光角』

少年が撃ち放った魔力の刺突が、天音へと襲い掛かった。

「——ッ、……………」

天音は傷が深く身体を起こす事も儘ならず、無情な一撃が既に眼前まで迫っていた。しかし、直撃の寸前。

——上空から振り下ろされる、一閃。

割つて入るように飛び降りて来た少年が、一刀の下に光の槍を叩き斬っていた。

「つ……御剣……」

突如として現れ自身を守るように立ち塞がった、その少年の名を呼ぶ天音。対して伊織に魔術を両断された謎の槍使いは動揺を見せる事は無かったが、次の瞬間新たな乱入者によって殴り飛ばされていた。

咄嗟に防御しながらも吹き飛ばされる程の、爆炎の一撃。伊織と共に姿を現した春川日向は、その視線の先で体勢を立て直していた『槍使い』へと言葉を放った。

「何のつもりだ？……説明しろ。」

そして射し込む月光によって、影に隠されていたその人物の素顔が照らし出される。

「——鎧」

そこにあつたのは、彼等が知っている筈だった人物の姿。天音を殺害しようとしたその槍使いの正体は、天城 鎧だった。

「何故この場所に……!?!」

鎧の傍らで炎の仮面を纏った人物が疑問の声を上げるが、日向は携帯端末から一通のメールをホログラムで展開し提示する。

『【無題】

工業地帯 藤堂天音

——— S B ———

「……誰が送って来たのかは知らねエけどな」

「……成程。何者かに感知されていたようですね」

天音達の居場所を突き止めていたのは、日向の端末に送信された謎のメールだった。『S B』という差出人には一切心当たりが無かったが、唯一の手掛かりであるその情報を信じ日向達はこの場へ急ぎ現在に至る。

「天城……オマエ、何が目的だ……!?!」

天音を抱き起こしながらも、動揺を隠せない様子で問い掛ける伊織。

「君にも春川君にも伝えた通りさ。僕の目的は初めから一つ。魔術の公表だよ」

ここにきて初めて口を開いた鎧は、普段と変わらぬ穏やかな声音だった。しかしそこに含まれている感情は一切見通す事が出来ない。

「巫山戯んじゃねエ……それと藤堂に何の関係があるつて聞いてんだよ……!!」

「君に汲み取れない真意を、僕が明かす必要は無いだろう。……一つだけ教えるとするなら……」

怒りを押し殺すように辛うじて冷静さを保つ伊織へと、淡々と言葉を続ける鎧。

「僕の作る社会に、藤堂さんは不要だった。それだけだよ」

「デメエ……!!」

それと同時に鎧と仮面の人物の背後から、十数人の集団が姿を現す。皆一様に強い魔力を有しており、鎧の仲間の魔術師である事が見て取れた。

「目撃された以上、貴方達三人には消えて頂きます。……一つ伝えておきますが、この一帯からの魔力及び通信は遮断しています。脱出も救援も不可能ですので、悪しからず」

仮面の人物が空を示すと、既に工業地帯全域を覆うような巨大な結界が張られてい

る。端末は圏外になっており、外部への連絡は取れないようになっていた。

「……………伊織、天音担いで逃げろ」

「……………お前はどうぞすんだよ」

見る限り天音は相当な深傷を負っており、早急な治療を施さなければ命に関わる危険性もある。しかし伊織の剣で結界を斬り脱出出来れば、彼女が助かる可能性も確かに存在していた。問題は、結界の端まで辿り着けるかどうか。

「俺は残るよ。……………守りながら戦うなら、多分お前の方が得意だろ」

「……………分かった。俺が戻って来るまで持ち堪えろよ」

「おう。任せたぞ」

あらゆる追撃の魔術を斬って無効化出来る伊織が天音を守りながら脱出を試み、日向は敵を足止めし追走を阻む。日向をこの場に残していく事は苦渋の決断だったが、天音を救う為にはそれが最善の選択だと伊織は即座に理解していた。

天音を抱え上げ、駆け出す伊織。

「行かせると思えますか？」

仮面の人物の声と共に、周囲の魔術師達が二人を追うべく動き出そうとした。しかし

火属性攻撃術式

『戟衝破・捌連』

——閃く、烈火。

空を薙ぐような回し蹴りの動作から、八本のレーザーが撃ち出される。放たれた熱線が魔術師達を吹き飛ばし、建造物の外壁へと叩き付けた。

「行かせねエよ」

揺らめく火花を纏う日向は、その瞳に静かな激情を封じ込めながらそう告げる。

「……………流石だね、春川君。学園では力を隠していたのかい？」

「そりやお互い様だろ……………」

学生のレベルを凌駕する程の日向の戦闘能力に、微かに笑みを浮かべる鎧。

「彼は僕が抑えます。貴方は御剣君達を追って下さい」

「承知致しました」

仮面の人物は命を受け動き出し、それと同時に地を蹴った鎧が瞬く間に距離を詰め

た。『瞬間』^{ソニック}によって一気に肉薄した鎧の槍刃が、日向の頭上から打ち下ろされる。

炎を纏った両腕を交差させ防ぎ止めるが、凄まじい衝撃が日向へと襲い掛かった。

「……君はあまり、僕の事を信用してなかったみたいだね。この状況への適応が早すぎる」

「……初めて会った時から胡散臭エヤツだとは思ってたよ。お前の言葉はいつも本心じゃなかった。疑う理由には充分だろ」

光と炎の魔力が闘ぎ合う中で、言葉を交わす鎧と日向。

日向は伊織よりも明らかに、鎧の本性に対して動揺していなかった。その理由は単純。鎧の危険思想を直感的に感じ取っていたからこそ、日向は彼を警戒し続けていた。

「……認識を改めよう。君は僕が思っていた以上に、冷徹な人間だったみたいだ。あの明朗な性格は、本心じゃなかったのかい？」

「……今更お前が知る必要は無エよ」

愉快そうに——僅かな歪みを湛えた笑みを浮かべる鎧へと、日向は凍てつくような声音でそう応えた。



「……クソ……しつかりしろ、死ぬんじやねエぞ……!!」

次々と迫り来る襲撃者を斬り伏せながら、結界の出口を目指し疾駆する伊織。背負った天音へと懸命に声を掛け続けていたが、彼女の呼吸は浅くなっていくな一方である。

鎧の配下の人間達による追撃は激しさを増し続けており、未だ多くの魔術師がこの工業地帯に潜んでいる事が推測出来た。

「みつ……るぎ……」

「っ、気が付いたか……!!喋らなくていい、もう少し辛抱しろよ」

しかしその時、伊織の背中で天音が意識を取り戻す。息も絶え絶えになりながら、天音は訴えかけるように声を発した。

「お願い、春川の所に戻って……」

「分かっているよ……!けど今は、お前を安全な場所まで運ぶのが先だ」

それでも尚引き返そうとはしない伊織だったが、続けて天音が放った言葉に目を見開いた。

「殺されるの……春川だけじゃ、天城には勝てない……!!」

「ッ……!?!」



「疑問には思わなかったのかい？何故藤堂さんがあそこまで重傷を負って、完膚無きまでに敗北していたのか」

両手を広げ、一人悠然と語る鎧。その眼前には、全身を無数の穿孔に貫かれ膝を突く日向の姿があった。

「答えは一つ。君達と僕の間には、超えられない壁があるだけさ。絶対不可侵の、実力の差だよ」

日向の眼に宿る闘志は未だ消えてはいないが、流血は夥しく身体内部の魔力波長も不安定に揺らめいている。

「純粹な、格の違いを教えよう——」

鎧が掻き上げた黒い頭髮の右側が、魔力の影響を受け白色へと変化し始めていた。

「——」
『お前』じゃ、『俺』には勝てねエ」

立ち昇る魔力の色は『純白』と『漆黒』。光と闇、双つの力を纏った少年の、残忍な宣告が静かに響いた。

第14話『Dual Wizard — 双属性魔術師 —』

鎧が隠していた、二つ目の属性性質。

光属性と共に、闇属性の魔力を半身から放出しながら、鎧は膝を突いている日向へと開口する。

「藤堂天音の八属性魔術は確かに脅威だ。だが、明確な弱点も存在する……何か分かるか？」

その言葉と共に鎧の槍へ収束していく、光と闇の二属性。

「奴は複数の属性を、同時使用出来ない事だ。だが………俺は違う」

光＋闇属性攻撃術式

デュアルスラスト
『双魔一穿』

白と黒、相反する力を融合し纏った刺突が、日向へと叩き込まれる。咄嗟に飛び退き躲す日向だったが、鎧の槍はその背後の壁を貫き打ち砕いた。

——二つ以上の属性性質を有している人間は、世界に一定数存在している。しか

し一つの術式に複数の魔力属性を付加する事は極めて難度が高く、扱える魔術師は多くない。

「闇が色濃い程光は輝き、光が眩い程闇は深まる……互いを喰らい合う相乗効果^{シナジー}が、力を際限無く高めて行く。これが、双属性魔術師^{デュアルウィザード}の真髄だ」

天音は八属性全ての魔力を有しているが、彼女が一度の術式で使える属性性質は一つだけ。天音を倒した鎧の力の正体は、二重属性を同時付加する事で飛躍的に威力を高める『双属性術式^{デュアルフォーミュラ}』だった。

「もう解つただろ。単一属性の術式じゃ、俺に傷一つ付ける事すら叶わねえんだよ」

「……………」

闇属性の魔力が影響を及ぼしているかのように口調が変化しつつある鎧だったが、日向は強く地を蹴り高速移動を発動させる。

(まだあの速度で動けるのか……)

相当な深傷は負わせた筈だが、未だに日向の敏捷性は落ちていない。そのタフネスに内心で興味を示す鎧だったが、依然として自身の優位に変わりはないと余裕を見せる。

「……………どんな理想を掲げよオが、テメエの勝手だ。好きにしるよ……けどな」

鎧の背後を取った日向が、左右の拳を交差させるように振り抜く。

「その下らねエ目的の為に、俺の仲間に手エ出すんじゃねエよ!!」

火属性攻撃術式

『戟衝破・双連』

怒りの尻に撃ち放たれる爆速の熱線。二発同時に射出された日向の炎のレーザーを、鎧は防御能力に長けた光の魔力で迎え撃つ。

「オイオイ、関係無エとでも思ってたのか。無知つてのは熟罪つくづくだなア……魔術は、選ばれた者だけに与えられる権能でなくちやならねエ」

光属性を纏った槍を戟衝破へと叩き付け、強引にその軌道を変化させる。

「だが、最強なんぞと宣いやがったあの女は、あるオコトか魔力すら持たねエ”劣等種”に勝利出来なかつた……そんな弱者にこの力は”相応しくねエ”んだよ」

「ツ……!!」

誰を侮蔑しているのかなど、日向には容易に想像がなかった。しかしレーザーを弾き斬り裂いた槍刃を返した鎧は、日向に開口させる間もなく反撃の魔術を炸裂させる。

光属性魔力×形成術式

グロリアス・ホーン

『聖獣衝角』

撃ち込まれた閃光の槍は、防御を物ともせず日向を豪快に吹き飛ばした。

『魔術師』は!!力を持たねエ弱者を須く支配する存在だ!!魔術こそが、この世界の新たな秩序足り得るモノなんだよオ!!春川日向ア!!」

夜天を仰ぎ、鷹揚に大義を騙る。

「だからこそ……力の足りねエ術師は淘汰する。魔術を振るうに値するのは、畏怖される程の力を持った強者だけだ」

邪悪な闇をその瞳に宿し、日向へと槍を向ける鎧。しかし体勢を立て直した日向は、全身から爆炎を噴出させながら突進した。対して鎧は繰り出される拳と蹴りの連撃を難無く受け流し、日向の腹部へと容赦無く槍を突き立てる。

その刃に刺し貫かれて尚、日向の拳は止まらない。

「ッ……………」

鎧は僅かに瞠目しながらも、迎撃すべく左拳へ魔力を集中させる。

火属性魔力×強化術式

『炎撃』

闇属性魔力×強化術式

『テッドストライク』

交錯する二つの拳が互いへと叩き込まれ、両者を大きく後退させた。

(冗談かと思っていたが……あの話、強ち嘘というワケでもなかったらしいな……!!)

最早痛覚を疑うレベルの日向の耐久性^{タフネス}を目の当たりにしながら、鎧はかつて交わした会話を思い起こす。

『忍者』——尋常ならざる鍛錬の果てに、人を超えた力をその身に宿した異能者。日向へ修行を施した彼の祖父は、その末裔だと口にしていた。

「だったらよオ……俺が勝てばテメエは弱者だ。そのクソみてエな理論は破綻すんだろ？………テメエの全てを否定して、ブツ壊してやるよ」

「面白エ……お前の屍を礎に、盤石の世界を築き上げるとしよオか」

燃え盛る憤怒を宿した炎、底知れぬ悪意を内包した光と闇。

決して相容れぬ意思の下に、二人の魔術師は衝突した。



「……例えそうだとしても、今引き返す訳にはいかねエ」

日向の元へ加勢に戻ってほしいという天音の望みに、伊織は冷静にそう返答する。

「アイツのしぶときはお前も知ってんだろ。……そう簡単にくたばるかよ」

今は、日向を信じるしかない。彼女を安心させるようにそう口にする伊織だったが、その表情には僅かではあるが焦燥と苛立ちが浮かんでいた。一刻も早く結界を抜けなければ、天音と日向の両方の命に危険が及ぶ。着実にタイムリミットが迫りつつあった、その時。

伊織の眼前の道へと、一枚のランプが突き刺さった。

「ッ!？」

行手を阻むかのように何処からか飛来して来たカードに、咄嗟に足を止め周囲を警戒する伊織。その場に音も無く降り立ち姿を現したのは、謎の二人組だった。

一人は道化師ピエロのような仮面と服装を纏った人物、そしてもう一人は白のローブを身に付けフードを目深に被った人物。どちらも素顔は隠されており、その表情を窺う事は出来ない。

「やアやア御機嫌よう、御剣伊織くん。何やら急いでるみたいだねエ」

「!!……………お前、誰だ……………」

二人の内道化のような風貌の人物が、至つて陽気な声色で語り掛けてきた。自身の名前が知られていた事に警戒を露わにしながらも、伊織は慎重に言葉を返す。

「あー、そうか……………名前ね。僕はJOKER。『切り札』の意のジョーカーだよ。そしてこちらの無口な彼がゼロ。以後、お見知り置きを」

「……………」

『JOKER』と名乗つたその人物は、指先で弄んでいたトランプのジョーカーを伊織へ見せながらそう告げた。その隣の『ゼロ』と呼ばれたローブの男は、依然として一言も発する事なく沈黙を貫いている。

「デメエら……………天城の仲間か」

「そう訊かれると、答えはNOかな。彼の思想には理解こそすれど、同調はしない」

伊織の問いに対しJOKERが答えとして示したのは、血に染まつた一つの仮面だった。JOKERが手に持っていたそれには、先程まで鎧の傍らに控えていた人物の物と同じ、炎の紋様が刻まれている。

「キミを追ってた連中はほぼ全員始末したよ。その見返りと言っちゃ何だが……少しばかり、僕等に時間をくれないかい？」

「……………何が目的だ」

彼等の一挙手一投足から、相当な実力を有している事は見て取れた。敵が味方は不明だが、ここで戦闘に発展した場合に天音を巻き込みスクリューを考えた伊織は静かに続きを促す。

「僕等ね、刻印結社ってトコの幹部やってんだけどさ、」

「……………!!」

『刻印結社』。

それは、幾人もの凶悪なテロリストが属しているとされる、国際犯罪組織の通称だった。魔術界に多少なりとも関わりを持つならば知らない者はおらず、世界各国から脅威と認識されている危険な魔術結社である。

動揺を見せる伊織へと、事も無さげに続けるJOKER。

「御剣君、キミさア……………ウチ^{結社}に入る気はないかい？平たく言えば、スカウトってヤツだよ」

「何だと…………？」

「君の素性については、大方調べはついてる。『そちら側』にいるべき人間じゃないってコトもね」

提案と共に明かされていくのは、記憶の奥底に閉じ込めていた忌むべき過去。

「彼の魔術旧家に生を受けながら、その魔力を持たない体質によって迫害され、勘当された。桐谷恭夜に助けられなければ、野垂れ死んでいた未来すらあり得たワケだ。だが、それでも君をこの魔術の世界に留めていたのは……自分を虐げて来た支配体制への『復讐心』だ」

人の心に潜む闇を引き摺り出すような囁きが、伊織の深層へ沈み込んでいく。

「……その憎悪は、解放されるべき正当な意思だ。そしてキミの剣チカラなら、あらゆる術師を打ち倒し、この歪み切った魔術社会をも破壊出来るだろう。

——君は、如何したい？」

委ねられた選択は、自身が歩む未来への問い。背負った天音へと一瞬だけ目を向けながら、伊織はその答えを口にした。

「……………一つ、条件がある」

「何だい？そこにいる彼女を助けたい……………ってトコかな？」

「いや、違う」

JOKERの予想を、即座に否定する伊織。

「俺を引き入れる事以外の、本当の目的を今ここで明かせ。全てだ」

「……………やっぱり鋭いねエ。流星はあの桐谷恭夜の私兵と言った所か」

伊織の言葉にJOKERは、別空間から転送魔術によって召喚した大鎌を手に取りつつ応える。

「ただ、キミの勧誘に関しても嘘じゃアない。本命のミツシオンを複数並行させてただけさ。『藤堂^{八属性魔術師}天音の確保』と、『春川日向に対するデータ収集』、のね」

「日向の……………？」

JOKER達の狙いは自分だけではないという、伊織の予測は的中していた。相手に天音を無事に帰すが無いと判った今、交渉の決裂は免れない。

「天城鎧の介入は想定外だったけど、彼程度なら障害にはなり得ないだろうからね。今

は放置。脅威度なら、キミの『退魔ノ剣』が一番危ない」

魔力を纏わせた無数のトランプカードを空中へ展開しながら、JOKERは伊織の刀へと指を指す。背後の壁際に天音を座らせた伊織は、振り返りながら一刀の柄へと手を掛けていた。

「こっちは急いでるんでな。押し通らせてもらおう」

「二つ言っておこうか。……キミが選ぶコトが出来る？ 択は同行の可否じゃない。大人しくついて来るか、力尽くで連れて行かれるか、だ」

肩に担いでいた大鎌を伊織へ向けながら、JOKERは一縷の望みをも断つようになう告げる。

しかしその肩口から、突如として鮮血が噴き出していた。

「——ッ!？」

瞬き一つの間の、剣閃。

「言っただろ。時間が無エんだ」

退魔一刀流・『鳴神』ナルカミ。

抜刀すら悟らせぬ居合の刃が、目にも留まらぬ超剣速でJOKERを斬り裂いていた。雷の如き神速の剣技によって、伊織への警戒度は更に跳ね上げられる。

「コレは……悠長にはしてられないね。今すぐにも、キミを捕らえる必要性が出て来た」

JOKERは周囲に浮遊させていたトランプを、魔術によって操作する。

無属性魔力×強化術式

『4カード・Qs』クイーンズ

魔力を纏い撃ち放たれた4枚のカードを、伊織は大上段から振り下ろした刃で迎え撃った。



魔力によって強化された、超脚力による跳躍。

上空から突き下ろされた鎧の槍は、地を穿つ勢いで日向へと叩き込まれた。半歩引いて辛うじてその一撃を躲すが、眼前の地面に突き刺さった槍からは猛烈な衝撃と風圧、そして魔力が噴出している。

八大属性の中でも、融合する事で爆発的なエネルギーを生み出す光と闇の二重属性は、ただの一発の術式にすら必殺級の威力が秘められていた。更にその双属性の真価は、攻撃能力のみに留まらない。

繰り出された前蹴りを槍刃の腹で打ち返す鎧だったが、その胴元へと突き込まれる日向の拳。そこから放たれたのは、零距离で発動された戟衝破だった。

しかしその猛炎をも、鎧の双つの力は抑え込む。

あらゆる威力を呑み込み吸収する闇の性質と、自在に形状を変化させ力を塗り替える光の性質。重ねて施された二属性の盾は、鎧を大きく後退させながらも日向の炎を完全に遮断する。

「この場所は……お前が到達し得ない高みだ。^{領域}支配者たる魔術師としては、お前じゃア力不足だよ」

間隙無く繰り出される魔槍の連突を、体術によって紙一重で弾き続ける日向。しかし全身に負った傷によって、集中力と防御能力は確実に低下している。

それでも尚、その瞳に宿る意思に変化は見えない。

(目障りだ……………)

度重なる流血は、着実に日向の肉体を消耗させている。後は、その精神を完全に押し折るのみ。

闇属性攻撃術式

『アッドドリーランス』

貫通能力を強化された、一点突破の闇の槍が撃ち込まれる。そして日向は——防
御ではなく、更に一步鎧へと踏み込んだ。

「ッ!!」

身体のを僅かに傾け、頬を斬り裂かれながらも槍刃を受け流す。そして瞠目する鎧の
の手首を掴み取った日向は、右手へと紅い魔力を収束させていた。

「一々ウザってエんだよ……………お前の、理屈は——!!」

振り抜かれるのは、火炎を纏った手刀。

火属性魔力×強化術式

『炎刀』エントウ

渾身の一閃は、鎧の胸元を深々と斬り裂いていた。

「何……!?!」

鎧の視覚と魔力知覚が捉えた、理解を超えた光景。既に限界へ近付いている筈にも関わらず、日向の体内に宿る魔力は一際激しく燃え盛っていた。

——暴れ回るように、脈動する炎。日向を追い詰めていたこの窮地が、彼に新たな進化を齎そうとしていた。

第15話『Reason Living 一生きていく理由一』

天城 鎧は、神宮寺家傘下の魔術旧家『天城家』に生を受けた。望めば全てが与えられる、魔術界の中でも最上位に近い特権階級。しかしその環境は、彼を歪んだ価値観の形成へと導いていった。

日常的な弱者への蹂躪。絶対的な力こそが彼等を強者たらしめる唯一の正義であり、鎧が見る世界の尺度となりつつあった。そして傲岸な支配思想を謳う、一人の人物との出会い。

その邂逅は鎧を、魔術に拠る更なる権威主義へと傾倒させていく事となる。



突如として、急激に威力を跳ね上げた日向の一撃。

炎を纏った手刀に斬り裂かれた鎧は、胸の傷口から溢れ出す血を拭い取っていた。その表情には驚きこそ見えれども、動じた様子は一切無い。

「中々……良い、攻撃だ。お前の場合は、復讐者の執念とでも言うべきか……ドス黒い根幹は、ヒトの力の源泉足り得るとは思わねエか？」

「悪人の自覚があるッてんならそりゃ結構だが……テメエみてエなクズと俺を一緒にされるのは心外だ」

笑いながら血を払う鎧は、変わらぬ戦意でこちらを睨む日向へと目を向ける。

日向の体表から、更に揺らめき立ち昇っている火炎。その魔力は覚醒の兆しと共に、変質を始めているように見えた。言うなれば、魔力の『段階的進化』といった所か。

「憎悪、怨念、殺意。遍く負の感情こそが、更なる力を呼び起こす。奥底に刻まれた闘争本能こそが人間の本質なんだよ」

「性悪説か。興味無エよバカが」

戦いの中で増幅し続ける日向の魔力を押し返すべく、鎧もまた全身から魔力を放出する。噴き上がり、鬨ぎ合う火と光と闇。三属性の魔力が展開された空間で、日向と鎧は同時に駆け出した。

鎧の魔力で形成された、無数の光の槍。日向はそれを熱線で迎え撃ち、乱れ飛び交う火と光の中で両者は激突する。繰り広げられる、拳と槍刃の応酬。

この戦いで日向が鎧を止められなければ、彼の思想は更なる暴走の一途を辿るだろう。伊織や天音を、仲間達の未来をこの殺人者の手から守るには、自分が勝つ以外に道

は無い。

そして同時に鎧もまた、ここで日向を逃せば間違い無く、自身の理想を阻む障壁と成り得る事を確信していた。

(コイツは絶対に――)

(コイツは確実に――)

――ここで、殺す。



緊迫によって支配された、静寂。

極限まで高められた集中は、驚異的な加速を生み出す。

「退魔一刀流――」・『羅針』^{ラシン}

引き絞られた弓の如く、構えられた刃は唸りを上げて撃ち込まれた。全身のバネを集約し放たれた剛速の刺突を、JOKERは流体的な重心移動で舞うように躲す。そして刀を突き込んだ伊織の右腕を叩き斬るべく、大鎌を振り下ろした。

その鎌刃の側面を初撃の蹴りで弾いた伊織は、続けて二発目のソバットをJOKERの胴へと叩き込む。

剣術と体術の『連動』。伊織の卓越した戦闘技術は、隙を生じぬ圧倒的な『攻防一体』を実現していた。

一方で伊織の二段蹴りをまともに喰らい吹き飛ばされつつも、空中で反撃の術式を構築するJOKER。バラ撒いた七枚のカードの内二枚を障壁へと変化させ、蹴り飛ばされていた自身を受け止めさせる。そして残りの五枚に、魔力を纏わせ撃ち放った。

無属性防御・攻撃術式

『7スタッド・オープンズDデیفエンドf & クローズドSシヨットt』

鋭い斬撃性質の魔力を付加されたカードは、渦巻くような軌道を描きながら伊織を包囲し襲い掛かる。その全てを一刀の下に斬り捨てるが、『瞬ソニック』による高速移動で距離を詰めていたJOKERの蹴りが脳天に迫っていた。

蹴り下ろされた左脚を刀身で防ぎ止める伊織だったが、こちらへ向けられたJOKERの右腕にはカードと共に魔力が収束している。

「大技は無いと思ってたかい？」

「ッ……………!!」

無属性攻撃術式

ブラックジャック
『2 1 バースト』

嘲笑うような声と同時にJOKERが放ったのは、超至近距離からの魔力砲撃。咄嗟に後方へ飛び退るが、それでも威力は殺し切れず壁まで叩き付けられる伊織。

「君の実力は相当だ。学生どころか、純粋な戦闘能力ならプロすら上回るだろう。ただ……今回ばかりは相手が悪かったね」

JOKERは軽く手を叩きながら、血を吐き出す伊織へと語り掛ける。

「僕等は『番号刻印』^{ナンバース}の名を与えられている。俗に言う、最高幹部つてヤツの肩書きさ。マトモに戦り合う気なら、S級魔術師^{ランカーウイザード}でも連れて来た方がいい」

技術では埋める事が出来ない、絶対的な実力の差。全世界の魔術師を相手取るテロ組織の戦力は、伊織の剣術をも凌駕していた。

「まあ、キミは何も恥じるコトは無いよ。よくここまで戦った」

称賛の言葉を掛けながらJOKERは、伊織達を仕留めるべく周囲へトランプによる陣形を空中展開する。浮遊するカードに囲まれながらも、刀を地に突き立て立ち上がるうとする伊織。

その時、彼に守られていた天音もまた動こうとしていた。

「御剣……お願い……」

「藤堂か……もう少し、待ってろ……」

「私を……置いて行つて。アンタ一人なら、逃げられるでしょ……」

自分を見捨ててほしいという、天音の懇願。

「ッ……お前、何言つて……」

その言葉を一蹴しようとした伊織だったが、振り返り彼女と向き合つて口を噤んだ。

頬を伝っていた、失意の涙。

「私のせいで……アンタを、死なせたたくない……」

その目は、かつての伊織自身と同じだった。

自身の弱さへの、失望と絶望。何者にもなれず、惨めに生き続けたくない。助けられる事よりも、ここで死ぬ事を天音は望んでいる。

鎧による完膚無きまでの敗北は天音の心を完全に折り、生きる意志と存在意義を失わ

せていた。

「……………お前が死にたいと思うなら、好きにしろよ」

全てを否定され、魔術師としての矜持を失った天音へと伊織は静かに語り掛ける。

「けどな……………」死んで逃げる”事は、この世で一番無様な敗け方だろ”

だが、伊織が否定したのは天音の最後の選択だった。

「俺は……………見下して来た奴等をブツ倒すまでは、絶対死なねエ」

例え、剣才を持ち得なかったとしても。そして、魔力が無かったとしても。

——生きて戦い続ける限り、真に敗北する事は無いと信じていた。

「そうは言ってもキミ……………このままじゃ彼女と心中だよ？本懐を遂げたいなら、僕等と来るべきだと思うけどなア」

傷が深い天音を一瞥しながら、JOKERは再度伊織の意思を問う。

「バカかテメエ。俺が生きてる限り、コイツもここでは死なせねエっつーコトを言った

んだよ」

対して伊織は不敵な笑みと共に、刀を手にして立ち上がった。その眼に宿る闘志は、僅かたりとも消えてはいない。

天音の命も、自身の勝利も、諦めるつもりは無かった。

「それとな。俺が上の連中と戦うのは……」

そして伊織が手を掛けるのは、二本目の刀。

恭夜から教わったこの剣は、己の為ではなく、誰かを救う為に振るうと誓った。

「あの人への義理を返した、その後だ……!!」

誇りと共に在るための生き方戦い方を自分に授けた、師への恩義に報いる時まで。

——『退魔二刀流』

抜き放たれた双刃が、月下で鋭く輝き揺らめく。

「抜く気は無いのかと思っていただけ……やはり二刀使いなんだね。本来の力を出し惜

しんでいたのか、それとも窮余の一策か……」

伊織の新たな戦型に僅かに警戒を示しながらも、JOKERはトランプへと魔力を収束させていた。

無属性攻撃術式

『シユート・ザ・ムーン』

繰り出される狙撃魔術。月をも穿つ超速の弾丸と化したカードが、空を裂くように伊織へと襲い掛かる。

「――」
『瀑布』
バクフ

その一撃を迎え撃ったのは、渾身の力で振り下ろされた二刀だった。

炸裂する、衝撃。

剛力を以て叩き付けられた急流の如き双剣撃は、轟音と共にJOKERの魔術を両断していた。

斬り裂かれ魔力となつて爆散したカードを傍目に、JOKERは大鎌を担ぎ上げながら伊織へと声を掛ける。

「成程……付け焼き刃じゃア、ないみたいだ」

「当たり前だ。一気にケリ付けてやるよ」



戦闘に於いて、”必ず勝てる”方法は存在しない。だが、”勝てる確率を引き上げる”方法は存在する。

自身に優位なフィールドへと、相手を引き摺り込む事。

まだ彼の生徒となつて日は浅いが、恭夜から教わつた魔術戦闘に於ける戦術思考の基礎。

(もう魔力もほとんど残つてねエ……決めるなら、一発でだ……!!)

日向の狙う状況フィールドは、徒手格闘のみによる超近接戦だった。

——— 鎧は二重属性を同時付加した術式を用いる際、必ず槍を経由させている。つまり光と闇の双属性術式は、武器を介さなければ使えないと日向は予測していた。

槍を掻い潜り間合いの内側へと入り込めば、その攻撃は届かない。そこで残存魔力全てを込めた一撃によって、決着を付けようとしている日向。

そしてその目論みを、鎧は完全に看破していた。

日向は恐らく、武器に纏わせなければ双属性魔力は制御出来ないと思いつ込んでいた。だからこそ、懐深くへ最後の―一撃を叩き込もうと特攻を仕掛けて来るだろう。

鎧の誘導通りに。

そう動かすべく敢えて体術という手札カードを伏せ、槍の使用時にだけ双属性術式を発動させていた。深く踏み込んで来た日向を、隠していた技で仕留める為に。

「そろそろ白黒つけよオじゃねエの……!!」

「そうだな……いい加減、くたばれ……!!」

放出され空間の支配権を奪い合っていた鎧と日向の魔力が、二人の身体へと結集し収束されていく。

暴れる猛炎、弾ける閃光、渦巻く暗闇。

たった一人の勝者を決するべく、互いの最後の力が激突した。



「中々………面白くなって来てんじやねエか」

眼下の光景を見下ろす、一人の青年。

その身体から立ち昇るオーラは、全てを灼き尽くす業火の如く。

「愉ませてくれるんだろオナ……？」

歪んだ笑みと共に、青年は空へと身を投じた。

真つ逆様に、墮ちていく。

——
『火竜』は、
戦場へと降り立とうとしていた。

第16話『King of Blaze —爆炎の王—』

光十闇属性攻撃術式

『オルタナティブ・ペネトレイター』

純白と漆黒の螺旋を纏った、魔槍の一撃が放たれた。唸りを上げ迫り来る槍撃を前にしても、日向は立ち止まる事無く最高速度で疾走する。

そして真正面から突き進み、接触の寸前。

その脚で蹴り下ろすようにして、槍の穂先^{先端}へと踏み込んだ。

術式によつて実体を得た、魔力の槍。収束していたそのエネルギーの真上を足場に、一気に距離を詰めるべく駆け抜ける。

既に鎧の眼前まで肉薄していた日向の右腕には、膨大な火炎の魔力が集められていた。しかし、その全てが計画の既定路線。

「ッ!?!」

「ハハッ、一手遅かったなア!!」

瞠目する日向の視線の先では既に、鎧は槍を手放している。そしてその両腕には、光と闇の魔力がそれぞれ纏われていた。

双属性魔力に槍は必要無かったと気付くが、最早回避は間に合わない。僅かではあるが、鎧の攻撃が届くタイミングの方が確実に速い。

光＋闇属性攻撃術式

『ツインズ・セイバー』

チエックメイト

「詰みだ」

光と闇の魔力を帯びた、左右の手刀が突き込まれる。双属性で形成された諸手の刃は、日向の胸を――貫いていた。

「お前がな」

筈だった。

真横に視線を向けるまでもなく、日向の渾身の一撃が迫っている事を察知していた。彼の手刀が突き刺さっていたのは、日向が一瞬にして脱ぎ捨てていたパーカーだった。

忍法『空蟬』。

最後まで切り札を隠し持っていたのは、日向もまた同様だった。

火属性魔力×強化術式

『爆皇破』
バクオウハ

イメージするのは、獅堂との決闘で繰り出したあの一撃。膨大な魔力を一点に集中させ、拳の内側へと封じ込めていく。限界を超えた窮地の中で、日向の魔力はあの爆炎を鮮明に再現していた。

爆発的な火力を纏い、叩き込まれる炎の拳。

横腹をノーガードで捉えたその一撃は、炎撃を遥かに凌駕する威力で鎧を吹き飛ばした。

猛烈な速度で鎧の身体は、建造物の外壁へと叩き付けられる。響き渡る轟音と共に壁はヒビ割れ砕ける中で、鎧は膝から崩れ落ち倒れ伏した。

目の上から滴る血を拭い、ふらつく足で何とか踏み留まる。

「俺の……………勝ち、だ……………」

血を吐く鎧を見下ろしながら、日向は静かにそう口にした。

「巫山戯るな……………僕はまだ、敗けていない……………死んで、ないんだ……………!!」
鎧は憎悪に満ちた目で日向を睨み上げながら、起き上がろうと腕いている。

「俺は……………お前とは、違う。命は奪わない。……………生きて罪を償い続ける。死ぬまでな」

冷淡な声で言い放たれた日向の宣告に、鎧は最早執念じみた意志で言葉を続ける。

「何故理解出来ない……………魔術師^{魔術師}は自身の在り方を、再定義しなければならぬんだと……………!!人類は何度でも失敗する、愚かな本質を抱えているからだ!!だからこそ奴等を支配し、統制する為の存在が必要なんだ!!そしてそれは、僕等が為さなければならぬ責

務だろうッ!!」

「勝手に言ってる……お前はその愚者以下の、敗者でしかねエんだからな」

どこまでも不遜な大義を騙る、鎧の理想を唾棄する日向。

「まだ……止まれないんだ……紫苑さんが、目指した世界を……あの人の、意思を……!!」

それでも尚、足掻き続けていた鎧だったが――

「下らねエなア……自分自身が、悪意に塗れた負の側面そのものだって気付いてねエのか」

――次の瞬間、一人の人物の手によって刺し貫かれていた。

「な……なに……?」

「ッ!!」

余りに唐突な出来事に思考が追い付かず、鎧は半ば呆然とした様子で声を上げる。突如としてこの場に姿を現した謎の男は、愕然としている日向の前で鎧の背中から右腕を引き抜いた。

その手の中に掴み取られていたのは、溢れ出す鮮血に塗れた心の臓。

「度し難いクズだが……同時に、どうしよオもなく『人間』だったよ。お前は」
そう言つて抉り取った心臓を放り捨てると、鎧へと差し出すように手を向ける。

そこから放たれたのは、紅く燃え上がる灼熱の炎。
叫びすら上げず、鎧の全身は瞬間に焼き尽くされ消滅していった。

理想の世界を追い求めた少年の、無惨な最期。その様を嘲笑うように眺めていた青年だったが、ふと日向の視線に気付きそちらへ目を向ける。黒のジャケットに深紅色の髪と瞳、そして全身から立ち昇る魔力。

瞬時に警戒を引き上げる日向だったが、既に遅い。

「オマエが……春川日向か？」

(速——)

一瞬の内に眼前に現れた青年は、そう問い掛け日向の肩に手を乗せていた。

桁違いの速度を認識した、その瞬間。日向の身体は、為す術も無く吹き飛ばされていた。



伊織が戦いで二刀流を多用しなかった理由は、至って単純だった。

二本の刀を同時に操るこの高難度な戦闘技術は、極めて高い集中力を要する。師である恭夜は二本の刀を自在に操っていたが、伊織には一刀流の方が適性があった。

しかし不得手という訳ではなく、二刀流の方が隙は増えるが攻撃能力は確実に高くなる。リスクを負う事で自らを強化するこの剣術を、伊織は短期決戦用の戦術切り札として扱っていた。

無属性攻撃術式

『スピッド・イン・ジ・オーシャン』

JOKERが放った無数のカードが、殴り付ける雨の如く伊織へと殺到する。その全弾に向かつて、一切の回避行動を取る事無く歩を進める伊織。

退魔二刀流・『波浪』ハロウ

持ち上げられた刀の鋒が、飛来するカードへと僅かに触れる。その一瞬の干渉によって、変化した軌道は伊織の背後へと通り抜けて行った。

次々と襲い来る魔術の尽くを、刃へと滑らせ受け流す。水波の如く、全ての力を流動させる『柔』の剣、その極意。

文字通り無傷で”斬り抜けた”伊織は、カードの雨を突破すると同時に地を蹴った。一気に接近戦へと持ち込まれたJOKERは、大鎌を振り下ろし迎え撃つ。

横殴りに振り抜かれる、伊織の刀刃。その剛力を以てしても、JOKERの鎌刃は止まらない。

しかし、間髪入れずそこへ繰り出される二の太刀。正確無比な精度で初太刀と全く同じ箇所へと叩き付けられた剣撃は、JOKERの大鎌の刃を斬り砕いていた。

「ッ、やるね……!!」

JOKERの武器を破壊し、更に追撃の蹴りを叩き込む伊織。

二刀流ならば、カードによる遠距離攻撃術式には全て対応出来る。それを見越してJOKERは、魔力によって強化した体術で仕掛けて来るだろう。

その接近の瞬間を、カウンターで殺^とる。

恐らくこの戦いの中で、残りのチャンスは一度しか無い。極限の緊張の中で、全ての意識を剣へと集中させていく。

「これで……………終わりだ」

「フフ……………それはどうかな？」

二刀を構える伊織と相対し、JOKERは右腕へとトランプと魔力を結集させてい

た。

無属性魔力×強化術式

『エルダーハンス』

先に動き出したのは、JOKER。鉤爪のような五指が、刀ごと伊織を引き裂くべく迫り来る。

「退魔二刀流——」

対して伊織は一切動きを見せず、刀を手にしたまま静止していた。力を強く押さえ付け、封じ込めるかのように。

そして、JOKERが間合いへと踏み込むと同時に、

「——『虚空』」

その全てを、解放した。

伊織の膂力によって振り抜かれる、超高速の連続剣撃。繰り出された無数の刃を一点収束させる事で、瞬間的に空間をも削り取る密集斬撃と化す。

JOKERの命を喰い千切る、伊織の最強の剣技。

敵を斬り潰さんとする、刃の連撃は——突如、止まった。

「なっ……………!?!」

目を見開く伊織の前に立っていたのは、戦闘を静観していた筈のもう一人の敵。伊織の剣は、割って入ったゼロによって受け止められていた。

掴まれた刃は、伊織の力でも全く動かせない。その動揺も意に介さず、ゼロの手によって伊織の刀は握り潰され、粉碎された。

あらゆる魔術を打ち破って来た伊織の剣術を完封する、規格外の実力差。JOKERをも遙かに凌駕する、圧倒的な強者だと本能が告げていた。

気力が尽きたかのように、折れた刀を手放した伊織が地に膝を突く。

「漸く……………万策尽きたと言った所かな?」

遂に敗北を悟ったように見える伊織へと、JOKERが術式を解きながら言葉を掛けた。

しかし。

不敵な笑みを浮かべた口元が見えた。伊織の目から、戦意は消えていない。

「……………残念だったな。テメエらの敗けだ」

その言葉の真意を読み取れず、JOKERは警戒と共に訊き返す。

「それは……………どういう意味かな？」

「万策尽きたのは、テメエの方だって言ってるんだよ。時間切れだバーカ」

その瞬間、空間全てを呑み込むかのような、巨大な魔力の出現を感知する。

「……………よく凌いだじゃねエか、伊織」

JOKER達の『時間切れ』タイムアップを告げる、飄々とした声が響く。聞こえて来たその声に

伊織は、息を吐き出しながら小さく笑った。

伊織の『勝利条件』は、この結界から脱出する事では無かった。”この男”がここに辿り着くまで、生存してさえいれば良かったのだと気付く。

「褒めてやるよ」

魔術によってこの空間へと姿を現したのは、サングラスを掛けた黒髪の青年。”最強”の魔術師、桐谷 恭夜の登場だった。

「キミが出て来る前に勝負をつけたかったが……ここまで速いとはね。少し想定外だ」
「フッフッフ、出し抜けるとでも思ってたか？俺の生徒は連れて行かせねエよ」

最も介入させてはならなかった男が結界を突破して来た事に、JOKERは僅かな焦りと共に言及する。恭夜の眼と情報網は、伊織達の危機を正確に察知していた。

「……もう少し早く来れなかつたんスか」
「悪かったよ。別件が色々立て込んでた」

伊織の緊張感の無い問い掛けに、恭夜が笑い混じりに応える。それと同時に伊織と天音の身体が、瞬く間に恭夜の背後へと転移していた。

圧倒的な魔術の発動速度にJOKERは言葉を失うが、次の瞬間その空間に異変が生じる。

押し潰されるかのような、全身への圧力。それが恭夜から放出される、濃密過ぎる魔力波動による物だと気付くまで時間は掛からなかった。

「どうした？ 苦しそうだな」

その中で恭夜は、人を食ったような笑みで悠然と語り掛ける。

半端な力では、この男の前で動く事すら儘ならない。伊織の勝利への確信は、恭夜の實力への絶対的な信頼故だった。

結社の最高幹部『番号刻印』ナンバース。その称号は、S級魔術師ランカウイザードにも匹敵する力の証左。しかし自分達をも超越する魔術師の存在を今、JOKERは目の当たりにしている。

眼前で嗤うこの男こそが、次元を異にする真の『怪物』だと理解した。

恭夜の手の内へ収束していくのは、黒く蠢く異質な魔力。その力は、光をも断つ暗色の刃を備えた一本の刀を型作る。

影属性魔力×形成術式

『アッシュ暗刃』

そしてその刀身へと、更なる魔力を纏わせていく恭夜。

「まあ、俺の教え子に手エ出したんだ。何はともあれ……まずは一回、死んで来い」
笑みを崩す事無く、そう言い放った恭夜の刀は振り抜かれる。

影属性攻撃術式

『ザンエイリユウトウ斬影龍刀』

影によって創り出された、龍の如き巨大斬撃。

放たれたその一撃は、一瞬にしてJOKER達を喰らい尽くした。

第17話『Invading Salamander
—火竜襲来—』

恭夜の刀から撃ち放たれた、”第九属性”の魔力による巨大斬撃。

その一撃は付近一帯ごとJOKER達を吹き飛ばしたが、彼等の僅かな魔力痕跡はまだ残っている。深傷は負わせたが、恐らく辛うじて撤退したのだと恭夜は判断した。

「大丈夫なんスか？野放しにしておいて……強引にでも、捕らえておいた方が良かったんじゃない……」

「問題無エよ。また襲って来やがったら、そんな時ブチのめせば良いだけだ」
(んなコト出来るのはアンタだけだろ……)

誰よりも恭夜の実力を知っているからこそ、心中でそう呟く伊織。しかしJOKER達を追うよりも、天音を救出する事の方が最優先だという事もまた、言われるまでも無く理解していた。

「ツ、そうだ……!!桐谷先生、日向が……!!」

その時、鎧を足止めする為に日向が残って戦っていた事を思い出す。

「あー、アイツなら心配はしなくていい。もう助けは向かわせてる」
しかし恭夜はそれも想定内といった様子で、平然としながら天音を起こし抱え上げていた。

「それより、急いでこっから出るぞ。工業地帯、あと数分で爆発すつから」

「……………はア!？」



突如姿を現した謎の男により、痛烈な一撃を受け殴り飛ばされる日向。

地を転がりながらも何とか停止するが、既に日向の体力と魔力は戦いの中で尽きかけていた。

「いきなり出て来やがって……………誰だ、お前……………」

鎧を一瞬で焼き殺したその人物へと、立ち上がりながら日向は声を上げる。

「俺は……………『結社』の番号刻印『N^o.7』、紅蓮だ。お前の力を、確かめに来た」

深紅の髪を掻き上げながら、その青年紅蓮グレンは日向へと返答した。

結社、ナンバーズ、自身の力。

それらのキーワードが、重要な事実を指し示している事は分かる。しかし日向は、その意味を理解する事が出来なかった。

「結社だか何だか知らねエが……俺を殺しにでも来たのか？」

「ここで死ぬ事になるかどうかは、お前次第だ。まアとにかく……見せてみるよ、魔法の魔力を。俺をココから一步でも動かせたら、お前の勝ちで良い。一切手は出さずに、立ち去ると約束する」

紅蓮はその提案と共に、挑発的な態度で両手を広げて見せる。

依然としてその真意は読めなかったが、鎧と同じ悪意に支配された人間である事だけは感じ取れた。

「舐めてんじゃねエぞ……!!」

生き延びるには、ここで戦って勝つ他に道は無い。残り少ない魔力を右腕へと掻き集め、日向は紅蓮へと一気に距離を詰める。

火属性魔力×強化術式

『爆皇破』

爆炎を纏い叩き込まれる、日向の最大威力の一撃。響き渡る轟音と共に、衝撃が空間中へと吹き荒ぶ。

しかし。

「オイ……………フザけてんのかテメエ」

紅蓮の腹へと激突した日向の拳。荒れ狂う炎を伴ったその一撃は、確かに炸裂した筈。

にも関わらず紅蓮の身体は、その場から一步たりとも動いていなかった。

自身の必殺の一撃が、全く通用していない。その事実に向向が動じる間も無く、紅蓮の右手には魔力が集められていた。

紅蓮のその表情に見えるのは、抑え切れない怒りの感情。

「この程度が『属性人柱』の力だと……………クソつまらねエ冗談だな……………!!」

その言葉と共に放たれる、紅く輝き燃える灼炎。

「ツ!!」

咄嗟に相殺すべく、日向もまた火炎を撃ち放つ。

しかし紅蓮の紅炎は一瞬にして日向の火属性魔力を呑み込み、更にその身体をも炎上させた。

「グッ、アアアアアアアアアア!!!」

襲い掛かる猛烈な熱さと痛み。炎に耐性を持つ筈の日向を絶叫させる程に、禍々しく燃え上がる魔力。

同じ性質を持ちながらも、紅蓮の火属性は日向の完全な上位互換だった。炎すらも焼き尽くす、さながら地獄の業火。

「あの野郎……………散々期待させておきながら、こんなモンとはな。拍子抜けも良い所じゃねエか」

誰かへの苛立ちと日向への失望を露わにしながら、不愉快そうに悪態を吐く紅蓮。対して日向は凄まじい激痛によって、意識を失いかけていた。

炎としての、純粹な格が違う。

漸く日向を焼き尽くそうとしていた炎が収まりかけていたが、紅蓮の掌には新たに膨大な熱量が出現していた。

「もうお前に用は無エよ。ここで……………消えろ」

日向へと吐き捨てられる、残忍な声。

そして、紅蓮の業炎は撃ち放たれた。

(クソ……………!!!)

日向の精神を埋め尽くす、避けられない死のイメージ。しかし迫る炎を前にして、最早日向は指先すらも動かせない。

絶対的な悪意を宿した力は、万象を滅するべく進撃し——消し飛ばされた。

そう、消し飛ばされていった。

正確にはその炎は、一刀の下に両断され消失していた。

「は？」

突如として自身の炎が消滅するという理解出来ない光景に、思わず紅蓮は声を漏らす。しかし日向は気絶する寸前、確かにその姿を目撃していた。

刀を携え、自身の前に現れた一人の人物。

そしてその剣士は、かつて屋上で日向と出会っていたあの少年だった。

「お前……何者だ」
ナニモン

薄茶色の髪を持った、高校生らしき少年。炎を斬り裂いたと思われるその当人へと、紅蓮が訝し気に開口する。

「……………俺は——」

対して彼が応答しようとした、その瞬間。

紅蓮の手から、再度魔力炎が放たれる。しかしその炎はまたしても、少年が振るった刃によって両断された。

「オイオイ危ねエないきなり……落ち着けよ」

「成程なア……マグレじゃねエコトは解った。どオやらそこに転がってるザコよりは、いくらか腕が立つみてエだな」

少年は動揺した様子も無く平然と続けるが、彼の実力を確かめた紅蓮は悪びれた様子も無く愉快そうに笑う。

「まあそりゃ、俺の方が”先輩”だかな。コイツよりは強くて当然だろ。んなコトよ

り……お前、『結社』の紅蓮だろ？」

「あ？ だったらどオすんだ」

「恭夜君に頼まれててな。コイツ回収するついでに、お前ブチのめして取っ捕まえに来たんだわ」

そう言った少年は不敵に笑いながら、持ち上げた刀の鋒を紅蓮へと差し向けた。一方で紅蓮もまた笑ってこそいるが、その目には溢れ出さんばかりの殺意に満ちている。

「ハッ………学生風情が、俺を捕らえる？……ソレはお前如きが、俺に勝つ気であるっつー認識で良いのか？」

「おう、俺達がな」

至って軽い口調で、少年は言葉を返す。

自然に交わされるような、会話の中に紛れ込むワンフレーズ。

俺達。

その瞬間、

「ッ!？」

轟音と共に紅蓮の左右から、爆発的な質量が激突する。

何の前触れも無く紅蓮へと襲い掛かったのは、巨大な氷と雷の砲撃だった。

「ハッハッハ、不意打ち返しだ」

「グッ、クソがアッ!!!」

少年が笑い声を上げている中、荒々しい叫びと共に爆炎を放出し迎え撃つ紅蓮。全方向への魔力噴出によって、その挟撃を相殺し吹き飛ばす。その視線の先では、少年の左右へ新たに姿を現した二人の人物を捉えていた。

「天堂君に呼び出された時点で、何かトラブルの予感はしていたけど……」

一人は氷属性の魔力を纏い大鎌を手に行っている、黒髪の少女。

「何だ黒乃、戦る気が無エなら帰ったらどうだ」

もう一人は大剣を担ぎ全身から放電している、金髪の巨漢。

「やめろやめろお前ら。こんなトコで喧嘩すんなって」

そして睨み合う二人を諫める、茶髪の少年。

クロノ
黒乃 雪華、大文字 獅堂、天堂 蒼。

彼等は東帝の中でも突出した実力を有する、『学園三強』と謳われる三人だった。

「師匠ツッ！無事ですか!!」

雪華と獅堂の後から遅れて、金髪碧眼の少年が蒼の元へと駆けて来る。腰に刀を提げ蒼の弟子を自称する彼の名は、ステイブ・ジャクソン。

更にステイブに続いて、四人の人物が雪華達の元へと歩いて来た。

「そーいえばアツくん、なんで司置いて来たの？連れて来れば良かったじゃん」

「思ったより喧嘩が長引いてな。アイツはまだ『表』で暴れてる」

「あの馬鹿が……………」

白幡 千聖の問いに応える諸星 敦士、そしてここにはいない人物へと怒りを向けている神宮寺 奏。その背後では最後の一人である、琥珀色の髪の少女が日向の側で屈み込んでいた。

「もう大丈夫だよ」

柔らかい声色と共に微笑みながら、倒れ伏す日向の傷を魔術によって治療し始める。彼女の名は、綾坂 未来。東帝の『保健委員会』の長であり、学園の中で最も優れた『回

復術式』の使い手だった。

日向への処置を施している未来を一瞥し、蒼は紅蓮へと向き直る。

「頭数だけは揃えて来やがったツてか……上等だよ。全員まとめて焼き殺してやる」

紅蓮は蒼達へと挑発するように口角を吊り上げるが、それに真つ先に反応したのは獅堂だった。

「おーおー、面白エコトほぎきやがるじゃねエか。お前ら全員スツ込んでろ、俺が潰す」

「黙れ大文字。奴は師匠と俺が斬る。お前の方こそ下がっている」

「二人共、少し慢心が過ぎるんじゃないかしら？流石に今回は全員で戦うべきでしょ」

「さんせーい。てかアタシ前には出ないからちゃんとしてね♪」

「どうでも良いが……コイツらに連携を望めるような協調性は無いと思うぞ」

「獅堂、少し冷静になれ。黒乃達は味方だ、ここで暴れるな」

そこからステイプ、雪華、千聖、奏、諸星が口々に主張をぶつけ始め、最初に口を開いた筈の紅蓮は蚊帳の外へ追いやられている。

「……コイツらホント仲悪イな……………」

背後で飛び交う、全く足並みの揃わない仲間達の声。蒼は何とも言えない表情を浮かべながら、刀の峰で肩を叩いていた。

「7対1だけど、悪く思うなよ。つってもまあ、天下の国際指名手配犯様テロリストが文句なんざ言うワケ無エか」

「死に急いでんのかテメエ。一人残らずブチ殺すつつつてんだろオガ」
蒼の皮肉めいた口ぶりに、滾る憤怒を内包した紅蓮の声が返される。

しかしその威圧に一切臆する事無く、蒼は剣呑な視線を向けていた。
「テメエこそカン違いしてんじゃねエぞ。」

俺達の後輩に手エ出したんだ。……生きて帰れると思うなよ」

蒼の言葉に応じるように、六人もまた紅蓮へと鋭い戦意を向ける。

日本最大の魔術学園が誇る、若き魔術師達の集結。彼等が放つ魔力は、空間を蝕むような紅蓮のオーラとも鬩ぎ合い拮抗していた。

しかしその均衡は、すぐに崩れる事となる。

「やア紅蓮、生きてるかいい？」

突如、紅蓮の背後に聞こえて来る声。

そこには魔術による高速移動で姿を現した、道化のような風貌の人物——JOKERが立っていた。そしてその傍らには、同じく恭夜の攻撃を何とか切り抜けて来たと思われるゼロの姿が見える。

「新手か……？」

紅蓮の仲間らしき新たな敵の登場に、警戒しつつそう呟く諸星。

しかし傷を負っているJOKERは蒼達には目もくれず、明らかに焦燥が見て取れる様子で紅蓮へと声を掛ける。

「まだ暴れ足りないとは思うけどね。残念ながら、今日はもう撤収だ」

「ンだと……？こんなハンパな所で引き下がるワケねエだろうが。どけ」

「いや、だからさ……！そんな悠長なコト言ってるヒマ無いのよ。」奴が来た」

静止の声も意に介さず蒼達と戦おうとしている紅蓮を、JOKERが何とか抑え込もうとしていた。

「桐谷恭夜だ。アレは流石にレベルが違う、ヤバ過ぎる。まともに戦うならあと五人は番号刻印がないと、多分勝負にならない」

「……………」

仮面にヒビが入ったJOKERの説得に紅蓮は暫くの間沈黙していたが、やがて大き

く息を吐くと忌々しげに蒼を睨み付ける。

「……で、結局どうすんだ？三人まとめて掛かって来ても、俺は別に構わねエけどな」
恭夜の介入によってJOKER達が蹴散らされて来たであろう事を察し、蒼は挑発的に笑い掛けていた。しかし紅蓮はその挑発に乗る事は無く、無言で蒼へと掌を差し向ける。

「ツラは覚えた。……テメエはいずれ、必ず殺す」

そう端的に告げると同時に、紅蓮の手から放たれる火炎。その炎は蒼達の横を通り過ぎ、工業地帯のプラントの一つへと直撃する。

そしてその直後、周囲の建造物一帯へ波及した衝撃と共に大爆発を引き起こした。

巻き上がる炎と煙、そして凄まじい振動に千聖や未来が体勢を崩す。そしてその隙を逃さず、JOKER達は鉄柱や電線を足場に脱出すべく走り出していた。

「ッ、逃すか!!!」

それに気付いたステイブが、刀へ魔力を纏わせ鋭く振り抜く。そこから撃ち出され

たのは、魔力によって形成された斬撃。しかしJOKERが咄嗟に展開したトランプが、飛来した追撃の刃を阻む。

更にその状況へ畳み掛けるように、日向を治療していた未来の頭上に資材が落下して来た。しかしその巨大な鉄骨は、即座に反応した奏の上段蹴りにより迎撃され打ち返される。

「かなりマズいな。俺達も今すぐ脱出すべきだ」

矢継ぎ早に周囲へと、防御障壁の魔術を放っている諸星。冷静さは保っていたが、この場が刻一刻と危険な状況へ向かっている事もまた理解していた。

紅蓮の炎は連鎖爆発を巻き起こしながら、工業地帯全体を火の海へと変え始めている。各所で建造物は燃え上がり、次々と崩壊しつつあった。

「クソ……この場所ももうじき吹き飛ばぞ!!」

「うーん……つつても、今から逃げても多分間に合わねエだろコレ」

奏の怒鳴り声に、蒼は緊張感の感じられない様子でそう応える。

「じゃアどオすんだ!!このまま爆死でもすんのかテメエは!!」

「いや?ここで死ぬ気なんか更々無エよ。よし、みんな俺の後ろに入れ」

今度は大剣で爆炎を斬り払っていた獅堂に怒鳴られるが、蒼はやはり軽い口調でそう

返しながら刀を構えた。

彼の考えを最初に汲み取ったのは雪華、次にステイブがその狙いに気付く。

「まさか、師匠……!!」

「おう。逃げ場が無エならブツた斬ればいい」

そう言つて刀へ魔力を収束させている蒼の背後では、既に雪華が氷属性魔力による防御壁を形成し『準備』を済ませていた。

「自信の程は？ 天堂君」

「まあ何とかなるだろ。心配すんな」

どこまでも楽観的な態度を崩さない蒼。しかし不安な表情を浮かべている人間は、誰一人としてその場にはいなかった。

それは、学園最強たるこの男の能力への、絶対的な信頼。

そして全員が、雪華の氷壁の中へと飛び込むと同時に。

工業地帯基幹部から漏れ出た魔力が、紅蓮の炎により誘爆した。

夜空をも閃光で染め上げる、超巨大爆発。

視界を埋め尽くすような、炎の壁が向かって来る。仲間を背後へ回らせた蒼は、膨大な魔力を宿した刃を振り上げていた。

無属性攻撃術式

『ザンカイ斬界』

世界をも斬る、一撃。

炎を、魔力を、そして空間を斬り裂く剣が振り下ろされる。

刹那の激突と同時に――

――光が全てを呑み込み、覆い尽くした。

第18話『Meaning of Living 一生活ている意味—』

——思い起こされる、かつての対話。

『俺は——父親と母親を殺した人間を見つけてエんだ』

日向から告げられた目的に、鎧は僅かに狼狽した様子を見せながらも問いを投げ掛ける。

『それは……復讐の為かい？』

『……いや、どうだろうな。俺さ、ガキの頃からずつと爺ちゃんに預けられてたんだ。だから親とは殆ど会った事も無かった。……殺した奴を恨んでねエワケじゃねエけど、別に大して思い出みてエなモンも無エんだよな……』

悲嘆するような記憶も無いと言った様子で、淡々と言葉を続ける日向。

『ただ、もしソイツを見つけたら……俺は自分が何をするのか、全く想像つかねエ』

日向がそう零した時、鎧が微かに浮かべた表情の意味が判らなかつた。

だが、今ならその感情の正体を理解出来る。

あの時、鎧は嗤っていた。

日向の心の奥底に仄めく、暗い感情に気付いていた。



「ツ!!!」

意識を取り戻し、目を開ける日向。

そこは東帝学園の、医務室のベッドの上だった。

「あ、春川君起きてる!」

「やっと目エ覚ましたかバカ野郎」

天井を見上げていた日向の視界に、横にいたと思われる啓治と沙霧の姿が映り込んで来る。

「いやー、命あつて何よりやでホンマに」

「そうだな。助かつて良かった」

「ずっと寝てたね〜……」

少し視線を下げると、陣、創来、凧もベッドの側に揃っていた。

「そうだ……俺……死に掛けて……そんで……」

全身に巻かれた包帯に気付き、そこから少しずつここに至るまでの出来事を思い出していく。

鎧との戦い、紅蓮の急襲。そして刀を携えた少年の介入。日向の記憶は、そこで途切れている。

啓治達の話によると、彼だけでなく雪華や獅堂も自分を助けに来ていたらしい。そして日向は全身大火傷の上に意識不明の重体だったそうだが、未来による適切な初期治療が功を奏し奇跡的に一命を取り留めたとの事だった。

自分の事ながら雲を掴むように実感の無い話を聞いていたが、ふと日向は最も重要な

事を思い出す。

「ツ、そういや……伊織達はどうなった……!?」

「安心しろ。あのバカと藤堂さんはちゃんと無事だ」

「桐谷センサーがキツチリ助け出しとったで。今は別の部屋で療養中や」

啓治と陣から無事に伊織と天音も救出された事を知り、日向は安堵の溜息を漏らしながら脱力した。

そこでこれまであまり口を開かなかった凧が、敢えて皆が触れなかった話題を口にす
る。

「あいつ………連続殺人にも関わってたらしいね」

凧が言及していたのは、言うまでも無く日向や天音を殺そうと目論んだあの少年の存在。彼女達学生は断片的な話しか聞かされていなかった為に、彼が一連の事件とどこまで関係があるのかは分からなかった。

ただ一つ確かな事は、天城 鎧は紛れも無い魔術犯罪者であったという事実。

僅かな時間とは言え仲間だった人物がこの凶行を引き起こした事に、誰もが複雑な心

情を抱いていた。しかしその中でも特にこの事件との関係が深い筈の創来は、感情を乱す様子も無く静かに口を開く。

「……アイツが何者だったのかなんて、今更どうでもいい。大事なのは、日向も伊織も天音も無事に生きてたつてコトだ。今はその事を喜ぼう」

「キミがそこまで割り切つとるんやったら、ボクらは何も言えへんわ」

「つーかテメーがまとめてんじゃねーぞコラ」

かつて冤罪を被りかけた事は一切気に掛けず、穏やかな口調でそう語る創来。陣や啓治が言葉を続けるが、啓治はやや苛立ち気味に日向へと目を向ける。

「大体なア……あんな無茶をしでかすんだつたら、何故俺達に一声掛けねエ。少なくとも俺なら、御剣なんぞよりよっぽどスマートに解決出来ただろうよ」

「あー、それはゴメン……でもお前はケガしてたし、創来達はどつか行つてたし……」
憤慨する啓治に弁明する日向へと、沙霧は柔らかな表情で笑い掛けた。

「みんな心配してたから……これからは、私達の事も頼つてね」

沙霧の言葉に同意するように、他の三人も頷く。

力を貸してくれる仲間が、確かにいる事。その存在を胸に刻み込み、日向は笑つて頷き返した。

「あア……今度は手エ貸してくれ」

そして、沙霧が見舞い品の中にあつたバスケットを手に取る。

「そうだ、春川君お腹空いてない？果物剥こうか？」

「俺はあのパイヤつてのが興味あるな」

「テメーはちよつと引つ込んでろ漆間。つーか多分マンゴーの間違いだろ。……いやお

前コレパイナップル………ドリアンじゃねーか!!誰だこんなモン買ってきた奴!!」

「創来と陣が『モーニングスターだ』とか言つて購買で……」

「いや凧ちゃんも結構乗り気やつたやんけ。え、何やアカンかつた？」

「たりめーだバカじゃねーのかお前ら。室内だぞボケ」

カゴの周りで騒がしく言い合っている啓治達を眺める日向。

——彼等はきつとこの先も、変わらないでいてくれる。

そんな予感と共に、日向は林檎に齧り付いていた。

「春川！皮くらい剥け！」



別の病室にて、窓際から外の景色に目を向けていた一人の少女。

「……目エ覚めたか」

ベッドの上の天音に声を掛けたのは、入り口のドアに寄り掛かっていた伊織だった。身体各所に包帯を巻いてはいるが、大きな傷を負っている様子は見られない。

「……春川は……？」

「心配すんな、ちゃんと生きてるよ。アイツもさつき意識が戻ったらしい。空条達もそっちにいる筈だ。……呼んで来るか？」

「いや……大丈夫」

一人戦いに残っていた日向の無事を伝えられ、微かに安心したような声を漏らす天音。しかしすぐにまた表情を曇らせるが、その心中を伊織は大方察していた。

「……ねえ、御剣——」

「……申し訳ねエとも思つてんなら、俺に謝るより日向に礼を言えよ。お前を見つけたのも、天城を倒したのもアイツなんだからな」

日向へ感謝するように告げるが、天音は首を横に振りながら言葉を返す。

「それは……そうなんだけど。私が謝りたいのは、その事じゃないの。……」あの時”の事を、アンタに謝りたかった」

そう言った彼女が思い起こしていたのは、傷だらけになりながら自分を守り続けた伊織の姿。

「私が死にたかつたのは……アンタの言う通り、逃げ出したかつたからだって……今なら分かる。けど、それじゃ最後まで敗けたままで終わっちゃうって……アンタが教えてくれた」

無力さに打ち拉がれていたあの時、天音の心を動かしたのは紛れも無く伊織の言葉だった。同じ絶望を背負いながらも、伊織の魂は決して折れなかつた。

「だから私はもう、戦いから逃げたりしない。生きて、自分と向き合うつて決めた。……そう思えたのは、アンタのおかげ」

「……………そうか」

確かな決意を感じさせる天音の声に、伊織は静かに応える。

「うん。……………ありがとう、御剣」

感謝の言葉と共に、笑顔を浮かべる天音。その時伊織は、かつて恭夜と交わした会話を思い出していた。



『……………恭夜さん』

『んー？どうした』

街を歩く、青年と少年。

まだ幼さの残る風貌の御剣 伊織に、前を歩いていた桐谷 恭夜が声を返した。

『俺ってさ……………魔力が無いから捨てられたんだろ？』

『……………そうかもな』

伊織が不意に零した眩きに、恭夜は静かに応える。

『俺は……………必要ない、人間なのかな』

魔術都市——彼等が生きてくるこの街では、魔術が全てを司る絶対の秩序。

そんな世界で魔力を持たずに生まれた伊織は、異端の烙印を押された存在だった。誰からも肯定されず、生家の人間ですらも彼を見放した。そしてまだ幼かった伊織は、この場所以外に生きる世界を知らなかった。

——自分が生きる意味を、見出せずにいた。

立ち止まり、振り返った恭夜は伊織へと歩み寄って行く。そして屈み込み、サンングラスを外して伊織と目線を合わせた。

今まで一度も見た事が無かった恭夜の瞳。右眼は淡い影のような紫色、そして左眼は空のように透き通る青色だった。

『確かに……今のお前にはまだ、何の力も無いかもしれない。……けどな』

嘘偽りの無い、真っ直ぐな言葉。

『……どんな人間も、意味と理由を持って生まれて来るんだ。お前だってそうだよ』
恭夜は、絶対に伊織を否定しなかった。

『俺は、戦う事しか教えられない。……けど、お前を絶対に強くして、誰かを守れるような人間にしてやる。そしたら……お前を必要としてくれる人が、きっと現れる』

『なんで……そんなこと、分かるんだよ』

そう信じて疑われないような口ぶりの恭夜に、僅かな不安を隠すように言い返す伊織。しかし立ち上がった恭夜はサングラスを掛け直しながら、伊織の頭に手を乗せ応えた。

『分かるさ。俺には——』

—— 『未来』が視えるんだからな。



師の言葉を信じ、戦い続けて来た。

探し続けて来た、生きる意味。天音の笑顔が、それを教えてくれた気がした。

伊織が天音を救ったように、天音もまた伊織の心を救っていた。

自分を認めてくれた少女へと、少年もまた笑顔を返す。

「——なら良かったよ」

『生きていてくれて、ありがとう』と。肯定してくれた誰かの為に生きよう。そう決めた伊織の過去は、確かに今、報われていた。



「待てよ」

『表』の東京、某所にて。

誰かを呼び止める一人の声が、薄暗い夜の路地に響く。

その男——桐谷 恭夜が声を掛けたのは、彼もよく知る人物だった。

「あら？桐谷先生やないの。奇遇やねこんなトコロで。何してんの？」

振り返った少年、一文字 陣は恭夜の登場に軽く驚いたような様子を見せる。

「あーお前、まだしらばつくれるカンジ？まあいいわ。………日向と鎧をカチ合わせたの、お前だろ？」

「？」

唐突な恭夜の指摘に、陣は思わず面喰らっていた。

「結社の介入を狙ってたんだろ？が、残念ながら出て来た番号刻印ナンバーズはお前らが追ってる

『フェイスレス』じゃなくて『紅蓮』だった」

「ゴメンな桐谷先生、ちよつと待つてもらてええ？………ナニを言うてるんかホンマに解れへんのやけど………ひよつとしてボクのコト、誰かとカン違いしとらん？」

理解が追いついていないような表情で問い返す陣だったが、恭夜は一つ息を吐きながら言葉が続ける。

「お前なア……………」『一文字 陣』なんて人間の戸籍は元々は存在してなかった。国のデータベースを改竄するとは、中々手の込んだマネしてくれたじゃねエか。もう全部バシてんだ、ヘタクソな芝居はやめとけよ」

「……………」

恭夜の口から語られていく事実。そして沈黙する陣へと、恭夜は核心に踏み込んだ。

「お前のコトも朔夜サクヤから大方は聞いている。国防省の技術研究部門が、魔術科学の粋を集めた”改造人間”……………確か……………『Silverbullet計画』だったか」

言及される、”彼”の正体。

その瞬間、一文字陣と思われる誰かは、恭夜へと銃口を向けていた。

一瞬の内に取り出され構えられる拳銃。しかし直後、ゆつくりとその銃身が音を立て

地に落ちた。

恭夜は一步たりともその場から動いていないが、その手には魔力で形成された刀が握られている。

「……もう一度だけ言うぞ。やめとけ」

圧倒的な速度で瞬く間に銃を斬り捨てていた恭夜は、静かに相手へと忠告した。

対してその謎の人物は銃を捨てると、自身の体表に展開していたある魔術を解除する。

『カモフラージュ
偽装』解除

外見を変えていた幻術が解かれた事で、彼の本当の姿が現れていく。

そこに立っていたのは、銀色の髪を持った一人の青年だった。

「ハハッ、そんな警戒すんなよ。別に事を荒立てるつもりは無エ」

青年からの鋭い視線を向けられながらも、恭夜は身構える様子も無く話を続ける。

「俺から一つ提案があるんだが………お前ら、しばらくこつちには手工出さねエでく

れねエか？」

恭夜から提言されたのは、この国で起こり得る事象への不干渉だった。

「これから起こる戦いで、お前らに好き勝手やられると少し面倒なコトになりそうなんだわ」

「……………その要求を、こちらが受け容れる理由があるとでも？」

そう説明される青年だったが、依然として彼が臨戦態勢を崩す事は無い。

「……………力尽くで合意させても構わねエが…………お前はどうか？戦り合うつもりなら、相手にはなつてやるけどよ」

掛けられた不穏な言葉に対し、恭夜は刀で肩を叩きながら不敵な表情で返答する。全てを見通すような笑みを浮かべる恭夜と、暫し睨み合っていた青年。

「……………そちらの条件を聞こう」

「んん、建設的な取引が出来そうでは何よりだ」

しかしやがて青年は対話の姿勢を見せ、恭夜は刀を形成していた魔力を解いた。

「今後『ペロニカ・バーンズ』を捕らえた場合、彼女は米国アメリカに引き渡す。ただし、それ以外の番号ナンバーズを拘束した場合、処遇は俺達に一任させてもらう」

「……………」

ある少女の名前を出しながら、話は進んで行く。

「安心しろよ。お前らのトコから流出した例の技術は、今更手に入れてもどうこうする気は無エ。風やら徹彦やら、『術式移植』の被験者はもう何人も保護してんだからな」

「……………一度協議し、情報を精査した上で回答する」

一通り聞き終えた青年は、一度帰投し判断を仰ぐべく恭夜に背を向けた。

「そうしてくれ。こつちとしても、こんな事が発端で戦争になんのは勘弁だからな。……………聞いてんだろ？オリバーさん」

その時、歩き出そうとしていた青年が足を止める。この場にはいない。誰か。へと、語り掛けるように言葉を続ける恭夜。

「貸しを作りたくねエのは分かるが、今度からは正式な手続きを踏んだ上で協力を持ち掛けてほしいモンだな」

恭夜の声に反応するように、青年が着けていたインカムのランプが赤く点滅した。

しかし青年は沈黙を貫いたまま、再び歩き出す。そして魔術を用いた『瞬間転移』テレポルトによつて、音を立てる事も無く姿を消した。

第19話『Next Phase』——ネクストフェイズ

—

『魔術師協会・日本支部』

全世界の魔術師を束ねる国際組織、その日本支部。魔術管理局や東帝魔術学園といった機関を下部組織として従える、日本魔術界の中枢である。

そしてこの支部長室に、二人の人物が訪れていた。

「えーまあ、以上が今回の顛末になるわけですが………何か質問ありますか？王我さん」
一連の事件についての経緯を説明し終え、投影していた立体画像ホログラムを閉じる。召喚されていた内の一人は、魔術管理局『魔術捜査課』の沢村 秀一だった。

——魔術連続殺人の首謀者は天城鎧であり、また彼こそが魔術師によって構成された犯罪集団の主犯格であった事。

春川日向がこれを撃破するが、『刻印結社』最高幹部の一人である紅蓮の介入を受けた

事。そして時を同じくして御剣伊織と藤堂天音も、結社による襲撃を受けていた事。

沢村からの報告を聞いていた、その部屋の主である人物は口を開く。

「つーコトは……今この国には、番号^{ナンバース}刻印が三人潜んでるつーワケか」

鬼の如き威容を誇る体躯、龍の如き鋭い風格。その老年の男こそ、『魔術師協会日本支部』^{キリユウイ} 支部長、鬼龍院^{オウカガ} 王我だった。

「えー、ハイ……まあそうなりますね」

「……………マジかよ……クソ面倒じゃねーかオイ……わざわざ来んなよこんな島国までよオ……」

しかし王我は暫し沈黙した後、厳格な雰囲気をも崩し露骨に気怠げな声を上げる。

「つーか大体水際対策はどオなってんだよ。セキュリティのガバが過ぎるんじゃないやねエのかオイ」

「ンなコト俺に言われましても……………」

ぶつくさと文句を垂れながら、宙を仰いでいる王我。勝手気儘なその物言いに若干辟易しつつも、沢村は今回出現した番号^{ナンバース}刻印についての補足情報を空中へ映し出して行く。

『紅蓮』

3年前に刻印結社に加入したとされている、番号刻印N.O.7。結社へ合流する以前は、中東紛争地にてゲリラを率いるテロリストとして危険視されていた。各国で甚大な被害を齎しているN.O.5やN.O.4と同様に、凶悪な魔術犯罪者と目されている。

『ジョーカー』

番号刻印N.O.?。幹部を自称している謎の人物であり、他の番号刻印と同時に目撃される事が多い。主に欧州での魔術テロを主導しているが、昨年の北米同時多発テロにも姿を現していた。

『ゼロ』

番号刻印N.O.?。これまで目撃情報は無く、使用魔術など能力の詳細は一切不明。

世界各地でテロ行為を扇動している国際的犯罪結社、その幹部が三名も侵入している事は、由々しき国家問題だった。

「……………で、何でコイツらが学生三人をわざわざ狙って来たのかについては、調べ付いてんのか？」

王我からの問いに、沢村は管轄外とばかりに肩を竦めながら隣を見やる。沢村に代

わって口を開いたのは、彼と共に王我に招かれていた二人目の来訪者。東帝学園学長、神宮寺 澄香だった。

「御剣と藤堂に関して、能力の希少性が要因と見て間違い無いでしょう。ですが春川については……目的は不明です」

目的は愚か、思想や行動理念すらも不明瞭な刻印結社。そのような犯罪組織がここに来て初めて、明確な狙いを定めて来た事は、得体の知れない不気味さを感じさせた。

「……いやちよつと待て。春川？ つつーコトは……」

「はい、そうですよ。義正さんの孫らしいっす。俺も大和から聞かされて驚きました」

「マジか！ てかあの人子供居たのか……」

「しかもアイツ、こないだ一人で末端組織にツツ込んでまるごと吹っ飛ばしてましたよ。あの人より遥かにアホですね」

「何だその龍臣^{タツオミ}みてエなエピソードは。学生のクセしてブツ飛びすぎでんだろソイツ」

一方王我は日向の祖父である『旧知の人物』について、沢村の言葉を聞きながら古い記憶を辿っている。

「まアそれはともかく………学生の中にこんなクソ野郎が紛れてたつつ一方が問題だ

ろ。しかもよりによって『天城』じゃねーか」

結局思い出せなかった王我はその事を一旦放置し、学生でありながら犯罪に関与していた鎧について言及する。

日本最大の魔術旧家である神宮寺家、その傘下である天城家の人間が凶悪な殺人犯であつたという事実は、魔術界全体を震撼させていた。神宮寺宗家としても彼等の沽券と面子に関わる大問題であり、王我を始めとした非旧家の術師からの弾劾及び責任追及は免れない。

「まア澄香、お前も分家だし言いにくいかもしれないけど、神宮寺の本家連中に言つてくれ。傘下のケツはお前らがキツチリ拭いとけよつて」

「いやアンタが直接言やいいでしょ」

「ヤダよ俺あの当主嫌いだし」

澄香へ伝言を託ける王我に口を挟む沢村だったが、想像以上子供じみた理由に呆れた視線を向けている。

「あ、そう言や恭夜にも声掛けたのに何でアイツ来ねエんだ？……つかそもそも、今回の件は『視て』なかったのか？アイツ」

「いやア、厳しかったんじやないスカ？アイツの『千里眼』は予知に関しちや、良いトコ五分でしょ」

「確かにソレもそうか……^{スバル}昴の星詠みの方がまだいくらかマシだわ……」

そこで王我は、沢村達と同じく呼び出していた恭夜が未だに姿を見せていない事に気が付いた。

「あー、恭夜君なら多分来ねエよ。さつき用があるとか言つて『表』に出て行つたし」
その時、王我の声に答えながら一人の人物が支部長室へと入つて来る。

東帝の制服を着崩した茶髪の少年。そこに姿を現したのは、紅蓮を撃退し日向を救出した張本人、天堂 蒼だった。

「『表』に出てつただア？あんのバカ息子が……つーか蒼テメー、学生の方でフラつとこんなトコまで入つて来てんじやねエよ」

「俺受付フロントのオネーサンとは顔パスだから♡それとき師匠、さつきの話だけど……」

協会施設の最上階であるこの部屋に平然と入室して来た蒼は、師匠と呼んだ王我へと言葉を続ける。

「春川 日向つつたつつけ？敵さん方は、何かしらの明確な目的があつてアイツを狙つてた……：ような気がした。まーコレは俺の予想だけど……：多分アイツも、なんか面白エチカラ力持つてるぜ」



東京某所、廃工場内にて。

「全く以て期待外れだった。あんなザコが属性人柱とか、何かの間違いじゃねエのか？」
「そんな閣下ホスに直接文句言つてよ……：ていうかさ、ボク最初に殺しじゃなくて生け捕りつて伝えたよね？」

工場内に口論の声を響かせていたのは、逃走し一時的に潜伏していた紅蓮とJ O K E R だった。

その周囲にはゼロを含めた、彼等の仲間と思われる五人の人影が見える。

「疑わしかつたんならさア……：取り敢えず両手両脚潰して、連れて来てから殺すなり何なりすりゃよかつたんじゃねーの？その程度も出来ないくらい切羽詰まつたワケ？」

紅蓮にそう声を掛けたのは、資材に腰掛けていた黒髪に紫の瞳を持った少年。

彼等と同じく結社、最高幹部、たる称号を持つ彼の名は、番号^{ナンバース}刻印、No. ^{フォー}4、
『デイエス』。

「デメエ……喧嘩売ってんのか」

「客観的な所見を述べただけですケド？」

何キレてんの？と嘲笑っている、昏い眼をしたその少年を紅蓮が睨む。

「やーめなつてデイエス。キミが来ても多分結果は変わんなかったよ。桐谷恭夜が出て来たら、流石に一旦退くしかないでしょうが」

「だつたらよオ………」

剣呑になりかけていた空気を諷めるべくJOKERが仲裁に入ろうとするが、今度は別の人物が会話を割り込んで来た。

「まずその桐谷恭夜を倒しちまえば、後は消化試合なんじゃねエのか？」

威圧的なオーラを放つ、筋骨隆々とした肉体を誇る巨漢。

番号刻印^{ナンバース}「N.O.5」^{ファイブ}。その名は、『バスター』。

「簡単に言ってくれちゃってるケドさア……最初からそう出来りや今苦勞してないのよ」

「大体なア筋肉バカ。仮にもしアレを抑えておけたとしても、鬼龍院王我と土御門昴が出て来たらどオするつもりだ」

「ホラ！紅蓮の方がまだ解つてんじゃん！」

その状況理解度にJOKERが苦言を呈するが、バスターは余裕の表情で主張を続ける。

「強ち不可能と言うワケでもないだろう。まず第一にこちらには………俺がいる」

「ちよつとキミもう黙つてもらつていいかな？クロックからも何か言つてやつてよ」

うんざりとしたような声でJOKERは、その様子を見下ろしていた一人の女性を頼つた。

「フフ、まあいいじゃない。ゴリラさんのお話を聞きましょう」

蠱惑的な笑みと共にそう応えたのは、妖艶なオーラを醸し出している妙齡の美女。

番号刻印^{ナンバース}「N.O.8」^{エイト}の称号を持つ彼女は、『クロック』と呼ばれていた。

そしてその隣には、白いマントを羽織り無貌の仮面を頭に乘せた、幼い少女が座り込んでいた。クロツクに白金色の髪を撫でられている彼女もまた、刻印結社の一人。

番号刻印” N^o. 6 ”、『フェイストレス』の名を持つ少女だった。

「……………で、そのゴリラさんにはどういう勝算があんのさ。こつから更に、トライデントかダグラスでも増援に寄越してもらおうつもり？」

「いやア、アイツらを呼ぶ必要は無いさ。桐谷は俺が直接相手をしても良いが……ゼロが本来の能力^{チカラ}を使えば、奴とも互角に渡り合えるだろう」

バスターはJOKERへ声を返しながら、離れた場所で沈黙と共に佇んでいたゼロへと目を向ける。

やはり一言も発する事は無く、目深に被ったフードの下の素顔は伺えない。

未だに全容が謎に包まれた、彼の持つ数字は——

——その名と同じ、番号刻印” N^o. 0 ”。

「そりやそうかもしんないケドさア……ゼロの光属性はあくまで最終手段だ。それに人柱同士の力が干渉し合えば、春川日向を覚醒させてしまう可能性もある」

しかしJOKERは、ゼロと日向が持つ”同じ力”についての懸念を示す。

火の『属性人柱』、春川日向。

光の『属性人柱』、ゼロ。

ゼロの魔力によって、日向の能力に影響を与える恐れをJOKERは指摘していた。

「もし彼が人柱の力を自覚すれば、僕等が春川日向を狙ってる理由に気付かれるかもしれない。下手すれば協会の本部が出張って来る事も有り得るワケだ」

それに、ここで日向が人柱の力を有している事が知られれば、刻印結社が彼を狙う目的も露見し兼ねない。

三人ものS級を擁する、『七大支部』最強との呼び声高い日本支部。そんな魔境じみたこの国の魔術師達に加え、他国の戦力までも相手取っている程の時間は無い。

その為、出来る限りゼロの人柱の力は伏せておくべきと告げようとした。しかし、

「何だ、隠しといた方が良かったのか？」

「え？」

紅蓮の口から放たれた言葉に、JOKERは恐る恐る振り返る。

「俺ア春川日向に話しちまったぞ。アイツが火の人柱だってコト」

その告白に、JOKERは目眩を覚えたようにフラついていた。

「は……？ ホントに何してんの……？ 何してくれちゃってんの……？」

「知らねエよ。言ったらマズいんだったら最初に言っとけや」

一切反省する様子を見せない紅蓮の後ろでは、バスターやデイエスが愉快そうに笑っている。

「ハツハツハ、良いじゃねエか。面白くなって来た」

「殺るコトがシンプルになったね」

好戦的な二人を眺めながら、クロックもまた艶やかな笑みを浮かべていた。

「フフ………大変なコトになって来たわね」

「勘弁してよホント……早く計画立て直さないと……」

他人事のような態度のクロックを傍目に、プランのズレを修正すべく考え始めるJOKER。

「でもまだ、手段は残ってるんでしょ？」

「……………まあね……………」

クロックの声に応えながら、JOKERは一つの『仮面』を取り出す。

——炎の紋様が刻まれたその仮面は、天城鎧の部下だった謎の人物『陽炎』が着けていた物と全く同じだった。

「……………この立場の僕は死んだけど……………まだ潜入用の”顔”は残ってるしね」

陽炎——又の名を、番号刻印”NO. EX”『JOKER』。

幾つもの貌を持つ道化師は、不敵に嗤い動き出す。

蠢く悪意を宿した魔手は、再び日向達へと迫り始めていた。



The story moves to the next phase



「ほんでその一年が獅堂クンに喧嘩フツ掛けたらしいねん。流石にクソ度胸すぎてオモロくない?」

「どオでもエエけどオマエ原付の燃料入れ行つとけよ。もう無いなつとつたで」

「は? 先々週入れたやんけ。早すぎやろ」

「2ケツと移動距離とボロさ考えたら妥当やろボケ。ゴチャゴチャ言つとらんで早よ行つて来いや」

「オレ一昨日お前にアイス奢ったよな?」

「チューペットの半分で奢ったて人をナメすぎやろお前」

学園の廊下を歩く、三人組の男子生徒。

取り留めの無い口論が続けている二人を、もう一人の少年は一步引いて傍観していた。

ウルフカットの黒髪に、赤い瞳を持つ彼の名は湊^{ミナト} 紅輔^{コウスケ}。イチゴ牛乳のパックをストローで啜っているこの少年は、前を歩く二人の『目付役』を半ば強引に押しつけられている苦勞人だった。

「まあとにかくオレ今日30円しか持つとらんから無理や」

「しょーもないパチこくなやお前……いやホンマやん。しかもコレよく見たら1つ5円混ざるとるから25円しか無いやんけ」

「明日からしばらくチャリ通やな」

「いやお前は当たり前前に歩きやぞ。チャリも一台しか無いやろ」

「はア!? 2ケツしたらエエやろ」

「クロスのどこにそんなスペースあんねん。アカンわコイツもうバカすぎて話通じひん」

「おっ、何やねんコラ戦るかオマエ」

多くの生徒が往来しているにも関わらず、遂に取っ組み合いを始める二人組。翡翠色の髪を持った少年と金色の髪を持った少年、彼等の容姿は『双子』のように似通っていた。

そして、湊も含めた三人の共通点。彼等は皆一樣に、腕に『風紀』の文字が記された腕章を備えていた。

「……………おいバカ兄弟」

「何や紅^{ベニ}！止めんなよ、今日こそはこのタコシバき倒したんねん!!」

「コツチのセリフやボンクラがアツ!!」

湊は冷めた目でその様子を眺めながら、淡々と二人へ忠告する。

「別にどこで暴れようと勝手だけど、また奏さんに半殺しにされても知らねーからな。もう俺はフォローしねーぞ」

「ハッ、その前に俺がコイツ殺したるわ!!」

「そつくりそのまま返すわツ!!」

いよいよ殴り合いを始めた二人の周囲で、彼等の魔力が空間に影響を与え始めていた。

廊下に吹き抜ける『風』、他の生徒達が異変に気づきちらほらと悲鳴も上がり始める。当の目付役である湊は日常茶飯事とばかりに、その様子を止めもせず眺め続けていた。

しかし、二人は気付かない。すぐ近くまで、彼等の”上司”である少女が歩いて来ていた事に。

「死ねや!!」

兄弟は互いの頭突きを相手の額へと叩き込む。魔力がぶつかり合い、一際強い突風が廊下へ吹き抜けた。

——その一陣の風が、二人の前に立っていた少女のスカートを捲り上げる。

「「あっ……………」」

思わず声を漏らす、湊と二人。

そこに居たのは、三人が所属する『風紀委員会』の長、神宮寺 奏だった。

「廊下で乱闘とはどういう見だ……？まだ、風紀としての自覚が足りないみたいだな……………」

一切表情を変えず、凍てつくような視線を向ける奏。対して二人が取った行動は、単

純かつ迅速だった。

「スンマセンでしたアアアアアアアアッツツ!!!」

絶叫と共に頭を下げると、二人は奏に背を向け一目散に走り始める。

風紀委員でありながら、学園に混乱を巻き起こす異端児。彼等の名は――『如月兄弟』。

二人は迷い無く校舎の窓を突き破り、逃走すべく空中へと飛び出した。



魔術管理局、局内にて。

「オーイ結城くん、そろそろ行くよ〜」

「はい、了解です」

名を呼ばれその声に応えたのは、フロアに居た一人の少年だった。

「お、結城ー。こないだの護送の時は助かったわ。ありがとう」

「あーいやいや、気にしないで下さい」

「結城、今度飯でも行こうや」

「お、マジっすか。ぜひ行きましょう。へへ」

「結城君、こつち来てたんだ！」

「はい、今日はちよつと時間無いんで、また今度ゆつくり」

代わる代わるの局員から声を掛けられているその少年は、東帝学園の制服に身を包んでいる。

「やー、ごめんね。こんなド平日に」

「大丈夫っすよ。学校は公欠扱いになってるんで」

最初に彼を呼んだ青年は、黒のスーツに身を包んだ『魔術捜査官』だった。そしてこの少年は学生でありながら、魔術捜査課の人間と行動を共にしている。

即ち彼は、管理局から直々に要請を受けた『捜査協力者』だった。

「でも、毎回こんな便利屋みたいに呼び出されてちや、流石に面倒にならない？」

「いやア、沢村サンとかにはしよつちゆう世話になつてるんで。俺の能力が役に立つなら、いつでも出て来ますよ」

「真面目だよねエ……」



「………ねえテツクーん」

「どしたの風切さん」

東帝の二年教室にて、会話を交わす二人の男女。

スカジャンを着た少女の声に応えたのは、無気力に机に突つ伏している少年だった。

「もうすぐ”アレ”始まるね。『東帝戦』」

「あー、あの陽キャの祭典ね………あんな脳筋すぎて時勢に合つてねーのよ。全員で戦つて最強決定戦とか……」

バトル漫画の世界線かよ……と呟く少年に、少女は頬杖を突きながら楽しげに笑う。

「多分、蒼さんは本気でテツ君を倒しに来るだろうね」

「………あの人は俺のコト買い被り過ぎてんだよ。俺の術式は無敵でも何でもねエつつつてんのにさー……」

全く意欲の感じられない、気怠げな表情で少年は声を上げた。

「マジで、憂鬱だわ……………」

第20話『東帝十席』

「あゝゝもうダメだオレは……絶対ムリだこんなん……」

虚な瞳で宙を仰いでいるのは、『キミならできる』と書かれたハチマキを巻いた日向。日向達八人は今、魔術都市のバーガーチェーン店内でテキストを開きテスト対策に励んでいる。数日後に期末試験を控えている彼等は、それに備えて勉強会を行っていた。

「ゴチャゴチャ言つてねエで手を動かせ」

「だからムリだつて……そもそも何が分からねエのかすら分からねエ……」

「ドツボにハマつとんなア……やっぱ日向クン、勉強だけは全部からつきしやね」

「読み書きさえ出来れば人間は生きてけるつて村のじっちゃばつちやが言つてた……」

「オマエその学力でよく今まで生きてこれたな……」

まずそのスタンスで生きて来た人間が実在した事に、驚きを隠せない伊織と陣。その隣では創来が、猛烈な勢いで何かを書き込んでいる。そして、解き終わったと思われるプリントを啓治へ突き出した。

「よし……!!出来たぞ、啓治」

「見せてみる。……だアからオマエ二次関数のココ!!係数よく見ろつってんだろオガ

！しかも二重根号に関しちや大問全滅じゃねエか!!」

「啓治。一ついいか？」

「何だア！」

「根号つて、何だ？」

創来の神妙な言葉に、啓治は力尽きたように机へと突つ伏す。

日向よりも勉強に対する意欲はあるのだが、理解度が致命的な創来。真剣な表情でプリントを睨んでいるが、その単元は五分前に啓治が苦心しながら説明したばかりだった。

「……もうオマエ潔く赤点取れ……」

啓治は疲れ切った顔で口を開くが、それに対してポテトを三本まとめて啜っていた風が応える。

「……啓治さア、”理解出来る”のが当たり前のコトだと思ってるっしょ。アタシらからしたら、こんなワケ分かんないのを平気で解いてるアンタの方がよっぽど普通じゃないからね？」

「アンタは何エラそんなコト言ってるのよ」

天音に咎められている風もまた、日向や創来と同じく赤点予備軍だった。ほぼ全授業爆睡皆勤である為、当然と言えば当然である。

そオだア！当たり前じゃねエからなア!!と尻に同意するように叫んでいた日向は、伊織から脳天へと手刀を受け叩き沈められていた。

——東帝は魔術師の学園とは言え、中等^高教育機関^学としての側面も有している。その為、最低限の一般教養はカリキュラムに組み込まれていた。

「とにかく……お前らが赤点取るのは勝手だけどな。そうなたら一学期が終わった後に補習になんだぞ。そこんトコ解ってんのかバカトリオ」

「嫌だア~~~~遊びてエよオ~~~~」

「それはキツいな……」

「マジ勘弁……」

伊織に危機感を煽られ、日向と創来と尻がげんなりとした表情でうな垂れる。

「夏休み、みんなで一緒に迎えられるように頑張ろうね」

「空条さん……貴女は俺のオアシスです……心の……」

励ますような沙霧の言葉に、何故か啓治が泣きながら感動していた。

その時日向は陣のクリアファイルの中に、プリントに紛れて新聞が一部挟まっているのを見つける。

「ん？陣、ソレなんだ？」

「あーコレ？新聞部の友達から取引して、一足先に手に入れたんや。最速リーク情報やで」

陣が得意気な顔で手にしていたのは、数日後にバラ撒かれる手筈の号外新聞だった。東帝きつての情報通を自称するだけあり、流石の手の速さである。

「ちよつ、別にここで見る必要無いでしょ」

だがその新聞に日向が目を通そうとした時、天音が慌ててそれを奪い取った。

「え、何？お前載ってんの？別に恥ずかしがらなくてもいいーだろ」

「なっ……!?!」

しかし日向は落ち着いた様子を崩さず、一方で天音は手元のプリントを握り締め目を見開く。彼女が持っていたのは、日向が一瞬の内にスリ変えた創来の0点答案だった。無駄な器用さを発揮している日向を、物言いたげな目で見ている伊織。

「どーれどれ……」東帝十席「……何だアソレ？おつ、やっぱ天音載ってんじゃん」

日向が広げた号外の中身を一目見ようと、天音と陣以外の五人もテーブルに身を乗り出して来る。

所狭しと頭を寄せ合い、六人が目にした記事の内容は——



「号外ッ、号外イイイッッ!!」

登校して来た東帝の生徒達の耳に届いて来たのは、朝早く張り上げられていた新聞部員らの叫び声。号外発行の報せだった。

見れば中央時計塔の頂上から、花吹雪の如く学園中へと無数の新聞が振り撒かれている。

そして上空から降って来たその内の一枚を、赤髪の少女が掴み取っていた。

「……………」

ツインテールと『生徒会執行部』の腕章が特徴的なその女子生徒、一条ハルは、紙面を一瞥しながら不愉快そうな表情を浮かべている。

「おはよう、ハル。朝から何だか機嫌が悪そうだけど……どうかしたの？」

その後から声を掛けたのは、彼女と同じく生徒会に所属している金髪の少女、九重絵恋だった。

「別に……何でもないわ。ただちよつと、気に食わない顔があっただけ」

そう応えたハルは新聞を丁寧折り畳むと、鞆に放り込み絵恋と共に歩き出す。

彼女達のみならず、学園に散らばる実力者達の手元にも届いていたこの号外。そこに記されていたのは、学生達の中でもトップに位置する十人の魔術師——『東帝十席』についての情報だった。



『さーア皆さんッ！おはようございまーす!!!今年も遂にこの季節がやって参りましたア!!』

『朝から声がデカいよ声が。……えー、本日は予定を変更し朝から緊急生放送でお送りします』

学園各所のスピーカーやモニター、そして生徒一人一人が保有している携帯端末へと

一斉配信が始まる。

画面に映し出されていたのは、普段から昼休みの学内放送パーソナリティを担当している二人の放送部員。

『毎年七月開催、学園最強にして最優の魔術師を決定する「東帝戦」!!それに先立ち、今年もその注目株筆頭たる十人の生徒、「東帝十席」が確定致しましたア!!』

『皆さん中央時計塔下並びに噴水広場にて配布されていた”号外”はお手元にございますかね?ただ今学園中がどこもかしこも大盛り上がりです』

放送部もやはり、学園の一大ニュースである『東帝十席』の選定について取り上げていた。学園ネットワークを通じたSNS及び匿名掲示板でも、多くの生徒からの注目と関心が寄せられている。

魔術師としての総合的能力を基準とする東帝学園の順位制度ランキング、『席次番付』。その中でも一際優れた実力を有する十人の学生、その写真とデータが学園中のモニターに次々と映し出される。

『早速紹介していきますましよウツ!まずは席次番付”第十席”ツ!!藤堂天音!!』

『二・三年が統合された学園全体のランキングで、上級生を押し退けいきなり食い込んで

来ました！藤堂家の戦姫と名高い”神尊”、超大型ルーキーです!!!

『ちなみに一年のみの学年順位では断トツの一位です。世界的にも希少な「全属性魔術」の使い手、魔術界の至宝ツ!!!』

『続いていきましょう!』第九席!!!綾坂未来!!!』

『保健委員長にして「聖母」の二つ名を取る最高峰の「回復術式」使いです!絶大な人気を誇る学園のアイドルと言つて差し支えないかと。ちなみに私も大ファンです!!』

『生放送で私情を挟むんじゃないよ。そして彼女は非戦闘型魔術師にも関わらずこの高順位なんですよね。圧倒的な支援^{サポート}能力の高さが窺えます』

『続いて”第八席!!!諸星敦士!!!』

『東帝学園きつての武闘派勢力「大文字一派」、そのNo.2です!!』

『外見は優等生そのもの、しかしその戦闘能力は折り紙付き!!インテリヤンキーつてヤツですかね』

『「軍師」の異名を持つ、頭脳と武力を兼ね備えた切れ者です!!』

『そして”第七席!!!神宮寺奏!!!』

『スマートながらも鍛え抜かれた肉体を誇り、学園の戦闘集団「風紀委員会」を束ねるクールビューティ!!!』

『魔力保有量は少ないですが、体術と剣術の練度は達人級!!「剣鬼」の異名で呼ばれる、

近接戦闘のエキスパートです!!』

『続きまして”第六席”!!ステイブ・ジャクソン!!!』

『ここに来て初の二年生が登場ですツ!!米国から武者修行の為に来日して来た留学生
!!』

『あらゆる能力値で高い水準をマークする万能の魔術師、更には一刀流の使い手たる「剣
士」でもあります!!』

『いよいよ折り返しです、”第五席”!!結城結弦!!!』

『二年次からこの東帝学園に編入して来たという異例の経歴の持ち主です!!第三学年に
して今回十席に初選出!!』

『そして彼の^か高難度魔術「空間操作術式」を自在に操るテレポーター、まさしく”晩成の
強者”です!!!』

『そしてここからは「東帝戦」本戦トーナメントにてシード権を獲得するトップ4の発表
になりますツツツ!!!』

”第四席”ツ!!如月亜門!!!』

『かつて関西最強コンビと謳われた「如月兄弟」の一人、「風神」の異名を持つ”学園最
速”の男ですツ!!!』

『現在二年生ですが昨年の東帝戦ではルーキーながら大波乱を巻き起こしました!!今年も台風の目と思われまます!!』

『更には学園屈指の問題児ながら「風紀委員会」の一員でもあります!!毒を以て毒を制すとはこの事、兎に角話題に事欠かない人物です!!!』

『第三席” ツ!!大文字獅堂!!』

『全学生の中でも別格の力を持つ「学園三強」、その一角が遂に登場ですツ!!「大文字一派」のトップに君臨するその男、雷を纏う姿に付けられた異名は「金獅子」!!!』

『怪物級の脅力を誇る、最凶の豪傑ですツツツ!!!』

『そして” 次席” ツ!!黒乃雪華!!!』

『生徒会執行部、保健委員会、風紀委員会の三大組織が合体した「生徒会連合」を率いる絶対女王、” 生徒会長” が満を辞して登場ツツツ!!!』

『その美貌もさる事ながら、学園三強の一角たる実力もまた本物です!!!』

そして現れる、最後の一人。

『遂にやって参りました……………」首席” の発表ですツツツ!!!』

『天堂、蒼!!!』

『「劍聖」の異名を持つ、唯一無二の学園最強ッ!!』

『その戦闘能力は、学生どころかプロの魔術師をも凌駕していますッ!!』

『そしてこの男なんと、一年次と二年次で立て続けに東帝戦優勝を飾り現在二連覇中!!!』
『過去では唯一、若狭憲吾のみが達成した「東帝戦三連覇」を射程圏内に捉えていますッ
!!』

『今年、その牙城を崩す者は現れるのでしょうかッ!!はたまた無敗の王者が三度目の頂
へと手を掛けるのかッッッ!!』

遂に出揃った、”東帝十席”。若き魔術師達が集うこの学園にて、覇を競い合う戦い
が始まろうとしていた。



「よう、恭夜君。やっと見つけたぜ」

東帝学園管理棟・教員私室にて、ドアに寄り掛かっていた一人の少年が口を開く。

「おー、誰かと思えば学園のキング様じゃねーか。今日はどうした」

その部屋の主——桐谷 恭夜は声を掛けて来たその少年へと、茶化すように笑いながら用件を問う。

そこに立っていたのは学園中で今話題に挙げられている渦中の人物、天堂 蒼だった。

「や、別に大した用事ってワケでもねーケドさ……二年前の約束、忘れてねーよな？」
「あー、アレな。……分かった分かった、思い出したわ」

不敵な表情の蒼の言葉に、恭夜は過去に彼と交わした会話を思い起こしていた。

——二年前。

『なア。俺と本気で戦ってくれよ』

一年生ながら、東帝魔術学園の頂点に立った蒼。

しかし更なる強者との戦いを求めた彼は、最強の魔術師である恭夜との決闘を望んだ。その申し出に対して恭夜は、蒼に一つの条件を課す。

それは、三年間この学園のトップとして『勝利し続ける』事。

そして今、蒼は東帝戦三連覇を目前にしている。”退屈”の終わりを告げる待望の闘いに、手が届く時が漸く訪れようとしていた。

「この東帝戦も勝つたら、約束通り戦ってやるよ。……………けどな」

改めてその決闘を受ける恭夜だったが、愉快そうに笑ったまま続けて口を開く。

「今年はお前でも、そう簡単に勝てるかは分かんねエぞ」

蒼は現在二連覇中の、学園の絶対王者。にも関わらず、その盤石の勝利を疑うかのような恭夜の忠告に、蒼は訝しげに声を返した。

「へエ……………何か面白エ未来でも視えてんの？……………あ、ひよつとして恭夜君の教え子が俺に勝つとか？」

「フフツ、どうだろうなア」

恭夜が担当している一年生の数人ならば、蒼を上回る未知数の成長性、或いは潜在能力を隠している可能性もある。しかし蒼の問いに対しても恭夜は、相変わらず逸らかすように笑うのみ。

「まあいいよ。俺の喉笛喰い千切るよオナヤツが出て来るなら……ソレはソレで面白そうだしな」

蒼はそう言い残し、恭夜に背を向け歩き出す。

”最強”の少年が求め続けるのは、自身を超える”誰か”との闘いだけだった。

第21話『高次魔術訓練』

期末考査終了後の七月上旬、二週間という期間を設けて実施される『高次魔術訓練』。東帝のカリキュラムに組み込まれているこの課程は、二、三年の中でも特に優れた能力を示し選ばされた、約百名程度の生徒を対象として行われる。

従来よりもハイレベルかつ専門的な演習を控え、彼等は学園最大規模施設の一つである『第三演習場』に集められていた。

「おー、集まってる集まってる。みんな気合い入ってるね〜」

「ふふっ、ちーちゃん楽しそうだね」

「そりゃー、みんなでワイワイやれる年一のイベントみたいなモンだしね。雪華もそう思うっしょ?」

「遊びじゃないのよ?」

周囲の生徒達から注目の視線を寄せられながら、その場に姿を現す五人の少女。

黒乃 雪華、白旗 千聖、綾坂 未来。

『生徒会連合』の中核を担う三人に続き、彼女らの腹心である一条 ハルと九重 絵恋も

側に控えていた。

一方でその向かい側から、殺伐とした空気を纏った集団が姿を見せる。

その先頭にて彼等を率いていたのは、諸星 敦士と蛇島 司——『大文字一派』の両翼たる二人だった。

「おーおー今日も御苦労なこった……目障りな顔が揃つてんなア」

「……やめておけ」

挑発的にそう吐き捨てる蛇島を、静かに諫める諸星。

生徒会勢力と敵対している不良軍団の登場に、雪華達の忠実な部下であるハルは苛立たしげな表情を露わにしている。隣の絵恋もハルほど露骨ではないにせよ、彼等をあまり快くは思っていないようだった。

しかし千聖は然程気分を害した様子も無く、敵意を隠さない二人を軽く宥めながら普段通りに話し掛ける。

「お、ヤンキーのくせにマジメに来てんじやーん。獅堂シドは？サボつてんの？」

「さアな。……大方、気分が乗らなかつたとか、そんな所だろう」

樂しげに訊いて来る千聖に、淡々とした声で諸星が返答した。

生徒会と大文字一派は犬猿の仲だが、互いのNo. 2同士であるこの二人は不思議と

険悪ではない。その背後ではハルと蛇島が睨み合っていたが、その場にまた別の新たな集団が現れる。

「——何だ？……暴れたいなら、私達が相手になるぞ。蛇島」

「ツ……神宮寺……!!」

好戦的な声色で蛇島へとそう告げたのは、屈強な『風紀委員』達を従え歩いて来た神宮寺 奏だった。更にその集団の中には、一際人目を引く派手な髪色の二人組の姿が見える。

「アカン……アカンな学食の麻婆は……」

「オマエがイキつて8辛なんか手エ出すからやろ。アホか」

「新メニユーがあそこまで本格派とか誰が分かんねん……」

「口ん中の感覚無エのは多分士門がブチ込んだ山椒のせいだろ？」

「オイ言わんでエエ事は言うな紅」

「待てやコラ。席立った時か？あん時か？」

緊張感の無い会話を繰り広げている彼等こそ、精鋭揃いの風紀委員会でも主戦力として恐れられている、如月^{キサキ}、如月^{アモン}、如月^{キサキ}、土門^{シモン}だった。そしてその如月兄弟の横には、二人と同じく二年生ながら『風紀』の主力である湊 紅輔も並んで歩いている。

東帝学園内の各勢力に属する実力者達が、この場所へと集結しつつあった。

しかしその中でも、別格の力を持つ人物が既にこの場へと足を踏み入れている。それを一早く察知したのは、この中で最も“彼”に近い実力を有している雪華だった。

「あー？獅堂も結弦ユツルも居ねーじゃん。揃い悪いなア」

その声に気付いた群衆が、慄くようにして一斉に道を開ける。

中央を闊歩するのは、『劍聖』の異名を持つ東帝最強の男。天堂 蒼だった。

一歩下がって彼に付き従っているのは、刀を携えた金髪碧眼の少年、ステイブ・ジャクソン。弟子として蒼に師事している彼もまた、学園“第六席”に位置する程の実力者である。

「おー？蒼くん珍しく来とるやんけ」

「ホンマや。しかも遅刻しとらんし」

「ルーズさでオマエらにどうこう言われたかねーよ」

気付いた雪華よりも更に早く、真っ先に蒼へ声を掛けたのは亜門と士門だった。

その声に応えながらも、誰かを探すように周囲を見回している蒼。

「……徹彦テツヒコは？ アイツ来てねーの？」

「アイツこそフツーにサボつとるんとちやうの？」

「それか、結城さんと風切と一緒に管理局に駆り出されてる……とかじゃないんすか？」
亜門の蒼への返答に、湊が隣から補足する。目的の人物がこの場に不在と分かり、蒼は期待外れと言わんばかりに小さく息を吐いた。

「なーんかアイツ全然出て来ねエよなア。俺のコト避けてんのか？」

「アンタが徹彦見つけたらすぐ戦おうとするからでしょーが。メンドくさがられてん
だつて」

いい加減気付きな？と千聖に軽く咎められながらも、やや不本意そうに蒼は首を傾げている。

「それより……今年はおもしろいルーキーが何人かおるらしいやんか。獅堂クンとも戦り
合ったヤツがおんねやろ？ なア諸星クン」

「……ああ。全力では無かったが……獅堂の一撃を、”アイツ”は確かに受け止めた」

その時士門と諸星が言及していたのは、一年生世代から選抜された数名の高次魔術訓練参加者について。彼等の実力を知っている蛇島やステイブは、その表情を僅かに顰

めていた。

「……………来たぞ」

ルーキーを話題に盛り上がっていた蒼や亜門達へと、奏が演習場の入口を示しながら声を掛ける。

開かれた扉から見えたのは——八人の人影。

「なア伊織、今日って俺ら何しに来たんだっけ？」

「話くらい聞いとけお前……………」

「高次訓練のガイダンスよ」

「俺達の実力を測る良い機会だ。そしてあわよくば麗しき先輩方とお近づきに……………」

「ホントに沢山いるね、先輩達……………緊張してきたな……………」

「俺は次こそ大文字に勝つ」

「何や、創来クン意外と燃えとるやんけ」

「あーダメだ……………ねっむ……………あと昼休み三時間……………」

姿を現したのは、上級生にも匹敵するその能力を見出された『選抜クラス』の一年生達だった。

「おつ、天音ちゃんおるやん。久しぶりやなア」

「亜門さん……お久しぶりです。土門さんも」

「え、何アンタら天音つちと知り合いなの？」

天音へと軽い口調で話し掛けた亜門に、千聖が意外そうに声を上げる。

「あー、オレらも天音ちゃんも家が道場やからな。ガキの頃によく試合とかで会つとつたんや」

「へー……意外な繋がりだわ……」

日本魔術界にも多くの門弟が存在している、『魔術剣』の二大流派『藤堂流』と『如月流』。その実子である天音と如月兄弟は、幼少期から交流試合などで顔を合わせる機会が度々あったと言う。

「海は元気にやつとるんか？」

「ええ……英国イギリスからよく手紙が届きます。相変わらず、聖神教に傾倒してるみたいです」

「クソ真面目なヤツやからなくアイツ」

一方で土門と天音は、外国に出向いていると思しき“ある人物”について、二、三言会話を交わしていた。

「やー、アツシ君も司もなんか久々だな。元気にやってんの？」

「黙れ。テメエ馴れ馴れしいにも程があんだろオがクソが。ナメてんのかコラ」

ヘラヘラと笑いながら肩に手を置いて来る日向を、蛇島は鬱陶しげに振り払っている。

「……アイツからお前に伝言だ。『再戦ならいつでも受けてやる。もう一度戦う気があるなら、スラムに來い』……だ、そうだ」

「成程ね……OK OK、また近い内に行くつつつといて」

そして諸星が口にしたのは、預かっていた日向への言伝。

学園内での戦闘を良しとしない風紀委員長の奏はこちらを睨んでいたが、それを聞いた日向は不敵な笑みを浮かべながら、諸星へとそう託けていた。

「沙霧ちゃーん♪一年生なのにちゃんと選ばれててすごいね〜」

「綾坂先輩！いえ……私なんて、みんなに比べたら全然で……」

未来は以前から面識のある沙霧を見つけ、手を振りながら話し掛けている。

「ふふっ、大丈夫だよ。一緒に頑張ろうね」

「はい……!!」

恐縮しきつっていた沙霧だったが、優しげな表情で笑う未来へ嬉しそうに頷き返していた。

「感じるか一文字。アレが、”マイナスイオン”だ……プライストレス……!!」

「え、いやまあ何となくは……」

「キメエな」

少し離れた場所では、彼女達の遣り取りを啓治が満面の笑みで眺めている。彼のその様子に陣は曖昧に頷き、伊織は直球でそう吐き捨てていた。

「ほぼ全員揃ってるわね。始めるわよ」

そんな中、最後に演習場へ到着した三人の人物の足音が響いて来る。

白衣を纏った女性教師、冴羽 怜に続き、主任教員の万丈 大和と技能指導員の久世 宗一もこちらへ歩いて来ていた。

「今日は桐谷先生はいらっしゃらないんですか？」

「なんかアイツ最近忙しいみたい。まあアイツ、こういう説明の時は大体出しやばって来るもんね。気になるのも分かるわ」

そこで雪華が、普段は演習などにもよく顔を見せる恭夜が居ない事に気付く。珍しくはあったが、彼が多忙な事は周知であったので誰もそこまで気に留めてはいなかった。

「……ではこれから、高次魔術訓練についての説明をしていく」

「——つか、大和センサーってマジでガタイいいよな。顔もめっちゃ怖エシ」

「確かに……強そうだな。あの厳つさは俺達も目標にすべきだ」

「うるせエゾアホ共。フィジカル議論ならヨソでやれ」

「啓治くんもポリウムはあんま変わらへんで」

「オイそこのバカ四人。まとめて叩き出すぞ。話くらい黙って聞け」

「[[[[ヒツ……………]]]]」

雑談していた日向・創来・啓治・陣は、鬼の形相の冴羽に睨まれ縮み上がる。その横では何とも言えない表情で佇んでいる万丈の肩を、半笑いの久世が軽く叩いていた。

『高次魔術訓練期間』

・ 選抜された全101名の生徒は、7/2〜7/6、7/9〜7/13の期間中、午後から行われる高次魔術戦闘訓練に参加しなければならない。

・ その間、実施されている本来の授業への出席は免除される。

「……つーコトは、座学受けなくて良いってコトか……!?」

「後で説明してあげるから、今はちよつと黙ってなさいよ……!」

期待に目を輝かせている日向の脇腹を、小突いて黙らせている天音。

・訓練は監督権限を与えられた三年生を中心として、学生主導の下に行う。

「………すいません。ちよつといいつスカ」

そこで、投影されていた要項に目を通した伊織が、万丈へ質問を投げ掛ける。

「………これってつまり、俺達は先生方じゃなく先輩方から、戦闘についての指導を受けらるってコトっスカ?」

「そうなるな。我々教員も、円滑な訓練実施の為にサポートは随時行なっていく。だが基本は、主体性を重んじた生徒間での戦術共有がメインになる。こちらから必要以上に干渉する事は無い」

万丈からその答えを聞きながらも、伊織の表情には僅かに不満の色が見えた。

「………確かに、今まで桐谷から剣を習って来たお前からすれば………自分と同じ学生は、教えを乞う相手としては不足を感じるかもしれないな」

「……別に、そこまで言ってるつもりは……」

「……だが彼等は、お前達よりも一年間長く、魔術師としての確かな経験を積んでいる」

万丈は伊織へと諭すように、静かに、しかし力強く言葉を続ける。

「お前の実力は、こちらとしてもよく理解している。だがこの場にはお前と同格、もしくは上回る力を持った人間も確かに存在している。……得られる物は少なからずある筈だ」

東帝の魔術戦闘教育はあくまで学生の自主性を基軸としており、その方針は放任的にも取れる物だった。しかし、脈々と受け継がれて来たその伝統が、若くしてこの国を護る盾でありまた矛となる強靱な魔術師を育てて来た事も事実である。

「……分かりました」

伊織は納得の意を示すと共に、静かに引き下がった。

「フン……露骨に無礼な奴だな」

「まあまあ……」

その横では、咎めるような視線を向ける啓治を沙霧が諫めている。

・7/16〜7/20の期間は、シード4名を含めた選抜者60名によるトーナメント形式の対人戦闘演習を行う。

「……二年と三年は既に知っていると思うが……『東帝戦』についての説明だ」
 そして万丈が最後に言及したのは、「東帝最強」を決める学内トーナメントについて。

訓練参加者101名の中から更に、60名の魔術師を選抜し1対1での戦闘を行わせる。トーナメントに於いてシード権を持つのは、席次番付の上位四名。

昨年の東帝戦にて、一年生ながらベスト4という大躍進を見せた亜門。

氷と闇の複数属性魔術師であり、学園内で数少ない『特殊魔術』アヒリテイマジックの使い手でもある雪華。

純粋な戦闘能力だけならば、その雪華をも上回る獅堂。

そして入学以来、東帝戦で二年連続優勝中の蒼。

彼等四人以外にも、警戒すべき数多くの強者がこの場には集っている。戦いへの緊張感と期待感を抱きながらも、「三人」の心中には全く同じ考えがあった。

(俺が——)

(私が——)

天堂^最 蒼^強を、倒す——!!

日向と伊織と天音、静かに闘志を燃やす三人の視線に気付きながら、蒼は不敵に笑っていた。

(アレが恭夜君の教え子三人組か……)

「俺の所まで来るのは、誰になるんだろうな?」

先日の恭夜の意味深な言葉を思い起こしつつ、蒼は小さく呟く。

「誰が来た所で、結果は同じでしょう。この場にいる全員、師匠の力の足元にも及びませ
ん」

隣に居たステイプは、蒼の圧倒的な実力を示唆するようにそう応えた。しかし、蒼の愉しげな表情は変わらない。

「いやア……そりやまだ分かんねエだろ」



「ねー流星さん。いくらオレらがクソ暇窓際部署とは言え、流石にこんな雑用にまで駆り出すのは勘弁してもらえないスカね」

魔術都市を走る黒のセダンの運転席にて、ハンドルを握る山吹色の髪の青年がそう零す。

「まアそう言いなさんな。折角の”母校”訪問なんだし、人数いた方が賑やかで良いですよ」

その声に応えたのは、後部座席に腰掛けている藍色の髪の人物。長髪を束ねたその流麗な美青年に対して、今度は助手席に座っていた黒髪の男が口を開く。

「つーか速水さん、そもそも俺らって今日何しに行くんスカ?」

「アレ、言ってなかったっけ?まア、捜査情報の一部共有と協力要請ってトコかな」

「いや、流星さん言ってましたよ。このゴリラがちゃんと聞いてなかっただけっスね」

速水と呼ばれた人物のその返答に、運転手の青年が流れるような罵倒と共に言葉を続けた。

「確かに話を聞いてなかったのは俺が悪い。だがそれをお前に咎められる筋合いは無エ」

「いだいいだいいすんませんスンマセン痛いつてエ!!俺運転中!!」

しかし隣に座っているその男に耳を捻り上げられ、苦悶の声を上げながら即座に謝罪している。無礼な物言いのこの青年は、一応彼の後輩だった。

騒がしい車内にて、運転席の後ろに座っている最後の一人は無表情で沈黙を貫いている。

(……………帰りたいたい)

桔梗色の髪の青年、北斗 玲王。ゲラゲラと爆笑している先輩や同僚に囲まれる、彼こそ一番の苦労人だった。

「はいいよ、やーつと到着ですツと」

そして四人を乗せた車は目的地に到着し、正面ロータリーで停車する。

「ココも変わらないね……………」

長髪の青年は降車しながら、眼前に聳え立つ建物を見上げながらそう零していた。

「ヤッて……………行こうか」

歩き出す、漆黒のスーツを纏った四人。管理局に属する『魔術捜査官』達は、彼等の母校である東帝学園へと訪れていた。



夜、東京某所。

高架下のトンネルに響く、一人の足音。

歩いていたのは、大柄な体躯を持った金髪の男——大文字 獅堂だった。しかしその足取りはやけに緩慢であり、側から見ても動きが鈍い事が分かる。

不意に立ち止まった獅堂は、バランスを崩したかのように壁へと手を付いた。

(クソツタレが……………)

心中でそう毒づく彼の息遣いは荒く、額には汗が浮かんでいる。

その脇腹には、深く刺し貫かれたような傷跡があった。

夥しい量の血を流していた獅堂は、遂に膝を突きアスファルトに倒れ伏す。血溜まりの中でも、その目に宿る忌々しげな光は変わらない。

しかしやがて限界を迎え、彼の意識は暗闇へと沈んでいった。

第22話『再会と報告』

東帝学園、応接室にて。

「やーどうもどうも、もてなしてもらっちゃって……」

藍色の長髪を束ねた青年は、そう言つて案内された席へと腰を下ろす。スーツを纏つた端正な顔立ちのその人物の名は、速水^{ハヤミ}流星^{リユウセイ}。彼はある所用でこの東帝学園へと訪れた、魔術管理局の『魔術捜査官』だった。

その隣には彼と同じく管理局の『魔術捜査課』に所属する人物、北斗 玲王の姿もある。そして彼等を出迎えた万丈と冴羽は、テーブルを挟んだ向かいの席に腰掛けた。

「……北斗も息災そうで何よりだ。沢村とは上手くやれているか？」

「ええ。……相変わらず、掴み所の無い人ではありますが……優秀な上司だと、度々思いますよ」

北斗と同じ捜査課に属しており、彼とバディを組む事も多い沢村についての近況を訊く万丈。沢村と万丈はかつて、この東帝学園の門を共に潜つた同年代の学友だった。

「アレ、そういや正タダシと俊哉トシヤも連れて来るつつつてなかったっけ？」

「あー、あの二人はヒマそうだったから連れて来ただけなんだよね。テキトーに時間潰しとして言ったらホントにどっか行っちゃった」

「自由過ぎんだろ……」

冴羽は速水達と共に来校していた筈の、残りの二人の姿が見えない事に気づく。運転席と助手席に座っていた彼等は、どうやら暇を持って余し校内探索に繰り出したようだった。

「奴等には、その奔放を通すだけの實力があるからな……」

「腕っ節だけの用心棒部署とはよく言ったモンだわ……」

速水と北斗の『捜査課』とは別の部署に属する、彼等二人の實力に言及しながら苦笑を見せる万丈と冴羽。

「——で、結社についてはなんか掴めたワケ？」

「いやー……恥ずかしながらまだ、殆ど何も。足取りもさっぱりでさア」

そこで冴羽は、本題である『刻印結社』について問い掛けた。

日向達へと干渉した後、行方を眩ました三人の番号ナンバー刻印。国外へ脱出したとの情報は

無く、この魔術犯罪者達が東京の何処かに潜んでいる事は間違いない。

しかし忽然と消えた彼等の姿は、事件から二週間以上が経過した今でも発見されていなかった。捜査は難航していると、肩を竦めながら速水は告げる。

「……管理局がここまで追って見つからないなら、もう魔術都市には居ないんじゃないのか？」

「ですね。『表』に出てる可能性はかなり高い……」

万丈の推測に応えながら、コーヒーに口をつける速水。

「上からも少しづつではありますが、圧力が掛かり始めてます。対応を急ぐようにとの通達がありました」

「まアこの状況自体が既に外聞悪いしね……ホントお疲れさんだわ」

管理局が置かれている現状を北斗から聞かされ、冴羽は同情するような声と共に溜息を零した。

国際的テロリストの潜伏を許しているこの状況は、既に他国にも知られ始めている。国家間情勢への影響を懸念している政府上層部は、魔術師協会日本支部に早急な事態収束を求めていた。

「そこで、なんですケド……沢村さん、捜査規模をかなりデカくするらしいんですね。上への提言がついさつき通つたみたいです。人員も追加投入するとか」

「ほう……アイツにしては、思い切つた考えだな」

速水から聞かされたのは、沢村が計画している捜査の範囲拡大について。

「こつからはお願いつつ一要請なんですけどね……」

「あーハイハイ、結弦^{ユツル}だけじゃなくてアランと徹彦にも手エ借りたいつてコトね」

「理解が早くて助かるよ」

そこで冴羽は、速水が口にしようとしていた内容を先んじて言い当てる。それは東帝に在籍している三人の学生に対する、管理局の捜査への協力要請だった。

「風切の諜報能力があれば、的を絞つた捜査活動によつてより進展が見込めます。無論身の安全については、我々が嚴重に警護を行います」

「あー大丈夫大丈夫、その辺はあんま心配してないから」

彼等生徒の安全面については、管理局による護衛を信用していると北斗へ告げる冴羽。

「古田が居れば、お前達の作戦の生存率が上がるという事も理解出来る………分かつ

た、学長に話を付けて来よう」

「ホントですか、いやアありがとうございます。助かりますよ」

そう言つて席から立ち上がった万丈へと、一安心と言つた表情で速水が礼を述べる。その隣では、北斗も静かに頭を下げ感謝の意を示していた。

「……だが、あくまで生徒には拒否権があるからな。まだ確定した訳ではない事は把握しておけ」

「つつてもまあ……アランと徹彦に関しちや、サボリの口実が出来たつて喜ぶだけだろうけどねエ……」

最後に釘を刺すような言葉を残し、退室して行く万丈。そして冴羽は小さく笑いながら、カップの中のティースプーンをかき混ぜていた。

三人になつた部屋に訪れる、僅かな静寂。

「……………もうすぐ一周忌ね。龍臣の」

「……………そうだね……………」

沈黙を破つたのは、冴羽が発した一言だった。それは彼女と速水の、共通の友人についての話題。

「……………外しましょうか？」

「いや、気にしなくていいよ」

二人の心情に配慮し席を立とうとした北斗だったが、必要無いと速水が呼び止める。

戦国セングワ 龍臣タツオミ。

速水と冴羽と同世代の人物であり、日本の魔術旧家『戦国家』当主でもあった男。彼は一年前、米国アメリカで起こった刻印結社との戦いの中で命を落としていた。

実際に対面し顔を合わせた事は数回程度しか無かったが、優れた実力を有し人望も厚い人物であった事は北斗の記憶にも残っている。

そして彼の訃報を受け取ったあの日、速水の横顔に浮かんでいた憎悪も未だ鮮明に思い出こす事が出来た。

「……………どうこう言うつもりは無いけど……あんな無茶すぎんじゃないわよ」

速水は結社が関係した全ての事件を、私怨めいた執念で追い続けている。いずれ暴走し兼ねない彼の危険性を、口には出さずとも冴羽は薄々感じ取っていた。

「何、心配してくれてんの？」

「バーカ、玲王達にケツ拭かせんなってんのよ」

彼女からの指摘を茶化すように逸らかすが、案じているのは北斗達だと一蹴される速水。

「まあ、大丈夫だよ。やるべき事を、見誤るつもりはないから」

己の責務を全うする。そう言つて薄く笑う速水の横顔に見えた、僅かな不穩さを北斗は胸中に留めていた。



東帝学園、第七訓練エリアにて。

「さて、と……………メンドクセーけど、ボチボチ始めてどうか……………」

そこには既に、演習の開始を待つ十数人の二年生が集まっている。

少し遅れて気怠げな声と共に姿を見せたのは、眠そうに後頭部を掻く白髪の青年。長い前髪から青色の瞳を覗かせていたその人物は、東帝の『術式技能指導員』久世 宗一だった。

「術式を構築する上でまず第一に組み立てないといけないモノ……………絵恋、解るよね」

「『図式』です」

「ハイ、正解」

絵恋の返答と同時に久世は、魔力によって空間中へ図式を描き出していく。それは彼の脳内でイメージされている、魔力の流通回路を可視化した物だった。

「俺のは『回路型』だけど、あくまで一例に過ぎないから。個々人のスタイルはそれぞれだしね……」

射撃魔術の本質は、魔力の『充填』と『解放』。極限まで引き絞られた弓や、重力が限界に達し落下する水滴などのイメージでも図式としての役割は果たす。

オールドツクス
一般的な型のみに関われないようにと、久世は注意を促していた。

「OK、それじゃ実践やってこうか……ハルはマグナム使っちゃダメだよ」

「分かってますって……」

ハルの大腿部に備え付けられたホルスターを指差し、釘を刺しておく久世。彼女の銃は魔力を直接弾丸へと変換するバイパス機構が搭載されており、術式発動の為の図式構築を短縮出来る代物だった。

生徒達が訓練へと移っていく中、久世は新たに二人の人物がこの場に現れた事に気付

く。

「……OBとは言え流石にズカズカ入って来過ぎだろ」

そう言つて久世が背後を振り返ると、そこに立っていたのは黒いスーツを纏つた二人組。

「固エコト言つてんじゃねエよ」

「おー、宗一さんマジでちゃんと先生センセイやつてんだ。ウケる」

本郷 ホンゴウ 正と柊 タタシ ヒイラキ トシヤ 俊哉 トシヤ。久世の知人である彼等は、管理局の『魔術特務課』に所属する

プロの魔術師達だった。



訓練エリアの端で、壁際に並ぶ三人。

「新設の課は慣れたの？」

「まあ、ボチボチだな」

学生時代は同学年でもあつた久世と本郷は、互いの近況について語り合つていた。

「つつても実際、体の良い雑用みたいなモンっスからねー。毎日コキ使われてますよホント」

柊は視線で女子生徒達を追い掛けながら、不満げな口調でそう愚痴を零す。

極めて高い白兵戦闘能力を持ちながらも、命令違反や独断専行を重ね『武装部隊』から懲戒除隊の処分を下された本郷。

天才魔術師として鳴り物入りで入局しながらも、手段を選ばない強行捜査で捜査課からの異動を余儀なくされた柊。

そんな異端児二人を抑えておく為の実験的部署『魔術特務課』は、特命とは名ばかりの雑務を回されそれをこなす日々を送っていた。

少なくとも、表向きは。

「……………で、今日は何しに来られたんで? ……まさか、速水さんの送迎だけってわけじゃないでしょ」

「……………俊哉」

「はいはい、了解ですよー……………」

二人が今日東帝を訪れた、本来の目的について久世が問い掛ける。

対して本郷は柊へと声を掛け、周囲に簡易的な結界を展開させた。付近の四方を囲んで構築された不可視の壁は、空間遮断によって外部からの盗聴及び魔力感知を防ぐ。

「……………どうも俺達管理局の動きが、向こう結社に読まれてるらしい」

「……………情報を流してる人間がいる、とでも言いたいワケ？」

「早計だと思うか？……………少なくとも、王我さんは疑ってる」

本郷が言及したのは、この国の中枢に刻印結社の内通者が潜入している可能性だった。

「こんだけ追つても連中の足取りが掴めねエつつーのもありますケド、ノーマークで三人も入って来ちまつてるこの状況がそもそも説明つかねエンスよ」

捜査情報が筒抜けになつてゐる事に加えて、三人の番号ナンバーズ刻印の密入国を手引きした『協力者』の存在についても終が指摘する。

そして王我はそのスパイを特定するべく、本郷ら特務課に本来の捜査と並行させ内部調査の密命を下していた。

「それだけじゃねエ。奴等は御剣伊織と藤堂天音の能力の詳細についても、正確に把握していた」

「成程……………疑われてんのは学園他関係者もつてコトね……………」

それに加えて協会内部だけでなく東帝学園内にも、或いはその両方に内通者がいる可

能性も示唆する本郷。

「まア、宗一さんは除外されてるみたいなんで安心して良いと思いますよ」

「お前みてエな事勿れ主義の野郎が、裏切りのリスクを負う動機は無エしな」

「ハハツ、ご明察。……まーお前ら二人も、スパイやるにはちよつとアホすぎるしね」

柊・本郷・久世の三人に関しては、性格的に内通者の可能性は無いと王我が判断していた。故に今回の内部調査に於いて、彼等に白羽の矢が立った訳である。

「……で、この段階で誰か目星は付いてんの？」

久世が問い掛けるも、本郷と柊の顔には予想以上に渋い表情が浮かんでいた。

「いや……それが全くでな……」

「なんか全員怪しく見えてくるんスよね……」

「……今からでも王我さんに謝って来れば？俺らは人選ミスでしたっつて」



鉄扉を蹴り破る、轟音。

「やっと見つけたぞ……」

スラムに存在する旧演習場に足を踏み入れたのは、刀を手にした御剣 伊織。
「おー、来やがった」

その視線の先で彼を待ち構えていたのは、場内のステージ上で寝転がっている茶髪の少年だった。更にその傍らには、刀を携えた金髪の少年の姿も見える。

天堂 蒼とステイブ・ジャクソン。学園トップクラスの戦闘能力を持ち、東帝十席にも名を連ねる二人の実力者だった。

「訓練もせずにサボりとは良い身分だな、”先輩”」

「ブーメランプツ刺さってんぞ”後輩”。……一応聞くが、何しに来たオマエ」

他の生徒達が高次訓練に参加している中、惰眠を貪っていた学園最強の男へと伊織が相対する。

「回り道は嫌いなんでな。手っ取り早く強くなるなら、アンタをブツ倒すのが一番近道だろ」

「……よく分かってんじゃねーか」

JOKERやゼロとの戦いで、完敗を喫した伊織。力が足りないのなら、更なる戦いの中で強くなるしかない。例え相手が、学園の頂点に立つ魔術師であるとしても。

「いいぜ、どつからでもかかって来い。相手になつたらア」

起き上がった蒼は、招くように軽く指を折り曲げ挑発的に笑い掛ける。

「だつたら……遠慮無く行かせてもらおう」

静かな口調でそう告げると同時に、伊織は強靱な脚力で地を蹴った。

驚異的な速度によつて瞬く間に距離を詰め、繰り出された刺突が蒼へと襲い掛かる。

しかし、突き込まれたその刃が届く事は無い。

「ただし……まずは俺の一番弟子と戦り合つてもらおオカ」

蒼の眼前では、抜刀したステイプが伊織の一撃を防ぎ止めていた。

「師匠と剣を交えるならば、俺を通してもらおう」

「上等だよ……アンタもいずれ、倒すつもりだつたしな……!!」

淡々と言い放つたステイプは、その一刀を振り抜き相手を吹き飛ばす。対して伊織は体勢を立て直しながら、寧猛に口角を吊り上げていた。

刀を構える両者、その戦闘スタイルは同系統。

この魔術師の学園で、二人の『剣士』は激突した。

◇
◇
◇

そして伊織だけでなく、”彼等”もまた動き出していた。

◇
◇
◇

スラムにて。

「……お前らに用は無エよ。大文字を出せ」

「生憎だが……アイツは今留守だ」

「クソ生意気なルーキーだなオイ。口の利き方から教えてやるオカ」
剣呑な視線を向ける創来の前に、諸星と蛇島が立ち塞がる。

◇
◇
◇

医療棟にて。

「さあて……気合い入れて頑張っていこうか、沙霧ちゃん」

「はい……!!」

未来の言葉に、緊張した面持ちで頷く沙霧。



武道場にて。

「武装に頼るな。体術は全ての戦闘の根幹だ」

「はい……もう一本、お願いします……!!」

奏に幾度となく打ち倒されながらも、静かな闘志と共に起き上がる啓治。



訓練施設にて。

「お、天音つちは雪華に弟子入り志望かい？お目が高いねえ」

伊織達がそれぞれの戦いへと赴く中、天音は『生徒会連合』2トップである雪華と千聖の元を訪れていた。

「……自分に足りない物を教わりに来ました。よろしくお願いします」

雪華は天音にも匹敵する程の、膨大な魔力保有量を誇る。彼女の優れた魔力操作技術

は、天音が持ち得ない物だった。

「桐谷先生ほど、上手くは出来ないかもしれないけど……私に教えられる事なら、全て貴女に教えてあげるわ。よろしくね、藤堂さん」

高次訓練に於ける指導を承諾した雪華達に、天音は静かに頭を下げる。

プライドに囚われている時間など無い。もっと、強くなる為に――

第23話 『進化への助走』

伊織や天音達は、上級生の元で鍛錬を重ねている。

そんな中日向は、屋上に寝転がり呆然と空を見上げていた。

——思い起こされるのは、紅蓮との戦いで喫した完膚なきまでの敗北。

啓治や獅堂、創来とも互角以上に渡り合って来た日向。しかし紅蓮の力は、自身を遥かに凌駕する程に圧倒的だった。

同じ『炎』でありながらも、一方的に捻じ伏せられ灼き尽くされる明確な実力差。日向の心は、行き止まりに突き当たったような閉塞感に支配され始めていた。

「——浮かない顔だな」

その時、横になっていた日向の頭上から聞こえて来た声。視線を上げるとそこには、灰色のスーツの上から外套を羽織った一人の女性が立っていた。

「ガクエンチョー………学園長じゃん。珍しいね、こんなトコ来るとか」

東帝学園学長、神宮寺 澄香。意外な人物の登場に、日向は軽く驚きを見せる。

「……敗北が頭から離れないのか？」

「……鋭いね。まあ、そこまで気にしてるつもりは無エんだけどさ……」

内心を言い当てられ、小さく苦笑する日向。しかし澄香は穏やかな口調で言葉を続ける。

「お前は桐谷の生徒だったな」

「え……うん、そだけど」

「……奴もよく、屋上ウチノカミで暇を持て余していた」

「らしいね。このサボリ場教えてくれたのも恭夜センサーだし」

そう口にする澄香の瞳に見えるのは、僅かな旧懐の情。

「今でこそ最強と言われているが……あの男も昔はお前と同じ、悩める一人の学生だった」

「っ……………」

「お前の力はまだ発展途上だ。……それに、再戦の機はいずれ必ず訪れる。お前がやるべき事は迷うよりも、鍛え、備える事ではないのか？」

——立ち止まっている時間など無いと、静かに、しかし力強く諭される。澄香は日向が持つ、『可能性』と『成長性』を信じていた。

「……………魔力がさ、『上書き』されるような感覚だったんだ」

「……………?」

口を開いた日向が言及していたのは、紅蓮が戦いの中で見せた『火属性魔力』について。

「同じ属性なのに、全く相殺出来なかった。なんつーか……俺の魔力が”削られて”、”呑み込まれる”みてエな感じだったんだよな」

地獄の業火の如き、紅蓮の炎。あの力に対抗する手段が無ければ、そもそも勝負にすらならない。しかしそれを全く見出せないが為に、日向の鍛錬は行き詰まっているようだった。

「成程な……つまり、魔力密度の問題か」

「え?なんか言った?」

一方で澄香は、腑に落ちたと言った表情で小さく呟く。その声に反応し、聞き返して来た日向へと彼女は続けた。

「お前、天堂の事は知ってるか？」

「蒼のコトか？うん、まアなんとなくは。東帝で一番強エんだろ？」

「奴は恐らくスラムの旧演習場にいる。会って今の話をして来い。それと、『斬界』について教わって来る事も忘れるな」

澄香から告げられたのは、東帝の全学生中最強と謳われる男の名前。彼を訪ねろという勧めに、戸惑いながらも日向は頷き返した。

「奴ならお前が抱えている問題の、答えの一つを知っている筈だ」

「そうなのか……分かった。行ってみるよ」

立ち上がった日向は駆け出そうとして、ふと足を止める。

「ありがとな、澄香センチー」

振り返った日向はそう言つて、今度こそ屋上から飛び降りて行つた。その背中を見送りながら、澄香はある男の後ろ姿を思い出して微笑に笑う。

仲間と共に歩き、時には仲間を導いていた”彼”もまた、日向と同じように真つ直ぐに強さを追い求めていた。

(……………似ているな、戦国に——)



「オイオイ、逃げてばっかじゃいつまで経っても勝てねエぞ伊織〜」

ステージ上で胡座をかき、愉快そうに声を上げている蒼。その視線の先では、伊織とステイブが激しい戦闘を繰り返していた。

無属性魔力×形成術式

『飛斬^{ヒザン}』

ステイブが自身の刀に魔力を纏わせ、鋭く振り抜く。撃ち放たれたのは魔力で型作られた、術式名通りの”飛ぶ斬撃”だった。

「ッ……!!」

回避不能のタイミングを狙われ、刀身でのガードを試みる伊織。しかし防御されて尚その斬撃は、伊織を演習場内の壁際まで押し込む程の威力を残していた。

更にステイブは追撃を仕掛け、鋭い斬り上げで伊織の手から刀を弾き飛ばす。即座に二本目へと手を伸ばす伊織だったが、ステイブの方が一手速かった。

抜き放とうとした刀の柄頭を踏み込まれ、抜刀を封じられる。そして武器を抑えられた次の瞬間には、喉元へと刃が突き付けられていた。

「……勝負あったな」

蒼がそう告げると同時に、回りながら宙を舞っていた刀が床へ突き刺さる。

これで、伊織の16戦16敗。学園第六席に座す男の実力は伊達ではなかった。

「まだ続けてもいいけどよ……お前、自分の敗因については理解出来てんのか？」

刀を収めているステイブの背後から、蒼が伊織へと問い掛ける。

「分かってんだよ……力不足なら、俺が一番……!!」

苛立たしげな声を返しながら、再戦を挑むべく立ちあがろうとする伊織。対して蒼の口から放たれたのは、普段の彼からすると意外とも取れる理知的な言葉だった。

「あのなア……我武者羅に戦った所で強くなれるワケじゃねえんだぞ。弱点を正確に分析して、フィードバック出来なきゃ意味無えんだ」

焦りが見える表情の伊織を抑えながら、蒼は落ち着き払った口調で続ける。

「自分には今何が必要か、何が足りねエのかを理論で説明出来るようになれ」

「……だから……頭で考えた所で、飛び道具が使えるようにでもなんのかよ」

「成程……把握自体は出来てるよオで何よりだ」

伊織が口にした自身の弱^{ウイークポイント}点とは、『遠距離攻撃』という^{戦術}手札を持たない事。剣技だけ

の勝負なら寧ろ伊織が優位と思われたが、ステイブの『飛斬』は剣士の戦いに於いて、

一方的に攻撃出来る強大なアドバンテージだった。

「解ってんなら話は早エ。お前がやるべきは……」新技「作りだ。それも遠距離用のな」

ニヤリと笑いそう言った蒼に、無茶を言うなど伊織が反論する。

「だから……そもそも俺には魔力が」

「無エんだろ？ンなこと解つてらア。俺は『魔術』じゃなくて『技』を作れつつつてんだよ」

「……はア……？」

彼が何を言っているのか理解出来ず、疑問の表情を浮かべている伊織。

「大体なア……俺達からすりや、魔力も使わず術式ブツた斬るよオなお前の芸当の方がよっぽどバカげてんぜ。ソレに比べりや、斬撃を飛ばす事なんざワケ無エだろ」

「……簡単に言いやがって……」

蒼は伊織が持つ戦闘センスと、高い潜在能力を認めていた。勝手な言い分にも聞こえるその言葉に、溜息を吐きながらも伊織は立ち上がる。

「ハラは決まったみてエだな。ならまずは……………」

……………死ぬほど振り込め」

「……………オイ」

そして蒼から手始めに課されたのは、矛盾も甚だしい我武者羅な修行方法だった。

◇◇◇

「ココか……………」

スラムの旧演習場へとやって来た日向は、巨大な鉄扉の前に立っていた。場内では誰かが暴れているのか、外まで轟音が響いて来ている。

「よし……………たアーのもオー」

意を決した日向は、扉を開けその中へと足を踏み入れた。そこで彼が見たのは――

――鋭い剣戟音と共に斬り結ぶ、二人の剣士の姿。

激しい乱戦を繰り広げていたのは、御剣 伊織とステイブ・ジャクソンだった。

その時、ステイブに斬り飛ばされた伊織が日向の近くまで転がって来る。

「……違う。もう一度だ」

「クツソオ……………!!」

ステイブに淡々と指摘されながら、刀を突き立て起き上がる伊織。

『斬る』んじゃねエ……『割って』『広げる』『イメージ……』

そう呟く伊織は、場内に入ってから来ている日向の姿も見えない程の集中で、戦いに没入しているようだった。

「頑張ってるなアイツ……」

「——ん？日向じゃねーか。こんなトコで何してんだオマエ」

伊織が地を蹴りステイブへと突撃して行く中、日向は背後から声を掛けられ振り返る。そこに立っていたのは、自販機で飲料を買い戻って来ていた蒼だった。



演習場からスラムへと出て来た二人は、オブジェのように積み上げられた資材の上に腰掛けていた。

「成程な……話は大体分かった」

澄香に紅蓮との戦いについて話をした事、そして彼女から蒼に助言を求めよう言われた事を日向は告げる。それを聞き終えた蒼は、暫く何かを考えるように黙り込んでいた。

「あー、それとさ……『斬界』？に、についても聞いて来いって言われたんだケド……」

「おー、ソレも後々説明してやるよ。関係あるしな」

自身の術式についても軽く触れながら、蒼は本題へと入っていく。

「まずは……紅蓮に『炎』で”押し負けた”原因だったか」

「うん。……何であそこまで威力に差があったのかも気になんだけど、アレにどう対抗すりゃいいのかが全く分かんねーんだわ」

「……ま、原因に関しちや答えは簡単だ。オマエの魔力が『密度』で負けてたんだよ」

まず蒼が言及したのは、術式構築の際にその強度を左右する『魔力密度』についてだった。

「属性魔術に限った話じゃねエけどな……術式を組む時、その規模が同じでもより多く魔力が込められてる方が威力は大きくなる。コレは理解出来るよな？」

「つまり、俺の炎は中の魔力がスカスカだったってコトか？」

「まア、あん時のお前は連戦の疲れもあつたろうけどな。火属性なんかは特に、魔力の交換効率がモロに威力に反映出されるんだよ」

『燃烧』性質の強さを決める術式中の魔力量に於いて、紅蓮の炎が日向を上回っていた事で、軍配が上がった訳である。

「だったら、その魔力密度を上げるにはどうすりゃいいんだ？」

そしてその具体的な方法を聞き出そうとする日向だったが、何故か蒼は難しい表情を浮かべていた。

「あー、それなんだがな……結論から言うと、気合いか反復ぐらいしかやり方は無エんだわ」

「気合い……？」

「まずは構築の話になるんだけどな……術式の組み方って、ザックリ二つに分けられんだよ」

そう説明する蒼は、両手に魔力で形成した刀を出現させる。

「二つ目は、何も考えずに魔力を押し固めて術式を作る。カンタンに出来るから発動が

速エし、魔力量が多いヤツなら威力もそこそこ出せる。獅堂とかはこのやり方だな」

「そう言つて蒼は右手に握つた、大振りな魔力刀を持ち上げた。

「で、二つ目は術式の中に魔術記号マジックコードを書き込むやり方だ」

そして蒼は次に、少し小さい左手の刀を日向に見せる。その刀身には、紋様のような謎の文字列が所狭しと書き込まれていた。

『魔術記号』マジックコード。

それは、魔術が始まった場所、イエルサレムで使用されていた、ヘブライ語を基に創り出された『魔術的な意味』を有する言語であり文字である。

「コッチのやり方は難しい上に構築に時間が掛かつけど、その分密度が上がつて威力も強くなる。コレは雪華とかが使つてるな」

蒼はその声と同時に、両手に持った刀同士を打ち合わせた。すると右手の刃はヒビ割れ、左手の刀に斬り碎かれる。

「けど、必ずしも記号コードを使う方が強エつてワケじゃねエ。物量差が質を上回る事だつてある」

「どっちのスタイルも使い手次第つてコトか」

しかし左手の刀を地面に突き立て、右手に更に巨大な魔力刀を創り出す蒼。その巨大

な刃は振り下ろされ、記号が書き込まれていた刀を斬り潰した。

「そういうコトだ。お前みたいな『近接型』は下手に記号コード使っても、速攻で殴れるつつー強みが消えるだけだからな」

「確かに、寧ろタイムロスになるよな……」

そうなることややはり根本的に魔力密度を上げるには、反復練習で術式に込められる魔力量を地道に増やしていくしか主な方法は無い。

「……つまり俺はシンプルに……鍛え方でアイツ紅蓮に敗けてたのか」

仰向けに倒れ込んだ日向は、そう口にしなから空を見上げる。しかし悲観的な様子は無く、疑問が解けたようにその表情は比較的晴れやかだった。

「……………お前、術式組む時に何か考えてるか？」

その時蒼が、傍らに立て掛けられていた刀を手に取りつつ口を開く。

「いや……ほとんど感覚でやってるけど」

「魔力で何かを作り出すなら、『型』ぐらいは意識した方が集積度はマシになるぞ」

術式を型作る『図式』について指摘しながら、刀を抜き放つ蒼。

「まアそれ以前に……魔術つてのは言っちゃまえば、イメージを具現化する力だ」
「っ……」

そう言つて蒼は、スラムの方角へと歩いて行く。その手に握られた刀には、膨大な魔力が収束していた。

そして。

無属性攻撃術式

『斬界』

刃は振り抜かれ、全ての魔力は解放される。

「——勝つイメージが無きや、勝てねエぞ」

蒼からそう告げられる日向の眼前では、巨大な斬撃によつて聳え立っていた旧校舎が両断されていた。

魔力を一点集中し放たれる、超高密度の一撃。それが蒼を最強たらしめる、『万物万象を斬り裂く』術式だった。

「凄エ…………!!」

規格外の威力を示すその光景に、瞠目し驚愕を露わにしている日向。尽くを焼き払う紅蓮の炎をも、蒼の『斬界』は恐らく斬ってみせるだろう。

（…………!!）

その時日向の脳裏には、一つのイメージが浮かんでいた。

より鋭く凝縮され、研ぎ澄まされた魔力^{エネルギー}。

全てを斬り裂く『刀』の如く。そのイメージが、『炎』という力の解釈を押し広げる。炎の”燃やす”力。そして————”灼き斬る”力。

「……………そうか……………!!」

僅かに見えた、『進化』への足掛かり。そう呟く日向を傍目に、蒼は小さく、しかし愉しげな笑みを零していた。

◇◇◇

「しつつけエな、テメエ!!」

「まだまだこっからだろオが、蛇島ア!!」

鬨ぎ合う、片手斧と大剣。

スラムでは蛇島 司と漆間 創来による、轟音を伴った激しい戦闘が展開されていた。そして周囲からその様を傍観しているのは、大文字一派の面々。

「しづてエな、漆間の野郎」

「蛇島さん相手にあそこまで粘るとは……やはり中々やるね、彼」

長髪を束ねた中性的な風貌の少年、壬生^{ミブ} 閃九郎^{センクロウ}が舌打ちと共に呟く。その声に落ちていた口調で応えたのは、臙脂色の髪を持つ少年愛染^{アイゼン} 光陰^{コウイン}。

「前は獅堂さんにノされてたが……鍛え直して来やがったつてか」

「つつても司先輩が手加減してるだけじゃねエのか? 『盾』も使ってるねエっぽいよ」

創来は以前にもスラムに乗り込んで来た事があったが、その時は獅堂に一蹴イチタロウされていた。彼が着実に力を付けて来ていると口にするのは、黒髪の少年斯波シバ 一太朗イチタロウ。しかしその隣に居た金髪の少年、鬼丸オニマル コージはそれに異を唱える。

彼等四人は二年生ながら、大文字一派に於いて諸星と蛇島に次ぐ実力者だった。

「バーカ。蛇島先輩は盾は使ってねーけど、『反射』リフレクト自体は使ってた。ちゃんと見ろ」
「え、マジかよ」

壬生からそう指摘され、眼前の戦闘を注視する鬼丸。確かに彼の言う通り蛇島は、瞬間的に小型の反射障壁を展開していた。

「諸星さんはどう見ます？この戦い」

「……そうだな……」

そして愛染が声を掛けたのは、四人の背後から同じく戦いを傍観していた諸星 敦士。彼が口を開こうとした、その時だった。

諸星の懐から響いて来る、電子音。メールが受信された事に気付き、携帯端末を取り出す。その画面に目を通した瞬間、諸星が纏っていた雰囲気が一変した。

唐突に立ち上がり端末を懐に仕舞った諸星は、蛇島達の方へと歩き出す。

「諸星さん？どうかしたんですか？」

「……急用が出来た。漆間を医務室に連れて行ってやれ」

その様子に愛染が気付くが、諸星は端的にそう返すのみで足を止めない。

「司!!」

「あア!?!」

そして突然、創来と戦っている真つ最中である蛇島へと声を上げる。蛇島は反射的にそちらへ視線を向けるが、創来はその隙を逃さず刃を振り上げていた。

「何ヨソ見してんだテメエ!!」

しかし、次の瞬間。

「悪いな。今日付き合ってやれるのはここまでだ」

高速移動で瞬間に距離を詰めた、諸星の膝蹴りが創来の腹へと炸裂していた。痛烈な一撃を叩き込まれ、吹き飛ばされた創来がスラムの壁へと激突する。

「テ……メエ……!!」

諸星を睨み付けていたが、やがて意識を失い崩れ落ちる創来。

「オイ敦士……邪魔してんじやねエよお前」

「悪かった。だがそうも言ってられない状況になって来たぞ」

「あ……………」

横槍を入れられた蛇島は露骨に気分を害していたが、諸星の徒ならぬ雰囲気を感じ取り眉を顰める。しかし次に放たれた言葉は、蛇島の予想を遥かに上回る衝撃的な内容だった。

「……………池袋で、獅堂が刺されたらしい」



新宿周辺にて。

「あー？ 風ちゃんやないの」

交差点を渡ろうとしていた更科 風は、背後から声を掛けられ振り返る。そこに立っていたのは、彼女と同じ東帝の学生である一文字 陣だった。

「奇遇やねこんなトコで。何してんの？」

「別に……………大した用じゃないよ。陣は？ サボってんの？」

「まあそんなトコやなあ。こないだ桐谷センサーに怒られたさかい、見つからんようお互い気い付けよや」

「そうだね……………じゃ」

陣と二、三言交わした後、人混みの中へと消えて行く風。

「……………」

雑踏へ紛れて行く彼女の背中を見送り、陣もまたその場に背を向け立ち去って行く。

事態は水面下で、静かに動き始めていた。

第24話 『東帝戦開幕』

その報せは瞬く間に学園全体へと知れ渡り、多くの人間を驚愕させる事となる。

◇◇◇

「え、マジで!？」

「大文字君が……!？」

生徒会室でその報告を受け、千聖と雪華は驚きを隠せずにいる様子だった。

◇◇◇

「俄には信じ難いな……」

「そうだね……」

教室にてその事件を知った奏と未来も、緊迫した面持ちを浮かべている。

◇◇◇

亜門と土門は、同時に口からコーラを噴き出していた。

「ゲホッ、ウソやん!？」

「ありえへんやろ……」

「いや、なんかガチっぼい」

咳き込みながら疑っている亜門達に、湊が自身の携帯端末から学内SNSを表示して見せる。

◇◇◇

爆音を轟かせながら、首都高速を疾走する一台のバイク。

「なーにやってんだアイツ……」

そう呟きながら蒼は、スロットルを回し更に加速していく。

◇◇◇

「獅堂の部屋って何階だっけ!？」

「7階だよ!!さっき言ったろ!!」

大声を張り上げながら、階段を猛スピードで駆け上がる日向と伊織。獅堂が負傷したとの報せを聞いた二人は、彼が搬送された病院へと駆け付けていた。

そして7階の廊下へ辿り着いた日向達を待ち構えていたのは、大文字一派の六人。諸星と蛇島、壬生ら二年の四人衆だった。

「……来たね、日向君。伊織君も」

「おう、光陰コイシ。獅堂は?」

愛染へと日向が問うが、その隣に居た壬生が無言で背後の部屋を指し示す。ガラス張りの壁の向こうには、集中治療室^Cのベッドに横たわり目を閉じている獅堂の姿があつた。

「手術は先程終わった。命は取り留めたらしいが……意識がまだ戻らない」

全身をコードに繋がれている獅堂に目を向けながら、状況経過を語る諸星。その瞳には彼らしからぬ、静かながらも激しい怒りの感情が見えた。

「ナメやがつて……どこのどいつの仕業だクソが……!!」

蛇島もまた諸星と同様に、苛立った声を上げながら憤りを露わにしている。

「つーかさ、回復魔術で何とか出来ねーのかよ?」

「お前の時とは違う。発見が遅れた上に、今の獅堂には治癒力に回せる程の体力が残っていないんだ」

日向は回復魔術の使い手を頼るべきではないかと口にするが、諸星はそう簡単ではないと首を横に振った。

そもそも『回復術式』とは、被術者自身の治癒能力を外部から強化する物である。しかし獅堂は既に多くの血を流し過ぎていた為、自己回復力、即ち体力の大部分が失われてしまっていた。

剣呑な空気の中、伊織は傷を受けていた獅堂の腹部へと目を向ける。彼の脳裏に浮かんでいたのは、一つの疑念。

(……………凶器は刃物か……………いや、それにしても……………)

あれ程の深傷を負わせる為には、刃を押し込む為にかなりの至近距離まで接近しなければならぬ。

あの大文字 獅堂との戦闘の中で、そんな事が可能なのか——？



『まさか大文字がやられるとはな……………』

「そうだね……………俺もかなり驚いてる」

内部調査に伴い定期連絡を取り合っていた本郷と久世もまた、獅堂の殺害未遂を受け慄然としていた。

『やっぱ、「結社」の差し金だと思うか？』

「あー、そのコトなんだけどさア……………」

刻印結社の人間による犯行を疑っていた本郷だったが、久世はそれについて自身の見

解を述べ始める。

「ハツキリ言うけど、獅堂アイツの強さは東帝ウチの中でも頭一つ抜けてる。単純な殴り合いなら、例えプロが相手でも遅れを取る事はまず無いと思うよ。よっぽどの実力差でもない限り、真正面の敵からあんな傷を負うとは考えにくい」

『つまり……』

プロの魔術師にも匹敵する、獅堂の戦闘能力について言及する久世。

「相手が恭夜さんレベルだったか、それとも……」

『……見知ってる誰かに油断を誘われたか、ってコトか……』

久世が口にした推測を、本郷が引き継ぐ。彼等が示唆していたのは、獅堂が元々知り合っていた人物に刺されたという可能性だった。

『……いよいよ現実味帯びて来やがったな……』

「勘弁してほしいね、ホント……」

本郷と久世が言外に示しているのは、無論『内通者』の存在について。

自分達の預かり知らぬ所で、何かが動き出している。漠然とではあるが、不穏な予感を二人は確かに察知していた。

◇
◇
◇

しかし交錯する思惑を他所に、時は進んで行く。

◇
◇
◇

7月16日。

「日向は今日もまた寝坊か？」

日向がまだ到着していない事に気付き、辺りを見回す創来。

日向を除く一年選抜組の七人は今、『東帝戦』開幕式を控え演習場のスタジアムの観覧席に座っていた。

「おいオマエ、部屋隣なら起こして来てやりやよかっただろオが」

「知るか。俺が行った時にはもう部屋に居なかつたんだよ」

「アイツが早く起きるって、ちよつと珍しいわね」

啓治に軽く咎められるが、向かった時には既に日向は部屋から出ていたと反論する伊織。毎朝日向が伊織に叩き起こされている事を知る天音は、意外そうな表情で呟いてい

た。

「創来クンは随分派手に先輩達と戦り合つて来たみたいやね」

「まあな。積もつた恨み全部晴らしてやる」

一方で陣が感心しているのは、身体中に絆創膏や包帯が見える創来の姿。蛇島達へのリベンジに燃える彼の横には、アイマスクを着け爆睡している凧と彼女に肩を貸している沙霧が並んでいた。

そして、肝心の日向は——



「やーっべエつて!!遅ッ刻遅刻ウ!!」

学園上空を、屋根伝いに爆走していた。

普段より早く目が覚めた為、少し特訓しようとスラムへ足を運んでいた日向。しかし時計を全く見ておらず、伊織達との集合時間を大幅に過ぎている事に気付いていなかった。

慌てて目的地へ向かう日向だったが、そこで前々から思っていた事を改めて実感する事になる。

(つーか……)

「やっぱこの学校デカ過ぎだろ!!」

東帝学園の、広大すぎる敷地面積。

度重なる改修工事によって、各棟の施設規模は年々拡大している。加えてスラムの旧校舍群は魔術で建築されていた為、解体作業が全く進まない事も学園巨大化の要因の一つだった。

スタジアムまでは、まだ距離がある。更に加速しようとする日向だったが――

――その姿が突如、消えた。



「あ、結弦さん戻って来た」

「急に消えたと思ったたら……どこ行ってたんすか?」

ガラス張りの連絡通路を歩いていて、少女と少年の二人組。彼等が話し掛けていたのは、その場に前触れも無く現れた一人の少年だった。

「あー、遅刻寸前少年が一人見えたからな。助けて来た」

『空間転移』^{テレポート}の魔術で姿を見せた彼の名は、
結城^{ユウキ} 結弦^{ユヅル}。

「はー……好きだねエ人助け」

「よくやりますよねホント……」

スカジャンを着た少女、風切アラン^{カザギリ}は呆れと感心ともつかない声を返し、天然パーマの少年古田^{フルタ} 徹彦^{テツヒコ}は苦笑しながら頷いていた。

「まあ、そんなコトより急ごうぜ。沢村さん待たせてるしよ」

「りよーかい」

「うす」

二人の後輩を伴い、結城もまた目的の場所へと向かって行く。



突如として、日向の『視界』が切り替わる。

「……………つは……」

一瞬の浮遊感に襲われるも、気付いた時には周囲の景色が一変していた。

「……………え？……………え、は!?アレ!?何で!?!」

1秒前まで全力疾走していた筈の自分が、何故か既に目的の場所へと到着している。まるで、『瞬間移動』でも用いたかのように。

理解出来ない状況に動揺しながら辺りを見回す日向だったが、そこには目を丸くして絶句している伊織達が座っていた。

「……日向オマエ……いきなりどっから湧いて出た……!?!」

「春川アンタ今……何も無いところから急に出て来たわよね……!?!」

何の前触れも無く登場した日向に、伊織や天音は呆気に取られた様子で声を漏らす。

「春川……お前『転移^{テレポルト}術式』でも使ったのか?」

「いや……そもそも何が起きたのかサッパリ……」

啓治は何らかの魔術の暴発を疑っていたが、一切身に覚えの無い日向は依然としてこの状況に困惑していた。



『何やら客席の一年エリアがザワついてるが……それはともかくツ!!』

『この魔術学園の一大イベントたるバトルエンターテイメントがいよいよ開幕ツ!!』

『『東ツ!!帝ツ!!戦———!!!!』』

スタジアムへ響き渡る実況アナウンス。それと同時に、ドームのように上空を覆っていた結界魔術が一時的に開放されて行く。

そしてそこから打ち上げられるのは、これもまた魔術による号砲。無数の弾幕は轟音と共に、色鮮やかなスモークを空へと爆発させていく。

『さあ！今日から五日間、昼夜を通して行われる学園最強決定戦ですが!!』

『本日「一日目」に行われるのは！ある者達にとっては前座かもしれないが、ある者達にとってはメインプログラム!!』

『「タッグロワイヤル」————!!!』

実況の二人によって発表された第一競技、『タッグロワイヤル』。それは文字通り『二人組』^{タッグ}によって行われる、バトルロワイヤルを指していた。

メインイベントである『トーナメント』に先駆けて行われるこのプログラムは、『前哨戦』であると同時にもう一つの実施目的も有している。

それは、『非戦闘型魔術師』へ実戦内での評価機会を与える事。

例えば千聖や未来のようなタイプの魔術師は、後方支援に特化している為本人の戦闘能力は比較的低い事が多い。しかし1対1形式での戦闘を行う必要がある『トーナメント』では、彼女達の正当な能力評価を下す事は難しかった。

よってこの『タッグロワイヤル』にて任意の人物とチームを組ませ、測定された競技

成績を『支援能力』や『連携能力』の評価基準とする。それが、このプログラムの目的だった。

『タツグは誰と組むのも自由!! 能力でも性格でも、自分と相性が良い相手を探すもよし!』

『勝ち上がる為に、イケ好かない相手と一時停戦し協力するもよし!!』

『さア! 第一競技開始はこれより二時間後!!』

『参加者はそれまでに中央転送ゲート前へとお集まり下さい!!』

『『それでは改めて!! 東帝戦スターターターターター!!』』

実況席からの宣言と同時に、再び盛大な号砲が空へと轟く。



「えつと……取り敢えずトリプルチーズバーガー10コお願い。チキンとポテトはLで5コずつ。コーラフROOTも一番デカイやつで頼むわ」

「お前ホントにそんな食えんのか……?」

「朝あんま食ってなかったからハラ減ったんだよ」

競技開始前に売店へとやって来た日向と創来は、観戦に備えて大量の食糧とドリンクを買い込んでいた。

「つーか、オマエはタッグ戦出なくて良かったのか?」

「ああ、俺はトーナメント一本に集中する」

両手にトレーを抱えた日向からそう訊かれ、自身の出場競技について応える創来。

数分前。

開幕式が終了すると同時に、伊織が観覧席から立ち上がる。

『よし……行くか』

『え? 行くってどこにだよ』

『……エントリーに決まってるだろ』

伊織からさも当然のように応えられ、そこで初めて彼がタッグロワイヤルに出場する事を知る日向。

『え、お前出んの!? 誰とだよ?』

『私よ。私が御剣に前衛を頼んだ』

驚いていた日向へそう告げたのは、伊織と同様に既に席を立っていた天音だった。

『御剣の防御力なら、私の盾役として申し分無いしね』

『……あくまで立場は対等だっつーコトを忘れんなよ』

『なんだよソレ……俺一つも聞いてねーし……』

不敵に笑い合っている天音と伊織だったが、クラスメート二人が見知らぬ所で手組んでいた事に少なからずショックを受けている日向。

『……春川君の前では言い辛いんだけど……実は私達も出るんだよね……』

『え、沙霧と啓治もかよ?!』

『当然だ。空条さんはこの俺が前衛として守護するツ!!そして御剣イ……テメーは例え火の中水の中でも肉壁として藤堂さんを死ぬ気でいやいつそ死んでも守れよコラ。もし彼女に傷一つでも付けて見ろ……俺がテメーを……消すツ!!』

『るッせーな……テメーは精々空条の足引つ張らねエように気イ付けとけよカス』

『おおいオイ誰に注意しくさっとなじやコラア』

『あア?』

更に沙霧からもタッグ戦出場を告げられる中、日向の背後では啓治と伊織が普段通りに唾み合っている。

『オーイ凧ちゃーん、そろそろ行くで。あ、そうそう日向クン。一応ボクらも出るねん。応援ヨロシク』

『なんだよお前らみんな出るんじゃない!! ええ楽しそうじゃない!! 俺も出てエ!!』

そして風の肩を揺さぶっていた陣もまた、タッグ戦に出場するとの事だった。仲間達が揃いも揃ってエントリーする事を聞き、自分も競技に出たいと日向が声を上げる。

『いや……』

『『『お前と連携出来る奴なんているわけないだろ』』』

しかし伊織も天音も啓治も陣も、自由奔放すぎる戦闘スタイルの日向をサポート出来る人間など、いる筈がないと断言していた。

『ぐっ……それは……』

『はは……まあ、春川君はトーナメントもあるし……』

核心とも言える要因を突かれた日向は、再びショックによって沈黙する。沙霧は苦笑しながらも、何とかフォローを試みていた。

「でもやつぱちよつと興味あつたなー、タッグ戦」

「やめとけ。誰かと波長を合わせるような戦い方は、多分お前に向いてねエだろ」

「……オマエにソレ言われんのはなんか釈然としねー」

「だから俺は出てねエだろうがよ……」

口を尖らせる日向に呆れている創来だったが、その時二人の背後に一人の人物が現れる。

「春川 日向君……だよな？」

「ん？」

声を掛けられ、振り向いた彼等の前に立っていたのは――

◇◇◇

スタジアムの中央入口付近にある『転送ゲート』の前へとやって来た伊織達だったが、そこには既に大多数の出場者が揃っていた。

高次訓練に選抜されていた上級生達が集まっている中、雪華と千聖がこちらへ気付き歩み寄って来る。

「藤堂さん、今日は頑張りましょうね」

「黒乃先輩……！はい、胸を借りるつもりで行きます」

「ちよつと伊織イ〜、アンタすっかり天音っち守るんだよ〜？」

「分かってますよ……」

師事していた少女からの言葉に、気を引き締めながら応える天音。雪華の横では千聖

が、ニヤニヤと笑いながら伊織の脇腹を小突いていた。

そしてそこに、もう一人の『師匠』が現れる。

「お？伊織じゃねーの。オマエも出んのか？」

姿を見せたのは伊織へ『技』を授けた二人、蒼とステイーブだった。

「……どうも、蒼さん」

「何だ、一年同士で組むのかお前。まアアレだ、俺ら以外にはやられんなよ？」

弟子の肩をバシバシと叩いている蒼だったが、そこに雪華が少し意外そうな表情で声を掛ける。

「あら、御剣君は天堂君に弟子入りしていたの？」

「あー……ハイ、まアそんな感じっスね……」

「そう、俺の『二番弟子』ってコトだ。まー、今の一年最強は間違いなくコイツだな」

しかし蒼のその言葉に対し、天音の肩を持ちながら反論する千聖。

「いやいやちよーつと待てい。今の天音たちはアタシと雪華がみっちり鍛えたんだからね？何なら多分アンタにも勝つかもよ？」

「ちよつ、白幡先輩……!!」

蒼と千聖が『自分の教え子最強論争』を繰り広げている中、遠くではまた別の集団がギャラリーを騒つかせている様子が見えた。

「せやから絶対あのお姉さんキャスターはショート似合ってへんねんて!!間違ひなくロングの方が良かった!!」

「オマエ目エ腐つとるやろ絶対。どう考えてもショートの方が見栄え良いに決まつとるわ。ああいうクール系はあんくらの長さの方がスマートな印象になんねん」

「やつかましいわ……たかだか推し始めて二ヶ月程度のオマエに何が分かんねんボケ!!」

「歴関係無いやろカス!!もつと審美眼磨いて現実見ろ!!」

「オマエ如きに美的センスどうこう言われたないわタコ!!オイ紅!!オマエはロングショートどっち派や!!」

「朝からんなクソしようもねエコトで言い争えるお前らのバイタリテイがスゲーよなホント……」

「シバくぞ!!」

「何コイツらうるさ……」

如月兄弟の大激論からの飛び火に、朝は低血圧の湊がげんなりと応える。ちなみに言及されている女性ニュースキャスターは、二日後産休を発表し亜門と土門を絶望へと叩き落とすのだった。

「湊さん達だ……！よし、俺も神宮寺委員長に挨拶して来よう。空条さん、少し待っててくれ」

「あ、うん。行つてらっしゃい」

湊達がいるという事は、彼等を束ねる奏も近くに居る筈。啓治もまた『師匠』に一言挨拶すべく、人混みの中へ駆け出して行く。

(……綾坂先輩、どこにいるんだろう……?)

しかし沙霧が教えを仰いだ少女は、未だこの場に姿を見せていないようだった。

そして競技開始前となり、出場者達が次々と転送ゲートへ飛び込んで行く。待機していた最後のタッグがゲートへ入り、エントリー行程が完全に終了しようとしたその時。

「こつちこつち！まだ始まってないよ！」

「あつぶねエ！何とか間に合つたな!!」

——直前になって、新たな二人組がその場へ滑り込んで来ていた。

第25話『バトルロイヤル』

『タッグロワイヤル』の参加者達は、演習場中央のポータルゲートを次々と通過して行く。彼等がランダムに転送されるのは、この広大な学園の敷地内の何処か。

そう、このプログラムの舞台は、フィールド東帝の構内全体だった。

学園内を戦場にするという、狂気めいた運営方針の『東帝戦』。しかし施設各所は魔術により保護プロテクトされており、また万一戦闘行為などによって損壊したとしても、夏季休業中に修復される為新学期に支障を来す事は無い。一学期終了直後という、この時期だからこそ実施可能なカリキュラムだった。

そして二人ツーマンセル一組による出場者達には、『前後衛制度』による参加条件が設けられている。

『前衛登録』がされている生徒は一定以上の『近接戦闘能力』、『後衛登録』がされている生徒は『遠距離攻撃手段』もしくは『後方支援技能』を有している事が、タッグとしての出場認可条件だった。

「結構飛ばされたな……」

「そうね……一応聞くけど、どう動く?……様子を見るか、それとも打って出るか」

ゲートを潜った後、連結本棟中央の4号館と5号館の連絡通路に転送された伊織と天音。動向についての意思を問う天音だったが、不敵に笑う伊織の返答は端的だった。

「決まってんだろ。〃攻めあるのみ〃、だ」

「そう来なくちゃね……!行くわよ」

そう応えた天音は風属性魔力による突風を発生させ、ガラス張りの壁を砕き割る。そして駆け出し飛び出した二人の身体を、魔力による上昇気流で空中へと浮かび上げさせた。

「お前こんなコト出来たのか」

「まあね。術式の応用よ」

軽く驚きを見せる伊織に、天音が得意気に声を返していた、その時。

「——ッ、藤堂!!」

「!?!」

突如抜刀した伊織が、天音の背後で鋭く刃を振り抜いた。それと同時に、空間に響く爆発音。見れば伊織が寸前で両断していたのは、天音の背を狙い放たれた爆炎の弾丸

だった。

二人は体勢を立て直しながら、中央広場時計塔横の側塔へと降り立つ。その視線の先にいたのは、硝煙が上がる拳銃マッナムの銃口をこちらへ向けている一人の少女。

「フン……反応はまあまあね」

戦意を露わにしながら二人を睨むその少女の名は、一条 ハル。生徒会執行部書記を務める人物であり、また『生徒会長』黒乃 雪華の懐刀である。その隣には彼女と同じく雪華の部下である、九重 絵恋の姿もあつた。

「中々イイ不意打ちっスね、先輩」

「……アンタ達二人には、ここで消えてもらおう」

伊織から投げ掛けられた皮肉混じりの言葉に対し、剣呑な声を返しながら銃弾魔力を再装填ロードするハル。

彼女は雪華に目を掛けられている一年生達を快く思っていない事を、伊織も天音も薄々察していた。しかしロワイヤルにて生き残る上で、ハルとの戦闘は最早避けては通れない。

「やるしかないわね……」

「ああ。……倒して行くぞ」

術式を展開している天音の言葉に頷きながら、一刀を構え直す伊織。

《前衛》 御劍伊織／《後衛》 藤堂天音

V S

《前衛》 一条ハル／《後衛》 九重絵恋

「いつまでも見下ろしてんじやないわよ……!!」

火属性魔力×形成術式

『ブレイズバレット』

ハルが構えた二丁拳銃から、火属性による無数の魔力弾が一斉に撃ち放たれた。迫り来る炎の連弾へと、側塔から飛び降りた伊織が躊躇無く突っ込む。

そして炎弾を連射しているハル目掛け、渾身の力を込めた開戦の一撃を振り下ろした。

◇◇◇

『さア始まりました、強者ひしめく「タッグロワイヤル」！並み居るツーマンセルの中でも最初に交戦を開始したのは、「一条・九重ペア」と「御劍・藤堂ペア」だアっ!!』

実況者と観衆の声が響き渡る、演習場にて。

スタジアム上空の浮遊型巨大モニターには、激突した伊織とハルの戦闘が映し出されていた。他の画面でも校内各所に散らばっている出場者達の様子を中継すべく、目まぐるしく映像が切り替わっている。

『更に彼等のみならず!!構内各地で次々と新たな戦闘が勃発しております!!』

環状本棟2号館、3階大回廊。

「悪く思うなよ、一年ッ!!」

「調子に乗ってんじゃねエぞ!!」

光属性魔力×形成術式 『フォトン・アロウズ』

火属性魔力×形成術式 『力ホルテックフラスト撃弾』

風属性魔力×形成術式 『ゲイルブラスター』

通路に立ち塞がる上級生達から、次々と魔術射撃が繰り出される。襲い掛かって来るその弾幕へと、壁や天井を縦横無尽に疾駆し突進する一年生ルキ。

無属性魔力×強化術式

『撃脚』

《前衛》 皇 啓治

奏との鍛錬によって引き上げられた基礎戦闘能力は、彼の体技の威力を大きく上昇させていた。薙ぎ払うような飛び回り蹴りが、魔術防御ごと数人の相手をまとめて吹き飛ばす。

更にその上級生達を援護していた支援役の、一瞬の隙を逃さず『彼女』は術式を展開していた。

水属性魔力×形成術式

『水戟槍群』
アクアスピアーズ

《後衛》空条 沙霧

啓治によって前衛を撃破され、無防備となった敵後衛へと沙霧の魔術が炸裂する。放たれた水流の槍は、強烈な勢いで窓を突き破り彼等を棟外まで押し流していた。

一年ながら序盤から上級生相手に善戦する啓治と沙霧だったが、このタッグロワイヤルは80名40ペアが参加している。その為ここで派手に動き過ぎると包圍マウックされる恐れもあり、慎重な立ち回りもまた必要だった。

3号館、1階エントランスロビー。

「始まったな」

『ですね。皆ボチボチ動き出してます』

周囲に視線を巡らせている奏からの声に、湊が通信機越しに応答する。彼は奏とは別行動を取り、高台に確保した狙撃ポイントから構内を見渡しつつ警戒していた。

『2号館は皇、時計塔広場では一条達が戦り合ってますね。どっちか獲りに行きます?』
スナイパーライフルのスコープ越しに、各所の戦況を把握していた湊がそう伝える。報告を受けた奏は、腰に携えた刀の柄に手を置きながら言葉を返した。

「いや、その必要は無い。——接敵した」

そう口にする彼女の前方へと、二人の少女が歩いて来る。

「まさかこんな序盤から、貴女と当たる事になるとはね……奏」

「^{コースケ}紅輔えー? またどっかから隠れて狙ってんでしょー。お姉さん怒んないから出て来な

さいー」

風紀委員長の奏も風紀委員長として属している、『生徒会連合』の2トップである『生徒会長』と『副会長』。雪華と千聖の登場に、湊は離れた場所から苦々しい表情を浮かべていた。

『初っ端から黒乃さん達か……^引転送位置悪かったつスね』

「問題は無いさ。どのタイミングであろうと、ぶつかった以上は倒すだけだ」

湊からの通信に応えながら、自身の武装を抜き放つ奏。

「つつてますケドも……どうする? 雪華」

「天堂君の所まで温存しておきたかったけど……こうなった以上は、仕方無いわね」
 対して雪華は千聖を後方へ下がらせながら、手にした大鎌の柄へと指を這わせる。例
 え仲間であろうとも、一度戦闘となれば容赦は無い。

《前衛》 神宮寺 奏／《後衛》 湊 紅輔

V S

《前衛》 黒乃 雪華／《後衛》 白幡 千聖

双方が動き出そうとした、その瞬間だった。

7号館、8階多目的訓練フロア。

「ア~~~~退屈退屈、ヒマでしゃアないなア。眠たなつてくるわ」

双剣を鞘へと収め、フロア中央を闊歩する二人の少年。その周囲には、彼等に斬り伏
 せられた多くの出場者達が倒れていた。

「こんな戦いモンナンボやっても意味無いわ。折角派手にブツ壊せるなら、本気で暴れられ

る相手と戦り合わな時間の無駄や」

「ソレに関しては、珍しく同感やなア」

そう言葉を交わした二人は、全身から放出していた魔力によって室内で『乱気流』を発生させ始める。

——その属性は、『嵐』を形作る『風』と『雷』。

”釣り出す”か……!!」

”引き摺り出す”ぞ……!!」

吹き荒れ、空間を裂くような魔力の中で、双剣を抜き放つ。その構えは、日本にて藤堂流と双璧を成すもう一つの魔術剣。

『如月二刀流』。

「出て来いや、天堂蒼イ!!」

風属性攻撃術式『疾風神剣』
シツプウシンケン

雷属性攻撃術式『迅雷神剣』
ジツライシンケン

自身の居場所を知らしめるような叫びと共に、解放される超出力術式。

その剣技が生み出した爆発的な衝撃波は、全外壁を、床を、そして天井を、一瞬の内に吹き飛ばしていた。



極大魔力爆発の回線干渉によって、通信障害が発生する。その数秒後に復旧したスタジアムのモニターに映し出されていたのは、上階層が軒並み崩れ落ち半壊した7号館だった。

『おオーツとここでド派手に動きを見せたのは「風神」「雷神」の異名を持つ如月兄弟だアーツ!!!』

『2年前、当時中学生ながらミナミ一帯を制覇した“関西最強コンビ”はやはり伊達ではありませんッ!!』

学園を騒がせる悪童達の登場に、至る場所で沸き立ち歓声を上げている観衆。

『しかアし!!ここに辿り着くまで彼等には数々の波乱と苦難がありましたッ……!!』

『おツとここでいきなり回想を始める気でしょうか?』

『遡る事1年前、上京した彼等は揚々と東帝学園の門を叩きました』

『すみません実況に戻って頂けますか？』

『しかし当時から風神雷神と謳われていながらも、前生徒会副会長「一条カズヤ」、そして我等が最強「天堂蒼」の前に惨敗を喫します』

『聞いてます？』

『それでも彼等は再び、この戦場に戻って来ました!!リベンジを!!果たす為にッ!!』

実況による興奮冷めやらぬ解説が続いていたが、その時戦局に更なる変化が生じる。



ハルへと繰り出される、大上段の剣撃。しかし彼女の後方で絵恋が地に当てていた掌から、這うような魔力の光が伸びる。

そこから出現した氷の壁が、伊織の一撃を防ぎ止めていた。

「クッ……!!」

更にその壁の裏側から、ハルが撃ち出した炎の銃弾が氷を砕き伊織を襲う。受け止められた刃を引き抜き咄嗟に側方へ走り出すが、連弾掃射が周囲を薙ぎ払いながら彼の背後に迫って来ていた。

そこに天音が伊織の足元へと、土属性の魔力を投射し地形変化を発生させる。地面を急速に隆起させ、伊織の身体を弾丸が届かない上空へと打ち上げた。

「飛んだ……!!」

「下らない真似を……!!」

絵恋とハルの視線が、僅かな時間ではあるが頭上へと向けられる。

彼女達の注意が逸れた、その一瞬の隙。天音の新たな術式構築には、それだけで十分だった。

雷属性攻撃術式

『ハイスピード・ランサー
神速戟雷』

天音から撃ち放たれた稲妻の槍が、ハルと絵恋を急襲する。魔力による盾と武装の二重防壁でもその威力は殺し切れず、大きく押し飛ばされる二人。

更に天音が風属性による下降気流を発生させ、上空にいた伊織をハルの元へと猛スピードで引き降ろす。

再度振り下ろされる伊織の刃に対し、ホルスターにマグナムを収めたハルは左手首に装着されたブレスレットを指で叩いた。

——ロックハート
R H インダストリー製、『アーセナルA—06』。

空間術式を搭載されたその道具は、設定した武器を別地点から手元へと召喚する武装転送装置だった。伊織の剣撃を防いだハルの手に握られていたのは、巨大な刃を備えた戦斧。バトルアックス

「へエ……アンタ近接もイケんのか」

「あんまナメてると……ブツ潰す」

電流のように空を駆ける衝撃の中で、鬨ぎ合う刃同士が火花を散らす。その細身からは想像出来ない膂力でハルは、炎を纏わせた斧刃を振り抜き伊織を叩き飛ばした。

その後方では天音の絨毯爆撃を、抜き放った長剣で弾きながら少しずつ絵恋が距離を詰めて来ている。

（流石に、強い……!!）

雪華の直属の部下、生徒会執行部役員に相応しい実力を誇る絵恋。数々の戦闘経験で積んで来た二年生である彼女の、ハイレベルな魔術と剣術に天音は苦戦を強いられたいた。

更に絵恋は東帝内に於いて、天音に次ぐ数の『属性性質』の使い手でもある。光属性で形成された天音の防壁へと、魔力を纏った絵恋の長剣が突き込まれた。

水＋雷＋氷属性攻撃術式

『ラスト・トリック
「二連穿」』

一瞬の内に撃ち込まれる三連続の刺突、更に一撃ごとに属性を切り替えるという超高難度技術による剣技。『水』、『雷』、『氷』の異なる属性による三連撃術式は、天音の防御を完全に砕き割り、吹き飛ばしていた。

「こんなものかしら？ 藤堂さん……！」

「く……………」

炎と風の属性魔力による熱風で威力の相殺を試みる天音だったが、それでも大きく後退させられ伊織と引き離される。ハルと戦う伊織を援護しようとしていたが、絵恋の波状攻撃は彼等の合流を許さない。

個々人の高い単騎戦闘能力によるハルと絵恋の分断作戦の前に、天音達は次第に劣勢へと追いやられつつあった。何とかこの状況からの打開策を打ち出そうとする天音だったが、その時。

嵐をも呼ぶ、爆音が轟いた。



亜門と士門の複合術式によって、学園中に響き渡る轟音。

「チツ……やってくれたなあのカカ二人……」

高台にてその爆発を目視で確認していた湊は、即座に彼等の仕業と勘付き小さく舌打ちする。伝播して来た振動と爆風の余波が、その前髪を僅かに揺らしていた。

しかし、戦場を俯瞰していた湊は、混沌とした状況に追い打ちを掛ける『攻撃』の襲来に一早く気付く。

「ッ、奏さん!!上です!!」



1号館最上階、屋上にて。

「景気良くブチかましてくれてんじゃねーの。お陰でどいつもこいつも……隙だらけだ」

戦場と化した環状本棟を見渡していた蒼。広大な索敵範囲を誇る彼の魔力知覚は、各所で戦闘を繰り広げている人間達の位置を正確に捉えていた。

そして7号館で引き起こされた巨大爆発によって、一瞬ではあるが注意を引かれた彼等の動きが止まる。その時既に、蒼の背後ではステイブが腰元の刀を抜き放つていた。

「——やれ」

蒼からの指示と同時に、ステイプの刀から斬撃が撃ち出される。

無属性魔力×形成術式

『飛斬・参拾連』

次々と放たれた魔力の刃は、構内に散らばる出場者達を的確に撃ち抜いた。

◇◇◇

「皇君!!上から……!!」

壁を貫通し飛来した斬撃に、沙霧が気付き啓治へと叫ぶ。即座に反応した啓治は、魔力を纏った拳を叩き付け咄嗟に床を殴り抜いていた。

「空条さん、こっちだ!」

そして追尾斬撃から逃走すべく、フロアに穿たれた大穴へと飛び込んで行く二人。

◇◇◇

「ッ、なになに何よ!?!何の音?コレ」

「この魔力は……如月君達……?」

爆発音に千聖と雪華が動揺を見せた、その瞬間。

『奏さん!!上です!!』

「ツ、何だ……!?!」

通信機から湊の警告が響くと同時に、奏達へとステイプの“飛ぶ斬撃”が襲い掛かって来る。

「コレは……!?!」

『『飛斬』か……!?!』

雪華や奏など一部の実力者は辛うじて防御・回避していたが、2号館や3号館別フロアの生徒達は次々と『飛斬』に撃ち抜かれ戦闘不能に陥っていた。

更にその状況へと畳み掛けるように、新たな乱入者達がエントランスへ姿を見せる。

「だつ、大丈夫?」

「ああ、スマン空条さん!流石にツ、ブチ抜きすぎた!」

砕かれた天井から降って来たのは、『飛斬』から逃れて来ていた皇 啓治と空条 沙霧の二人だった。

「ツ、まさかお前達まで出て来るとはな……」

「神宮寺委員長!?!」

「白幡先輩に、黒乃先輩も……!!」

「あー、さぎりんと啓治まで来ちゃったか」

一堂に会する五人だったが、彼等を集めた張本人達が最後に『瞬』ソニックでその場へと現れる。

「流石にお前らは仕留め切れねエか。やっぱ直接叩くしかねエな」

ステイブの斬撃を凌ぎ切った啓治達へとその男が語り掛ける中、スタジアムでは新たな戦局の展開に実況が声を張り上げていた。

『おっとオーツ!!ここにきて遂に「剣聖」が動き出す!!天堂蒼、満を辞しての参戦ですツ!!』

《前衛》『剣聖』 天堂 蒼 / 《後衛》『飛斬』ステイブ・ジャクソン

連携に於いてこの学園の頂点に立つ、二人の剣士が戦場へと降り立った。

第26話『“最強”包囲網』

7号館での極大爆発によって、絵恋達の意識が一瞬ではあるがそちらへ奪われる。天音の方が僅かに速く戦闘の思考を取り戻したのは、技量や経験の差ではなく彼女の方が『爆発から少しだけ遠かった』という単純な『運』があつたのかもしれない。

しかし戦いの中で勝機を探り続けた、天音自身の力が切り拓いた活路でもあつた。

(今しかない——!!)

天音は自身が最も得意とする術式を多重発動させ、一気に絵恋へと畳み掛ける。

火属性魔力×形成術式

『エクスプロズラスト爆速弾・八連』

魔力弾による爆撃を受けるが、絵恋は相反属性の魔力を長剣へと纏わせ振り抜いた。

水属性魔力×強化術式

『リユウスイザン流水斬』

水属性の斬撃によって、天音の炎弾は尽く斬り裂かれ爆散する。しかしその時既に、

天音の“本命の攻撃”の準備は終わっていた。

「掛かりましたね、九重先輩……!!」

「!?」

絵恋が爆速弾を迎撃していた隙に、構築を終えていた天音の大技。撃ち放たれるは、
”冷気の砲撃”。

氷属性魔力攻撃術式

『アイシクルバスター』
『瀑氷道』

——天音が待っていたのは、こちらの氷属性術式を絵恋が『氷属性の魔力で』迎え撃つ事。そこで生じた大量の水蒸気が、氷の^{瀑氷}大砲^道に喰い尽くされる事で周囲を空間ごと凍てつかせていく。

「なっ——!?」

霧散した魔力が、彼女を捉え閉じ込める檻と化す。絵恋の身体は、水流の内側へと完全に呑み込まれていた。身動きを封じた上、絵恋の持つ属性では氷塊からの脱出は不可能だろう。

「ッ、絵恋……!?!」

天音によって絵恋が撃破され、ハルは僅かに動揺を見せていた。

「ヘエ……ま、あの程度はやつてもらわねエとな」

対して彼女と交戦していた伊織は、当然と言った表情で軽く笑いながら刀を構え直す。

「アイツはキツチリ仕事したんだ……コツチもそろそろ、ケリ付けさせてもらうぜ」

「……本気でそう言ってるなら、そろそろ下らない出し惜しみはやめといた方が身の為よ」

そう口にする伊織へと、ハルは剣呑な視線と共にマグナムを向けた。

「どいつもこいつも……何で一本しか使つてねエつただけで、俺が手加減してると思うんだ?」

「トボけてんじやないわよ白々しい。天堂さんとジャクソンに弟子入りしてたコトは判つてる。アンタが隠してるのは……『二刀』戦術じやなく、『技』でしようが」

言葉を切ると同時に、銃口から放たれた業炎の一撃。先程の手数を重視した速射連弾よりも、遙かに火力が引き上げられた砲弾の如き重撃だった。

咄嗟に校舎内へ飛び込み躲す伊織だったが、炸裂した爆風が全てのガラスを吹き飛ばす。そこから更に撃ち込まれた銃弾が、地を蹴り廊下を駆け出した伊織へと襲い掛かった。

「中々、鋭いな……!!」

壁を突き抜け貫通して来る弾丸の雨を、紙一重で潜り抜けながら走る伊織。しかし、このまま逃げに徹しても埒があかない。

防戦一方の状況を打開すべく、壁へと内側から斬撃を叩き込む。そしてその斬線を蹴り破り、校舎の外側へと飛び出した。その眼前に迫っていたのは、巨大な斧刃。

「はア!？」

視界を塞ぐようなその強襲は、ハルが投げ放った戦斧だった。意表を突かれながらも、伊織は即座に一刀を振り上げ迎撃する。

退魔一刀流・『富嶽』

斬り上げられた剣撃が戦斧を寸前で弾き上げるが、ハルの動きはそこで止まらない。ハルがアーセナルを叩くと同時に、彼女の身体がその空間術式機能の応用によって戦斧の元へ

と『逆転送』されていた。

「ンなコトも出来んのかよ……!?」

「ナメんな……よッ!!」

頭上へ弾き飛ばした戦斧を、瞬間転移して来たハルが掴み再び伊織へと振り下ろす。叩き付けられた刃同士が、凄まじい剣戟音を響かせていた。

(クソ……二本目使うか……?)

ハルの空中からの蹴り下ろしを刀身で弾きながら、戦術についての思考を巡らせる。彼女の近接戦闘能力は極めて高く、戦闘が長引けば想定以上のダメージを負う可能性もあった。

依然として二刀流は取り回し操作精度に不安リスクの残る戦術ではあるが、戦力強化の効果は著しい。手段を選んでいる場合ではないと、伊織は既に心中でそう判断していた。

大きく距離を取った伊織は、二刀目の柄へと手を掛ける。

「……結局、新技を使うつもりは無いってコトね」

「言つとくが……別に出し惜しんでるワケじゃねエ。”アレ”はまだ完成度がイマイチだからな。寧ろコツ二チの方が、今の俺の全力切り札だ」

その構えにハルは苛立った様子を見せるが、伊織は隙を見せる事無く一刀の鋒を差し向けていた。

「誇つていい。二刀コレを見せるのは……東帝ココではアンタが初めてだ」
 「偉そうなクチ聞いてんじやないわよ……!!」

強化術式『瞬間』ソニック

ハルはその言葉を最後に、高速移動で一気に距離を詰め肉薄する。残像が浮かぶ程の驚異的な加速で、一直線に突進して来る戦斧の刃。対して伊織は一刀青眼の構えを崩さず、もう片方の手を二刀目の柄に添えたまま。

そして、剛撃は振り抜かれる。

火属性攻撃術式

『炎速爆斬』バーニングドラッグ

爆炎を纏った斧刃が届く寸前、遂に伊織の手が動いた。

掴み取られた左手の刀は、逆手のまま抜き放たれる。そしてその抜刀の勢いを利用した、柄頭の一撃が戦斧の刀身へと叩き込まれた。

退魔流・『打鐘』。

真下からの強烈な打ち上げによって、斧刃の軌道が僅かに逸れる。その刹那。伊織の右手の刀が、ブレるように揺れた。

「……………次は……………敗けない、から……………」

交錯の後。ハルは途切れ掠れた声と共に、崩れ落ち倒れ込む。瞬く間に振り抜かれた剣閃、超速の峰打は彼女の身体へと確かに撃ち込まれていた。

「中々手強かった……………流石でしたよ。」先輩

意識を失い地に伏せている少女へ、刀を収めながら伊織はそう告げる。

『時計塔南広場での戦闘、決着です!!勝者は御剣・藤堂・ペア!!共にルーキーながら、生徒会主力メンバーである一条・九重を各個撃破する大健闘!!初出場の新世代が躍進していただきますツ!!』



『そして一方こちらでは、本戦大本命天堂 蒼とその右腕ステイブ・ジャクソンが動き

出しました!! 応戦するは「連合」の大戦力黒乃・白幡・神宮寺、そしてルーキーの皇・空条ペア!!」

1・2号館、連結部ホールにて。

吹き抜けになっっているこのエリアには、隣接館の各階同士を繋ぐ無数のエスカレーターが縦横無尽に張り巡らされていた。それらを尽く斬り崩す、無数の刃が撃ち放たれる。

無属性魔力×形成術式

『飛斬・炸^{サク}』

ステイブの連剣の軌道から繰り出される、全方位への炸裂斬撃。内壁ごと周囲を斬り飛ばさんとするその連刃に、蒼とステイブを包囲していた五人は魔力盾^{シールド}を展開しながら飛び退る。

「うおおつとつと……! ねー奏、流石にちーつと停戦しない?」

「チツ……好きにしろ。認めるのは癪だが、私達だけでは手に余るのも事実だ」

物陰へと飛び込んだ千聖は、刀刃で飛斬を弾き返している奏へと共闘を持ち掛けていた。その横で斬撃が降り注ぐ中、一人がステイブ達へと突進する。

「って、お!? 啓治突っ込んでったよ!」

「何をしているんだあの馬鹿は……!?!」

千聖と奏が目を見開く先では、啓治が飛斬の乱刃を躲しながら高速移動で蒼へと接近していた。

「威勢いいのがいんじやねエか……」

「アンタが天堂か……アホ剣士やら春川は随分アンタに執心してるらしいがな……」
愉快そうに笑う蒼の眼前で、地を蹴り上空へと跳躍しながら右腕へと魔力を収束させる。

「2年後東帝^{ウチ}のトップに立つのは、アイツらじゃねエ。この、俺だッ……!?!」
そう言い放つと共に、繰り出される啓治の鉄拳。

無属性魔力×強化術式

『撃拳』

蒼の前に踏み出したステイプが刀身で拳を受けるが、臂力の全てを威力へと変換した豪快な一撃に大きく後退させられる。しかしその背後では、蒼が抜刀すらせずに反撃の術式を構築し終えていた。

「心意気は結構だが……ソレ^{頭点}を今すぐ奪りに来る気概も欲しいよなア」

無属性魔力×形成術式

『セイバ
刃』

指先から放たれるのは、魔力を押し固めただけの単純な汎用魔術。ジエネラルマジックしかしステイプの『飛斬』の原型でもあるその術式は、蒼の魔力と技術によって強烈な斬撃となり襲い掛かって来る。

「だからこうして……アンタと戦いに来てんだよ!!」

対して啓治は全身へと魔力を展開しながら、真つ向からその刃と激突した。

無属性防御術式

『テッシン鉄身』

体表に纏うだけではなく体内にも魔力を凝縮・集中させる事で、自身の防御能力を大きく引き上げる術式。奏との体術訓練の中で啓治が編み出したその技は、蒼の一撃をも防ぎ止める程の性能を発揮していた。

「お？止めやがった……」

「フフ、奏との訓練の成果ね……!」

軽い驚きを見せる蒼へと、雪華が啓治を援護するように氷属性の魔術を放つ。足元から飛び出した、突き上げる剣山の如き氷撃に、蒼とステイプは脚力強化による後方への跳躍で距離を取った。

「何だ……結構後輩鼻肩じゃねエか、黒乃」

「未来の生徒会メンバーだもの。優しくしておかないと」

蒼と雪華は互いに余裕を崩す事無く、魔力波動の応酬によって空間の制圧権を奪い合っている。

「んじや……共同戦線と行こうか。啓治もさぎりんも、遠慮なく突っ込んでいーからね。フオローはしたげるから」

そう告げて来る千聖の隣では、奏が無言で啓治達を一瞥した後地を蹴り駆け出す。そこに言葉は無くとも、『力を示せ』と言う彼女の意思は二人へと伝わっていた。

「……どう動きますか?」

「任せるわ。自分で判断して、好きにやってみろよ。カバーはしてやる」

一方で蒼もまた、ここまで牽制や援護に徹していたステイプへと自由に戦うよう促す。実力を信頼しているからこそその、彼の自主性に任せた言葉。それを受けステイプは、初めて戦いの最中に小さな笑みを浮かべつつ刀を構え直す。

「分かりました。なら……神宮寺は、俺が相手をします」

「おー、行って来い」

蒼がそう応えると同時に、奏の魔力を纏った掌底が繰り出された。

無属性攻撃術式

『砕破』
サイファ

純然たる破壊力を宿した奏の一撃が、迎撃したステイブの刀刃と激しく鬩ぎ合う。両者は激突の勢いのまま2号館へ移りつつ、本格的に交戦を開始した。

そして蒼が相手取るのは、雪華・千聖と啓治・沙霧の四人。

水属性魔力攻撃術式

『流水砲』
アクエリアスカノン

繰り出される初撃は、沙霧が放った水属性の高出力砲撃。重く強烈な威力と質量を伴った急流が迫るが、蒼は素手で払い退けるようにしてその術式を弾き散らした。

「っ……!?!」

刀すら用いず流水砲を掻き消したその一撃に、沙霧は声も出せずに瞠目する。しかし彼女を飛び越えるように、全身に強化術式を纏った啓治が再度突撃を仕掛けた。

無属性魔力×強化術式

『撃拳』×『鉄身』

『臂力強化』と、『身体硬化』。二つの術式が持つ性能を一つに重ね、組み合わせる。

無属性攻撃術式

『撃鉄拳』
ゲキテツケン

膨大な魔力を収束させた、鋼鉄の豪拳が叩き込まれた。啓治の渾身の一撃を掌で受け止める蒼だったが、今度は威力を殺し切れず押し込まれ後退する。

「ヘエ、コレは中々この技イイ攻撃だな。やるじゃねエか、啓治」

「ム力つく余裕カマしてんじゃねエぞ、クソが……!!」

感心するような声を漏らす蒼へと、啓治の猛ラツシユが炸裂する。絶え間無く繰り出される拳と蹴りの超連撃も、徒手空拳のみで易々と弾き、いなし続ける蒼。

しかしその中で、啓治が放った内の一撃が突如蒼の頬を掠める。

（何だ、急に———?）

気付いた、違和感。啓治の攻撃速度が、不規則にはあるが上昇し始めている。反応速度を引き上げようとする蒼だったが———

「———ちつと遅かったねエ、蒼」

その時既に、千聖は愉しげに嗤っていた。同時に、彼女の術式が発動完了する。

「ウラア!!!」

明らかに威力を強化された、啓治のソバットが鳩尾へと撃ち込まれた。想定以上の速

度を叩き出したその一撃は、防御を掻い潜り蒼を壁まで吹き飛ばす。
轟音。

「つとと……やつぱ白幡アイツが敵だと色々面倒だな……」

痛烈な一撃を喰らいながらも、瓦礫の中から平然と起き上がりつつ千聖へ目を向ける蒼。

白幡 千聖。

彼女が操るのは、魔術によって様々な能力上昇効果を引き起こす『術式付与』エンチャント。この技能は習得難度が極めて高く、プロですら操れる人間が限られている。

即ち彼女は連携戦闘バックアップサポートの後方支援に於ける、学園随一のプロフェッショナルだった。

厄介そうに笑っている蒼へと、更なる追撃が襲い掛かる。上空では既に、強大な魔力を乗せた大鎌を雪華が振り上げていた。

術式付与エンチャント

『攻撃性バワード』アタックバワード & 『攻撃性速度』アタックスピード & 『術式発動速度』ソニックアーツ

そして千聖のサポートによって、雪華の術式に性能上昇効果が加算される。

「さーて、コレは耐え切れるかな？」

悪戯な笑みを浮かべる千聖の視線の先で、雪華が刃を振り下ろした。

氷属性攻撃術式

ギガアイシクルセイバー
セクスタブル
『氷斬鎌刃改・六連』

撃ち出される、氷の巨大撃群。瞬く間に地表を凍てつかせ、砕く剛撃が衝撃を四方へ暴発させる。冷たい暴風が吹き荒れる中、蒼の姿は白い煙へ呑み込まれ包み隠されていた。

「何だあの威力……!?!」

「凄……い……!」

雪華と千聖の連携精度が生み出した驚異的な破壊力に、啓治と沙霧が愕然と眩く。しかし白煙が晴れ、二人は更なる驚愕の光景を目の当たりにした。

「いやア、今のは流石に危なかったわ。やっぱイイ性格してんな白幡お前」

普段と何ら変わらない、飄々とした口調と共に歩み出て来る。そこにはあれだけの猛攻を受けながら、傷一つ負っていない蒼の姿があった。

そしてその手に握られているのは、抜き放たれた一振りの刀。

「やっぱりこの程度じゃ無理ね……」

「安定のバケモンだねアンタ……」

その圧倒的な実力を目にして尚、雪華と千聖は想定内と言った表情で再び術式を構築していく。

動き出す、『最強』。彼を王者たらしめる、刃が緩やかに振り翳された。



「……全然来エへんやん」

「知らんがな」

一方その頃7号館では、暇を持って余した如月兄弟が瓦礫でジエンガに興じていた。程派手な術式で所在を示したものの、一向に誰も戦いに来ない。

「何やねん蒼クンと戦える言うたからオマエと組んだんやぞ。こんなコトなら奏さんか紅と組んだ方がよっぽどマシやったわ」

「ツかましいわボケ。もうちよい待つとけば流石にそろそろ誰か——」

亜門がそう口を開いた、その時だった。

「どおオオオッせりやああアアアア!!!」

轟音と共に、壁を突き破った何者かがフロアへ転がり込んで来る。即座に反応し、ジェンガを放り投げ双剣を抜き放つ二人。

「——ん？何だよ、折角来てみたのにほぼみんなやられてんじゃねーか」
「キミは……………!!」

そこにあつたのは、学園を大いに揺るがす“風雲児”春川 日向の姿だった。

第27話 『風神雷神』

『何と!!ここで姿を見せたのは、数々の騒動を巻き起こす渦中の人物!!話題のルーキー、春川 日向です!!!』

実況が驚愕の声を上げる中、飛び込んで来た日向と相對していた亜門が口を開く。

「キミの事は知ってるで。獅堂クンに喧嘩売ったオモロい一年の話は聞いとる」

「何だ、結構みんなソレ知ってたんだな。まあ俺はお前らのコト、ほとんど知らねーんだけど」

特に悪気も無さそうに言葉を返す日向へ、今度は土門が愉快そうに笑いつつ問い掛けた。

「どつから突っ込んで来たんか知らへんケド、どうもそのブツ^イ飛び^レ具合は本物みたいやなア。ところでキミ、相方^{もう一人}はどこに置いて来たんや?」

「あー、未来さんなら離れたトコにいてもらってる。あの人回复^ヒ魔術^ラ師らしいし、近接は出来ねエみてーだからな。巻き込んでしまっても悪イからよ」

日向が明かしたのは、自身とペアを組んでいる少女の名前。彼をこのタッググロワイヤ

ルへ誘い入れたのは、『十席』の一人と目される実力者、綾坂 未来だった。

「キミと未来サンが……？これまたエライ珍しい組み合わせやないの。どういふ風の吹き回しや？」

「あの人も大概気分屋やからな……大方その辺歩いとつた奴の中から、そこそこ戦れそうな前衛選んで声掛けたとかそんな所とちやうんか？」

「あーあり得る。想像つくわ」

未来が日向と共に参戦して来た事について、彼女の気まぐれな性格に言及する亜門と士門。しかし会話を交わしながらも彼等は、纏っている魔力を着実に戦闘態勢へと移行させつつあった。

「まあ、誰と組んどるかなんかはこの際どーでもエエねん。どんなヤツが来た所で、蒼クンと戦り合うまでの肩慣らし前座しつちゆう点では大差あらへんしな」

二人の全身から溢れ出し、揺らめき立つ魔力波動が空間を支配していく。

しかしその圧力を一身に受けながら、日向は顔色一つ変えていなかっただ。彼等と向かい合い——ただ、平然と笑っていた。

「結構な言われ様じゃねーの。けど、何でだろうな………不思議とお前らには、全く敗

ける気がしねエんだわ」

「……………言うやんけ」

虚勢、挑発、そのいずれの感情も見取れない、屈託の無い笑み。その底知れぬ不気味さに、僅かな動揺を隠すように土門は口角を吊り上げた。

そしてその隣では、剣の峰で肩を叩きながら亜門が日向へと一步踏み出す。

「デカいクチ叩くのはキミの勝手や。せやけどなア…………一度剣抜いた以上、オレらはもう手加減出来ひんで」

「ハハ、そりや当然。俺も本気ガチンコでしか戦り合う気はねーから安心しろよ」

日向が不敵にそう言い返した、直後。

瞬く間の疾走と同時に、双方の魔力が激突した。



「え、日向アイツタッグ戦出てんの!？」

「うん。なんか見た感じ、未来ミライと組んでるっぽいよ」

その頃教員室では、事務作業が一段落した万丈・冴羽・久世・篠宮の四人が演習場スタジアムへ

向かおうとしていた。携帯端末で学内SNSを閲覧していた久世から、日向がタツグロワイヤルに参戦していると聞かされた冴羽は驚きの声を上げる。

何せ他者との連携が限り無く不可能に近い、日向の破天荒な戦闘スタイルは今に始まった事ではない。

「あー、未来か……アイツはホント、時たま突拍子も無い思いつきで行動するよね」

そんな戦況を掻き回すトリックスターを、バトルロイヤルに引き入れた未来へ呆れたような溜息を零す冴羽。

「あの子最近、やる事為す事が天堂君と似て来てる気がするわ……」
「何ソレ最悪じゃん……」

日に日に彼女の奔放さが増している一因に、篠宮が学園屈指の自由人問題児からの悪影響を挙げる。冴羽は眉間を押さえながら嘆き、その隣の万丈も苦々しい表情で沈黙していた。



「ツ!?この魔力………!!」

「何だ、どうした?」

時計塔広場でのハル達との戦闘を終え、激しく魔力がぶつかり合っている北方の7・8・1号館へ向かっていた伊織と天音。しかしその時、天音が魔力知覚によつてある人物の存在を捉える。

「……多分、春川だわ。7号館で、亜門さん達と戦つてる……!」

「は!? アイツ、出て来たのか……!? つか誰と組んでんだ……?」

「そこまでは分からないけど……とにかく、あの火属性はアイツで間違いない」

自分達も知らぬ間に日向がタッグロワイヤルに出場していた事に、伊織達は少なからず衝撃を受けていた。



そして1号館にて応戦していた蒼もまた、7号館で勃発した新たな戦闘を感知していた。

(この魔力……日向か。よりによって亜門達と当たるとはな……)

雪華から撃ち込まれる魔術を斬り返しながら、日向達が交戦している方角へ目を向ける蒼。その背後から、啓治の魔力を纏った右脚が蹴り下ろされた。

「どこ見てんだア、オイ!!」

「おーおーわーかつてる、よッと……!!」

迫り来るその一撃に対し蒼は、見向きもせずスウエーで難無く躲す。そして打ち据えるような反撃の回し蹴りで、啓治の身体を軽々と叩き飛ばした。

大文字獅堂。

御剣伊織。

春川日向。

神宮寺奏。

この四人は魔術を用いない基礎身体能力に於いて、全学生の中でも突出した実力を有している。しかし学園トップの総合戦闘能力を誇るこの男もまた、彼等に比肩する身体技能・体術能力を備えていた。

更に蒼は指先へと魔力を収束させ、追撃の魔術を撃ち放つ。

無属性魔力×形成術式

『^{ブラスト}弾』

術式技能も極めて高い蒼の、鋭く洗練された一発の弾丸。しかし啓治へと飛来して来たその術式に、沙霧が即座に反応を見せた。

「ヤッせません……!!」

水属性魔力×形成術式

『流盾』
フロースールド

啓治へ投射された沙霧の魔力が、彼を守る防御障壁を構築する。水属性魔力の特性の一つ『流動』性質によって、蒼の弾は威力を殺され盾の表面を滑るよう後方へ受け流された。

(アレが桜の妹か……やつぱ中々やるなア、『三大名家』)

障壁術・封印術に長けた魔術旧家、『空条家』。その一員として優れた防御能力を發揮している沙霧に、蒼は心中で感心するように小さく笑っていた。

「……お前らより先に、アイツらを片付けた方が良さそうだ」

「……………ツ！皇君、空条さん！退がって!!」

雪華と千聖に目を向けながら、蒼が一刀を腰元に引き寄せ居合の構えを取る。彼の狙いに気付いた雪華が後退の指示を出す、その時には既に啓治と沙霧は蒼の術中だった。

無属性魔力×形成術式

『縛』
バインド

気付かぬ内に壁や床から伸びていた無数の魔力帯が、二人の足へと絡み付き動きを封

じている。蒼は四人を相手取りながら、彼等に悟られず拘束術式の罾トラップをも仕掛けていた。

「余裕が無エのは良くねエなく。対応の余地は残しとくモンだぜ」

「クソ……!!」

「いつの間……」

焦りと動揺を隠せない啓治と沙霧だったが、彼等が拘束から抜け出すよりも蒼の刀へ魔力が収束する方が遥かに速い。

「雪華！壁!!」

「分かってる……!!」

「……………遅エよ」

千聖の声に応えながら雪華が氷壁を創り出そうとするが、その完成を待たず蒼の刃が振り抜かれる。

しかしその直前、三発の銃声が戦場に響き渡った。

それと同時に二発の銃弾によって、啓治と沙霧の拘束帯が的確に撃ち抜かれ弾け散る。そして最後の一発は、蒼の刀身に直撃しその太刀筋を僅かに歪ませた。

「紅輔……あの野郎オ」

悪態めいた眩きと共に放たれた、蒼の魔力斬撃。その一撃は軌道を逸らされ、啓治達の頭上の空間を斬り裂いた。

? 号館、9階吹抜けホールにて。

「一つ貸しだかなア啓治。感謝しろよ?」

銃口から硝煙を上げていたのは、セイバーズ・カンパニー製狙撃銃『ゲルハルト—
T02』。そのスコープ越しに戦場を一望していた、学園屈指の狙撃手はそう口にする。

後輩達の窮地を救ったのは、『風紀』にて如月兄弟と並ぶ実力者、湊 紅輔だった。

湊が撃ち込んだ最初の二発は、啓治達の拘束を解く為の魔力弾。そして最後の二発は、発射後不規則な弾道変化を起こす狙撃魔術『蛇^{スネークブラスト}弾』だった。

現に蒼は何処から銃弾を受けたのか測りかねているようで、湊の狙撃ポイントを探るように周囲を見回している。

「ハハ、無駄無駄。見つかるワケ——」

そう高を括っていた湊だったが、その瞬間。

風切り音と共に、湊の数メートル真横の空間を魔力斬撃が通り抜けた。それを目にした湊がその場から飛び退るとほぼ同時に、再度撃ち込まれた斬撃が今度は眼前の窓と床を斬り砕く。

「……外したか」

舌打ちと共に蒼が刀を下ろすが、その頃湊は間一髪で崩落するフロアから飛び降りていた。

「ツブねエな……!!ムチャクチャかよあの人……!?!」

『生きてるか?湊』

ほぼ山勘で斬撃を飛ばして来た蒼に唸るような声を上げていたが、その時奏から通信が入る。

「えエ、まア何とか。そっちは大丈夫なんスか?」

『問題無い。他の状況はどうなってる?』

「えーツと、7号館ではバカ共が戦り合ってます。んで南広場からは……藤堂と御剣が来てますよ、コツチに」

◆◆

「———そうか、分かった」

湊からの通信を切った奏は、飛来して来た斬撃を一刀の下に斬り伏せる。そして上空から斬り掛かって来た、ステイブの剣撃を同じ刀刃で受け止めた。

「……部下の戦いが気掛かりか。大した余裕だな」

「フツッ、お前を蔑ろにしているワケじゃないさ。……拗ねるなよ」

そう言い返すと共に奏が、舞うような体捌きによる二段回し蹴りでステイブを吹き飛ばす。そこから更に刀へ魔力を纏わせ、捻りを加えた突きの刃を繰り出した。

「撃ち出されるのは、弾丸の如く”飛ぶ”刺突。

無属性魔力×形成術式

トックウジン
カイ
『突空刃・廻』

魔力で形成された飛刃にステイブは自身の刀を叩き付けるが、その一撃は彼の頬を掠め斬り裂いていく。

「お前は亜門と戦いたかったかもしれないが……奴の標的は天堂だけだ。今回は私で我慢しておけ」

「勝手な憶測はよしてもらおうか。お前の狗になど興味は無い」

奏の挑発めいた言葉に、ステイブは乱雑に血を拭いっつ剣呑な視線を返していた。



『何という事だ、この戦局を一体誰が予想出来たでしょうかッ!!』

熱狂に包まれたスタジアムにて、興奮に満ちた実況の声が響く。観衆の視線の先のモニターには、熱戦を繰り広げる三人の姿が映っていた。

日向の右脚に纏われた紅い魔力が、蹴り抜くようなモーションと共に撃ち出される。

火属性魔力×形成術式

『大輪破』
ダイリンハ

放たれたのは、炎によって型作られた巨大な斬輪。凄まじい速度で襲来するその一撃を、亜門は烈風を纏った諸手の刃で迎え撃つ。

風属性攻撃術式

『如月二刀流・双旋斬』
ソウセンザン

叩き込まれた双刀が、業火の大輪を両断し吹き飛ばした。それと同時に今度は土門が、瞬く間に日向の背後上空へと跳躍し回り込む。そして両手に持った双剣の刃を重ね合わせ、柄に備えられたトリガーを引いた。

皇重工製魔術武装『紅月』、カリバーモード大剣形態。

その双剣は亜門の物とデザインは同じだが、士門の為の個人専用改造パーソナルカスタムによる追加機能『合体機構』が搭載されていた。

一振りの大剣と化したその巨刃に、雷の魔力を収束させながら振りかぶる。

雷属性攻撃術式

『如月一刀流・雷電斬』
ライテンザン

大上段から振り下ろされる、迅雷の一刀。日向は魔力を集めた両腕を交差させ、空中からの士門の剣撃を防ぎ止めた。

「ヌウンツツ!!!」

「オオツ、ラアアツツ!!」

全体重を乗せ叩き付けられた刃を裏拳で弾き、更に撃ち上げるようなアッパーカットで押し返す。そこから全身を振り上げ、強烈な回転力を帯びた渾身の蹴りを叩き下ろした。

士門を蹴り返した日向はそのままフロアに手を突くと、両脚で周囲を薙ぎ払うように旋回し始める。ウィンドミルムーヴを起点として巻き起こされるのは、日向の魔力が生み出す『竜巻』。

「吹っ、飛べ!!!」

火属性攻撃術式

『豪嵐破』
ゴウランハ

周囲の空間をも巻き込み渦巻く、爆炎の大嵐が炸裂する。繰り出された大技に、咄嗟に防御体制を取る亜門と士門。

『驚異の新星、春川日向の猛攻によって——』

しかしその猛炎をマトモに喰らった二人は、8号館の内壁を突き破り大講堂まで吹き飛ばされる。

『“学園最速”と謳われる男、如月亜門!!そして彼と肩を並べる猛者、如月士門が——
 —!!』

下馬評を覆す大立ち回りに、どよめき沸き立つ観衆達。最早戦場の追い風は、この男の背中へと吹き付けていた。

『——圧倒されていますッ!!!』

実況の声高な叫びと共に、観衆からの一際大きな歓声が上がる。

「クソツタレが……!!」

「やっぱ未来サンが相手となると、中々やりにくくなるモンやなア……」
ステージ上まで飛ばされた如月兄弟は、階段を降りて来ている日向を睨み上げていた。

東帝トップクラスの連携能力を持つ二人を相手に、日向は互角以上に渡り合っている。その要因は、『後衛』として彼をサポートしているあの少女の存在だった。

6号館8階、大回廊にて。

「フフ……私は気分なんかで、日向君を選んだワケじゃないよ」

窓枠に頬杖を突き戦場を眺めるその少女の名は、綾坂 未来。そう呟く彼女は大きく離れたその場所から、『回復術式』によって日向の戦鬪を支援していた。

——彼女の魔術は極めて長大な術式効果距離、即ち『射程』を誇る。つまり未来は相手の攻撃が一切届かないような場所から、一方的に味方を後方支援する事が可能だった。

（やっぱ相当凄エんだな、あの人……）

自身をタッグ戦に引き込んだ彼女の、想像以上の能力の高さに少なからぬ驚きを感じ

ていた日向。

姿すら視認できない場所の味方へ、的確に治癒魔術を施す技術。傷を修復するのみならず、身体の奥底から力が湧き上がるような感覚すら与える術式性能。それら全てが未^{ヒーリングウイザード}来の回復魔術師としての、圧倒的な才覚の表れだった。

「どうした。まだこんなモンじゃねエだろ。それとも……………もう、終わりか?」

そう言い放っている間に、日向の傷は未来の魔術によつて回復していく。目元の刀傷からの出血は、緑色の魔力光を発しながら瞬く間に治癒・修復されていた。

「……………コレで終わり、やと?随分ナメくさつてくれたモンやなア」

「ココまでコケにされたんも久々とちやうか……………」

日向に見下ろされていた二人は平然と起き上がると、小気味良く首を鳴らしながら立ち上がる。

「オイ……………」アレ」で行くぞ」

「おオ」

短く言葉を交わした亜門と土門は、突然双剣^{得物}を鞘へと収めた。

(何する気だ……………?)

何か仕掛けて来るつもりかと、日向が警戒し身構える。その眼前で二人は——高

速移動を發動させた。

姿が掻き消えるような速度で、日向を中心に包围するように疾走する。そこから一気に抜刀し二人同時に突進するが、繰り出される連続刺突を日向は蹴りと掌底で迎え撃つた。

攻撃を弾き返された亜門と土門は、距離を取り漸く足を止める。

そこに立っていた彼等は、どちらも髪の色が”黒”へと変化していた。

「……は……!?!」

恐らく魔術によって変色させていると思われるが、想定外の行動に日向は動揺を隠し切れない。

翡翠色の髪の亜門と金髪の土門は『双子』の兄弟、つまり極めて容姿が似通っている。その為両方が黒髪になってしまうと、最早どちらがどちらか判別がつかない程だった。

「何が出るかは?」

「喰らってからの?」

「お楽しみイ」

再度双剣を抜き放った二人は、人を食ったような笑みと共に鋒を向ける。

「4択クイズのオ」

「お時間でエーす」

そう言い放った二人の全身から、双属性の魔力が放出され————計四属性の魔力が、空間へと解放された。

第28話 『インビジブル・バレット』

同時に左右へ駆け出した亜門と士門は、双方向から弧を描くように肉薄し日向への距離を詰める。そして左側から接近していた方が、双剣から魔力を放出させながら刃を振り抜いた。

その属性は、『風』でも『雷』でもない第三の魔力。

水属性攻撃術式

『如月二刀流・雨吹』アマツキ

繰り出されるのは太刀筋刃の軌道から放たれる、打ち付けるような“斬撃の雨”。

「まだ属性隠してたのか……!!」

「手札カードが出揃った言うた覚えは無いで」

亜門と士門のどちらかは不明だが、新たに使つて来た水属性の魔術に日向は警戒を引き上げた。火属性の拳と蹴りの連撃でその斬撃を弾き散らすと、今度は日向が反撃の術式を構築する。

火属性攻撃術式

『戟衝破』

殴り抜くモーションと連動し放たれるその熱線は、右側から日向へ距離を詰めていた方へと襲い掛かった。炎のレーザーが猛スピードで迫り来るが、その相手は双剣を地に突き立て迎撃の魔術を発動させる。

火属性魔力×形成術式

『如月二刀流・炎威』

ホムラオドン

右側の男が使つて来たのは、またしても新たな四つ目の属性。猛炎を生み出す剣技を防御に転用したその術式は、地から噴出した火属性魔力の壁で戟衝破の威力を相殺する。

戦いの中で得た情報から、日向はある事実を確信した。

如月亜門と如月士門。彼等二人は『風属性』と『雷属性』以外にも、『水属性』もしくは『火属性』の魔力を有した『双属性魔術師』だった。

二属性×二人の、ランダム四属性による波状攻撃。数多の敵を打ち破つて来たこの連

携戦術が、如月兄弟のコンビネーションの真髄だった。

「成程な……フザけてんのかと思っただけど、中々面白エコト考えるモンだな」

「初見のヤツは大体目エ回すねんけどなア。キミは対応出来る分まだマシやで」

亜門が愉しげに刃を向けて来るが、日向もまた不敵な表情で言葉を返す。

「あア……何となく分かって来た。片方は『風』と『水』、もう片方が『雷』と『火』……

組み合わせはそんなトコだろ」

「ッ……!!」

「……ソレが分かった所で、捌けるかどうかは別の話や」

自分達の属性を言い当てられた亜門は軽く瞠目するが、土門は無意味だと言わんばかりに魔力斬撃を撃ち放った。

講堂の座席を斬り破りながら、雷の刃がフロアを走り抜ける。炎を纏った握撃で掴み止めるが、その上空からは跳躍して来た亜門が双剣を振り下ろしていた。

双刃が帯びている魔力は、『水』。火属性では防御出来ないとい座に見切った日向は、最小限の重心移動でその連刀を躲し受け流す。

そして肩口を僅かに斬り裂かれながらも亜門の刀身に踏み込むと、そのまま駆け上がり顎下へと膝蹴りを炸裂させた。

強烈な一撃を叩き込まれる亜門だったが、日向にも匹敵する驚異的なタフネスで一瞬の内に意識を取り戻す。

「効くなア……！目エ覚めるわ」

そこから亜門が繰り出すのは、魔力によって強化された臂力による純粹な『連続剣撃』。

『如月二刀流・連研』
レンケン

特殊な術式効果は持たないが、高い速度と威力を持った剣技は近接戦に於いて依然として脅威である。間隙無く打ち込まれる連刃は、日向の格闘能力があっても全てを捌き切る事は出来ない。

その時日向は亜門達の連撃を払い飛ばすように、全方向へと炎熱を放出した。力任せな牽制にも見えたが、日向の笑みにはまだ戦いを楽しんでいるかのような余裕も見え

る。

「……………ここで”使う”気は無かったけどよ……………やられっぱなしも性に合わねエ」

「んん？ナニをブツブツと……………」

その眩きに、怪訝そうな目を向ける亜門。

「出し惜しみて敗けんのもバカらしいしな……………よく見とけ。コッチも面白エモン見せて

やる……!!」

そう言い放つと同時に、日向の魔力波動による圧力が大きく跳ね上がった。急激な出力上昇と共に、日向の右腕へと膨大な魔力が収束していく。

日向の脳内にあつたのは、鋭く研ぎ澄まされた『刃』のイメージ。その『型』に対応するように、魔力が術式を構築していく。

『灼き斬る』イメージが『斬撃』の性質を与え、日向の右手へと術式として収束していた。型を成すのは、炎の手刀。

その彩いろは——”蒼あざく、変わり始めていた。

炎の『凝縮』が、術式を新たな段階ステージへと引き上げつつあつた、その時。

日向達が立っていたフロアが、轟音と共に突如斬り崩くずれされた。

「ッ、どつからだ……!!」

前触れ無く足場が崩壊していく中、その場に新たな乱入者が吹き飛んで来る。

「クソ、派手にブツ飛ばしやがって……!!」

「啓治!？」

「春川!?! お前出場してたのか!?!」

日向達の前に姿を現したのは、1号館にて蒼と交戦していた筈の啓治だった。そこから更に雪華や千聖、沙霧なども次々とこちらへ移動して来る。

「何や……騒がしなってきたなア」

士門が面倒そうに呟く中、耐荷重が限界に達した大講堂が遂に完全崩落した。

彼等が揃って転がり落ちたのは、5・6階複合『ポータルホール』。環状本棟中最大の8号館にて各所とのアクセスの要となる、広大な収容体積を持った空間である。

そして最後にその場へ足を踏み入れたのは、啓治や雪華達をここまで押し込んで来た男。今まさに7階大講堂を軒並み斬り飛ばして見せた、天堂 蒼だった。

「やつと来よつたなアツ……!?!」

「オイ待てやコラ!! 突っ込むなボケ!!」

「お、何だお前ら。まだ日向と戦ってたのか」

亜門は士門の制止も聞かず、待っていたと言わんばかりに斬り掛かって行く。対して蒼は一切の焦りも見せず、その猛烈な双剣撃を平然と防ぎ止めていた。

「お前の相手はッ、俺だろ……!?!」

「あんのクソが、俺に押し付けていくなや……!!」

「あれ、春川君……!?!」

「さぎりん、ちよつと下がろう。亜門の風に巻き込まれるから」

「皇君、如月君が押し返されたら仕掛けるわよ」

「了解です」

土門へと蹴り掛かる日向の姿に、驚いている沙霧を千聖が制する。その前方では雪華と啓治が、再度突撃すべく蒼達の戦闘を注視していた。

幾多もの魔術が交錯し、局面は乱戦状態へと突入していく。

——その瞬間。入り乱れた戦局を斬り裂くように、一発の弾丸が撃ち込まれる。全員の意識の外側から、盤面へと突き刺された奇襲の一撃。啓治と沙霧が目を見開く先では——

「……あー、マズったわ。油断した」

千聖が背後から、魔術弾によって撃ち抜かれていた。

「ゴメン雪華、先墜ちるわ」

ダメージが限界に達しつつあった千聖は、置き土産とばかりに雪華へ次々と術式を付与する。その直後に継戦不能状態と判断され、転送魔術によってスタジアムへと強制送還された。

そして弾丸を撃ち込んで来た方角にいたのは、灰色と緑色の髪の毛の二人組。

「うまいコト漁夫ったね」

「悪く思わんといて下さいよ〜？生徒会長」

これまで戦場に姿を見せなかった、更科 凧&一文字 陣のペアだった。

『おおおツとオオオオオ?!?ココに来て戦況が大きく動き始めましたツ!!!黒乃雪華をサポートしていた白幡千聖が、急襲を受け脱落する大番狂わせ!!彼女を倒したのはこれまたルーキー、一文字陣による狙撃魔術です!!』

『いやー忍んでましたね〜!!誰もが意表を突かれた一発でした!!』

雪華や千聖の索敵網を欺いた、その潜伏技術に言及する実況の二人。

その実態は、陣の肩に手を乗せていた風による『ステルスフォオミユウ隠密術式』の応用だった。

『隠密術式』の能力は、風自身の姿を透明化し他者から見えなくするという物。しかし一定までの体積であれば、風が触れた物にも透明化の効果は作用する。これによつて陣は狙撃の瞬間、誰からも視認される事なく千聖を撃ち抜けたという事だった。

「触つとるモンも消せるとか、やつぱ相当便利やなア」

「人間よりデカいサイズは無理だけどねー」

能力の拡張性について言葉を交わしていた陣と風だったが、そこへ怒りのままに地を蹴つた啓治が突撃して来る。

「一文字テメエ!!」

「ちよいちよい、ボクにキレンのはお門違いやろ?」

啓治の剛拳の一撃を、三重の魔力障壁で防御する陣。

「横槍は集団戦の基本やんか。キミにどうこう言われる筋合いは無いで」

「あアそうだな。だから更科さんには何も言わねエさ……だがテメエはシンプルにブチのめす!!俺がそういう気分だからなア!!!」

猛攻を繰り出す啓治を押し返すように、陣もまた至近距離から連弾を叩き込む。

「んじゃ、こっちはこっちで仲良く戦ろうか……!」

「流石だね、凧ちゃん……!!」

一方で沙霧は、凧の不意討ちにも感心したような声を漏らしつつ彼女を迎え撃っていた。



ステイブの一刀が、遂に奏を捉えた。

双方互角の斬り合いを展開していたが、肩口へ強烈な一撃を入れられた奏が両膝を突く。

「……その傷では最早立てまい」

勝敗は決したと言外に示すように、鋒を突き付けるステイブ。しかし奏の目には未だ、不敵な闘志が消えず残っていた。

「……あまり私の部下を舐めるなよ」

「何……?」

ステイブが訝しげに彼女を見下ろした、その時。

背後に新たな気配と共に、魔力反応が出現する。
咄嗟に振り向いたステイブの、視線の先にあつたのは――

「あ、気付きやがった」

――上空で魔力を纏った刀を振り上げた、湊の姿。

狙撃手でありながら距離を詰めて来ていた彼は、剣術によって近接戦にも対応可能な
”オールラウンダー”だった。

無属性魔力×形成術式

『翼翔斬』
ヨクシヨウザン

振り下ろされた刃から放たれるのは、猛禽の翼の如き魔力斬撃。ステイブはそれを
叩き斬るべく自身の刀を振り上げるが、その行動は既に”一手”遅かった。

無属性魔力×形成術式

『セイバー
刃』

奏の手の中に創り出された、魔力によって形成された刃。背後から突き込まれたその
一撃が、刀を持つ右腕を貫いていた。

「ッ……………!!」

そして迎撃を封じられたステイブへと——湊の斬撃が叩き込まれる。

「——2対1で勝てなかったら、流石にカツコつかねエだろ」

そう告げる湊の前で、遂に力尽きたステイブが地に伏せた。

『幾人もの出場者を斬り倒して来た、ステイブ・ジャクソンがここで惜しくも敗北!!
「剣鬼」の異名を持つ神宮寺奏を追い詰めるも、彼女の懐刀湊紅輔との巧みな連携の前に
討ち取られましたッ!!!』

響く実況の中で奏も崩れ落ちかけるが、寸前で湊に抱き止められる。

「お疲れ様っス。まだ余力残ってます?」

「いや…………もうリタイアだな、私は。お前は亜門達を手伝って来い」

「えエー…………俺ももう結構しんどいんですケド…………」

「黙れ。さっさと行け」

奏を支柱の側に座らせると、渋々といった様子で新たな戦場へ向かい始める湊。そうして2号館の外へと足を踏み出すが——

「はー面倒くさ……って、お？まさかの出待ち？」

そこには刀を携えた、一人の少年が立ち塞がっていた。

「……ステイーブさんを倒したのはアンタか？」

「おー、まアそうっちゃそうだけどさ……オマエは何しに来たワケ？御剣」

彼を待ち構えていた御剣　伊織は、抜刀しつつ問い掛ける。対して湊もまた、刀を抜き放ちながら声を返した。

「一応俺の兄弟子なんぞな。仇は取ってかねーと、後で蒼さんがうるせエんだよ」

「あー、そーいやお前らそうだったな。別にいいけどさ……お前にや多分負けねエよ？」
応戦の意思を見せる湊は、恐らく剣士としても相当な実力を有している。難敵である事は間違いなかったが、伊織の表情に緊張は見えない。

「確かに俺一人だと、アンタに勝つのは厳しいかもな」

「……あーやべ、忘れてたわ」

暫く黙っていた湊だったが、ふと思ひ出したようにゆっくりと空を見上げる。

そこにあつたのは、上空に膨大な魔力を収束させていた天音の姿。上昇気流で浮遊していた彼女は、魔力で形成された稲妻の巨剣を天空から叩き下ろした。



「スマンな日向くん……ポチポチキミと戦つとる場合やなくなつて来た」

「はア……!?!」

日向を相手取っていた士門だったが、亜門の劣勢をいち早く察知し新たな策に打って出た。双剣を合体させ再び大剣形態へと移行させると、雷属性魔力を一気に刃へと集中させていく。

膨大な魔力の収束を感じ取り、警戒と共に防御体制に入る日向。しかし士門の術式は、日向の想定を遥かに超える速度を叩き出す。

「今回はココまでや。勝負の続きは次に預けとくわ」

そして繰り出されるのは、爆発的な威力を持った雷の『砲撃』。

雷属性攻撃術式

ゴウキンケン

『如月一刀流』奥義・号起神頭』

「なっ——!?」

凄まじい轟音と共に叩き込まれた、猛烈な激雷。日向の身体は瞬く間に8号館内壁を突き破り、中央広場へと吹き飛ばされていた。

『出ましたア!!ここで如月士門の”奥義”が炸裂!!マトモに直撃した春川日向、ホールから大きく弾き出されましたが果たして無事でしょうか!?』

(……多分、仕留め切れてはないうろなア……)

一時的にはあるが盤上から一人の敵を排除した士門は、すぐさま蒼と戦っていた亜門に加勢する。

「遅いねんボケ」

「じゃあ後先考えず突っ込むなやカス」

流れるような罵倒を交わしつつ、蒼の前に並び立つ如月兄弟。

亜門と士門、そして雪華と相対しながら、蒼は暫し考えを巡らすように宙を仰ぐ。

「——佳境、か………」

そう呟く彼の眼に映るのは、近付きつつある戦いの”終わり”。一つ小さく息を吐く

が、すぐに再び笑みを浮かべると右手の刀を持ち上げた。

「そろそろ大詰めだ。ギア上げてくから、ついて来いよ」

そう告げると同時に、蒼の刀へと急速に魔力が収束していく。

「「ツ!!!」」

「「!?」」

雪華達だけでなく、交戦していた啓治・沙霧と陣・凧もその空間異常に気が付いていた。彼等の魔力知覚が警鐘を鳴らしていたのは、蒼の刀に宿る尋常では無い『魔力密度』。

これまでの術式とは一線を画した、絶対的な一撃が”来る”。

本能で危機を察知し、即座に動き出す七人。しかし彼等は、全員が同じ行動を取った訳ではなかった。

雪華・亜門・土門の三人は咄嗟にその場から飛び退るが、啓治達四人の一年は魔力盾を形成し防御体制を取る。その判断が悪手だと、彼等は知る由も無い。

蒼の剣術の真の”脅威”、それを知り得ているかどうか七人の行動を分けた。

——そして、一刀は振り抜かれる。

無属性攻撃術式

『斬界』

放たれた、蒼の”最強”の剣技。

その一撃は——啓治達の魔術防御を、物ともせずには斬り砕き、貫通していた。

規格外の威力と切断性能。凄まじい衝撃をその身に受け、四人の意識は一瞬の内に消し飛ばされた。

『これが……天堂蒼の、「斬界」ですツ!!!万物を斬り裂く最強の術式の前に、四人のルーキー達が瞬く間に戦闘不能に陥りました!!!』

啓治や沙霧達が次々と倒れ込む中、雪華の首筋を一滴の汗が流れ落ちる。常識の範疇をも超えつつある、眼前の男の実力を彼女達は再認識していた。

「さて、と……んじや、最後の仕上げといこオカ」

淡々とした口調で、その刃を突き付ける蒼。

そして戦いは、最終局面へと傾れ込む。

第29話『現在地』

「……オイ」

「何や」

蒼と対峙していた土門と亜門は、自分達だけに聞こえる声量で言葉を交わす。

「……お前、蒼クンとタイマン張りたいんやろ」

「……………やったら何やねんクソが」

考えを言い当てられた亜門は、見透かして来るような土門の指摘に悪態で返した。

「顔に書いてあんなねんボケ。……しゃアないから時間稼いだるわ。行くならさっさと行け」

「あア……!?!」

「まア、どうせサクつと敗けんのがオチやろうけどな」

彼の意志を汲み、足止めを買って出た土門。意外そうな表情を向ける亜門だったが、やがて愉快そうに笑うと双剣を構え直した。

「ハッ、一言多いねん。……感謝はせエへんぞ」

「そこは黙ってなんか奢れクズ」

亜門はそう言い残し、地を蹴って蒼へと飛び出す。それを目にした雪華も動き出そうとするが、彼女の前に土門が立ち塞がった。

「スンマセン雪華サン。チョットの間でエエんで、オレと遊んどつてもらえます?」

「あら……彼を一人で行かせるのね。流石に少し無謀じゃない?」

「アイツはホンマに、よオ勝てへん勝負フツ掛けがちなんですわ。ガキヤから」

雪華と土門の掛け合いの先では、亜門が渾身の剣撃を振り下ろす。

「前にも言つたろ? お前一人じゃ俺には勝てねエよ。……まア、二人で来た所で変わんねエか」

単身での突撃を、蛮勇だと一蹴する蒼。そのまま連撃を交わしていた二人は、フロアを突き破り1号館へと転がり込む。

「いつまでもそこに踏ん返り返っておけるとは、思わへんコトやな。そろそろ明け渡してもらおうで、No. 1」

「……お前にや無理だよ」

しかし亜門は獯猛にそう言い放つと、烈風を発生させ蒼を大きく弾き飛ばした。

「ムリかどうかは……コレ喰らってから、もっかい言つてみイヤ」

「……………!!」

そして魔力出力が跳ね上がると同時に、亜門の全身へと膨大なエネルギーが収束し纏われていく。その姿は、修行の果てに完成した彼の”切り札”。

風属性魔力×強化術式

『形態変化・風神』

生み出された爆風は亜門を囲むように吹き荒れ、彼の身体を包み隠した。

「——悪いけど、私にもあまり時間は無いから。長くは付き合えないわよ?」

「千聖サンの死に光の制限時間リミットですか」

「言い方……………!!」

一方で雪華と土門は、氷と雷の魔力による斬撃の応酬を繰り広げていた。

雪華が言及されていたタイムリミットとは、千聖が気絶寸前に彼女へ施した『術式エンチャント付与』について。

千聖は膂力・速度・耐久性・知覚能力・魔力出力・変換効率の全てを引き上げる術式をあの一瞬で付与して見せたが、その効果の持続時間は残り約2分と言った所だろう。その術式付与の効果が切れれば、雪華と言えど蒼に勝てる可能性は限り無く低くなる。

ならばこの効果時間内で土門を倒し、そして蒼と戦うしかない。しかし土門もまた彼女の狙いを理解しており、だからこそ”時間切れ”まで足止めに徹しこの場に押し留めようとしている。

僅か数分、戦況を膠着させればいい。そう目論んでいた土門だったが、雪華はその状況を打破すべく一気に動き出す。

「……私を何秒、ここに引き留めておけるつもりだった？」

問い掛けるような声と共に、凍えるような突風が吹き抜けた。その直後、膨大な質量を持った氷の『波』が襲い掛かって来る。

氷属性範囲術式

『コールドフォース』

千聖によって性能を強化された魔術が、凄まじい威力と速度で土門へと叩き込まれた。咄嗟に相殺すべく炎の魔力を放出するが、その猛烈な勢いに大きく押し込まれ後退する。

「……春川君に使った”あの技”は、私には見せてくれないの？」

「アレはそんなポンポン撃てるモンとちゃうんですわ……！」

奥義の連発は出来ないと返答した土門は、双剣を地へと叩き付けその衝撃に乗って飛

び上がった。そして上空で双剣を合体させ、魔力を掻き集めつつ大剣を振り被る。
 「もう少し長引かせたかったケドな……ここまでか」

雪華の連撃に耐え続けていた土門だったが、最後の勝負を仕掛けるべくその刃を打ち下ろした。

雷属性攻撃術式

『如月一刀流・迅雷神剣』

迫り来る雷撃の一刀に対し、雪華は回避行動すら取らず一直線に疾駆する。そして紙一重で斬撃を受け流し、一気に土門の眼前まで距離を詰めていた。

「残念だけど——^{属性}魔力の相性が悪かったわね」

その言葉と共に、カウンターの一撃が炸裂する。

氷属性攻撃術式

『^{アイシクルドライブ}氷速凍斬』

『氷結』の魔力を纏った、大鎌の刃。撃ち込まれた剛速の一閃は、土門の魔術防御を凍結させ、打ち砕いた。

『如月土門、「絶対女王」へ果敢に挑むもあと一步届かず!!白旗千聖の援護を得ていた、黒乃雪華の刃が「雷神」を下しました!!』

そして。

『一方こちらでも、天堂蒼と如月亜門の戦いが決着!!!軍配が上がったのは——』

士門を倒した雪華の背後へと、一人の足音が響いて来る。

「……まさか、そっちの方から出向いてくれるとはね」

振り返った雪華の、視線の先に歩いて来ていたのは——

『——やはり学園最強のこの男でしたッ!!!「劍聖」、天堂蒼!!!その圧倒的な力によって、「風神」すらも敗れ去りました!!!』

——亜門との魔術戦闘を、危なげなく制して来た蒼だった。

1号館には蒼の手によって斬り捨てられた亜門が、壁に叩き付けられたまま気絶している。刀の峰で肩を叩いていた蒼だったが、その顔には僅かながらも落胆の色が見えた。

「白幡の『付与』エンチャントが切れる前に、お前と戦り合いたかつただけどな……一步遅かったか」

嘆息しながら蒼が口にしたのは、雪華に付与された術式の状態。千聖の『術式付与』による能力上昇効果は、土門との戦いによって既に失われていた。未だ雪華は戦意を放棄したようには見えないが、勝敗は最早決していると云って良い。

「まだ、やってみないと分からないでしょう？」

「へエ……お前にしては、珍しいコト言うじゃねエか」

しかし勝負を捨てる気は無いと告げる雪華の言葉に、意外そうな声を返しつつ蒼もまた得物を構える。

爆発的な魔力衝突。その戦いは、一瞬の交錯だった。

止まる事の無い、実況と歓声。雪華との戦いを終えた蒼は、1号館を後にすべく歩き出す。最早自分と戦える人間は残っていないと、そう思っていた。

しかし、蒼の魔力知覚が”三人”の反応を捉える。その直後。

爆音を轟かせながら、二人の少年が一号館へと突っ込んで来た。そして少し遅れて、魔力気流に乗った一人の少女がその場に到着し着地する。

「オイ藤堂！お前流石に飛ばし過ぎだ!!」

「ゴメン……ちよつと力加減ミスったわ……」

「おおお勢いスッゲーな……死ぬかと思った……」

少女の魔力による気流操作でここまで移動して来たと思われるが、その尋常では無い速度について危険性を少年から咎められている。

蒼の前に姿を現したのは、御剣 伊織・藤堂 天音・そして春川 日向の三人だった。

「伊織……!?!つか日向、お前土門にフツ飛ばされたんじゃないやなかったのか?」

「おー蒼。いや、アレな。時計塔にブチ当たりかけたんだけど、ギリギリで天音が止めてくれてさア。マジで危なかったわ」

驚いた様子を見せる蒼の声に、身体を起こしながら応える日向。

「ハハツ……最高だお前ら。最後の最後に、退屈しなくて済みそうだ」

堪え切れないような笑みを漏らしつつ、蒼は三人と向かい合う。

そこに在ったのは、心の底から戦いを楽しんでいるような表情だった。

「楽しそうなのは結構だが……こつちも簡単に敗けてやるつもりは無いっスよ」

「言ってくれるね二番弟子……随分な自信じゃねーの。成長感じるわ」

師と対峙した伊織は、刀に手を掛けながら日向と天音へ忠告するように口を開く。

「一つ言っとくぞ。……太刀筋には絶対入るな。あの人の剣に防御は意味が無エ」

「あー……あの何でもブツた斬っちゃまう技な」

「とにかく躲すしか、対処方法は無いってコトね……」

『斬界』を実際に目にした経験がある日向が、伊織に同意するように頷いていた。二人の背後では天音が、術式の発動準備を始めている。

「今からお前らの『現在地』を教えてやる。——全力で、俺を倒しに来い」

蒼のその言葉が、開戦の合図。

双方向から斬り込む日向と伊織、そして彼等の背後から天音が術式を撃ち放つ。蒼へと迫るのは、暴れ回る風の乱流。

風属性攻撃術式

ウオーズストーム クアドラブル
『陣乱戦風・四連』

烈風の猛威を一刀で斬り払う蒼だったが、その眼前には魔力を纏った日向と伊織が襲来していた。

火属性攻撃魔術『炎刀』

退魔一刀流・『富嶽』

振り下ろされる日向の手刀、斬り上げられる伊織の刃。上下から叩き込まれた挟撃を、蒼は裏拳と蹴りで弾き返す。そして双撃を捌くと同時に、超高速で振り抜いた二連撃で二人を打ち飛ばした。

「グッ……!!」

「重ッてエ……!!」

間一髪で防御は間に合ったが、その凄まじい剣速と攻撃力に押される伊織と日向。

（中々やるじゃねエか……恭夜君の教え子三人衆）

しかし日向達と相対する蒼は、彼等の連携練度に密かに感心を覚えていた。

「……あの人の買い被りじやなさそうだな……安心したぜ」

その眩きと共に蒼が突進を仕掛けるが、行手を阻むべく天音が魔力防壁を出現させる。

土属性、続けて氷属性による二重防壁を構築するが、蒼の剣撃はそれすらも一瞬にして斬り崩して来た。防壁を突破して来た蒼に、上空から日向の術式が撃ち込まれる。

火属性魔力×形成術式

『ザンリンハ散輪破』

振り抜かれた右腕から放たれるのは、魔力によって創り出された無数の炎輪。しかし手数を重視していると思われるその攻撃は、陽動に過ぎないと蒼は即座に見抜く。

「らしくねエ真似して来んじやねエか、日向」

降り注ぐ炎を尽く斬り落とす蒼だったが、その背後からは本命の一撃が迫っていた。

退魔一刀流・『羅針』

散輪破に意識を割かれた瞬間に、死角から突き込まれる渾身の一撃。しかしその刺突を蒼は、見向きもせず上体を傾け回避する。

「んー、惜しいな。流れ自体は悪くねエ」

「クソ……!!」

伊織が突き出した刃を素手で掴み止めると、そのまま刀ごと彼の身体を力任せに投げ飛ばした。豪快に放り投げられた伊織は、日向に受け止められ何とか停止する。

そしてその隙に天音が展開していた、砲撃術式が蒼の頭上から炸裂する。

氷属性魔力×形成術式

『大崩氷塔』

畳み掛けるように打ち下ろされる、大質量の瀑水。自身を押し潰さんとするその一撃をも、蒼は一刀で迎え撃つ。

鋭く響く剣戟音。

空を斬り裂く超速の瞬刃が、魔力の大槌を両断していた。真つ二つに分たれた氷塊が、轟音と共に地へ叩き落とされる。

「ハハ……クソみてーに強エな。もう笑うしかねエだろあんなん」

「何なのよあのバカげた威力は……！」

反則めいた力を振るう蒼に、最早笑いが止まらない日向と苛立たしげに呟く天音。しかし伊織だけは未だ、勝機を探るように彼の刃を注視していた。

「……………『斬界』を、撃たせるしかねエ」

「はっ！」

「斬界を使わせれば、流石に何秒かは隙が出来んだろ。その瞬間に仕掛けるしかねエ」

伊織が口にしたのは、蒼の切り札にして必殺たる『斬界』を使用させ隙を作り出す作戦。どれだけ強大な術式であっても、発動直前と直後には僅かながらも必ずリスクとなり得る瞬間が生じる。

「成程。危険ではあるけど……勝つつもりなら、ソレしか方法は無さそうね」

「ドーせ賭けしかねエしな、アイツと戦い合うなら」

可能性に委ねられた戦術だったが、天音と日向も迷わずそれを選択した。伊織は小さく笑みを零すと、悠然と待ち構えていた蒼へと一歩踏み出す。

「あのクソムカつく余裕……ひっくり返すぞ、俺達で」

「ええ」

「おオ！」

「イイね……やっぱお前ら、最高だよ」

そう言って招き入れるように鋒を動かす蒼へ、日向と伊織が爆速で地を蹴った。二人が繰り出すのは、自分達が持ち得る『最強』と『最速』の攻撃。

火属性攻撃術式『爆皇破』

退魔一刀流 居合 ． 『鳴神』

突撃しつつ、豪拳と一刀へと力を溜め込んでいく。その二つの技は『速度』が上がる程に、『威力』もまた増大する一撃だった。

そして大技の気配を感じ取った蒼も、”必殺”の構えでそれに応じる。

(いきなり来やがった……!!)

(来た……!!)

日向と伊織に続き、天音も蒼が『斬界』の発動体制に入った事を察知した。

前衛二人の陽動で的を絞らせず、天音の爆撃と突風で振り抜く前に軌道を変えさせる。そして斬撃を放った直後に、三方向からの同時攻撃。一瞬で意思を伝達し、日向と伊織が襲い掛かる。

((——来る!!))

刀の柄に掛かった、蒼の手が動いた。瞬間的に防御の構えを取る伊織と日向。刃が、振り抜かれる。

しかし。

「ハハ、盲点」

笑う蒼。

斬撃が、来ない。

蒼が振り抜いた筈の刀から、『斬界』は放たれていなかった。

(しまった——!!)

フェイントを用いていたのは、日向と伊織だけではない。蒼が振るつたのは、一切の魔力が宿っていない只の一刀だった。

完全にタイミングを外された事で、逆に日向達が無防備な姿を晒す事になる。咄嗟に天音が術式を撃ち出すが、既に遅い。

無属性攻撃術式

『斬界』

返す太刀で放たれた、万物両断の一撃。その刃は天音の超火力術式諸共、三人を斬り倒すのみならず――

「あーしまった……流石にやり過ぎたか」

――環状本棟の北半分、7・8・1・2号館をも斬り飛ばしていた。

「……まあいいか。楽しかったしな」

日向・伊織・天音の三人を破った蒼は、刀を収めつつ背後を振り返る。

「隠れてんだろ？出て来いよ、綾坂」

「……いや、流石に厳しかったか。日向君達も頑張ってたんだけど……」

そう言われ半壊した支柱の陰から姿を見せたのは、日向の後衛としてこの競技に出場していた綾坂 未来だった。

両手を上げて見せ、戦闘の意思は無い事を示す未来。日向達との交戦を終え満足げに

蒼が笑う中、遂に決着のアナウンスが響き渡る。

『——タッグロワイヤル、遂に終結!! ひしめく強敵達を撃ち破り頂点に立ったのは、やはりこの男でした!!!』

『慎まれる事無きその力!! 無敗伝説、最強の神話!! 彼の進撃を、誰も止める事は出来ない!!!』

『東帝学園の歴史に、その名は深く刻まれる事でしょう!!』

『勝者——』

『……えーハイ、まあ総じてアイツがバケモンつつーコトでみんなの意見はほぼ一致してるっぽいケド……』

夜間帯の学園ラジオにて、久世が学内SNSを眺めつつタッグロワイヤルの講評を行っていた。

『どーも掲示板とかからも質問来てるっぽいから……「斬界」について話してこうか』

そうして術式技能指導員の久世は、蒼を最強たらしめるその魔術剣技についての解説を始める。

『……まあ結論からいくと、アレはメチャクチャよく斬れる「刃」だよ。ステイブとかも使ってる飛ぶ斬撃。アレと同じつつーか、ほぼ変わんねーの』

モニターに映し出されるのは、タッグロワイヤルの戦闘ハイライト。蒼が斬界を使用した場面の、リプレイ映像が流れていく。

『……ただ違いとしては、メチャクチャ”硬くて”薄い”ってカンジかな。アイツ結構魔力もあるから、それを全部「一点収束」で押し固めて”何でも斬れる斬撃”にしてんだよ。な、シンプルな仕組みだろ?』

久世の口から明かされる、『斬界』の術式としてのメカニズム。

その接触面は極めて小さく、更にその硬度は極めて高い。驚異的な魔力密度を実現するのは、蒼が持つ膨大な魔力。超薄型かつ超硬質のブレード、それが斬界の正体だった。

その斬撃は理論上この世界に存在している、形ある全ての物質を、またあらゆる術式を切断する事が可能である。その名の通り、まさしく世界をも斬る魔術にして防衛不能の一撃。

『……だからもう、アレ撃つて来られたら基本は詰みつつーかお手上げよ。学生は為す術無しなんじゃない？ガン逃げだよガン逃げ』

プロですら真正面からは受けられないだろうね、と補足する久世。

『……………えー何なにコメント……………【S級だろコイツ】あーそうね。今年か来年くらいには行けるんじゃないの？アイツ。』

あ、そうそう。コレ明日のオープンニングで言われると思うけど……………今回のトーナメントの優勝副賞で、「S級資格試験」の参加権利もらえるらしいよ』



第一学年寮棟、談話室にて。

「だあああクソおとおお敗けたあああ」

「……………久世先生、今サラっととんでもないコト言わなかった？」

男子寮と女子寮の中間に存在するこの交流スペースで、日向が唸り声を上げながらテーブルに突つ伏していた。彼の横には天音、向かいには啓治と沙霧が座っており、今日のタッグロワイヤルでの戦闘を振り返っている。

その後ろでは創来・陣・凧が、ソファアに腰掛け久世の学内配信を視聴していた。

「オーイ春川お疲れエイイ。如月兄弟との1対2、相当盛り上がったたぜ〜?」

「おーあんがとなー……」

「んな落ち込まなくてもいんじゃない? どーせ天堂先輩相手じゃ、誰が戦っても同じよ同じ」

「うるせーエそれでもこっちは勝つ気だったんでエイイ……」

通路を行き交う多くの生徒達の中、数人が日向達の健闘を讃えるように声を掛けて行く。しかし蒼の斬界に完全敗北し、日向はすっかり意気消沈してしまっていた。

「つたく……明日からはトーナメントも始まるんだぞ。いつまでも引きずってねエで、さっさと切り替えろ」

「いや……別にヘコんでるワケじゃねんだ。ただ……」

気落ちしているような日向に啓治が流石に声を掛けるが、予想だにしなかった角度からの返答が返って来る。

「……折角”新技”作ったのに、使うの忘れてたんだッ……!!」

「バカか。何だそのクソ下らねエ理由は」

「本戦まで無駄に手の内晒さずに済んだんだから、寧ろ良かったでしょ」

戦いに没入していたが故に失念していたが、その”奥の手”を使えば勝てる可能性もあった事を悔しがる日向。負け惜しみだと啓治は一蹴するが、天音は敗因を分析し次に繋げるべきと前向きなアドバイスを掛けていた。

「終わった事でいつまでもグダグダ言ってるじゃねエよ」

その時背後から声を掛けられると同時に、日向が後頭部を叩かれる。そこに立っていたのは、大浴場から戻って来ていた伊織だった。

「あの人に本気で勝とうとしてんなら、今そんなコト考えてても仕方無エだろうが」

「それはそうだけどな……」

「……あ、見て春川君」

伊織の発破にも煮え切らない声を返す日向だったが、端末を開いていた沙霧がふと口を開く。

「今日のタッグ戦で、活躍した人達を取り上げられてるみたい。みんなも載ってるよ」

「「んん？」」

「何ナニ、ボクにも見せてーや」

そこに表示されていたのは、新聞部の学内SNSによる東帝戦のニュース記事だった。日向と天音と啓治に続き、ソファーから立ち上がって来た陣も画面を覗き込む。

【御剣・藤堂ペア快進撃】

『一条・九重・湊を打ち破る活躍を見せた御剣・藤堂ペア。巧みな連携による遠近両対応戦闘で強敵達と渡り合った。』

【風雲児春川日向】

『前半戦で如月兄弟をも圧倒する大暴れを見せた話題のルーキー。最終盤のVS天堂戦では御剣・藤堂との連携も披露した。』

【天堂蒼、三連覇へ始動】

『盤石の強さでタッグロワイヤルを制覇した絶対王者。本戦トーナメントでの三年連続優勝に向け最高の状態でスタートを切った。』

「日向クンに、伊織クンと天音ちゃんの三人が注目されとるみたいやな。一年ボクラの中で
は」

「クソ……俺のはねーのか」

啓治がやや不服そうな表情を見せる中、ホログラム画面を下へとスクロールしていく陣。SNS上では今日の感想戦が展開されているだけでなく、明日以降に始まる本戦トーナメントの優勝候補や勝敗予想も飛び交っていた。

大本命として蒼、対抗馬には雪華や亜門の名が挙げられていたが、いかんせん最有力候補が飛び抜けている為言及すらあまりされていかない。しかし一方で勝敗予想は、日向や伊織がベスト8など上位に食い込む可能性が取り上げられており盛り上がりを見せていた。

「アンタも載ってるわよ、御剣」

「そうか……興味ねエよ」

日向の隣に座った伊織に天音がそう伝えるが、当人はさしたる興味も示さずコップに入った水を呷っている。その時。

「あの……御剣君」

声を掛けられた伊織が振り返ると、そこには同学年に見える三人の女子生徒達が立っていた。

「今日の戦い、本当に凄かったです……！」

「明日も頑張ってください……！」

「あー……そいつは……ありがとな」

どうやら彼女達は、今日の伊織の活躍を目にして心を引かれたらしい。面食らいつつも伊織が淡々と礼を返すと、応援の言葉を掛けた三人は嬉しそうにその場を後にしていた。

「……………え、なに今の」

「知らねエよ……」

「……………」

「……………何だ。言いてエコトがあるなら言え」

「つ……………別に」

日向は唾然とした表情で口を開けており、天音は少しだけ不機嫌そうに伊織から顔を背ける。

「まア伊織クン、愛想とガラはホンマに悪いけど顔はエエもんなア」

「うるせエよ」

天堂サン ステイルフサン

「オマケに師匠と兄弟子も女子人気高いし、案外モテるのも当然っちゃ当然……つて啓治クンでないした？キミそない般若みたいな顔しとつたっけ」

陣が持て囁すようにそう話していたが、ふと隣に座る啓治の異常に気付いた。血涙が

吹き出さんばかりに血走った目、唇は今にも噛み千切られようとしている。

「殺す……お前だけは1000殺す……」

「清々しいくらい逆恨みするやん。ガチ僻みすぎて普通に引くわ」

「だアまれ黙れエ!!どう考えてもこのクソ仏頂面がレディに人気なんざ何かの間違いだろオガア!!俺は夢でも見てんのか!?!」

「勝手に言ってるバカ……」

勢い良く立ち上がりながら啓治が叫んでいたが、伊織は一切取り合う様子も見せない。

「ちエー。俺も結構今日の戦い目立ってたと思うのになー」

「はは……そうだね……」

陣が啓治の目を覚ますべく顔面を張り飛ばしている中、日向は何の気無しに呟くが沙霧は乾いた笑いで応える。一方で創来は明日に備えて、凧にいくつか質問していた。

「天堂蒼の『斬界』、実際に喰らってみてどうだった?」

「マジでヤバかった。アレに真っ向勝負仕掛けんのはただのバカだよ」

「聞こえてんぞ」

日向と伊織が凧に言い返すが、その時談話室のモニターが突如切り替わる。そこには

彼等のよく知る人物の姿が映し出されていた。

『よーオ諸君久しぶり。そつちはもう夜か。初日終了お疲れさん』
「センサーじゃん。今どこで何してんの？」

声の主は、日向達一年生の担当教員である桐谷 恭夜。

『ちつとヤボ用でな。今は「本部」^{イエルサレム}だ。所でどうだったんだ？ タツグ戦は。お前ら全員蒼にノされたんじゃないかねーのか？』

「もう知ってるクセに……どうせ久世先生辺りから逐一聞いてるんですよね？」

恭夜は『魔術師協会』の本部が存在する、イスラエルへと出向していた。今日のタツグロワイヤルについて聞くと、天音から刺々しい声が返って来る。

『ハハ、その調子だと随分こっぴどくやられたみてエだな。まあ気にすんなよ、あと二年もすりやお前らだつてアレくらいには戦えるようになる』

「マジかよ……!?!」

無茶にしか聞こえない恭夜の言葉だったが、日向や創来は少し楽しそうに笑っていた。

『で……明日からは本戦だろ？ お前^一らの中からは何人出るんだ？』

「……俺達は出ますよ」

「うん」

「俺も出場します」

「同じく」

そこで恭夜が彼等にそう問い掛けるが、応えたのは伊織と日向、そして啓治に創来の四人。

『おーそうか。お前らは出ねエのか?』

「私は後衛として連携戦闘でベストを尽くせたので」

「私はちよつと、1対1に自信が無くて……」

「ボクは今日だけで十分SポイントWP稼げたし、満足したからもうエエかなーて」

「みーつー」

天音・沙霧・陣・凧から各々の意思を聞き終えると、恭夜は一つ頷き日向達へと口を開く。

『成程ナルホド、OK分かった。んじや、明日から本戦を勝ち上がる為に……三つ、オマエらにアドバイスを授けよう。言わば、魔術戦闘の“極意”ってヤツだ』

「「「極意?」」」

日向ら四人の出場組は、恭夜の言葉に興味深そうな目を向けつつそう聞き返した。

第31話 『十席集結』

7月17日、『東帝戦』2日目。

「へへ、じゃあ天音ちゃんは今日から出ないんだね」

「はい。課題も見つかりましたし、自分の実力は十分試せたので……」

並んで演習場の通路を歩いていたのは、綾坂 未来と藤堂 天音。二人は2日目再開式の前に用件不明の召集を受けたが、道中で偶然遭遇し揃って目的の場所に向かっていた。

「所で……私達、何の為に呼び出されたんですかね？」

「んー……まあそれは、面子を見たら大体分かるんじゃない？」

天音からの問いをはぐらかした未来は、魔力認証の自動ドアを通りスタジアムの『VIPルーム』へと入室していく。

「失礼します」

「……失礼します」

彼女に続き天音もその部屋へと足を踏み入れると、そこには既に六人の人物が集まっていた。

この魔術学園に属する学生達の中でも、頂点トップに立つ十人の魔術師。未来と天音も含めた『東帝十席』と呼ばれる者達の内、ある二人を除く八人がこの場に揃っていた。

「おー、天音チャンも来たんやな。一年からトップ10入りとは中々やるやんけ。オレと蒼クンくらいとちやう？こん中で一年から入ったの」

「そうだな。昨日は結構楽しかったぜ？お前ら三人との戦い」

東帝十席 第四席、如月 亜門。

同 首席、天堂 蒼。

日向や伊織、天音との戦いを振り返っていた蒼の背後には、”第六席” ステイープ・

ジャクソンも控えている。

「ウチ風紀の湊も、お前と御剣が倒したらしいな。やるじゃないか」

「フフ、藤堂さんは私と一緒に訓練したんだもの。当然と言えば当然じゃない？」

「沙霧ちゃんも頑張ってたみたいだしね」

”第七席”、神宮寺 奏。

”次席”、黒乃 雪華。

”第九席”の綾坂 未来は寄り掛かるように雪華に抱きついていていたが、一方部屋の片隅には静かに文庫のページをめくっている”第八席” 諸星 敦士の姿もあった。

「あ、そういうや敦士。獅堂っていつ退院すんだ？」

「アイツはまだ目も覚ましてない。だが……どうやら傷は癒えてるらしいがな」

「あつそう。じゃあ意識さえ戻ればその内脱走して来るか」

「ホンマタフやなく獅堂クン」

入院中の”第三席”大文字 獅堂の容態について蒼が尋ねるが、諸星はさしたる心配の様子も見せず淡々と返答する。そのドライさに蒼と亜門が笑いを漏らす中、天音は”最後の一人”がまだ見えない事に気付いた。

「あの……あと一人は……？」

「ああ、もうそろそろ来るだろう」

奏がそう言つて入口を指し示すのとほぼ同時に、再び自動ドアが開く。

「おはよーっす。お、やつば俺が最後か」

新たに姿を見せたのは、これと言つた特徴も無い黒髪の少年。

「来たか結弦！お前、今日からは出れるんだよな？」

「ああ、あつちの^{管理局}任務も片付いて落ち着いたしな。アランと徹彦の方もひと段落ついたつつてたから、多分アイツらも出て来ると思うぞ」

「ホンマかいな。そら楽しみやなア」

しかし彼の登場に、蒼や亜門などは嬉々として声を掛けている。天音は眼前のこの人物が、学園最強格の彼等からも一目置かれている実力者である事を感じ取っていた。

「……ん？見ねエ顔だな。……ひよつとして、一年か？」

「つ……はい。藤堂天音です。宜しく願います」

その時少年は、雪華達の側にいた面識の無い少女の存在に気付く。天音は緊張した面持ちで真面目な挨拶を返すが、堅苦しい空気を解すように少年は笑った。

「畏まなくていいよ。結城だ、よろしくな」

東帝十席、第五席、結城 結弦。

——彼こそが、東帝学園の最上位集団に名を連ねる最後の一人だった。

そして全員の集合を見計らったかのようにモニターが起動すると、冴羽の姿がホログラム画面で映し出された。

『全員揃ったみたいね。準備出来たら、ステージに裏まで来なさい。それと一人ずつコメントしてもらおうから、考えとくように』

「ウース、了解」

「ほなボクらもボチボチ行こか」

「え、コメント……!?!」

蒼や亜門達は揃って移動し始めるが、一人だけ状況が飲み込めない天音の声に冴羽が応える。

『何驚いてんのよ。アンタ十席らはウチ東帝の看板顔つてコト解ってる?ましてや天音、アンタは一年ルキ筆頭、なんだからね』

「それは……そうですが……」

『面前コトに立つ機会なんてこれからいくらでも出て来るんだから、今の内から慣れときなやこ』



スタジアム
演習場、特設ステージ前にて。

「あつぶねエ、間に合ったか!」

「誰のせいだと思ってるんだ……! 毎朝毎朝世話かけやがってこのアホが……!」

再開式の開始直前に、息を切らしながら会場に到着した日向と伊織。例の如くギリギリまで爆睡していた日向を、何とか伊織が叩き起こしここまで蹴り転がして来たのだった。

既に啓治や創来ら出場組だけでなく、本戦不参加ではあるものの沙霧・陣・風の三人も揃っている。

「……お前らは毎回ギリギリを攻めねエと気が済まねエのか？」

「もうおなじみの光景になって来たなア、遅刻寸前のキミら二人」

「まー確かに、伊織の怒鳴り声聞いてやっとー日始まるよオな気がするよなっフ」

啓治が呆れ陣が笑う中能天氣に身体を伸ばしていた日向だったが、伊織の渾身の鉄拳に顔面を殴り抜かれ撃沈していた。鼻は内側へとメリ込み完全に陥没している。

「朝っぱらから賑やかやなア。生きとるか？日向クン」

「如月さん！おはようございます」

その時やって来た新たな人物の声に、真っ先に啓治が反応した。彼が修行へ赴いていた『風紀委員会』の主戦力、如月 士門と湊 紅輔。そして二人の隣には、同じ二年生の一条 ハルと九重 絵恋の姿もあった。

「よオ御剣。今日は負けねーからな。………つて、一条が言ってたぞ。いてッ、いってえ」

湊は愉快そうな笑みを隠しつつ、伊織へとそう宣言する。しかし背後に立っていたハルから、間髪入れず無言で蹴り上げられていた。

「……昨日の借りは返すわ」

「フフ、お互いベストを尽くしましょう」

「……はい。宜しくお願ひします」

ハルは剣呑な視線と共にそう吐き捨てていたが、絵恋のフォローもあり流石に一応の会釈を返す伊織。

「————おやおやーあ？前方にナイスバディガールズはっけーん。ねらいよーし、ホールドっ」

「ひゃうっ!!」

「ふうんっ!!」

その時。

どこからか聞こえて来た少女の声と同時に。ハルと絵恋の背後から伸びて来た二本の手によって、彼女達の胸が驚掴みにされていた。

「風……切ッ!!」

「ノンノン、油断してたハルがわっるーい。だーから後方注意とあれほどアタシが言ってたのにさーあ」

一瞬嬌声を漏らしたものの、すぐに意識を取り戻したハルが凄まじい勢いで回し蹴りを放つ。しかし彼女の背後にいたその少女は、軽やかな身のこなしでその蹴りを易々と躲していた。

「な？九重は勿論だけど一条も中々だろ？」

「ホンマやな」

「死ね!!」

一部始終を見物していた湊と土門がサイズ談義を始めるが、そこにハルが抜き放ったマグナムが容赦無く撃ち込まれる。わっせわっせと踊るように銃弾の雨を避ける二人。

「据え乳あつたら揉まぬがぶさほーう。覚えとこうねーザ・ボーイズ？」

無責任にそう言い放つのは、スカジャンと野球帽を身に着けた浅葱色の髪の少女。

——東帝学園二年生、カザギリ風切 アラン。それが、彼女の名前だった。

「……相変わらずだね。アラン姉え」

「お？風じゃーん♪相変わらずかわいいね〜アンタは♡」

風に名を呼ばれたアランは、そのまま彼女に抱きつき気持ちよさそうに頬擦りしている。その親しげな呼び名から、二人は旧知の仲である事が窺えた。

「んん？キミも可愛いね〜。ひよっとして風のお友達？」

「あつ、ハイ！空条 沙霧です。初めまして……！」

「アラン姉え、沙霧にはセクハラしちゃダメだかね。天音が飛んで来るから」

「うへへー承伏しかねるー♡まーよろしくね、沙霧ちゃん」

早速風の隣にいた沙霧に目を付け始め、釘を刺されていたアラン。

「なア陣、啓治はこのままで大丈夫なのか？」

「あー、もうエエんちゃう？ほたつとつても。なんか幸せそうやし」

「It's a……beautiful life……」

一方で創来からの心配を、陣が杞憂だと切り捨てる。その足元では未だに顔面が没したままの日向の横で、啓治が鼻血と讒言を垂れ流しながら五体投地していた。ハルと絵恋の嬌声の時点で、既に彼の脳容量はパンクしてしまった事は言うまでもない。

「ねエ、徹兄いは？」

並んで仰向けに転がっている馬鹿二人を放置し、凧がアランに訊ねたのは「もう一人の人物の所在。」

「あー、テツ君はね……」

アランが応えようとしたその時、スタジオム全体に号砲が響いた。

『始まりました東帝戦2日目！オープニングを飾るのはこの九人、学園の頂点に立つ「東帝十席」ですッ!!!』

再開式開会と共に、東帝戦2日目の開始が宣言される。そしてステージ上には、九人の人物が姿を現していた。

アナウンスが告げるのは、学園トップの実力を誇る魔術師達の登場。

『まずはやはりこの男！最早言葉は不要、唯一無二にして不敗の「剣聖」!! No. 1』、
天堂 蒼!!』

『続いて、「生徒会連合」を統べる絶対女王!! No. 2』、黒乃 雪華!!』

『学園最速の圧倒的スピードを誇る「風神」、風紀委員会の異端児! No. 4』、如月亜門!!』

『今日から東帝戦に参戦します、レポートを操る隠れた実力者!! No. 5』、結城 結弦!!』

『天堂 蒼の右腕にして、如月亜門と同じく十席中二人のみの二年生です!! No. 6』、
ステイブ・ジャクソン!!』

『風紀委員会を束ねる武闘の達人!! No. 7』、神宮寺 奏!!』

『知略と武力を併せ持った万能の術師!! No. 8』、諸星 敦士!!』

『学園最優の回復魔術師!!^{ヒーリングウイザード} N o . 9』、綾坂 未来!!』
 『そして一年生ながら、唯一十席に選出された神童!!^{スーパールーキ} 全属性魔術の使い手、” N o . 10”、藤堂 天音!!』

『十席』の登壇に観衆は大いに沸き立っていたが、その先頭に立っていた蒼が唐突に人混みを指差した。

「————オイ、徹彦」

群衆の後方を指した蒼は、その中に紛れ込むように隠れていたある人物へと呼び掛ける。

「……………いい加減、お互い本気で戦い合おうぜ。俺と当たるまで、勝ち上がって来ねえと承知しねえからな」

学園最強の男が、宣戦布告を仕掛ける程の相手。一体何者なのかと、伊織や創来達も後方を振り返った。

「クソだる先輩すぎる……………」

「同情するわ……………テツ君」

壇上の結城はクツクツと笑みを零し、アランは呆れた表情で肩を竦めている。不敵な表情でそう言い放った、蒼の視線の先にいたのは――

「マジ勘弁して蒼さん……」

気怠げな様子でそう言い返す、覇気の無い一人の少年だった。



魔術師協会日本支部内局・魔術管理局にて。

「……まさかテメーの女癖の悪さが、こんなトコで役に立つとはな」

「いやこれまでもちよくちよく役立ってたでしょうが」

廊下を歩いて行くのは、『魔術特務課』所属の本郷と柊。彼等は柊の情報網ツ（女性関係）から提供されたある『証言』の裏を取るべく、『表』の東京へ捜査に赴こうとしていた。

「真偽はともかく、そのタレコミ目撃情報が正しいなら……」

「……ええ。大文字を刺したのは――」

——十中八九、学園関係者で間違い無い」



東京某所、——にて。

「——行くぞ」

立ち上がった紅蓮が、闇の外へと踏み出して行く。その背後には、彼に追隨するよう
に動き出す“四人”の影があつた。

——陰謀は蠢き、着実に迫りつつある。

第32話『絶対防御術式』

「俺達^{一年}は二つに分かれたな……」

スタジアム上空の浮遊モニターに映し出されたトーナメント表を、観覧席から創来が見上げている。

開示された本戦の対戦^{組み合わせ}カードは、AとDの4ブロックに分かれていた。

Aブロック

天堂蒼（第1シード）

ステイプ・ジャクソン

風切アラン

九重絵恋

……

Bブロック

如月亜門（大文字不在により繰り上げ、第4↓第3シード）

結城結弦

諸星敦士

古田徹彦

春川日向

御剣伊織

……

Cブロック

神宮寺奏

如月士門

皇啓治

漆間創来

……

Dブロック

黒乃雪華（第2シード）

蛇島司

湊紅輔

一条ハル

……

日向・伊織と啓治・創来は同ブロックに割り振られており、決勝まで勝ち進むとして

もこの内二人は敗退する事になる。

「フン。どの道どつかで当たるんだ。早かろうが遅かろうが、テメエに敗ける気は無エぞ」

「ああ、望む所だ」

淡々とした口調でそう言い放つ啓治に、不敵に頷き返す創来。その一方で伊織は、眼下のバトルフィールドを注視している。三人の後ろの席には天音や沙霧・凧・陣も揃っており、トーナメント本戦の開始を待っていた。

モニターに表示されているカードは、

『春川 日向』VS『古田 徹彦』。

今朝の再開式にて、注目を集めていたあの少年。蒼が認める程の実力者と思しき”彼”が、日向の対戦相手だった。

「うわ、初っ端から徹兄いとか……運悪いね、日向^{あいつ}」
「凧ちゃんはある人とも知り合いなの？」

凧と徹彦の関係について沙霧が尋ねるが、それに応えたのは彼女達の背後に現れた新たな少女。

「おやー？ 沙霧ちゃん、アタシらのルーツに興味がおありなのかね？」

「風切先輩！」

姿を見せたのは、二年の観覧エリアからこちらへやって来ていた風切 アランだった。

「丁度いいや。説明したげて、アラン姉え」

「あーたホントすぐメンドくさがるんだから……」

「あ、ココどうぞ」

「お、サンキュー」

前方の席に移った陣に場所を譲られ、凧の隣に腰を下ろすアラン。

「さーてよっこらせつと………で、何だっけ。あたしらとテツ君の付き合いだっけ」

「うん」

「もう結構長いよね。10年くらいかな？」

「うん。そんなくらい」

そして語られ始める、凧とアランと徹彦の過去。

「——あたしらねー、ガキの頃から研究所に入れられてたんだよね」

「……研究所、ですか……」

「うん。テツ君とか風とも、そこで初めて会ったの。」

「まあ、みんなどつかから誘拐されて来たコだったんだけどね」

「「!?」」

沙霧との会話の中で何気なく溢れたその言葉に、傍らで聞いていた伊織や天音達が目を見開いた。

「なーんかソコが結構ヤバイトコでね……拉致して来た子供に、『身体に魔術を埋め込む実験』とかをやってたの」

「……………なら…………」

「うん、”そう”だよ。あたしの『ステルス隠密』も」

アランから衝撃的な事実が明かされる中、振り返った伊織が口にしようにとした推測を風が肯定する。——彼女が持つ『アベリテイマジック特殊魔術』は、後天的に与えられた物だった。

「で、まアそれから色々あって……7年くらい前かな。恭夜さん達に助けてもらってさ。何とか脱出出来たってワケ」

「龍臣さんとか王我さんもいたね……」

「!!……………聞いた事があるわ。協会の各国支部が、合同で決行した救出作戦」

思い起こすようにそう語るアランと凧に、その事件について知っていた天音が反応する。

当時から既にS級だった恭夜や王我に加え、戦国龍臣などA級トップの魔術師なども数多く動員された突入作戦。激しい戦闘の末に、研究所から多くの『術式移植』被験者を救出・保護したと天音は聞き知っていた。

壮絶な経験を平然と話し終えたアランだったが、その時創来がふと生じた疑問を口にする。

「……………アンタはどんな術式を持ってるんだ？」

「オイ馬鹿テメエ……………」

少し不遠慮とも取れるその問い掛けを啓治が咎めるが、アランは気に留めた様子もなく声を返した。

「あーいいいよ、気にしないから。まあそれは……………キミの目で直接確かめなよ、漆間創来くん？」

そしてアランの言葉の後、スタジアムに歓声が響き渡る。

観衆の視線の先の、スタジアム中央フィールド。双方の入場ゲートから、両者が足を踏み入れる。学園内でも話題の二人による、注目の一戦が始まるうとしていた。

「……じゃあ、あの人の能力は何なんです？」

そんな中、伊織から投げ掛けられた一つの問い。

「あー気になる？ まア、教える分には全然構わないよ。……だって、知った所で対応出来ないから」

「……？」

アランの含みのある物言いに、伊織だけでなく創来や陣も訝し気な表情を見せる。

「テツ君の能力は——」



相對する、二人の對戰者。

「……お前、結構強エんだろ？」

「いや……別に、そこまでだよ。巫門とか土門に比べたら、全然大した事無い」

「いいや嘘だね。蒼に執着されてんのに、弱エ奴のハズはねエ」

買い被りだと返答する徹彦だったが、そんな筈は無いと日向は断ずる。

緊張、高揚、闘争心。それら無意識な感情の揺らぎすら、戦闘を目前にしても一切見取れない。静かな挙動と瞳の裏に隠された、“戦いへの慣れ”。この少年は明らかに、日向自身よりも場数を踏んで来ている。

その実力を察知し警戒する日向だったが、徹彦から告げられたのはある一つの“提案”だった。

「参ったな……まあ、そんなに気になるなら……一発俺のコト、ブン殴ってみなよ。本気で」

「……………はア……………？」

「ソレで、俺の能力は大体分かると思うよ」

突拍子も無い言葉に啞然とする日向だったが、至って徹彦は平然としており巫山戯ているようには見えない。

「何だお前……流石にナメすぎだろ」

「いや、そういうワケじゃなくてさ。勘違いさせたくないんだ。俺は別に……強くは無
いんだよ」

「……………意味分かんねエよ。何の謙遜だ……!？」

あくまで真剣というスタンスの徹彦に、いい加減痺れを切らし始めた日向が僅かに苛
立ちを見せつつ拳を鳴らす。

そして、戦闘開始の合図が鳴った。

「そこまで言うなら遠慮はしねエぞ……望み通り一発ブチ込んでやるよ……!!」

そう言つて突撃を仕掛ける日向に対し、徹彦は自然体の構えを崩さない。繰り出され
るのは、日向が持ち得る最強の一撃。

火属性攻撃術式

『爆皇破』

爆炎を圧縮された剛拳が、凄まじい速度で徹彦の腹部へと叩き込まれた。

手応えは確かにあった。

にも関わらず、拳に残る異質な違和感。何故かその感覚と共に、かつて完全敗北を喫した紅蓮との戦いが脳裏を過る。

「……成程。騒がれる理由も解る。……相当な威力だ」

「……………何……………!?!」

日向の爆皇破は、確かに徹彦の身体を捉えていた。

しかし。

あの時と同様に——その身体は吹き飛ぶ所か、一歩たりとも動いていなかった。



『術式移植手術』を施された徹彦の全身には、ある魔術が常時展開されている。それは端的に言えば、体表全てを覆う『障壁』だった。

しかし。

その障壁は如何なる攻撃を以てしても、破壊する事が出来ない。

そして傷一つ付かない驚異的な硬度のみならず、身体内部へ一切ダメージを通さない

異常なまでの防護性能も備えていた。

法則をも歪めるかの如きその術式は、便宜上こう呼称されている。

—— 『絶対防衛術式』。

◇◇◇

「何だソレ……そんなモン、”無敵”じゃねエかよ……!?!」

「それに……そんな魔術、聞いた事が無いです……!?!」

アランによって明かされた、ことわり理すらも凌駕する埒外の能力。チカラ創来はそう唸る事しか出来なかつたが、天音は納得がいかないといった様子で疑念の声を上げる。

世界最硬の防衛魔術と認定されている『イージス神盾』でさえ、米国研究機関が行った耐久実験の末に『破壊可能』という検証結果が報告されていた。

「んー、まアそうだね……何なんだろうねアレ。ぶつちやけテツ君も、あの能力のコトよく分かんないらしいしね」

最早魔術の範疇を超えつつあるその異能については、術式を付与された本人にも未知の部分があるらしい。

「ちよつと待て。……そこまで強エなら逆に、何で十席に入つてねエんだ？」

そこまでの実力を有しているなら、亜門やステイブと同様に十席入りしていても何らおかしくはない。そんな伊織の指摘に、凧から返されたのは意外な回答だった。

「そりやアレだよ。徹兄いはソレ以外の魔術からつきしだから。強化ブーストもヘツタクソだし、形成モールドなんかほとんどダメだからね」



日向の渾身の一撃をまともに受けながら、後退すらしていない徹彦。観覧席にてその戦いを見下ろしていた蒼に、こちらへ歩いて来ていた人物が背後から声を掛ける。

「規格外の矛と張り合えんのは、規格外の盾だけつつーコトか」

「そういうコトだ。面白エモン戦い見せてやつから、楽しみに待つとけよ」

期待させるようにそう言い放つ蒼に、結城 結弦は呆れるように小さく笑っていた。

全てを斬り裂く術式に対抗し得るのは、全てを防ぐ術式のみ。この学園で唯一蒼と互角に渡り合える可能性を秘めた徹彦に、結弦は同情するような視線を向けていた。

「所で……お前はいつになったら本気出すんだ？」

「……………どういう意味だ？」

その時蒼が口にした問いに、結弦が僅かに眉を顰める。

「黒乃も獅堂も、お前の能力とは相性最悪だと思っただけだな」

「お前な……それこそよっぽど買い被りだ」

学園”5位”の彼の実力に、疑問の声を上げる蒼。雪華や獅堂にも匹敵すると目される、その能力について言及されながらも結弦は軽く聞き流す。

しかし蒼の隣のステイプは、依然として油断の無い視線を向けていた。

一方で日向と徹彦の戦いは、更なる白熱の一路を辿る。



微動だにせず爆皇破を止めた徹彦に対し、大きく飛び退り距離を取る日向。しかし後

方に跳ぶと同時に、右脚を振り抜き攻撃魔術を発動させる。

火属性攻撃術式『戟衝破』

回避と並行させながら一撃を放つが、徹彦の余裕が崩される事は無い。

「……無駄だよ」

徹彦が翳した掌は、炎のレーザーを断絶させるように防ぎ止め、弾き散らす。

(どうなってるんだ……!?)

魔術の威力・衝撃を完全に殺し切るかのような、尋常では無い防御能力。肉体の硬度・耐久性を上昇させる強化術式かと思われたが、それだけでは説明がつかない違和感を日向は数秒前に感じていた。

爆皇破を真つ向から叩き込んだにも関わらず、微動だにしていなかった徹彦の身体。まるで、物理攻撃の慣性そのものを無効化しているかのように。

そもそも本当に徹彦が使っているのは魔術なのかという、大前提を揺るがすような疑念まで頭を過り始める。

「……色々考えてるみたいだね」

「そりゃそうだろ……なんだそのワケ分かんねエ硬さは……」

「そう、ソレだよ」

「は？」

能力を推察しようとしていた日向に、徹彦は軽く同意するように指を差した。

「俺、全身に解除出来ない『障壁』^{バリヤ}の魔術が掛けられてるんだ。ただの硬い皮膚みてーなモンなんだよ。……単純だし、別に強くもなさそうだろう？」

唐突に明かされた、徹彦の能力の正体。しかしその性能は、只の防御魔術と呼ぶには余りに桁外れ過ぎる。

「何だと……？ いや、つーかそうだとしても……!!」

再度突進した日向は、またしても爆炎を纏った拳を繰り出した。今度は頭部——額を狙い、叩き飛ばすような一撃を炸裂させる。

(ツ……石でも殴ってるみてエな感覚だ……!!)

しかしやはり、徹彦はその鉄拳を完全に受け止めながら1ミリたりとも動いていない。

「吹っ飛びすらしねエってのはどういうコトだ……!？」

「あー、ソレはね……副次性能^{オプショナル}みたいなのだよ。動かない代わりに、更に防御力を上げてるだけだ」

徹彦が口にしたのは、『絶対防御術式』の能力法則。

体表に常時展開されている『魔力の鎧』が、フルオートで攻性ダメージを遮断する『障壁装甲』。

そして全身の動作を停止する事で、攻撃威力だけでなく慣性をも遮断しその場から動かす事すら出来なくする『座標固定』。

この二つの能力性能を自在に切り替える事で、徹彦はあらゆる攻撃の無効化を可能にしていた。

順位では測り切れない実力を持った、超一点特化型の魔術師。その能力は、圧倒的な攻撃力を誇る蒼の『天敵』とも呼べる。

「そういうコトかよ……そりゃ蒼に狙われるワケだ……」

「あー、ソレに関してはマジで困ってる。あの人もうバトルジャンキーに片足突っ込んでるよな?」

腑に落ちたと告げて来る日向に、自身を取り巻く厄介な現状を語る徹彦。

———彼はこの学園に於いて、No. 1に最も近い位置にいる魔術師だった。

「まア……俺には知ったこっちゃねエけどな……!!」

そう言い放ちながら日向が撃ち出すのは、魔力で形成された火炎の斬輪。

火属性攻撃術式『大輪破』

撃ち放たれた炎輪は、徹彦の足元へと叩き込まれバトルフィールドのフロアを斬り碎く。

「クツ……!!」

足場を崩された徹彦の体勢が僅かに揺らぐが、日向はその瞬間を逃さない。

（止まってなければ、動かせる——!!）

座標固定セカンドの発動条件は、『身体動作の完全停止』。即ち少しでも徹彦の身体が動いている間、彼はセカンドを使えない。バランスを崩した徹彦へと、日向が追撃の魔術を炸裂させる。

火属性攻撃術式『豪嵐破』

足元から突き上げるように現れた爆炎の竜巻が、徹彦を上空へと吹き飛ばした。

そして日向もまた彼を追うように、豪嵐破によって生じた上昇気流に乗って飛び上がる。それは天音がタッググロワイヤルで見せていた、『気流飛行』の模倣だった。

「くツ……成程、考えたな……!!」

「空中でなら、存分にフツ飛ばせる……!!」

咄嗟にファーストで防御していたものの、体勢を安定させる事が出来ない空中に引き摺り出された徹彦。一方で日向が思い起こしていたのは、恭夜から授けられた魔術戦闘の”極意”について。

——昨夜。

『まず一つ目は、如何に戦闘を自分優位の領域に持ち込めるかだ』

日向と創来は属性魔術で周囲の環境に影響を及ぼし、伊織と啓治は近接戦闘の間合いを保ち続ける事。それが恭夜が四人に伝えた、一つ目の戦術理論だった。

『戦術つてのは強力であればある程、自分以外の状況的要素に依存してる』

だからこそ相手に不利であり、尚且つ自身が100%の力を発揮出来るフィールドを作り出せるかが勝敗を分ける。

バトルフィールドの遙か上空にて対峙する両者。空中戦の火蓋を切ったのは、日向が撃ち放った三連続のレーザーだった。

火属性攻撃術式

『戟衝破・参連』

手掌操作で撃ち出した三本の熱線が収束しつつ迫り来るが、徹彦は両の掌で掴み潰すように迎え撃つ。激しく光炎が乱反射する中、日向は魔力放出によつて一気に距離を詰めた肉薄した。

炎を纏った拳と蹴りの連撃。『炎撃』による日向の猛攻を、徹彦は物ともせず仕留めるに全て防ぎ切る。

しかし激しい戦闘が展開されながらも、気流は徐々に上昇力を失い二人の身体は落下し始めていた。『絶対防御術式』がある徹彦とは違い、日向はこの高さから地表に叩き付けられれば恐らく只では済まない。

そして徹彦が再びセカンドを使える状況になれば、間違いなく戦術に適応し対策を講じて来るだろう。そうなると彼をもう一度この空中という領域フィールドに引き込む事は、限り無く不可能に近くなる。

ならば、徹彦が地上に降り立つ前に倒すしか日向に勝機は無い。

火属性攻撃術式

『双烈破』

繰り出される、炎拳の双撃。しかし日向が見出した“勝利条件”を、徹彦は既に看破していた。

「あと何秒か凌げば、俺の勝ちだ」

そう言つて交差させた両腕で双烈破を防いだ徹彦は、空中で日向の胸倉と首筋を掴み取る。

「クッソ……!!」

拘束から逃れようと連撃を叩き込むが、徹彦の力が緩む気配は一向に無い。その間にも落下速度は上がり続けており、地表まで残り僅かの距離まで近付いて来ていた。

「———終わりだ」

「フザっ、けんなッ……!!」

加速と共に激突が迫る中、日向は全身に魔力を纏わせ一か八かで防御魔術を構築する。

———そして。

バトルフィールドに、轟音が響き渡った。

◇◇◇

「オイオイ生きてんのかよアイツ……!?!」

「ヤベエだろアレは……大丈夫か……!!」

フィールドの遙か上空から、地表へ衝突した日向と徹彦。

観覧席まで届いて来るかのような、凄まじい衝撃に啓治と創来が瞠目していた。隣では天音や沙霧も、固唾を飲んで戦局を注視している。

◇◇◇

「ウワ、容赦ないね〜徹彦」

「春川もよくやった方だろうが……如何せん相手が悪かったな……」

一方で三年の観戦エリアからも、『生徒会連合』の三年生四人がバトルフィールドを下ろしていた。千聖と奏は既に決着はついたと見做していたが、未来は未だ興味深そうに戦場を静観している。

「……雪華ちゃんは、どっちが勝つと思う?」

「……………そうね……………」

勝敗を問う未来の言葉に応えようと、雪華が口を開いた。

その時、フィールドを覆うように立ち込めていた煙が晴れていく。そしてそこに立っていたのは——

◇◇◇

「フー……………」

一つ息を吐きながら姿を見せたのは、やはり『絶対防御』の力を持つ徹彦だった。

地上数十メートルから墜落しながらも、平然とした様子で首を回している徹彦。その足元では、後頭部から地表に激突した日向が倒れ伏していた。しかし——

「……………オイ……………待てコラ……………!!」

「まだ立てんのか……………キミも相当頑丈だね」

背後から声を掛けられた徹彦が、軽い驚きと共に振り返る。その視線の先では、頭部から夥しい量の血を流しつつも日向が立ち上がっていた。

しかし辛うじて意識は保っているものの、その身体は満身創痍。恐らく今の日向は、自分の攻撃の衝撃にすら耐えられないだろう。

「悪いけど……今のキミには何発喰らっても敗ける気はしないよ」

その身体状態を見抜いた徹彦はそう忠告するが、日向の眼からはまだ戦意は消えていない。

「ソレは……お前が決めるコトじゃねエ……」

「……………確かにね」

不敵に笑う彼の言葉に呼応するように、徹彦もまた全身へ魔力を集めていく。収束していく爆炎は、日向の右腕を煌々と輝かせていた。

——恐らく、これが最後の交錯。

全身から放出された炎の圧力が、駆け出した日向の身体を更に加速させていく。

火属性攻撃術式

『爆皇破』

絶対防御術式

『座標固定』

叩き込まれた死力の一撃と共に、再び戦場に爆音が轟いた。

第33話『強さの在り方』

東帝戦、2日目終了。

午後8時、学生寮二年エリアにて。

「そんじゃ……テツ君一回戦敗退おつかれ〜」

「ハイおつかれ〜……」

半屋外テラスの座席で、ニヤニヤとした笑みを浮かべながらグラスを差し出して来るアラン。対して徹彦は普段通り覇気の無い表情で、自身のグラスをぶつけ乾杯していた。

「やー、まさかテツ君が敗けるたあね〜。やっぱ強かった？春川 日向」

「うん……強かったよ。それに、墜ちる瞬間にさ……笑ってたんだよね」

戦いの中での日向の様子を、思い起こしながら口を開く徹彦。

「恐怖でも、焦りでもなく……笑ってたんだ。アレは明らかに……蒼さんとか亜門側の人間だよ」

「あー、アツチ側つてコトね。……けどまあ、蒼さんにはドヤされるだろうね〜。結

局初戦で消えちゃったワケだし」

「マジでソレが目下最大の悩みだわ……」

一日を振り返りながら雑談して来た二人だったが、その時入口フロア付近が俄かに騒がしくなり始めていた。

「お、ウワサしてたら来たっぽいよ」

「最悪だ……」

二年生達の注目を集めながら登場したのは、やはり二人が話題に挙げていた人物。

「オイ徹彦くオマエ何やってんだ〜？」

「いや違うんだって蒼さん……マジで一個言い訳させて」

姿を現した蒼は、胡乱な表情で徹彦に問い掛ける。

「……俺は敗けるつもりは無かったよ。ちゃんと本気でやった」

「ならお前……なんであの時、座標セカンド固定を解いた？」

日向と徹彦の、最後の交錯。繰り出された剛炎の拳撃を、『不動』の力を誇る防御魔術が迎え撃った。

しかしその時、徹彦の魔力知覚が異質な波動を感じ取る。

『ブツ、飛ばすッ——!!』

『ッ——!!』

嗤う日向の拳の中で、蠢き脈動する不気味な魔力。その得体の知れない圧力に、本能が危険を告げる。

そして、その瞬間。徹彦の脳裏を過った、一つのイメージ。

(破られる——!!)

座標固定を、破壊される。

何の根拠もない、僅か一瞬の思考。しかしその直感は、徹彦の能力を無意識下に操作していた。

咄嗟に術式を障壁装フアースト甲へと切り替えた事で、爆皇破の衝撃と慣性は後方へと受け流される。

その結果。

徹彦の身体はバトルフィールド外まで吹き飛ばされ、スタジアムの内壁へと叩き付けられる。そして相手を場外へと退けた事で、日向が勝者とされ戦いは決着した——

「……要はオマエが土壇場でビビっただけだろうがこの野郎」

「いやちつげエから。勝手に能力が切り替わったっつーか……正直俺にも分かんねエんだって、なんでセカンドが解けたのか……!!」

望んでいた戦いの機が泡と消えた事で蒼は立腹していたが、徹彦は諫めるように言葉を続ける。

「まあでも展開としては、コッチの方が面白エんじゃねーのかな。多分蒼さんも、俺より日向君と戦った方が楽しめると思うよ」



「いやー、何とか勝てたわ。良かった良かった」

一方で一年のエリアでは、頭部に包帯を巻き付けた日向が一回戦突破を喜んで隣には彼と同じく二回戦に進出した伊織が座っており、向かいの席では天音と沙霧が一回戦のハイライトをモニターで閲覧している。

「ホント、危なっかしい戦い方してんじゃないわよ……見てることちがヒヤヒヤさせられたわ」

「でも、古田先輩の防御を突破するなんて本当に凄いやね。正直、どうやったの？」

「うーんそれだけがなア……どうにも思い出せねエっつーか、そもそもどう勝ったのかよく覚えてねーんだわ」

「何ソレ……アンタ記憶障害でも起こってんじゃないの？」

沙霧からの問いに日向は平然と首を傾げており、天音は怪訝な表情を向けつつも軽く心配するような言葉を掛けていた。

「……………」

「伊織、お前どうかしたのか？ さっきから黙ってっけど」

「……………いや……何でもねエ」

しかしその傍らでは、伊織が考えに耽るように沈黙している。

——実はあの時伊織だけが、戦いの中で日向に現れた一瞬の『異変』に気付いていた。

徹彦へと爆皇破を叩き込んだ、あの瞬間。

日向の拳には、啓治や獅堂との戦いでも現れていた『謎の魔力』が纏われていた。

八属性中ほどの魔力とも似つかない、暗色のエネルギー。恐らく日向自身も気付かなかったであろう一瞬の展開を、伊織の動体視力は見逃さなかった。

（——まさか………いや、あり得ねエか……）

その時伊織は、日向の『謎の力』の正体についてある可能性に思い至る。それは——彼の師である人物が持つ、“九番目”の『属性性質』。

桐谷恭夜と同じ、『影』属性』。

しかしあの『影』の魔力は、全世界で恭夜以外に誰も発現者が存在しない彼だけの特異属性である。日向が持ち得る筈は無いと、伊織は即座に自身の考えを否定した。

「まアそれはともかく……アンタは明日の相手について考えた方がいいんじゃないの？」

一転して天音が言及したのは、日向の明日の対戦相手について。

Bブロックから出場している”第3シード”、如月 亜門。

『学園最速』と謳われる程のスピードと、『風神』の異名を持つ男。二年の中で戦闘能力トップかつ『十席』のNo. 4でもあり、強大な壁として日向の前に立ちはだかつて来る事は間違いなかった。

「あー、あの双子のヤツらか。どっちがどっちだったか忘れたけど……まア確かに結構強かったな」

タッグロワイヤルで交戦した、亜門の実力に考えを巡らす日向。

「けどお前、ログ見る限りでは押し勝ってただろ。……大文字より順位も低いなら、特段気張る必要も無エンじゃねエか？」

「意外ね、アンタからそんな慢心じみた言葉が聞けるなんて。……あんまりあの人の事を甘く見ない方がいいわよ」

以前日向が獅堂と互角に渡り合った事を引き合いに出す伊織だったが、彼がタッグ戦の映像を見ていた端末を取り上げながら天音が忠告する。

「亜門さんと士門さんは二人でも相当強いんだけど……その分、頭が回ってないのよね。だから正直、一人の時のの方が戦う相手としては手強いわよ」

「しかも……亜門先輩も、模擬戦で大文字先輩と引き分けた事があるらしいよ……!!」
更に天音に続いて沙霧が、自身の端末で調べていた情報を日向と伊織に表示して見せた。

学園のデータベースに記録されていた戦闘成績。そこに映し出されていたのは、亜門が獅堂や雪華と決闘し引き分けていた事に加え、一対一戦闘での勝率が9割を超えているという驚異的なデータだった。

「マジか……タイマン強エんだなコイツ……!」

その戦績に目を通した日向は、驚きと期待が入り混じったような表情を浮かべている。

「ところでアンタも明日二回戦なんですよ?大丈夫なの?」

「ああ、”相手”の戦術はもう頭に入ってる。問題無エよ」

一方で天音にそう応えた伊織もまた、ある”強敵”との戦いを翌日に控えていた。

そしてその頃、啓治と創来は――

◇◇◇

風紀委員会専用トレーニングルームにて。

「フツ……!!」

鋭く息を吐き出しながら、上段蹴りによってサンドバッグを叩き飛ばす啓治。

「よオ。……随分気合入ってんなア」

その背後から声を掛けたのは、入口の扉に寄り掛かっていた湊だった。

「お疲れ様です。湊さんも勝ち進んだらしいっスね」

「ああ、つつても明日は黒乃さんだからなア……流石に厳しいと思うわ」

互いに初戦を突破し、明日の二回戦へと進出していた二人。

「……お前は同学年対決か、明日は」

「……ハイ。これ以上……アイツらに遅れを取るワケにも行かないので」

湊からの声にそう応えた啓治は、再びサンドバックへ蹴りを叩き込み轟音を響かせ

た。

◇◇◇

スラム旧校舎屋上にて。

夜空の下、座禅を組み瞑目していた創来。彼が思い起こしていたのは、以前恭夜と交わした言葉だった。

『成程な……あの時』の力を、いつでも引き出せるようになりてエってか』

『……ああ。身に余る力ってコトは、自分が一番解ってる。けど……』

創来が恭夜に相談を持ち掛けていたのは、ある“力”の再現について。

——かつて啓治達と戦った時、半ば暴走した状態で発動させていた『強化形態』の事だった。

『簡単だ——』

恭夜から告げられた、一つの答え。記憶を呼び起こしながら、ゆっくりと目を開いていく。

（『感情を、制御する——』）

怒り、恐れ、憎しみ。『枷』によって縛られた、魂の内側に渦巻く力の本質^感。

『魔術ってのは、心』の力だ。自分自身が“信じて”望めば……力は必ず、お前に応

える』

抑え込むのではなく、受け容れる。律する事、御する事とは——心の形を、魂の在り方を見つける事。

己の中核に座す『信条』心構が、解き放たれ、共に戦う力へと変わっていく。

彼等の真価を問われる戦いが、始まろうとしていた——



「オイ……お前いつまでやんねん」

学園地下の訓練施設にて。

内壁には凄まじい威力の刺突による物と思しき、幾つもの穿痕が刻まれていた。

「全然アカンわ……」風神”じゃ蒼クンには勝てん……!!」

土門の声に振り返る事もなく、亜門は壁を睨みながらそう吐き捨てる。

「付き合い切れるか……先帰っとくぞ」

呆れたようにそう言い残し士門はその場を後にするが、亜門は無心で剣を振るい続けていた。

驚異的な集中力で、剣の世界へと没入していく。

彼を突き動かすのは、飽くなき強さへの探究心のみ——

◇◇◇

そして、7月18日。東帝戦3日目。

三人のシードが、参戦する。

◇◇◇

第二演習場^{スタジアム}

本戦トーナメント、二回戦。バトルフィールドにて相対する、二人の少年。

『ギア、本戦2日目のトーナメント二回戦!! Cブロック注目の対戦カードが間もなく始まります!』

『上級生達を押し退け参戦した四人の一年、その内二人が早くも激突!!目が離せない一戦となりそうです!!』

『皇 啓治』VS『漆間 創来』。

歓声と実況の声を一身に受けながら、互いに不敵な表情で対峙する。

「……あん時の再戦と行こうじゃねエか」

「ああ……受けて立つ」

啓治の言葉に応えながら、創来は背負った大剣の柄を掴み取った。

RHインダストリー製展開式大剣『クラレント』。

一方で啓治もまた、自身の魔術武装を起動させる。

アーマーズ
A・G 『ナツクル・R/L』

一対のメリケンサックを握り込むと同時に、両腕のブレスレットから装甲が展開され籠手へと変形した。
ガントレット

鳴り響く、戦闘開始の合図。双方ほぼ同時に動き出すが、先に攻撃態勢に入ったのは

啓治だった。

自ら施したアップデートにより、新たにナツクルに搭載された追加機能。予め充填ストックされていた魔力が、掌部のエネルギー変換コアへと収束し『弾丸』を形成する。

『ガントレット・ブラスト』

両手から撃ち出される、無数の魔力弾。挨拶代わりとばかりに放たれた連弾が迫り来るが、対する創来は真つ向から突進を仕掛けた。

戦場を駆ける強靱な脚力を以て、魔弾の尽くを打ち払う。更にトツプスピードのまま疾走する創来は、弾幕を蹴り破ったその脚で力強く地を踏み込んだ。

そして上空へ跳躍すると同時に、天高くその刃を振り翳す。『クラレント』へと集中していく、闇属性の魔力。

闇属性攻撃術式

『ダークネスカリバー』

振り下ろされる、渾身の斬撃。

しかし。

叩き付けられた筈の刃は、ガードすらしていない啓治の首筋で止まっていた。その一撃を防いでいたのは、体表を走る魔力によって形成された不可視の装甲。

無属性防御術式

『鉄身』

性能としては、単なる身体硬化に過ぎない防御魔術。しかし奏との格闘訓練によって、その練度は大きく引き上げられていた。

「こんなモンじゃねエだろ……本気で来いよ、漆間……!!」



スタジアム、出場者控室バックルームにて。

「どっちが勝つと思う?」

「漆間だろ。一年の中ではアイツがNo. 2らしいしな」

「いや……でも皇の方が押してねエか?」

設置されたモニターに映し出された啓治と創来の戦いを、待機場から観戦している他の出場者達。彼等が勝敗予想に興じている中、自身の試合を間近に控えた日向もまた静かに戦況を注視していた。

「……………」

恐らく、二人の実力は拮抗している。ならば、局面を動かす事が出来るのは――



無属性攻撃術式

『撃鉄拳』

『硬化』性能を付与されたカウンターの一撃が、武器防御の上から創来を吹き飛ばした。更に体勢を立て直す間も与えず駆け出した啓治は、『撃拳』と『撃脚』による猛攻を間隙無く叩き込む。

連撃に纏われた魔力が、空中に描き出す光の軌跡。流れるように炸裂する波状攻撃に、創来が次第に押し込まれていく。

エネルギー魔力を最適化し攻防へと利用するA・Gの性能と、奏や湊との鍛錬によって強化された戦闘技術。相乗効果によって引き上げられた啓治の格闘能力は、目覚ましい進化を遂げていた。

大剣を弾かれた創来だったが、襲来する蹴りを迎え撃つべく自身もまた魔力を脚部へ流し込む。

無属性魔力×強化術式

『撃脚』

閻属性魔力×強化術式

『イヴルストライク』

両者が繰り出したハイキックが交錯し、周囲の空間へと衝撃が走り抜けた。衝突の反動を利用し互いに大きく距離を取るが、戦勢は著しく一方へと傾いている。

「やっぱ強エな……!!」

「あ……?」

しかし笑う創来の瞳は、依然として好戦的な光を湛えていた。

「けどこつちも……黙ってやられるつもりは無エぞ……!!」

轟音と共に、大剣を地へと突き立てる。そして目を閉じ、大きく息を吸い込んだ。

「何だ……?」

訝し気に警戒していた啓治の眼前で——創来の全身から、爆発的な魔力波動が放たれた。

柱の如く立ち昇る、黒い力の奔流。荒れ狂うエネルギーの圧力が、創来の身体を呑み込んでいく。

(抑え込むんじゃねエ——制御するんだ——!!)

体内で魔力が暴れ回る激痛に、歯を食い縛り耐える創来。抑圧されたままでは、魔力は完全な性能を發揮出来ない。一度は暴走させた”力への渴望”を、己の武器へと変え再び行使する。

今度は、強さを追い求める自らの”意思”として。

『——お前を絶対、引き戻してやつからよ』

もう、あの時とは違う。自分を止めてくれる、仲間がいる。

「そっだよな……日向……!!」

迷いは消え、最後の『枷』は破られた。

そして——

——解き放たれた獣が、目を醒ます。



「ッ………!!」

「へエ……………」

観戦スペースの一角にて、周囲に凄まじい威圧感を放っていた二人。

創来が見せた”進化”に、諸星は瞠目し、蛇島は興味深そうな視線をバトルフィールドへと向けていた。

◇◇◇

再び呼び起こされた力。

魔力によって形成された、爪牙の如き装甲が身体各所に備えられている。

全身に魔力を纏う事で更に戦闘能力を引き上げる、より高度な強化術式。ブーストフォーミュラ 大文字獅

堂や如月亜門が到達した、その領域の名は——『形態変化』。

闇属性魔力×強化術式

『形態変化・ダークナイトモード』

「最ツ高の気分だ……!! まだまだ勝負は……こっからだろ……!!」

暗黒の猛獣は遂に、覚醒した。

第34話 『黒獣咆哮』

闇属性攻撃術式

『ウルフェンハウル』

響き渡る、衝撃波の如き咆哮。吹き荒ぶ凄まじい圧力が、空間を裂くように啓治へと襲い掛かる。咄嗟に防御の構えを取るが、創来はその機を逃さず地を蹴り突撃を仕掛けた。

強化された身体能力による、爆発的加速。目にも留まらぬスピードで、撃ち貫くような大剣の刃が突き込まれる。

啓治は両腕へと魔力を収束させ、渾身の双掌底で迎え撃った。

激突した大剣と装甲が火花を散らし、轟音を響かせながら闘ぎ合う。しかしAナツクルの魔力噴射機構ブラスターによるシステムアシストをも、創来の一撃は押し込み始めていた。

「ソのツ、野郎オツ!!」

啓治は叩き上げるようなアツパーで刃を弾くが、創来はその反動を利用し空中へと駆け上がる。そこから繰り出されるのは、鋭利な魔力の刃を纏った乱撃。

闇属性攻撃術式

『ダーク・クローズ』

斬撃性質の魔力を宿した手刀を蹴りで打ち払う啓治だったが、続けて蹴り込まれた闇属性の斬脚によって大きく吹き飛ばされた。

「クツ……ソがツ……!!」

胸元を斬り裂かれ地を転がりながらも悪態を吐く啓治へと、創来は更なる追撃を仕掛ける。

「オオツラアツ!!」

巨大な刀身の重量を物ともしない膂力によって、担ぎ上げたその大剣を豪快に投げ放った。猛烈な勢いで飛来する創来のクラレントに対し、啓治もまた体勢を立て直し真っ向から突進する。

「フザけてんじゃ、ねエぞツ!!!」

投擲された大剣を殴り返した啓治の拳と、膨大なエネルギーを宿した創来の拳が再び激突した。



「中々頑張つとるやん、啓治^{ケイジ}」

「だな。意外と粘ってるわ」

観覧席から試合を見下ろしていた士門と湊は、後輩の善戦を称えるようにそう言葉を交わす。

一気に形成は逆転するかと思われたが、跳ね上がった創来の戦闘能力に未だ喰らい付いている啓治。しかし互いに強力な戦術というカードを切った事で、二人の体力と魔力は加速度的に消耗し始めている。

恐らく、両者の戦いが長引く事は無い。

「……だが、どちらもかなり負荷の大きい戦い方をしてる。……もうじき決着がつかだらうな」

それを見越していた奏が、士門達の後ろから戦局を注視しながらそう呟く。

ダークナイトモードの発動限界まで啓治が持ち堪えるか、それとも創来が時間内に仕留め切るか。鍵を握るのは、戦闘技術と耐久力。

勝敗の行方は、『近接格闘』へ委ねられようとしていた。



「何だオイ……もうガス欠かコラ……!!」

「冗談だろ……まだやれるさ……!!」

鏢迫り合いの状態から、同時に繰り出した拳と蹴りで互いを吹き飛ばす啓治と創来。

ダークナイトモードは魔力消費が激しいらしく、少しずつではあるが明らかに攻撃の精度が落ちて来ている。しかし隙が生じつつあるのは創来だけでなく、息を切らし始めているのは啓治も同じ。

創来は左腕に纏った魔力装甲を、弓のようなフォルムへと変形させる。そこから撃ち放たれるのは、衝撃を伴い襲来する剛速の一矢。

閨属性攻撃術式

『イヴルシューター』

「ツ!!」

予期せぬ飛び道具に意表を突かれ、啓治は反応する間も無く脇腹を射抜かれた。その一撃のダメージは想定外に大きく、遂に体勢を崩し片膝を突く。

そして創来は一気に戦いを終わらせるべく、”必殺”の術式を組み上げながら駆け出した。

全身に纏ったダークナイトモードの魔力を、斬撃に回すべく大剣へと一点収束させていく。振り上げられた巨大な刃は、遍く命を断ち斬るギロチンの如く。

「これで……最後だ!!!」

闇属性攻撃術式

『アッドスクラッパ』

天を衝くかのように翳された、闇属性の一刀を前にして——啓治の脳裏を過つていたのは、一人の仲間の姿。

啓治の『双拳』を模して『双烈破』を編み出し、天音の気流飛行をも独自に再現していた。戦いの中であらゆる技術を吸収し、己の力へと変えていく彼の成長性。

際限無く“強さ”を取り込んでいく春川 日向の戦闘スタイルは、啓治だけでなく多くの人間に影響を及ぼしていた。

「俺にも……使わせろ!!!」

そして啓治もまた、仲間の力を“模倣”し創来の一撃を迎え撃つ。

それは、日向が如月兄弟へ繰り出した『豪風破』と同じ——
高速旋回ウインドミルを起点とし、
嵐を巻き起こす足技。

無属性攻撃術式

『豪戦脚』
ゴウセンキヤク

突き上げるような魔力の竜巻が、振り下ろされた剣撃と激突した。

「オオオオオオオツツツ!!!」

「ウツラアアアアツツツ!!!」

双方一步も退かぬ、凄烈な魔力衝突。

しかし勝敗を分けたのは、両者の残存魔力だった。その一撃を放つまでに、創来は魔力を使い過ぎていた。

「まずはコレで……」イッブシ「勝一敗だ」

「あア……次は、勝つぞ……!!」

啓治の言葉に、最後まで不敵に笑いながらそう応える。

そして創来の身体は、嵐を纏った蹴撃によつて——その刃諸共、吹き飛ばされた。



『熱闘、ここで遂に決着!!軍配が上がったのはI—Bクラス所属、皇 啓治!!凄まじい乱打戦を見事制し、三回戦進出です!!』

仰向けに転がり空を見上げていた創来に、フィールドの外縁へと降りて来ていた啓治が手を差し出した。

「……オラ、立てよ」

その手を掴み取り、彼の肩を借りて歩き出す。傷だらけになりつつも戦い切った二人の背中に、観衆からは惜しみない称賛が送られていた。

そしてゲートを潜った彼等を通路で待っていたのは、間も無く始まる次の二回戦への出場を控えた少年。

「よう。お疲れ」

日向からの労いの言葉に応えながら、激励するように二人が彼の背を叩く。

「無様な戦い見せやがったら承知しねエぞ」

「だな。ベストは尽くせよ」

「俺が敗ける前提で話すのはやめろ」

不服そうに言い返された啓治と創来は、ゲラゲラと笑いながらも日向を戦場へと送り出した。

東帝学園屈指の“異端児”二人が、遂に対決する。

◇◇◇

1時間後。

激しい魔術戦闘に耐える為の、バトルフィールドの整備・修繕が完了した。

双方ゲートから姿を見せるのは、共に学園随一の注目度を誇る問題児達。

『絶対防御』の古田徹彦を破った驚異の新星!! 今日もその型破りなバトルスタイルを見せてくれる事でしょう!! 春川日向の登場ですツツ!!』

『対して迎え撃つは、現代の大剣豪「如月天涯」の後継者!! 万衆を魅せるスピードスター、如月亜門!!』

学園中を騒がせる二人の登場に観衆は沸き立つが、止め処無い歓声の中で亜門は静か

に開口する。

「日向くん、聞いたか？……この戦いに勝てば、S級の資格取れるかもしれないへんらしいで」

「あー……………そういや天音達がそんなコト言ってたな。興味あんのか？」

「いやア、別に」

そう訊き返す日向の声に、亜門も然程興味無さげに応えた。

『僕はさ……………S級魔術師になりたいんだ』

ランカーウイザード

「……………」

その時日向が思い起こしていたのは——かつてその地位を手に入れようと画策していた、自分達の仲間だった少年。

「それよか……………そこまでの戦いの方が、俺にとっては重要やなア」

続けて亜門が口にしたのは、彼が戦いに臨む理由について。

「2年ではトップやの、来年の東帝の頭やの……………気楽な外野に好き勝手言わせとくんも

イラついとったっんや、エエ加減な」

「……………」

客席を一瞥しながら言外に指し示すのは、東帝の頂点に君臨する”彼”の存在。

「今、此処で”最強”を倒す。それ以外には何の価値もあらへん。……そう思わんか？」
絶対的”最強”を、打ち倒す事こそ全て。そう断ずるその執心に対し、日向が返したのは意外な言葉だった。

「成程な……お前が間違つてるとかはこれっぽっちも思つてねエケド……俺は別に、そこまで一番であるコトに拘りは無エかな」

「……………」

日向の返答に、亜門が胡乱げな表情を向ける。

「今はまだ、何回やつても伊織からは一本も取れねーし。啓治とか創来にもちよくちよく敗けてるしな」

「何や……闘争心旺盛なタイプやと思つとったケド、案外そうでもないみたいやな」
「幻滅したか？」

「まあ、自分の実力過信しとるよオなバカよりは1000倍マシやろ。俺はエエと思うで」
掛け合いを続けながらも、二人は一步ずつ戦場の中央へと歩き始めた。



「ギアて……どう転ぶだろうなア」

「アンタは何当然のように居座ってんのよ」

「いーじゃん硬エコト言うなよ怜ちゃん」

VIPルームと同等の設備を備えた教員専用観戦室にて、窓際に腰掛けながらフィールドを一望していた蒼。その部屋には彼に声を掛けた冴羽に加え、万丈・久世・篠宮など他の教員陣も揃っていた。

「こんなバカが次のS級候補とか……本部は何考えてんだか」
「いやいや、まだ分かんねーだろ？ どうなるかは」

冴羽が呆れたような口調でそう零した、その言葉に蒼が反応する。

現在全世界には、魔術師協会によってその突出した能力を認められた15人の

『S級魔術師』が存在していた。しかし近日、ある事情によってそのS級に一つの空席が生じる事になっている。

その空席を埋めるべく開催されるS級選抜試験に、日本の魔術教育機関である東帝学園からも一名参加資格が与えられる事になった。その受験者を決定すべく、東帝戦の優勝副賞に試験参加権利が設定されたのだが――

「……………いや、あり得ねエだろ。お前以外」

「そうね……………引き分けならまだしも勝つてなると、中々想像つかないよね」

万丈相手にチエスを指していた久世に続き、コーヒ―を淹れていた篠宮も同意する。徹彦が敗退し獅堂も欠場している今、他の学生によつて蒼が倒される事はまず無いと思われていた。

「まアそう決めつけなさんなって……………」

しかし蒼は期待するような視線と共に、再度戦場を見下ろす。

未知数の潜在能力を秘めた、二人の戦い。蒼と激突するまでに、更に化ける可能性もある。最もそうでなければ、彼等をタッグロワイヤルで派手に蹴散らした意味が無い。



一方。

第三演習場スタジアムにて。

第二演習場で日向と亜門による二回戦が始まっていた頃、こちらの会場でも同様にCブロックの二回戦が行われていた。

その戦いを静観していたステイブの背後から、近づいて来ていた少女が声を掛ける。

「弟子が、が気になるみたいだねエ〜」

「……………」

アランの声に応える事も無く、ステイブは無言で戦場を注視していた。無視された事を気に留める様子も無く、彼女もまたフィールドを見下ろしながら言葉を続ける。

「流石に厳しいとは思うケド……………やっぱ期待してるワケ？番狂わせ」

「……………実力以上の物が通用する相手ではない。敗ければ所詮、奴はそこまでだったといっただけだ」

「ドライだね……………」

劣勢を強いられている、自身の兄弟弟子。アランの問い掛けにステイブが返したのは、あくまでも淡淡としたシビアな答えだった。



突き刺さるようなソバットが、鳩尾へと炸裂する。伊織は吹き飛ばされながらも刀の地に突き立て、地を削りながらその一撃の勢いを殺し停止した。

『学園随一の戦闘能力を誇る御剣伊織ですが、その強力な剣技を抑え込まれ苦戦を強いられています!!』

実況が響く中、起き上がりつつ眼前の相手を睨む。その少年の手にはそれぞれ、オートマチックの拳銃ハンドガンとナイフが握られていた。

「へエ、まだ立てんのか。タフだな」

卓越した戦闘技術で伊織を圧倒していた“彼”は、首を鳴らしながらも感心するような声を漏らす。

春川日向と如月亜門の一戦の裏で繰り広げられていた、もう一つの戦い。

『御剣 伊織』VS『結城 結弦』。

——伊織の道を阻むべく、新たな強者が立ち塞がる。

第35話『テレポーター』

『テレポーターシヨン
瞬間移動』。

空間中のある地点から別地点へと瞬時に転移する、『超能力』と呼ばれる異能の一種。自身が持つその力が”普通”では無い事、そして他の人間とは違うという事を、幼い頃から漠然と理解していた。

だが、その力を人前で使った事は一度も無かった。そんな物が無くとも、人並みの平穩な生活を送っていたという事もある。

しかし少年の日常は、ある日突然終わりを迎える。

咄嗟だった。

騒音と悲鳴が飛び交う中で、道路を暴走する乗用車。その先にいたのは、胎児を宿していると思われる妊婦と幼い少女の親子連れ。

多くの人間に目撃される事は間違いない。しかし迷いは僅かたりとも無かった。

一瞬でも躊躇えば絶対に間に合わない、本能的に悟っていた。

半ば無意識に、身体が動く。そして――

陽が沈みつつある、夕暮れ時。ビルの屋上に腰掛けていた少年は、自身の今後にはぼんやりと思いを馳せていた。

あの場を逃げるように立ち去り、当ても無く街を飛び交った末にこの場所に辿り着いた。母娘を助けた事に後悔は無いが、恐らくこれまで通りの日々が戻って来る事は絶対に無いだろう。

身寄りの無い自分を育ててくれた親戚や、毎日のように顔を合わせていた友人達を思い浮かべつつ、小さく溜息を漏らす。途方に暮れていた、その時。

『頭では分かっても、いざって時にあそこまで動けるヤツはそうそう居ねエ。お前、才能あるよ』

『……………誰だ？アンタ』

サングラスで双眸を隠した、見るからに怪しげな雰囲気青年。突然背後に現れた彼は、振り向いた少年からの問いに応える事なく手を差し出した。

『お前のその力——もつと多くの人間を助ける為に、使ってみる気は無エか?』
後に桐谷恭夜と名乗った、その人物との出会いによつて——

——結城結弦の世界は、一変した。



結城の右手に構えられた拳銃。

撃ち放たれた銃弾の雨に対し、伊織は真つ向から突撃を仕掛けた。迫り来る連弾を捌きつつ疾走する伊織へと、結城もまた迎え撃つべく突進する。

銃をホルスターへと収めつつ、ナイフを逆手へと持ち替える。そして、交錯の瞬間。伊織が振り抜いた横薙ぎの一閃を、上体を倒し寸前で躲す。鼻先を掠めながら通り過ぎる刃を見上げつつも、結城の右手には魔力が収束していた。

直後。

撃ち上げるような掌底が、伊織の顎下へと炸裂した。更にそこから間髪入れず、胴元への追撃の蹴りで叩き飛ばす。

伊織の反応速度をも上回る、反撃を許さない高速連撃。更に結城の戦闘能力の”真価”は、それだけに留まらない。

吹き飛ばされていた、伊織の真上の空間へと――

――突如、結城の姿が現れる。

そして振り下ろされた右脚が、伊織の身体を戦場へと叩きつけた。

『またしても出ましたア!!結城の「空間テレポルト転移」!!強力無比な魔術の前に御剣は防戦一方ですッ!!』

『やはり学園屈指の実力者!!第五席』の戦闘力は伊達ではありませんッ!!』

一瞬にして伊織の前に出現した、結城のその力の正体は――『空間操作術式』。

この魔術を利用した転移・転送技術は、魔術都市内でも転移ポータルゲート門を始めとした様々な箇所所で運用されている。しかしそれらは、コンピューターとの連動による極めて精密かつ正確な演算能力があつてこそ成り立つモノ。

しかし卓越した空間認識能力を持つ結城は、一切の演算補助を用いず超感覚による概算のみで『空間転移』^{テレポート}を自在に操っていた。

そして高度な魔術使用を可能にする、繊細な魔力操作技術^{コントロール}。天堂蒼・黒乃雪華・大文字獅堂といった同世代の巨星に隠れながらも、彼もまた優れた才覚を有した確かな強者だった。

伊織を叩き伏せた結城は、転移によって一度距離を取る。

「クソツタレが……!!」

血反吐を吐き捨て、切れた口の端を拭いつつ立ち上がる伊織。事前に結城の能力について情報は得ていたものの、想像を遥かに超える万能性と脅威によって完全に伊織の剣は封じ込められていた。

『——圧倒的な戦闘センスを見せる結城ですが、彼はスカウトを受け二年次から東帝学園に編入して来たという異色の経歴を持っています』

『スタートダッシュで大きく出遅れていたにも関わらず、たった一年で東帝十席にまで到達したその才能は紛れも無く本物です』

「こんだけブチのめしてまだ向かって来るとは……流石は恭夜さんが師匠だけあるな。ハンパな鍛え方はしてねエってか」

ナイフを手の上で踊らせながら、結城が語り掛けて来る。

「いや、今は天堂に弟子入りしてるつつつってたな」

「ベラベラと……よく喋るなオイ……!!」

地を蹴った伊織は弾丸のように飛び出すが、相對していた結城は真正面からその刃を投げ放った。

向かって来る刃を即座に斬り返すが、その瞬間既に結城は前方から消えている。そして直後、背後に気配。

振り向きざまに空を薙いだ一刀が、飛来していた弾丸を真つ二つに斬り裂いた。しかしその銃弾を放った筈の結城の姿が、またしてもその場から忽然と消える。

周囲に次々と、現れては掻き消える魔力波動。短距離瞬間転移を連発しながら、一気に距離を詰めていく。

「チツ……!!」

テレポートによる的を絞らせない接近に、舌打ちしながらも伊織は刃を持ち上げる。

そして——その刀を地へと突き立てた。

掴み、捕らえる事さえ出来れば、渾身の一撃を叩き込める。近接格闘による迎撃の構えを見せる伊織に、結城は不敵に笑いながら更に転移速度を引き上げた。

空間を飛び回りながら迫り来る気配を察知すべく、伊織は極限まで集中力を高めていく。そして、繰り出される結城の蹴撃。そこにタイミングを合わせ、伊織もまたカウンターの一撃を叩き込む。

しかし。

「悪イが……バカ正直に付き合ってやる気はねーよ」

空を切る伊織の拳。再度発動したテレポーターによって消えた結城の気配が、伊織の周囲複数箇所へ同時に出現する。

それは、超高速連続転移によって作り出された『擬似分身』。

そして全方向から包囲するように構えられた銃口から——

無属性攻撃魔術

『フルダイレクト・バレット』

——一点へと収束するように、撃ち放たれた魔力連弾が伊織を急襲した。



「あの御剣君が……ここまで押されるなんて……」

学年トップクラスの實力を誇る伊織を、楽しげな表情で圧倒する結城。一方的に展開される戦闘に、観覧席の沙霧は愕然とした様子でそう呟く。

「……アイツが……こんな所で敗けるワケないでしょ……!!」

しかし彼女の隣の天音は、まだ伊織の勝利を信じていた。自分と引き分けた彼が、こんな場所では敗れる筈は無い。きつと戦いの中で、突破口を見つけ出す。

(なんとかしてみなさいよ……御剣……!!)



咄嗟に引き抜いた刀で、ほぼ全ての銃撃を打ち落とした伊織。しかし数発の弾丸を斬り損じ、急所こそ防御したものの脚を撃ち抜かれ負傷していた。

機動力が大きく低下したこの状態では、瞬間転移^{テレポート}を多用する結城の高速戦闘には追い付けない。

「ダラダラと戦っても仕方がねエ……そろそろ終わりにしようぜ」

そう口にした結城は、構えた拳銃へと魔力を再装填する。そして引鉄トリガーを引くと同時に、地を蹴りテレポートを発動させた。

放たれた弾丸と共に疾駆する、結城の魔力を纏った刃が迫る。



二週間前。

『こんなコトやっててツ……意味ツ、あんのか……よツ……!!』

伊織は学園裏スラムにて、巨大な重石ウエイトが突き刺さったバーベルのような剣を振り込んでいた。

『グダグダ言ってるヒマがあったら一本でも多く繰り返せイ。筋肉は全てを凌駕し解決すんだぞーハツハツハ』

『フっづけ……やがつ、て……!!』

一方でそのトレーニングを課した蒼はと言うと、愉快そうに笑いながら七輪に風を送っている。

幼い頃から恭夜に鍛えられていた伊織は、標準的な体格ながら驚異的な筋力・身体能力を有していた。純粋な膂力で彼と並ぶ人間は、東帝学園の中では大文字獅堂程だろう。

『いいか？そのクソ力はオマエの最大の武器だろうが。ソレを「飛び道具」にまで昇華させれば、魔力が無エつつー弱ウィークポイント 点なんざカンタンに打ち消せんだよ』

『だから……具体的にどうやんのかを聞いてんだよ……!!』

息を切らしながら重量器具を地に下ろす伊織だったが、焼き烏賊を啜っていた蒼は串を手に取り空中を指し示した。

『……………魔力はあらゆる場所に存在してる。空間の中にもだ。お前にやハッキリとは視えねーだろうが……その気配を感じ取るくらいは出来んだろ』

魔力知覚を持たない伊織は正確に感知出来ないが、魔力はこの世界のあらゆる空間に遍在している。そして伊織の超人的な五感機能は、臚げにはあるが魔力の“気配”を認識出来た。

『その魔力の“流れ”に沿って空間を斬ると、どうなると思う？』

『……………どうにもならねェんじやねエのか?』

『そりやフツの奴はな。けどお前は違エだろうが』

訝しげな表情を見せる伊織に、その問いの答えを示す。

『正解はな……「空間の」裂け目」が広がる、だ』

『……………?』

依然として首を傾げている弟子に対し、蒼は言葉が続けた。

『空間に流れる”魔力の割れ目”をオマエのバカ力で”斬って”広げれば”、斬撃そのものの威力を拡張出来る。俺やステイプの「飛斬」魔力斬撃が”飛ぶ斬撃”なら、お前のソレは”伸びる斬撃”ってトコだな』

『ツ……………そうか……………!!』

空間の歪みを斬り開く事で、『切断』という性質を持った攻撃の有効距離を引き伸ばす。鋭く刃を振り抜いた風圧によって、物体を斬り裂く『鎌鼬』の如く。

『もう分かったろ。俺達の”技”を再現するには、今のお前じやまだ単純に”力”が足りねェんだよ』



師の言葉を反芻している間にも、結城の一撃はそこまで迫って来ている。

結局どこまで腕力を鍛え上げても、『飛斬』を再現する事は一度も出来なかった。だが積み重ねて来た力と技術は、決して消える事など無い。

御剣伊織の人生は、往々にして失敗と敗北の連続だった。一か八かの窮地など、今まで何度でも潜って来ている。

己が為すべきは、修練の軌跡をなぞりこの一刀を振り抜くのみ。信ずるは、この刃ただ一つ。

無心の剣は——空を、斬り開く。



「フン……やっと完成させたか……」

弟弟子が到達した、剣士としての新たなステージ。眼下の戦場を見下ろしながら、スティーブは小さく笑みを零した。



超剣速を以て撃ち放たれた『刃』が、空間を劈くような異音を響かせる。

「ッ!?!」

咄嗟に魔力を集め盾を形成するが、その『拡張斬撃』は結城の魔術防御を斬り碎いた。不可視の剣風によつて、裂かれた頬を血が伝う。

土壇場で遂に完成した、伊織の新たな戦闘術。名を——

”飛斬改式剣術” ・ 『鎌風』。

カマカゼ

第36話 『飛斬改式剣術』

『何という事でしようッ!! 御剣伊織が放った空を裂く一閃ッ!! その剣技は天堂蒼やステイブ・ジャクソンが操るモノと同じ、”飛ぶ斬撃”のように見えました!!』

(どうなってんだ……魔力が無エってウワサは嘘か……? いや、そんな下らねエマネするような奴には見えなかった……)

興奮冷めやらぬ実況と観衆による歓声の中、結城は伊織が放った斬撃について洞察していた。

彼が学園で唯一、一切の魔力を持たない人間である事は知っていた。しかし今自分が受けた攻撃は、紛れも無く蒼やステイブが用いている『飛斬』と同質の物だった。

酷似してはいるが実際は別物である事など、初見の結城が看破出来る筈は無い。

「……色々考えてんな」

「そりゃ驚くだろうよ……とんだ隠し玉じゃねエか。どんなカラクリだ?」

「ソレは……自分の目で確かめるんだな……!!」

結城の問い掛けに返答しながら、伊織が再び一刀を引き寄せる。テレポートによって消失する相手の姿。

構えた刃、伊織のその眼は閉じられている。そして開眼と同時に、斬り上げるような剛速の一閃が繰り出された。

飛斬改式剣術・『鎌風』。

” 右前方16 M^{メートル}、44” 。純然たる超直感のみで割り出した^{予測した}転移先へと、正確無比な空間断裂が撃ち込まれた。

「クツ……マジかよオイ……!!」

飛来する剣撃に、結城は両腕へと魔力を流し込み『武装』する。

無属性魔力×強化術式

『^{アームス}纏』

魔力を纏った両腕を交差させ『鎌風』を防御するが、それでも大きく押し込まれ吹き飛ばされる。

脚の負傷による機動力の低下も、飛斬改式剣術という手札を得た伊織には関係無い。

視界の全範囲へと斬撃を撃ち出す、固定砲台の如き新たな戦術^{カード}。遠距離戦闘というネットワークを克服した今、形成は最早逆転したと言って良い。

しかし、東帝の最上位十人に君臨する魔術師の力は依然として脅威たり得る。例え有利な戦況であろうと、そのまま”崩し切る”事は容易ではない。

空中で体勢を立て直した結城は、伊織の真横へと転移して来る。そして繰り出されるのは、魔力によって創り出された『刃』を纏った蹴りの一撃。

無属性魔力×強化術式×形成術式

『纏刃脚』^{テンジンキヤク}

振り抜かれた結城の右脚は、即座に反応した刀刃に防ぎ止められる。剣戟音を響かせながら伊織に斬り返されるも、反動を利用し大きく距離を取って着地した。

「……仕組みは大方解った。空間中の魔力に干渉して、剣の『風圧』を増幅させてんだろ」
 結城が口にした『飛斬改式剣術』についての推測は、大前提として異常なまでの剣^{スイングスピード}速が無ければ成り立たない。しかし伊織の常識外れの超腕力ならば、不可能な芸当では無いと見抜いていた。

「ギア……どうだろう、なッ!!」

その声と共に再び撃ち出された伊織の斬撃を、転移によって回避する。上空に姿を現した結城は、地上目掛け無数の魔力弾丸を叩き込んだ。

無属性魔力×形成術式

チエインプラスト
『連弾』

そしてそれらの銃弾の軌道を、魔力操作によって不規則に散開させる。

伊織の『飛ぶ剣撃』は、空間中の魔力の『亀裂』を斬り拡げる物。ならばその流れを意図的に乱せば、飛斬改式剣術は完全な性能を発揮出来ない。

拡散した連弾が、縦横無尽に空を走りながら襲来する。その銃撃を、伊織は『もう一つの武器』で迎え撃った。

退魔一刀流・『富嶽』。

叩き上げるように振り抜かれた刃が、その弾丸の尽くを吹き飛ばす。

しかしその術式の軌跡によって、空間中の魔力脈は大きく掻き乱されていた。

”風圧で空間を斬る”という飛斬改式剣術の性質上、結城が取った戦術的選択は最善

手に近かった。

ただ、彼が考慮していなかった——誤算とも言うべき要素は、伊織の持つ『怪力』。

魔力の乱流など、何の支障も無く引き裂き弾き散らす剛腕の三連斬。

「オオオオオツツツ!!!」

『鎌風・参連』

咆哮と共に撃ち放たれた渾身の連続剣撃は、結城が咄嗟に創り出したシールドを一瞬で打ち破った。そして轟音と共に、砕かれた魔力の残骸が暴発する。

煙の中に吞まれかけていたが、転移テレポートで辛うじて爆発からは逃れていた。しかし結城の肩口には、決して浅くない斬撃の傷が刻まれている。その一方で伊織もまた、弾丸やナイフによって傷を受け全身から流血していた。

「……………ここまで来りや後は気合の勝負だ。どつちが先にくたばるか……………とことん戦り合おうじゃねエか」

「……………望む所だ」

最後に勝利を掴むのは、耐久戦を“気迫”で制した者。戦いを決着させるべく結城が

放った言葉に、刀刃を構えながら伊織が応じる。

そして発動する、超連続レポート。その瞬間、双方から放たれた斬撃と弾丸が激突した。

◇◇◇

超速で展開されているのは、目にも留まらぬ乱射戦。激しい遠距離攻撃の応酬を繰り広げながら、伊織が思い起こしていたのは東帝戦初日の夜。

『二つ目は……相手の次の一手を予測する事だ』

恭夜から伝えられていた、魔術戦闘の『極意』の一つ。

『常に一步先の思考で動くんだ。予備動作を見抜いて発動工程の隙を突けば、大抵の攻撃は破綻して無力化出来る』

『簡単そうに言いますがケドね……』

『んな予知めいたコトが出来りや苦労はしねエだろ』

僅かな綻びを見逃さず、相手の攻撃そのものを先回りで潰す。予測と対応で圧倒出来

れば自ずと主導権は奪えると恭夜は説くが、啓治や創来の表情は胡乱気だった。『そんな難しい事は言つてねーよ。少し攻撃のテンポを乱すだけでも、後々戦術のペースに大きく響いて来る。』

——1秒先未來の「分析」が、あらゆる戦闘を支配するカギだ』



退路を断つように次々と放たれる伊織の斬撃。辛うじて直撃は避けているが、その精度は次第に上がつて来ている。しかし結城は乱戦の中で、飛斬改式剣術の法則性を見出していた。

一息に撃ち出せる『回数制限』。

あの斬撃は、『三発』以上は連射出来ない。二連斬や単発の斬撃を交え隠しているようだが、間違い無く上限は存在すると確信していた。

伊織が三連続で『鎌風』を放つた直後に生じる、一瞬の隙。その瞬間に間合いを詰め、一撃で決着をつける。

最後の勝負を仕掛けるべく、結城はテレポートで上空へと飛び出した。飛び交う斬撃を掻い潜りながら、右腕に魔力を収束させ強化術式ブリストウォーミクラを構築していく。

そして――

(来る――!!)

振り翳された刃が見せるのは、三連斬の構え。

恐らく伊織もまた、真つ向からの接近戦斬り合いを誘っている。斬撃を躲し、そのまま転移で間合いを詰めて来たこちらを迎え撃つ算段だろう。

「上等じゃねエか……受けて、立つ」

その目論見に不敵に応えながら、結城は更に転移速度を引き上げた。

剛力を以て、解放される剣気。結城が姿を見せるよりも、僅かに速く刃が振り抜かれる。

”出現座標の予測”。伊織は結城が現れるであろう場所の両横に、予め二つの斬撃を仕掛けていた。そして予想通りそこに現れた彼の左右には、一瞬速く放たれていた斬撃が壁のように隣の空間を塞ぎ移動を封じている。

強力な術式には、必ず一定のインターバルが存在する。転移直後のこのタイミングなら、再回避の為のテレポートは発動出来ない。

真正面から撃ち込まれる、渾身の一撃。回避は不可能と思われた、その瞬間。

地を踏み込んだ轟音が、フィールドに響く。

結城は魔力を流し強化した脚力によって、上空へと跳躍していた。転移が使えずとも機転によって危機を脱したが、対して三撃目を振り抜いた事で、今度は伊織に致命的な隙が生じる。

(これで、決める——!!)

ナイフを握った右腕全体へと纏われる、鋭く研ぎ澄まされた魔力。最後の―撃を叩き込むべく、結城が転移を発動させようとした――

——その瞬間、気付く。

自分の真下の空間を通り過ぎた筈の、三発目の斬撃が見当たらない。

「あれは……………!!」

観覧席にて戦場を見下ろしながら、瞠目する天音。

伊織が振り抜いた三刀目から、『鎌風』は放たれていなかつた。それはタツグロワイヤルで、蒼が見せたフェイント空トモーシ礎ョン。

上限回数で思考を縛り、敢えて残していた唯一の逃げ道へと誘導した。

（読み敗けたか……………）

「……………参ったよ」

伊織の戦略を称えるように、小さく笑いながらそう零す。そして繰り出された最後の『鎌風』が、空中で結城を撃ち抜いた。



人。携帯端末で学内速報を目にした湊の言葉に、士門とハルが驚愕の声を上げながら反応した。

「結城さんが……!?でも、どうやってあの空間テレポルト転移を……」

「さア……?どう勝ったのかは知らねーケド……まア御剣アイツの事だ、またあの人間離れしたクソ力で何とかしたんじゃないか?」

絵恋の疑問に湊がそう返すが、伊織を嫌っているハルは露骨に不愉快そうな表情を浮かべている。

『『予想外の番狂わせ』、ね……この流れで春川も勝つたりしてな、アイツ亜門に』

「……ソレはない」

そして端末の画面を見ながら湊が続けるが、隣の士門が発したのは意外な言葉だった。

「……あんのボケを鼻肩目に見とるつもりはこれッポチも無いケド……流石にタイマンで一年坊に敗けるよオナ鍛え方はしとらん。あのジジイの修行はそんなヌルくない」



吹き荒ぶ烈風と、燃え上がる猛炎。

爆烈の暴嵐が巻き起こる戦場を、飛ぶように駆け抜けて行く亜門。そして地を蹴り跳躍すると同時に、両手の双剣を投げ放つ。

飛来する双刃を日向は薙ぎ払うような蹴りで弾き飛ばすが、その眼前には既に亜門が迫って来ていた。

風と炎の魔力を纏った、強烈なクロスカウンターが交錯する。無数の爆発を伴うド派手なインフ^殿アイト^{り合}に、観衆は沸き立ち大歓声を響かせていた。

「やっぱ……キミと戦うんは楽しいなア!!」

「そりや、どオモツ……!!」

第37話『エンターティナーズ』

「ちよつとアンタ、もう歩いて大丈夫なの？」

「ああ、問題ねエ。最低限の治療は済ませた」

結城との激戦を終えた直後。伊織は天音達と共に、渡り廊下連絡通路の先の第二演習場へと向かっていった。

「戦況はどうなってるって？」

「皇君からは、今の所膠着状態って送られて来たけど……」

「ハハ、最高じゃねエか」

沙霧から現地の状況を聞かされた伊織は、ふらつきながらも愉快そうに歩を進める。

「別に中継でもいいんじゃないの？なんでわざわざ……」

「あのバカと如月さんの戦いだぞ？んな面白エモン、直接観ねエのは勿体ねエだろ」

「あつきれた………しようがないわね……」

実地観戦に拘るその理由に呆れながらも、伊織に肩を貸すように体を寄せる天音。

「……お前、あんま無理すんなよ？」

「あんたに言われたくないわ……!!」
意外そうな目を向ける伊織だったが、天音に脇腹を小突かれ苦悶の表情を浮かべていた。



「なっ……結弦ユツルに……!?!」

「うん。伊織が勝ったって」

第三演習場での試合結果は、教員専用観戦ルームにも伝わっていた。久世からその報告を聞いた冴羽は愕然としていたが、蒼は楽しそうに笑っている。

「まあ、アイツ結弦も勿論強かったが……俺の”弟子”の実力がソレを上回ったってこった。ハツハツハ」

「アンタがデカイ面ツラしてんのはムカつくわね……」

「なアんでだ師匠なんだからいいだろうがイ」

毒づく冴羽に口を尖らせながらも、躍動する『新星』達に考えを巡らせる蒼。

日向や伊織は戦いを経る程に、驚異的な成長速度で進化しつつある。恭夜が見出した

彼等の潜在能力は、蒼の想定をも超え始めていた。

『——今年はお前でも、そう簡単に勝てるかは分かんねエぞ』
 かつての恭夜の言葉を思い起こしながら、不敵な笑みを更に深める。



「はいはい、もしもし?」

着信音に気付き、携帯端末を起動するアラン。Sound Onlyのホログラムから聞こえて来たのは、やや興奮気味の徹彦の声だった。

『風切さん、試合見た!』

「見た見た、実地で。ビックリだよねー結弦さんが敗けるとか。てかテツ君どこいんの?」

『部屋から配信で見た』

「こつち来なよ。今あたしも第二向かってるから」
演習場

『そうだね〜……行く、か……』

通話しながら第二スタジアムへ歩いていったアランに誘われ、面倒そうな声を上げながらも身体を起こし支度を始める徹彦。

『あ、ついでに売店でサンドイッチ買って来てくんない？お腹すいちゃった』

「あーはいはい、フルーツサンドね。風ちゃんの分も買っとく？」

『いや、いいですよ。なんか今日は見当たんないし。居たらあたしのあげるから』

「買い物を頼まれた徹彦だったが、ふと部屋モニターに映っていた日向と亜門の戦いに目が留まる。

「……凄いよねー今年の一年。日向君も御剣君も大活躍しててさア……華つつーか、スター性あるよね」

『そう？去年のテツ君も結構騒がれてたよ？』

「俺はただ能力が物珍しかっただけだよ……」

徹彦の自虐に笑い声を上げるアランだったが、彼女もまた感心するように同意の言葉を返した。

『まー言いたいコトは何となくわかるよ。蒼さんとか亜門とかもそうだよね。人とは違う“何か”を持つてるカンジがする』

——『才能』、『カリスマ』、『実力』。どうしようも無く人を引き寄せる、何らかの“力”を彼等は持っている。

「そういう星の下に、生まれた人間なんだろうね……」



「——昔、ジジイが言うとした」

「あ?」

唐突に語り掛けて来た亜門に、日向が怪訝な目を向ける。

「『強さ』言うんは『自由さ』やってな。どんだけの『型』をブチ破れるか。『変化』を恐れて1秒でも停滞^{止ま}ったヤツは、必ず敗ける」

「……何が言いてエ?」

亜門が続けた言葉は、彼等二人の共通項。

「キミはオレらと同種の間人^かや。変遷^{かわ}り続けるコトに、1ミリたりとも躊躇^{ヒビ}つとらん。ほんでもって……戦いの中で、オモロさを探す”気狂い”や」

革新し続ける時代、その先頭を走る者同士としてのシンパシーを口にする亜門だったが、日向は挑発めいた笑みと共に言葉を返す。

「褒められてんのか貶されてんのか……言うコトが一々小難しいんだよ。オマエさては捻くれてんな？」

そして両の掌から爆炎を放出し、生み出した爆風に乗って遙か上空へと飛び上がった。そこから蹴り下ろされた日向の右脚が撃ち出すのは、煌々と輝く紅炎のレーザー。

火属性攻撃術式

『戟衝破』

流星の如き一条の熱線に対し、亜門もまた刃を構え迎撃する。

皇重工製魔術武装『翠月』。翡翠色の鋼を鍛え上げ造り出されたその双剣に、烈風の魔力が纏われていく。

振り抜かれた刃から放たれるのは、唸りを上げる斬風の大砲。

風属性攻撃術式

『穿風砲』
センブウホウ

地上へ撃ち込まれた『炎』と、天空へと突き上げられる『風』。二つの属性魔力が激突し、凄まじい衝撃が吹き抜ける。その時、爆煙に紛れるように亜門の姿が掻き消えた。

「ッ!!」

高速移動の発動に、咄嗟に防御の構えを取る日向。しかし次の瞬間——ガードが完成するよりも速く現れた亜門が、豪快な蹴りを日向の脇腹へと叩き込んだ。

「カハッ……」

痛烈な一撃に日向の口から空気が吐き出されるが、更なる追撃は止まらない。

亜門の全身から放たれる風は、天音や日向と同様の『気流飛行』を可能とする。

縦横無尽に空中を飛び回り、四方八方から日向へ襲い掛かる連刃。上下前後左右、全方向からのヒットアンドアウェイによって、一方的に削られて行く。

「野郎オツ……!!」

全身から火炎を放射する日向だったが、亜門はその反撃の僅かな『隙間』を即座に見切っていた。揺らぐ炎の境目、その『攻撃経路』へと一気に侵入すべく、魔力を固め空中に創り出した『足場』を鋭く踏み込む。

爆発的加速からの、突撃。

「……トロすぎてアクビ出て来そうや」

風属性攻撃術式

『如月一刀流』居合フウジン・風迅』

納刀状態から繰り出された居合の一刀が、炎壁を斬り破り日向の肩口をも掻つ裂いた。



『速い速い、速すぎるーッッッ!!やはり”学園最速”ですッ、如月亜門ッッッ!!』
『反撃すら許さぬ超高速戦闘!!「風神」は今日も止まらない!!』

「やっぱり強いね〜亜門君。去年と比べてスピードも相当上がってるし」

「フン……まだ無駄な動きは多いがな」

『保健委員会』と『風紀委員会』、二つの集団の長である少女達。綾坂 未来は興味深そうにバトルフィールドを見やっていたが、神宮寺 奏は自身の部下部員の戦いに厳しい評価を下していた。

「でも、『雷』でも『光』でもなく、『風』であそこまで速くなるって、やっぱり凄いなと思
うよ」

「そうだな……だが、春川もよく喰らい付いてる。一昨日と違って、オマエ綾坂のサポートが

無いにも関わらず、だ」

そして未来が言及したのは、他の追隨を許さない亜門の圧倒的な戦闘速度について。

まず第一に、八つ存在する属性魔力の中で、速度的性質に最も長けているのは『雷』もしくは『光』である。当然それらの属性の使い手も東帝には多く在籍しているが、では何故『風属性』使いの亜門が”学園最速”と謳われているのか。

その『速さ』のメカニズムは、術式の始動から完成までの『発動速度』にあった。

魔術の発動体系は、魔力を集め術式を組み上げる『構築』とその術式を体外空間へアウトプットする『展開』によって構成されている。

しかし『雷』と『光』の二つはそれぞれ『炸裂』と『拡散』の性質を持つ為、構築するまでの魔力の『収束制御』に時間を要する。一方で亜門の風属性魔術は、展開後のスピードこそ二属性に劣るが構築速度では大きく上回っていた。

即ち、雷属性もしくはは光属性の使い手が魔術を発動する時——亜門は既に、戦闘そのものを終わらせている。

最高速到達へのスピード。この一点に於いて、東帝で亜門を超える魔術師は存在しな

い。

日向も善戦してはいるものの、未来の回復術式による支援を得ていたタッグロワイヤルの時とは違い、一方的に押し込まれ劣勢へと追いやられつつあった。

パワー、スピード、テクニク。あらゆる能力面で、亜門は日向よりも明確に優れている。このまま戦っていても、恐らく日向に勝機は無いだらう。

風属性魔力×強化術式

『フウゲツキヤク
風撃脚』

剛速で蹴り下ろされた一撃が、防御の上から日向を叩き飛ばした。あわや場外かと思われたが、ジェットのような噴炎で強引に軌道を変え何とか立て直す。

「……さつきから思つとつたが、エラく空中戦に拘るんやなア。何か狙つとるんけ？」

その時亜門は、空中というフィールドに執拗に留まり続ける日向に疑問の声を放つ。

「狙うも何も……お前を頭の上で好き勝手飛ばせとくワケにはいかねえだろうがよ。言わなきゃ解んねーのか、それとも解つてて言わせてんのか？」

亜門だけを上空で自由に飛び回らせていても、戦況は日向へ不利に傾いていく一方である。

「ハハッ、成程。狙い撃ちされるのが嫌っちゅーワケかい。まア地上も空も関係無い、オレのナワバリはこの戦場全部ばしよや。安全地帯逃げ場なんざ何処にもあらへんで」

「ハナから逃げる気は無エよ……!!」

日向はそう言い返しながら、続け様に放たれる風の斬撃を蹴りで弾く。しかし亜門はそれらの爆風の余波を、気流操作によつて周囲の空間へと集め『回収』していた。

自己補填による『魔力の循環』が、高速化状態の継続を可能とする。速度スピードを始めとした、全ての戦闘能力を引き上げる強化術式ブリストフォーミコラ。

風属性魔力×強化術式

『形態変化・風神』

亜門の全身へと纏われていく、渦巻く疾風の『鎧』。

「出た、『風神』……!!」

創来と共に観戦していた啓治が、その魔力の『装甲』を目の当たりにして小さく声を漏らす。

「目エ見たら分かんぞ。キミはまだ何かカードを隠し持つとる。使う気があらへんなら……一つずつ引きずり出して、潰していったるわ」
そう言つて差し向けられた亜門の右手が、銃ピストルのような型を作り出す。

刹那。

風属性攻撃術式

『センブウシウ穿風槍』

撃ち放たれた超速の風槍が、日向の魔力防御を一瞬で斬り裂いた。

発動の瞬間を視認出来ない程の、圧倒的な術式構築速度。目にも留まらぬスピードで弾き飛ばされた日向は、その勢いのまま地上へと墜落する。

「油断しすぎや。構えを見たら即応せんかい」

僅かに呆れながらも亜門は、撃墜した日向へ更なる追撃を仕掛けるべく双刀を構える。そして全身に纏った魔力を、爆風として後方へと一気に放出した。

エネルギーの高出力指向放出による、超高速突進。真正面からその直撃を受ければ、確実に日向は場外まで吹き飛ばされるだろう。

衝撃波を撒き散らしながら、迫り来る亜門の突撃。

しかし、交錯の瞬間。

振り抜かれた双刃を掻い潜った日向は、渾身の掌底をすれ違い様に叩き込んだ。

「ツ——!?!」

腹部へ強烈なカウンターを受け、叩き飛ばされた亜門が地を転がる。

「分かったよ……だったら望み通り見せてやる。」 暖気運転^{アップ} は終わりだ」

一方で立ち上がった日向は、小気味良く首を鳴らしながら不敵に笑っていた。

「どういう事や………」

「コレも言わなきや解んねエか? わざわざ空中のお前に近付いてたのは、その速さに目エ慣らす為だ」

突如として日向の反応速度が、大きく向上した理由。亜門の空中での高速戦闘に対応しながら、日向は彼の攻撃パターンを見切り、反撃のタイミングを計っていた。

「もう攻撃のテンポは掴んだ。ここからは……俺も最高速^{トッパギア}で行くぜ」

「ハッ……ほざいとけ……!!」

日向の言葉を一蹴した亜門は、再び高速移動を発動させ掻き消える。視覚と魔力知覚の両方をフル稼働させても、捉え切れない程のスピード。

しかし日向は右脚を軽く揺らすと、渾身の力を以て迷い無く振り抜いた。『速さ』と『重さ』を乗せたその一撃は、消失する程の速度で繰り出された亜門の剣を的確に迎え撃つ。

轟音と共に鬨ぎ合っていた双方だったが、洗練されたその蹴撃は亜門を押し返し大きく吹き飛ばした。

周囲の気流を操りながら、空中で体勢を立て直す亜門。その視線の先では――

――日向の全身から、揺らぐ”蒼”い炎が放たれていた。

そして訪れる、新たな”進化”。

第38話『セカンド・ブレイズ』

新たな技を作り出す足掛かりは、これまでの戦いに散らばっていた。

獅堂へ放った爆皇破による、魔力密度の『凝縮』。

蒼の『斬界』からイメージを得た、刃の如き『斬撃』の魔力性質。

そして最後の1ピースは、徹彦の『絶対防御』、創来の『ダークナイト』、亜門の『風神』のように全身へ展開した魔力を纏う『形態』。

溢れ出す閃炎のエネルギーを、全身へと張り巡らせていく。

迅く、鋭く、研ぎ澄まされていく炎。その色は——鮮やかな蒼へと変わっていた。

日向が辿り着いた新たな領域、それは魔力の『性質進化』。 ”第二の炎”、その力の名は——

ザンソウエン
『斬蒼炎』。



東帝戦のLIVE映像は魔術都市全域へと中継されており、管理局内のモニターでも放送されていた。

「……………どう思いますか？」

北斗からの問い掛けに、沢村と速水は少なからぬ驚きの見える表情で声を返す。

「……………そんなワケねエとは分かってるんだが……………」

「あの『進化』は……………龍臣の『魔力覚醒』にそっくりだ……………」

「戦国家、相伝、のですか。……………だとしたら、何故彼が……………」

亜門との戦いで日向が見せた『魔力の変質』に、沢村達は疑念を抱きながらもその戦いの推移を注視していた。



蒼色に変化した炎を纏った日向の新たな姿に、多くの人間が注目を寄せていた。そん

な中、蒼は納得したかのように独言を零す。

「ヘエ……アレが、ね……」

「何アンタ、知ってたの？アレ」

「理論自体は完成したっつーのは聞いてたよ。けど、実際試して上手くいったコトは一度も無かったんだと」

冴羽の問いに対し、日向から新たな技の開発事情について聞かされていたと語る蒼。

「つまりアイツも伊織と同じで、ぶつつけ本番で成功させたってこつた。—————どい
つもコイツも、一瞬に生きてんね」



火属性魔力×強化術式

『形態変化・”斬蒼炎”』

「……ソレがキミの奥の手か」

「ああ、そうだ。目エカッ開いてよく見とけよ」

日向の『形態変化』に警戒を示しながら、油断無く双剣を構え直す亜門。鋭く爆ぜ続

ける蒼炎は、刃のような装甲となって腕部や脚部へと展開されていた。

「これが俺の、”最高速度”だ。追い付けるモンなら……追い付いて、みやがれツ!!」
「オレ相手に速さ勝負かい……エエ度胸じゃコラア!!」

両者は同時に地を蹴り、高速移動の魔術を発動する。

至る場所で響く剣戟音。双方の体術と剣術が、激しく撃ち合い火花を散らす。

後方へと吹き飛んで行く景色の中で、亜門は更に速度を引き上げ双刃の刺突を繰り返した。

しかしその一撃よりも速く、日向の右腕に炎が閃く。蒼く輝く魔力を宿した、超速のカウンター。

火属性魔力×強化術式

『瞬迅』炎撃』

斬蒼炎によって更に強化された炎拳が、目にも留まらぬ速度で撃ち込まれる。その一撃は双剣の防御をも打ち破り、亜門を豪快に吹き飛ばした。

(速い——しかも、それだけやない……!!)

「斬れた……!?!」

更にその拳撃が有する性能は、『打撃』のみに留まらない。

敏捷性上昇に加えた、斬蒼炎のもう一つの付与効果。その蒼炎は日向の魔力に、“灼き斬る”『斬撃』の性質を与えていた。

『速さ』と『鋭さ』。その二つによって、日向の近接戦闘能力にもたらされた向上効果は計り知れない。それ程にこの『形態変化』は、日向の戦闘スタイルと相性が良かった。

両脚で地を削りながらも何とか持ち堪え踏み留まると、亜門は風圧を操作し上空へと飛び上がる。振り翳されるのは、魔力によって形成された風の刃。

風属性攻撃術式

『如月二刀流・双旋斬』

撃ち下ろされた双つの斬撃が、暴風を纏い迫り来る。

しかし日向は斬り払うような回し蹴りで、一撃の下に魔力刃を叩き折った。更に右腕へと魔力を集め、即座に反撃の術式を構築する。

放たれるのは、蒼の炎槍。

火属性攻撃術式

『瞬迅』戟衝破』

撃ち出された斬炎のレーザーは、亜門が咄嗟に創り出した風の防壁をも穿ち貫いた。



「何だア……如月の野郎オ、押されてんじやねエか。ザマアねエな」

ケケケ、と愉快そうに笑う蛇島。その隣で観戦していた諸星は、興味深そうに日向の戦型を洞察している。

「魔力を刃のように凝縮して、速度と威力を引き上げているワケか……火属性の燃焼性質を上手く利用したな。中々面白い術式だ」

「ケツ……相ツ変わらざるの魔術マニアが……」

魔力密度を上げバーナーのように火力を強化したその炎を諸星は注視していたが、蛇島はその様子を傍目に怪訝な表情で言葉を続けた。

「……けどよオ。いくらスピードが上がったつつつても、空中で如月の速さに追い付け

んのか?」

「仕留めるならば直接攻撃という事か。それについては同感だが……」速度の勝負に
関してはまだ分からないぞ」

空中を高速で飛び回る亜門を地上から狙い撃ち墜とすには、日向の遠距離攻撃では些
か威力不足。しかし直接叩く為に空中へ上がったとして、亜門の主戦場テリトリで日向は彼の速
度に対応出来るのか。

蛇島のその疑問に対し、諸星は彼等の術式への考察を交えながら応える。

「如月の『風神』は、速度強化による高機動戦闘を長時間継続させる為のモノだ。だか春
川の形態変化はそれに比べると持続性は落ちるが、その分更に『一撃』の性能を強化し
ている」

『斬蒼炎』が『風神』を上回っている一点。それは諸星が日向に見出した、亜門に勝利す
る一握の可能性。

「瞬間的な速度なら、恐らく春川は如月をも凌ぐ……!!」



「何だオイ、もうバテてんのかア!？」

荒々しい挑発の声を上げながら、超速の連撃を仕掛ける日向。対して亜門もまた、疾風の如く空を駆け高速斬撃を連発する。

衝突が生み出す爆圧。その余波を潜り抜けた亜門が、弾丸のような速度で突撃を仕掛ける。そして日向は、その爆速突進を待ち構えていた。

突き刺さるような膝蹴りが、勢い良く叩き込まれる。しかし亜門はその一撃を正確に見切り、左手で防ぎ止めていた。

「キミの方こそ無理せんときや。鈍って来とるで、カウンター反応」

蹴りで日向の身体を浮かせ、撃ち上げるような剣撃で空中へと叩き飛ばす。そこから間髪入れず亜門が追撃を放つが、日向もまた体勢を崩しながらも迎撃の魔術を繰り出した。

風属性攻撃術式『穿風槍・式拾連』

火属性攻撃術式『瞬迅』戟衝破・式拾連』

旋風とレーザーの応酬が、空間中へと波動を撒き散らす。

しかし、その瞬間。

何の前触れも無く、日向の背中に不可視の『刃』が突き刺さった。

「は？」

啞然とした様子で大量の血を吐き出しながら、浮遊力を失い地へと墜落する。

「ホンマはこんなクソ小細工、使いたなかったんやケドな」

亜門は不本意そうな表情を浮かべながら、剣の峰で肩を叩いていた。

日向を背後から貫いていた『刃』。それは亜門が一瞬の隙を逃さず発動した攻撃術式だった。

風属性魔力×形成術式

『陰刀』

術式同士の衝突によって、空間中に霧散していた属性魔力の“残滓”。その僅かな

『風』を遠隔魔力操作で掻き集め、日向の背後で『暗器』として再構築していた。巧みな技術による、死角からの奇襲。”意識の外側”からの一撃は、戦況が拮抗している程に威力を増す。

「せやけどそんな下らんプライド守つとつても、キミには勝てんとよオ理解わかった。どんな手エ使つてでも……オレは此処で、キミを倒して行く」

向けられる刃と、鋭い戦意。その先で日向は——嗤わらっていた。

「そりゃ、ありがてエ……コッチとしても、全力のお前をブツ倒せなきゃ戦う意味が無エんでな……!!」

よろめきながらも、立ち上がる。そして傷口から漏れ出していた魔力が、『炎』となつて一際強く吹き上がった。

「悪イが俺にとつちや……ブツ壊して超えてく壁でしかねエよ……!!」

窮地に陥る程に、力を増す『生存本能』。流れ出る『命』をも燃やし、『装甲』へと変えていく。

「そうかい……腹ア決まったなら……勝負と、行こおか!!!」

そう叫ぶと同時に爆風を発生させ、亜門は遙か上空へと飛翔した。そこから一気に急旋回・急降下と共に、衝撃を伴う程の猛スピードで滑空して来る。

そして掬い上げるような剣撃で、日向を再度上空へと吹き飛ばした。

そのまま荒れ狂う乱気流へと突っ込む日向だったが、爆炎を拳へと集中させ空中で迎撃態勢を取る。

(使うか……!!? 『神業』……!!)

その膨大な魔力の収束を、亜門は高速で飛行しながら感知していた。彼の脳裏を過っていたのは、日向の一撃に対抗し得る可能性を秘めた戦術^{カード}。

(あいつまさか……『颯風王』使う気か……!?)

そして観戦していた士門もまた、亜門の思考を察知し瞠目していた。

——”それ”は蒼を倒す為に、密かに開発していた二段階目の『形態変化』。しかし強力過ぎる性能故に、過剰出力を制御出来ず術式が暴走する危険性もあった。

それでも。

（守りに入れば、敗ける——）
 亜門を突き動かす、勝利への渴望。新たな進化を恐れる者に、待ち受けるのは敗北のみ。

『強さ』は『自由さ』。その言葉に一切の迷いは無い。

風属性魔力×強化術式

『形態変化・????・??風??』

更なる斬撃性能を宿した魔力が、亜門の周囲空間をも覆い尽くしていく。

吹き抜ける、瞬間最大風速。全身に暴風を纏った亜門自身が、巨大な竜巻の大槍と化す。一方で日向もまた、爆発的火力を限界まで圧縮し右の拳へと内包していた。

そして——

風属性攻撃術式

『如月二刀流』奥義

・ガイラシンセン凱螺神閃』

火属性攻撃術式

『瞬迅』爆皇破』

「オオオオオオオツツツツツ
!!!!」

死力を賭した、双方の一撃が激突した。

◇
◇
◇

刹那の交錯が生み出した、凄まじい規模の魔力爆発。

旋風が吹き荒れ火柱が立ち昇るその光景に、ほぼ全ての観衆が息を呑んで刮目して
いた。生徒会連合や大文字一派の実力者達も、決着の行方をその目で確かめるべく戦場を
フィールド注視している。

そして爆煙が晴れた先で、その場に立っていたのは――



「――楽しかった!!」

最初に口を開いたのは、亜門。

「……また戦ろうや」

「ああ。次も……俺が勝つ」

その言葉を返したのは、日向。

そして――

亜門は地へと倒れ伏し、日向は天を仰ぎ笑った。



観衆の大歓声と、実況の興奮冷めやらぬ叫び声を聞き流しながら。

「これは……俺達も改めて、認めざるを得ないな。アイツの力を」

「フン……相変わらずクソ生意気な面アしてやがる……」

諸星と蛇島は、戦場に立つ一人の勝者を不敵に見下ろしていた。



「未来！奏！見た!? 亜門と日向の!!」

第二演習場スタジアム観覧席の未来と奏の背後から、こちらへ走って来ていた千聖が息を切らし

つつ声を掛ける。その隣には彼女と同じく、第三演習場から移動して来た雪華の姿もあつた。

「うん、見てたよ……凄い戦いだつたね……!!」

「まさか、一日に二人も十席が陥されるとはな……」

予想だにしていなかったその結果に、未来と奏は驚きを隠し切れない様子である。そしてその傍らで、何かを考え込むように沈黙したまま戦場を静観していた雪華。

彼女の視線の先にあったのは——戦いを終えて、楽しそうに笑っていた日向の姿だった。

◇◇◇

「あんのボケ……一年に負けよって、なツさけないアホンマ」

「オメーがフラグ立てたからじゃねーのか？」

「何やねん俺の所為にすんなや」

軽口を叩き合いながら、土門と湊が席を立つ。

「私達も、後輩に敗けていられないわね」

「……当然よ」

絵恋の言葉にそう応えたハルは、鋭く日向を一瞥すると観覧席を後にした。

◇◇◇

「凄い……春川君、如月先輩に……!!」

瞠目していた沙霧の隣にいた天音は、伊織が隠し切れない喜々とした光をその眼に宿している事に気付いた。

「……アンタ、嬉しそうね」

「そりやそうだろ……こんだけ面白く事が運ぶのも珍しいからな」

天音にそう応えた伊織は、次に自分と戦う相手に背を向けスタジアムの外へと歩き出す。

御剣伊織、春川日向。

共に3回戦進出。



「これで日向は現状、学園で一番『三強』^{トップ3}に近い人間になったワケだ……」

学園No. 4の亜門を下した日向を、そう評する久世。万丈・冴羽・篠宮はこの衝撃的な幕引きに未だ愕然としていたが、一方で蒼は戦場を見下ろしながら静かに考えを巡らせていた。

(恭夜君には……この未来も視えてたのか……?)

第39話『相棒対決』

「今日はホントに、色々ありすぎたね……」

「確かに、濃い一日だったわね……」

一年である伊織と日向が、東帝十席と謳われる二人の強者を打ち破り勝利した。そのルキキ
ビッグニュースは夜になった今でも、学園中の生徒達の話題を独占している。

沙霧と天音は学生寮の交流ホールにて、その激動の一日を振り返っていた。そして彼女達の視線の先では――

「えーそれではツ!!春川日向の2回戦突破を祝してエ……」

「「「カンパリーイ!!!」」」

――日向のクラスメートらによる、祝勝会が盛大に行われていた。

「てか、なんでアンタらが騒いでんのよ……優勝したワケでもないのに」

「いやいや藤堂さん!!このスットコボケ太郎がああ『風神』と名高い如月先輩をタイマン

で倒したんだぜ!」

「快拳だ快拳!!食って歌って踊るしかねエよ!!」

「「カンパーパーイー!!!」」

男子生徒達の愉快な笑い声に、天音が呆れた様子で溜息を零す。

この東帝戦に乗じた生徒達のお祭り騒ぎは、仲間同士の健闘を讃え合う恒例行事として学園に代々伝わっているとの事だった。ちなみにその中心では当人である日向が、眠気で意識朦朧としながらステーキにフオークを突き刺している。

「オイオイコラコラコラ、テメーら宴会に俺を呼ばねーとは一体どういう見だ?おオ?」

「腹減ったア!コレ俺らも食っていいメシか?」

「おオオマエらもお疲れ!!食ってけ食ってけ!!」

「オーイ誰か食堂にオードブルの追加頼んできてくれーイ」

「「カンパーパーイー!!!」」

「またバカが増えた……」

更に啓治と創来を始めとした他クラスの生徒達も合流し、瞬く間にホールは大盛況となった。

その騒ぎの中、啓治はウトウトと船を漕いでいた日向の首根つこを掴むと、天音達のテーブルまで引き摺って来る。

「食うのか寝んのかどつちかにしろやコラ。つーかよくあんな馬鹿騒ぎの中心で爆睡しようと思えるなお前……」

「多分疲れてるんだらうね……皇君も今日はお疲れ様」

「ああ、ありがとう空条さん」

虚ろな瞳で半ば無意識に肉を咀嚼している日向をテーブル上に転がした啓治に、沙霧が労うように声を掛けていた。

「アンタもアンタで、結構ギリギリの戦いしてたわよね」

「そうだね……正直言つて、かなり危なかった。認めるのは癪だが、辛勝だったよ」

天音の言葉に、苦戦を振り返りながら渋い表情で応える啓治。一方で創来は、他の生徒達と熱心に意見交換や戦術談義を交わしているようだった。

「所で藤堂さん……アイツは来てないのか？」

「さアね……どうせまた、訓練室トレーニングルームにでも居るんじゃないの？」



スラム旧校舎、屋上にて。

「よオ。来たか、伊織」

その頃伊織は、屋上に放棄されたソファに寝転がり夜空を仰ぐ蒼の元を訪れていた。「ハッキリ言つて、結弦とお前じゃ7:3ぐらいでアイツに分があると思つてたが……大したモンじゃねエか。なア？」

「……少し防御が甘いとは思いましたがね。銃撃をもつと捌けていれば、ダメージは小限に抑えられたはずだ。……まア、及第点と言つた所でしよう」

「お前キビシーね。まア何はともあれ……3回戦進出おめでとう。よくやったよ」
「……どうも」

傍らにいたステイプの厳しい講評に苦笑しながらも、蒼は伊織の勝利を称揚する。

「んで……晴れて新戦型NEWスタイルが完成したワケだが……どうだったよ？初実践の感触は」

「……まだ、借りモンの力つてカンジが強いですかね」

「ハハ、そりゃ使い込んで慣れてくしかねエわな。その内モノになつてくるさ」

飛斬改式剣術の練度についての蒼の問いに、未だ発展途上であると伊織は返した。魔術と比べると応用性や拡張性で数段遅れを取っており、万能の戦闘術と呼ぶにはまだ程遠い。

「それよかお前、明日は『相方』と対決じゃねーか。何か思う所はねーのかよ」
「無いですしそもそも相方でもないですから」

そして蒼が続けて言及したのは、伊織の明日の対戦相手について。ステイブから投げ渡された携帯端末に目を通すと、学園SNSなどで多くの生徒がその対戦カードに注目しているようだった。

「下馬評はやっぱ日向か……ムカつくか？」

直接対決では伊織が全勝しているにも関わらず、シードの亜門を倒した事で勝敗予想は日向の方がやや優勢となっている。端末を投げ返しながら蒼が訊くが、伊織は一切気に留めた様子も無く平然と口を開いた。

「別に……外野が何を言った所で、やる事は変わらないつよ。どっちが方が強エのか……それを明日、確かめるだけです」



第二学年学生寮の一室にて。

徹彦はベッドに寝転がり雑誌を読んでいたが、テーブルの上に放っていた携帯端末から不意に着信音が響いた。

「はいもしもし」

『おう、徹彦。俺だ』

「どしたんすか結弦さん。あ、今日の試合お疲れでした。惜しかったですね」
端末から聞こえて来たのは、先輩である結城の声。

『よせよ、完敗だったろ。正直、一年に敗けるワケは無エとタカ括つてたが……フタ開けてみりやこのザマだ。ダセエ姿晒しちまって、情けねエつたらありやしねエ』

「いやいや割と接戦でしたつて。つーか御剣君に限らずつスけど、今年の一年全員ヤバすぎませんか？特に日向君と御剣君、あの二人はハッキリ言つて異常でしょ。戦闘のレベルが」

『まあ確かにな……恭夜さんと天堂に目エかけられてるだけのコトはある』

自分達を倒した、二人のルーキー。彼等の実力を、結城と徹彦は純粹に認め称賛していた。

「で、結局何の用です？こんな時間に電話して来て」

『あー、そうだったな。お前今どこにいる？』

「え、部屋っすけど……」

用件を訊いた徹彦だったが、結城から所在について問い返される。そして寮の自室に居ると応えた直後、瞬間転移テレポートによって結城が突然部屋の中へと現れた。

「ビツ、クリした……何ですかいきなり。てかどしたんスかその格好」

何の断りも無く唐突に転移して来た結弦に驚いていたが、その時徹彦は彼がこれから外出するかのように制服を着込んでいる事に気づく。

「5分で出掛ける準備しろ。管理局に行くぞ」

「はい？え、今からっスか？」

「沢村さんが呼んでんだよ。俺と、お前を」



二人はレポートによって、魔術都市中心部に設置されている『魔術管理局』へとやって来ていた。

「何なんですかねーこんな夜中に呼び出して」

「まア……大方察しはつくけどな」

「やっぱそうっスよね……」

魔術が関与した事件が起こった際、結城と徹彦は術式の有用性故に度々管理局へと召集されている。今回も例に漏れず、何らかの問題が発生したと考えるのが妥当だった。

襟元の校章を取り外すと、カード型の学生証へと変形させ入口ゲートで提示する。

入館証ゲートキーの役割も兼ねたカードスキャンによる内蔵チップ識別と、感知センサーによる個人魔力認証の二重セキュリティを通過し、局内へと足を踏み入れる二人。

深夜にも関わらず多くの職員が忙しなく動き回っており、やはり結城達の予想通り『何か』が起こっているであろう事は間違いなかった。

エレベーターで捜査部エリアへと昇り、会議室の自動ドアを潜る。

「失礼します」

「失礼します……」

入室した結城と徹彦を待っていたのは、管理局『魔術捜査課』の沢村、速水、北斗の三人だった。室内には彼等だけでなく、同様に黒のスーツに身を包んだ数人の捜査員がテーブルを囲むように控えていた。

「おオ来たか。結弦、徹彦」

「悪いね〜夜フケに呼び出しちゃって。あ、そーいや観てたよ東帝戦。結城君も古田君もお疲れ様」

「いやー観てました？ご覧の通り惨敗でしたよ。お恥ずかしい限りっス」

声を掛けて来た沢村と速水に結城が軽く笑いながら応えるが、周囲の物々しい雰囲気を感じ取っていた徹彦は神妙な表情で口を開く。

「あの……また何かあつたんスか？」

「あー、まアそういうこつた。今回も面倒な事態になつてな……毎度毎度悪いが、またお前らに力を貸してもらいたい」

沢村がやや気怠げな声で、徹彦達に向けてそう言つたその時。

「ウーッス」

「や、どーもどーも遅れましたアーつと」

「悪びれもせず堂々と、黒髪と金髪の二人の男が新たに会議室へと入つて来る。

それらの声の主は、管理局の『魔術特務課』に所属する捜査官、本郷 正と柊 俊哉 だった。



そして、7月19日。

波乱が更なる波乱を呼ぶ、東帝戦『四日目』が開幕する。

——その裏では密かに、ある一つの『事件』が進行していた。



A・B・C・Dの4ブロックで行われた、本戦トーナメントの一回戦・二回戦。2日目と3日目を共に勝ち抜き、本日行われる三回戦に出場出来るのは全参加者中16名のみである。

進出して来たのは、誰もが学園で名の通った実力者ばかり。更にここから三回戦・準々決勝を実施しこの4日目が終わる頃には、明日の最終日にて優勝を争う各ブロックの代表4名に絞られる。

そして今日の対戦カードは、どれも目が離せない強者同士のマッチアップとなってい

た。その中でも殊更に注目を集めていたのは、三組の『師弟対決』。

Aブロック『天堂 蒼』VS『ステイプ・ジャクソン』

Cブロック『神宮寺 奏』VS『皇 啓治』

Dブロック『黒乃雪華』VS『一条 ハル』

学園最高峰の実力を誇る三人の『師』へと挑む『弟子』達の戦いに、多くの人間が関心を寄せていた。

昨日の日向と伊織の劇的な逆転勝利を目の当たりにしていた観衆の中には、今日も『格上』を打ち倒す番狂わせを期待している者も少なくなかったが――

――実際にそこにあつたのは、明確かつ圧倒的な『力量差』だった。

東帝の頂点に君臨する『剣聖』。

万夫不当の戦闘術を操る『剣鬼』。

戦場を自在に支配する『女王』。

『十席』に名を連ねる三人。その様は絶対的な『力』を示し、挑戦者の前に立ちはだかる『壁』その物だった。

そして。

学園中の人間から、今日最も注目されている一戦が遂に始まる。



「ホラホラ、ハルも絵恋も急いで！試合始まつちやうよ！」

「尻を叩くなバカ!!」

アランに背後から急かされハルが怒鳴りながらも、三人の少女達は演習場スタジアムへと向かっていた。観覧席に到着すると、既に見知った顔が揃っている。

「おー遅かったな、お前ら」

「良かったー、間に合ったわ。って、亜門も居るじゃん」

アランに声を掛けた湊の隣には、鼻の頭に絆創膏を貼った亜門の姿があった。その横では土門が冷やし中華を啜っている。

「やっぱ自分を負かした相手の戦いが気になるワケ？」

「うっさいなアオマエ……何でもエエやる別に」

「やめときやアランちゃん。コイツ珍しく根に持つてんねん」

「昨日の夜にわざわざ、一年寮まで行って春川と再戦の約束しに行くぐらいにはな」

「余計なコト言ツとんとちやうぞお前らア!!」

「だつはははしつかり気にしてて草」

湊と土門の暴露にアランは笑い声を上げていたが、亜門は憤然としながらも言葉を続けた。

「……まあ、オレに勝つた以上は情けない戦い見せたら承知せんとは言つたケドな」

「フン……誰が勝ち上がった所で、結局全員が師匠に倒されるだけだな」

「ああ?」

その時、亜門に反応するように彼等の背後から声が聞こえて来る。後方を振り返ると、数段上の観覧席に腰掛けているステイブの姿があった。

「ウワびつくりした!アンタ今結弦さんくらい影薄かったよステイブ」

「ホンマにな」

「ナチュラル失礼が浸透しすぎてて居た堪れねエよ……」

アランと土門の掛け合いに、沈痛な表情で湊がツッコむ。

「何や、今日は蒼クンの金魚のフンやってへんねやなアオマエ」

「お前の方こそ、一年にああも無様に敗けておきながらよく表に顔を出せたモノだな。俺には無理だ」

挑発的にそう言い放つ亜門だったが、剣呑な視線で見下ろしながらステイブもまた言葉を返し、二人同時に無言で席から立ち上がった。

「言葉は慎重に選べやアメ公が……今スグ母国まで吹き飛ばすぞボケコラ」

「ほオ……まだそんな大口が叩けるだけの威勢が残っているとはな。その僭上さだけは賞賛に値する」

「ちよつ、やめなさいって……!!アンタ達も見てないで止めなさいよ……!!」

「エエやんけ。ほつとけほつとけ」

「だな。好きにやらせときやイイ」

至近距離で互いに睨み合っている一触即発の状況に、流石に止めようと声を上げるハル。しかし士門と湊は何の危機感も無く、ただ愉快そうにその様子を眺めているのみだった。

「ハイハイやめなやめな。主役はアンタらじゃないっての」

しかしその時、座ったままのアランの指先から紐状の魔力が放たれる。流れるように空中を走るその光は、目にも留まらぬ速度で亜門とステイブの額を続け様に通り返け

た。

「ッ!？」

「くっ……」

その瞬間、アランの『魔術』に頭を貫かれた二人は眩暈を起こしたようによろめきその場で膝を突く。

「まったく……してキミら二人はそんなに血の気が多いかね? ちよつち落ち着きな?」

「おオ……相変わらずエグいな……」

意識が混濁しているかのようにフラついている亜門とステイブを、淡々とした口調でアランが咎める。土門は慄然としていたが、湊は上空の浮遊モニターを見ながらトーナメント表について言及した。

「結局、この中で残ってるのは土門と風切だけか……」

ここまでの本戦の間に、湊と亜門と絵恋は2回戦で、ステイブとハルは3回戦で敗退している。準々決勝進出を決めたのは、この中では土門とアランだけだった。

そして今、3回戦最後の試合が始まろうとしている。

『御剣 伊織』VS『春川 日向』。

彼等以外のベスト8の七人は既に出揃っており、この戦いではどちらが勝利しても唯一の一年生として準々決勝に進む事が確定していた。

「……どっちも大したモンだよな。来年にはアイツら^年が主力になってんじやねーか？」

「そうならないように……私達ももつと、強くないとね……」

感心するようにそう零す湊に絵恋が頷きながら、静かだが力強い意志を感じさせる声で応えた。



「——まあたこりや面白い組み合わせ^カになつてんね。アンタどっち応援すんの？」

「そうだな……まあ実際、どっちが勝つても面白くなのは間違いないエだろ」

観戦エリアへと向かう、五人の男女。談笑している千聖と蒼の後ろでは、雪華と奏と未来が並んで歩いていた。

「二人はどちらが勝つと思う？」

「勢いに乗ってるのは春川だろうが……今の御剣は遠近両方で強力な武器を持ってい

る。勝てる人間は学園の中でも一握りだろうな」

「でも、日向君も新しい『形態変化』使ってたよね？タッグ戦でも活躍してたし、またミラクル起こしそうじゃない？」

学園の人気を席卷する美女グループに、道ゆく生徒達の多くが目を奪われていたが、蒼と同じ三年の男子数人が通りすがりに声を掛けて来る。

「おー何だ天堂、今日はハーレムじゃねーか。ステイブが嫉妬すんぞオ」

「派手にブチのめされた挙句放置される弟子が不憫だなア」

「ハツハツハ、敢えて突き放すオレ流愛のムチ」

「あんだだけ大つびらにボコっという愛もへったくれもあんのかよバーカ」

ギヤハハハ、と愉快そうに男子達と笑い合っていた蒼だったが、背後から不意に奏が彼の太腿を蹴り上げる。

「つと、急にどしたい奏」

「……お前が私達を待らせていると思われるのは気に食わない」

「いやもうそれはアイツらに文句言ってくんねーかな」

「ねえ天堂君、タッグ戦で私を蹴散らしたのも愛の鞭なの？」

「お前は弟子じゃねエだろまず……」

「ちよつと!!雪華とSMとかアンタ各方面から殺されるよ!？」

「ちーちゃんが一番語弊あるよ……?」

不毛なやり取りを交わす五人だったが、そうこう言っている間に観覧席へと辿り着く。

「お、アツ君だ! 司もいるし。おーい!」

千聖が指差した先には、諸星と蛇島が座っていた。しかし蛇島は雪華や奏の姿を見るや否や、露骨に不愉快そうな表情を浮かべ席から立ち上がる。

「え、司お前どっか行くのか?」

「……テメエらと連む気は無エよボケ」

蒼達へとそう吐き捨て、観覧席を後にする蛇島。

「フン……相変わらず癩に触る男だな」

「嫌われてるねー、私達……」

去って行くその背中を睨みながら奏は忌々し気に眩き、未来は溜息を零しながら席に着く。

「アツ君はあたしらと連んで、他のヤツらに何か言われたりしないの? 裏切りもの、とか」

「……俺が誰と付き合った所で、他の人間に口を出される筋合いは無い。そもそも俺が気に食わないのは、権力を笠に着るような旧家の連中だけだ。……お前達が奴等と違うという事は解ってる」

「え、ちよ……急にデレ見せて来るのはやめなよもオ……」

当然のような口振りでそう応えた諸星に、珍しく千聖は言葉を詰まらせていたがすぐに嬉しそうな表情を浮かべ笑っていた。

「……果たして今のはデレか……?」

「諸星君も意外と、天然の人たらしみたいなのがあるわよね」

「あの誠実さは天堂君も見習うべきだよ」

「蛇島と一緒に爪垢でも分けてもらえばどうだ」

「なんか今日は辛辣ですねキミ達」

その様子を雪華と一緒に後ろから眺めていた蒼だったが、突然未来と奏から矛先を向けられ苦々しい顔でそうぼやいていた。



演習場のバトルフィールドへと続く、通路を一人進んでいた伊織。その視線の先で、

入場ゲート前に誰かが立っている事に気付き足を止める。

「……遅かったわね」

「お前か。……何してんだ、こんな所で」

そこで伊織を待っていたのは天音だった。

「別に……試合前にアンタがどんな顔してんのか、気になって見に来ただけ」

「そりゃヒマそうで何よりだな……」

伊織は普段と変わらず淡々とした声を返しながら、彼女の横を通り過ぎる。

「……春川は随分と、色んな人達から期待されてるみたいよ。亜門さんを倒したあの技なら、天堂先輩にも通用するかも……だって」

「そうかよ。……わざわざそんな事言いにくるまで来たのか？」

「アンタだって、”魔術師相手なら敗けない”のよね」

「……桐谷先生といいお前といい、今更掘り返して来んじゃねエよ……」

過去の自分の傲慢とも取れる発言に、波面で振り向く伊織。しかしそこに立っていた天音は、真剣な表情で真っ直ぐに彼を見据えていた。

「……アンタは、私には無い物を全て持つてる。アンタの事を……尊敬してる」

「……………」

突然の言葉に伊織は僅かに戸惑っていたが、天音は構わず続ける。

「私を救ってくれた……………アンタの剣は、最強だって証明してほしい」
「っ……………」

そう言つて少し照れたように笑いながら、彼女は拳を突き出した。
「……………応援、してるから」

その言葉を受け止めた伊織は、天音と自身の拳を突き合わせる。

そして微かな笑みを零しながら、彼女に背を向け歩き出した。



「……………来たな、相棒」

歓声が響き渡るバトルフィールドにて。

戦場が上がって来た伊織を待ち構えていたのは、不敵に笑う一人の少年。

不思議な力で万人を引き寄せ、驚くべきスピードで進化し続ける。共に戦って来た“仲間”であり、打ち倒すべき“好敵手”。

相手に取って、一切の不足無し。

「今日という今日は……俺が勝つぜ」

「馬鹿言ってるじゃねエ。……今日も、俺が勝つ」

新たな時代の中核を担う、『魔術師』と『剣士』が相対する。



東京某所、高層ビル屋上にて。

『やっぱり、紅蓮は連れて来ておいた方が良かったんじゃないかしら。もしも荒事になった時を考えたら……』

「いいのいいの、そもそも荒事にしない為に置いて来たんだからさ。彼等は今もうアレですよ、根本的に隠密行動に向いてない人種なワケよ」

通信機から聞こえて来た、クロツクの声に応えるJOKER。

『ハツハツハ、何も案ずる必要は無いだろうクロツク!!用心のつもりなら、このオレだけで充分だツ!!』

「ホントはキミも留守番させるつもりだったけどねバスター。必要以上に騒ぎデカくしたら速攻帰らせるからね?」

続いて豪快にそう言い放つバスターに釘を刺しながら、JOKERは手にしていた大鎌を担ぎ上げた。

「それじゃ各自……抜かり無くないこう」

第40話 『炎刃乱舞』

先手を取ったのは、日向。

空間中に収束させた魔力を殴り抜く術式モーション起動動作アクションによって、猛る豪炎のレーザーを撃ち出す。

火属性攻撃術式

『戟衝破』

天音の『爆速弾』エクスピロスブラストにも匹敵する速度で放たれたその一撃を、伊織は抜き放ち振り翳した一刀を以て迎え撃つ。

退魔一刀流・『峡谷』

振り下ろされた、地をも砕き割るかの如き豪剣。熱線が真つ二つに両断されると同時に、轟く爆音が開戦の狼煙。

高速移動で距離を詰めつつ、上空から日向の更なる連撃が投射される。

火属性魔力×形成術式

『散輪破』

降り注ぐ無数の炎輪を伊織の剣が一つ残らず叩き墜とすが、その時既に日向の姿は彼の視界から消え失せていた。

忍法『炎隠遁』。

日向が祖父から教わった『忍法』の内、『隠形』と呼ばれる体技の一つ。

その場に残した魔力の気配で視線と意識を誘導し、景色に紛れ消えた次の瞬間には相手の死角へ回り込んでいる。

背後から迫る攻撃の気配に、伊織は振り向き様の一撃を叩き込んだ。

火属性魔力×強化術式『炎撃』

退魔一刀流・『打鐘』

繰り出された日向の炎拳を、柄頭の打突が迎撃する。鬨ぎ合う双方の威力は、炸裂する『衝撃』へと転じ互いを大きく弾き飛ばした。

開始早々に繰り広げられる巧みな戦闘技術の応酬に、会場のボルテージは一気に跳ね上がる。しかし響く歓声の中で、伊織は剣呑な眼を向けながら日向へ刃を突き付けた。

「オイ……眠てエ戦いさせんじやねエ。出せよ、『形態変化』」

「……アレ結構疲れんだよな。使い所考えねーとすぐバテちまうんだわ」

日向はそれを気に留めた様子も無く、首を鳴らしながら平然と返答する。

「フザけやがつて……まあ好きにしろ。使う気が無エなら……引き摺り出してやるだけだ」



「……なーんか日向君、あんまし動きが良くないね。やつぱ疲れ残つてんのかな？」

観覧席からフィールドを見下ろしていたアランが、暫し考え込んでいた後にそう零す。

伊織を相手に激しい戦闘を展開していた日向だったが、本調子の状態と比べ僅かながらもパフォーマンスが低下しているように見えた。同様の違和感は隣の士門も感じていたようで、彼女に続いて口を開く。

「まあ、コイツと派手に戦り合つたのが昨日の今日やからなア。体力はともかく、まだ魔力が完全に戻り切つとらんのとちやうか？」

「だな。それに春川のあの形態変化つて多分、天堂さんの『斬界』と同じで大量の魔力を凝縮させてんだろ？そんな燃費悪い戦い方してりや、すぐガス欠になりそうなモンだけだな」

亜門を指し示しつつそう口にした土門に同意しながら、日向の『斬蒼炎』の魔力消費量について湊が言及していた。



「———今の伊織アイツには、一刀流と体術だけじゃなく二刀流に飛斬改式もある。戦術の数が増えればそんだけ、攻撃も防御も幅が広がるからな。相手はその都度対応してかなきやならねエ」

「うーん……日向君にとつては、厳しい戦いになるつて事だね……」
蒼の厳しい見立てに、日向の戦いを見ていた未来が小さく唸る。

「……それはどうだろうな」

しかしその時、静観していた諸星が不意に声を上げる。

「御剣の戦術は確かに脅威だが……自分に不利な戦況の中で、突破口を見つけ出すのが

春川アイツの持ち味だろう」



伊織の驚異的な身体能力は、日向の体術をも凌駕する。これまで幾度となく彼と戦つて来た経験上、近接戦闘に持ち込んでも恐らく勝ち目は薄い。ならば――

「ブツ、飛ばや!!」

放出した膨大な魔力を手掌操作で制御し、渦巻く嵐を発生させる。

火属性攻撃術式

『豪嵐破』

――術式を斬る剣術 退魔一刀流カバで対応出来ない程の、広範囲かつ大規模な攻撃で圧倒する。

日向が巻き起こした炎の竜巻が、伊織を空へと吹き飛ばした。

しかし空中で体勢を崩されながらも、伊織の眼は地上の日向を捉え逃さない。

「甘エんだ……よッ!!」

鋭く振り抜かれる、一刀。

飛斬改式剣術・『鎌風』

上空から撃ち込まれた伸張斬撃が、術式を発動した直後の日向へと寸分狂わず命中した。

「つつ……やるなア……!!」

不安定な体勢からでも、的確に相手を撃ち抜く技術の高さ。抉るような斬撃を腹部に叩き込まれつつも、日向は感心の声を上げながら転がるように地を疾駆する。

一方で伊織は、巻き込まれた豪風破に内側から渾身の連続剣撃を繰り出した。

内部から炸裂した凄まじい威力の剣圧に、魔力の竜巻は瞬く間に弾け散り消し飛ばされる。そしてそこから姿を現した伊織は、周囲を旋回するように疾走していた日向へと立て続けに斬撃を撃ち放った。

『鎌風・参連』

迫り来る三連斬の内、最初の二発を左右へのステップで躲し、最後の一発を渾身の蹴りで叩き散らす。しかし日向の視線の先では、伊織が新たな剣技の構えを取っていた。

それは、刺突を繰り出す直前の”平青眼”。

—— 『鎌風』以外の技の『型』自体は、東帝戦前に既に完成していた。そして結城との戦いの中で掴んだ成功のイメージが、更なる実現性インスピレーションを掻き立てる。

放たれるのは、鎌風より更に速く鋭い『突き』の一撃。

飛斬改式剣術・『貫道』カンドウ

空間内に満ちる魔力を、穿ち貫く”飛ぶ刺突”。飛斬改式を更に応用した新たな派生剣技は、唸る槍撃の如く日向へと叩き込まれた。



別々の場所から、戦場を見下ろしていた亜門と蒼。

(何やねん……完全に守り入つとるやんけ。ビビつとんか?)

(まア、伊織と近接で戦り合いたくねエのは分かるが……その間合いはお前にとつても不利だろうよ)

至近距離での戦闘になれば、恐らく優勢となるのは伊織の方だろう。そして日向がその状況接近戦を警戒している事は、傍から見ても明らかだった。

いずれにせよ、彼等二人の心中にあつた日向の戦闘に対する印象は一つ。

(——らしくねエ)

◇◇◇

「……チマチマと遠距離一辺倒。形態変化は魔力を喰うから使わねエ。……随分と打算的な戦スタイルい方に変わつたな、お前」

日向を吹き飛ばした伊織は、剣の峰で肩を叩きながら吐き捨てるようにそう告げる。

「……言いてエコトがあんならもつと分かり易く言えや。どいつもコイツもまどろっこしいんだよ」

「……だったらハッキリ言つてやる」

皮肉めいた言い回しに苛立つた声を返す日向だったが、対する伊織は刀を腰の鞘へと収めながら口を開いた。

「ナメてんじやねエよ」

「……あ？」

「間合いに入らなかつたら俺に勝てるでも思つたか？ ナメられてるよオにしか感じねエつつつたんだよ」

示された、静かな怒り。そして会話を打ち切つた伊織は、再び一刀を強く握り込んだ。

「もういい。——フヌケと話すこたア何も無エ」

その言葉を最後に、繰り出される抜刀一閃。撃ち放たれる剛速の斬風。

刹那。

『——勝つイメージが無きや、勝てねエぞ』

最強の男が日向へと告げた、その言葉が不意に思い起こされた。同時に視線の先で、

伊織の姿に蒼の影が重なる。

彼等の目に一様に宿るのは、恐れを払い退ける『信念』。己の力を疑わない事。

無意識下で、身体が動く。

気付いた時には日向の右手は——斬撃を掴み止め、握り潰していた。

「そうだな……悪かったよ。今までの俺は——確かに”本気”じゃなかった」

そう言い放つ日向の全身から立ち昇るのは、鋭く弾け爆ぜる蒼い炎。

火属性魔力×強化術式

『形態変化・斬蒼炎』

一方で彼と対峙する伊織は、打って変わって楽しげな表情で得物を構え直す。

「やっとその気になったかよ。……だったら俺もこっからは——大盤振る舞いだ」

「OK。お互い出し惜しみはナシで行こう」

そして日向が振り抜いた右脚から、蒼炎のレーザーが蹴り出される。その一撃を伊織は、再び繰り出した刺突の刃で迎え撃った。

火属性攻撃術式『瞬迅』戟衝破』

飛斬改式剣術・『貫道』

二つの『槍』が真っ向から衝突するが、日向はその瞬間既に更なる追撃魔術を構築していた。

火属性魔力×形成術式

『瞬迅』大輪破』

超スピードで撃ち込まれる、蒼炎の斬輪。その一撃に対し、伊織は——『二本目』の刀へと手を掛ける。

一瞬の内に抜き放たれ、振り下ろされる双刃。

退魔』二刀流』・『瀑布』

叩き付けられた剣撃が、巨大な炎輪を両断する。轟音と共に爆風が吹き荒れるが、その時日向の姿はまたしても掻き消えていた。

二つの飛び道具は布石。背後から迫り来る気配。

高速移動で伊織の死角へと回り込み、一気に間合いを詰め肉薄する。

火属性魔力×強化術式

『瞬迅』炎撃』

斬撃を纏った炎の拳が、唸りを上げて襲い掛かった。

(よオやつとらしなって来たやんけ……腹ア括ったみたいやな)

(そうだ……『弱点』を庇うんじゃねエ。『強み』を押し付けろ——!!)

戦場を見下ろす、亜門と蒼の視線の先で。互いが最も力を発揮する領域フィールド——クロ
スレンジの格闘戦インファイトで、日向と伊織が激突する。



「近接戦闘なら、御剣君に分があると思つてたけど……あの形態変化で押し切る事が出来れば、春川君にも勝機はあるかもね」

「……そう甘くはないような気もするがな」

『加速』性質を齎す強化形態によって、伊織を相手に互角の戦いを繰り広げていた日向。あくまで俯瞰的な口調でそう推察する雪華だったが、奏がその声に応じつつ分析を交えた私見を述べる。

「昨日の亜門についても言える事だが……あの手のスピードタイプは、短期決戦で相手を倒せるかどうかが肝だ。もし仕留め損なえば、時間が経つ程に相手の眼が慣れていく。ましてや敵は御剣……長引けば不利になる一方だろうな」



「なんか、アイツら見てると……龍臣と恭夜の大喧嘩思い出すわ」

「ふふっ、確かに……あの頃はみんな激しかったよね」

冴羽の口からふと零れた昔を懐かしむような言葉に、篠宮が微かに笑いながら頷く。

「……二年後には、戦国達の世代をも超える可能性がある。奴等はそれだけの潜在能力を秘めているだろう」

「黄金時代の再来、ってワケだ……未来は明るいね」

続く万丈が示した日向達の成長性ポテンシャルの高さに、久世もまた興味深そうな視線を向けつつ同意していた。



「やっぱり凄いな、あの二人……同学年とは思えないな……」

「クソ……俺もアイツらと戦いたかった……!!」

双方一步も譲らぬ互角の接戦を、沙霧と創来は息を吞んで注視している。

「……御剣を応援しているのかい？」

その二人の後ろで啓治から唐突な問い掛けを受けた天音は、あくまで冷静な口調を崩さず訊き返した。

「……いきなり何よ」

「いや……さつきもアイツに会いに行っていたみたいだから。もし違ったならすまない」

「ッ……」

気づかれていないかと思っただけに、僅かな気恥ずかしさを押し殺しつつも無言の

肯定を示す。

「まア正直、6：4……いや、7：3と言った所かな。多分、勝つのは御剣だろう」

「……意外ね。アンタがあいつを認めるって」

「まア、気に食わない事に変わりは無いけどね……實力に關してだけは本物だろう」

シードを打ち破った勢いのまま日向が圧倒するかと思われていたが、やはりその追い風をも押し返す程の力を伊織は有していた。戦況は拮抗しているように見えて、伊織の剣速は斬蒼炎の速度を捉え凌駕し始めている。

着実に日向を追い詰めつつある事を、啓治のみならず学園の實力者達もまた察知していた。

しかし。

「けれど——アイツはいつだって、俺達の想像を超える事態を引き起こす。どんな結果になってもおかしくはない……この戦いの行方がどうなるうと、驚きはしないよ」
日向はこれまで何度でも、予想を覆す出来事を起こして来た。

「……確かに、アイツが予測不能の奇想天外男ってコトについては大方同意だけ……」
自分達とは違う『何か』を持った、特別な人間。測り知れない可能性を持った未知数

の存在である事を認めつつも、天音は啓治へと言葉を続ける。

「もしそんな人間を倒せるとしたら——私には、一人しか思い浮かばないかな……」
彼女の視線の先で——少年は、刃を振るう。

◇◇◇

交錯する、拳と刃。

斬炎を纏った右の拳が伊織の口元を掠めるが、カウンターの斬り上げもまた日向の肩口を捉える。裂かれた肉から鮮血が舞うが、伊織の撃ち上げるような蹴りを受け日向は上空へと吹き飛ばされた。

そして地表を削り取るようにして、下段から刃を振り上げ追撃を放つ伊織。突き上げのような斬撃が、上昇気流に乗って空中へと撃ち込まれる。

飛斬改式剣術・『天翔』
テンショウ

飛来したその剣撃を日向は、交差した両腕で防ぎ弾き散らす。そしてすかさず双腕を振り抜き、蒼炎のレーザーを撃ち返した。

火属性攻撃術式

『瞬迅』戟衝破・双連』

迫る二つの反撃に対し、伊織は自身を軸として独楽のように高速回転する。

飛斬改式剣術・『円月』エンゲツ』

全方位を薙ぎ払うように振り抜かれた刃は、周囲の魔力気流諸共双つの熱線を一撃で消し飛ばした。

鬨ぎ合い、空間で弾ける火炎と斬撃。乱れ舞う炎刃の中、着地と同時に一直線の突撃を仕掛ける。

日向がその右手に宿すのは、最強の一撃を型作る蒼き猛炎。

『今日(こんにち)で——お前を、超える!!』

火属性攻撃術式

『瞬迅』爆皇破』

その撃炎に対し伊織は、大上段から渾身の一刀を振り下ろし迎え撃つ。

「来い、日向!!」

飛斬改式剣術・『シントイ震霆』

フィールドを揺るがす程の威力で叩き付けられた刃は、地を砕き進む激烈な斬撃を生み出す。

交差する、双撃。雌雄を決する刻が、迫る——

第41話 『龍炎天閃』

恭夜が日向達へと授けた、魔術戦闘の極意。その”三番目”。

『——最後の一つは……コレさえ決まれば確実に相手を仕留められるっつー”必殺”の型を作る事だ』

『それは……蒼の「斬界」みてーな大技を作れつてコトか?』

『まアそれが出来りや言う事は無エが……何もそんな無理難題をフツ掛けてるワケじゃねエよ』

訊き返して来た日向へと、恭夜が実例を示すべく言葉が続けた。

『例えば天音。お前の爆速エクスプロズバスター砲ハイスピードランサーやら神速戟カミヤビ雷ライなんかは、伊織や徹彦みてエな特殊な防衛技能を持つてねエ限り、マトモに決まれば大抵のヤツは吹っ飛ばせるよな。あの辺の術式使う時に、何か考えてるか?』

『……他の術式で左右の逃げ場を塞いで、一本道に誘い込むようにしてます』
『そう、言っちゃまえばもうソレが答えだな』

発言を促された天音が暫し思索しながらも出した答えに、恭夜は満足気に頷く。

『その型を知ってるヤツは、そもそも左右を挟まれないように立ち回る必要が出て来る。』

相手の思考リソースを余分に割かせる事が出来るってワケだ』

『つまり、その攻撃手段の存在自体が相手の意識と行動を縛る、と……』

『そういうこつた。そしてそのコンマ数秒の判断阻害が、戦闘中には命取りになるつーコトは……もう言わなくても解るよな?』

啓治が言及した『戦術』と『思考』の関係性に同意しながら、更なる具体例を挙げていく恭夜。

『さつき日向が言つてた、蒼の斬界にしても同じだな。気持ち良く刀がブン回せる空間さえあれば、アイツは迷わずアレを撃つて来る。だから相手はとにかく太刀筋に入らないように、回避主体の立ち回りを自ずと強制されるワケだ』

『見せさえすれば、戦術的選択の何割かは制限出来るってコトか……』

ゴッドバレット

アメリカ

『言わば思考誘導だな。ギリシャのゼノンの「神弾」然り、米国のアレックスの「トリニティブラスト」もそうだ。あの手の「一撃必殺」は相手に戦闘そのものを避けさせる脅威だが……アレは一朝一夕で身につくようなモンでもねエ。参考程度に頭に置いときやいいさ』

伊織の呟きにそう応えるが、その時創来は表情を顰めながら首を傾げていた。

『誰の話してんだ?』

『逆になんであんな有名な有名人を知らないワケ?……天堂先輩と同じ、”世界学生十傑”。

それぞれの国のエース級魔術師よ』

『さもご存じみてエな言い方されても知らねエモンは知らねエ……』

呆れながら天音が“彼等”について補足的に説明していたが、その横で口を開いた陣から恭夜へ一つ意見が投げ掛けられる。

『せやけどあんまし早よ使いすぎたら、相手に対策されるリスクも出て来るワケやろ。初見殺しのメリットが無くなるのはどうなん？』

『まゝそりや各々に任せるわ。ここぞつて時まで隠しといて大本命の相手にブチ当てるもヨシ。早めに見せといて牽制の手札カードにしても良い。使い所はお前ら次第だな』



伊織の必殺パターンは、恐らくハルトとの戦いでも見せた『退魔二刀流』。飛斬改式剣術も依然として脅威ではあるが、決着を左右する場面で選択するのはより練度の高い戦術の筈。

不用意に近付けば、即座に“喰”われる。そう告げるように揺らぐ伊織の刃から、蠢き立ち昇る“圧力”。

やはり彼との近接戦闘は鬼門だが、かと言って日向の遠距離攻撃では決定力に欠け

る。ならば、こちらの攻撃威力を保ちつつ二刀流の間合いを外すギリギリの距離で仕掛けるしかない。

即ち、

（——中距離術式……!!）

退魔二刀流と飛斬改式剣術のどちらの優位性も軽減出来る、伊織の戦術の『隙間』とも呼ぶべき戦闘領域。勝負を決めるのはその一点だと、日向は試合前から既に想定していた。

瞬迅爆皇破と雷霆の衝突による爆風を全身に受けながらも、更なる追撃を叩き込みその反動で後退する。自身の持ち得る最大威力の一撃を止められた以上、まだ見せていない技での奇襲に賭けるしかない。

蒼炎を、その掌に握り込む。

「——ッ!!」

「遅エト」

日向の視線の動きで伊織は彼の狙いを察知するが、その時既に術式の構築は完了していた。繰り出された拳から、放射状の爆炎が撃ち出される。

火属性攻撃術式

『瞬迅』閃空破』

相手を覆うように焼き尽くす、中距離範囲攻撃。斬蒼炎によって向上した術式展開速度ならば、恐らく『峡谷』で両断されるより速く攻撃は伊織へと到達出来る。

しかし。

「———どうかな」

迫り来る炎を前にして、伊織は不敵に嗤っていた。そして二刀目の柄を逆手で掴み取り、一瞬の内に抜き放つ。

「ッ!?!」

(まさか———!!)

瞠目する日向の視線の先で、振り抜かれる伊織の双刀。

斬り上げ、撃ち下ろされるその挟刃は———空を喰らう牙を備えた、顎アキトの如く。

飛斬改式 二刀流 ・ 『飛龍』

放たれた龍型の斬撃が、瞬迅閃空破と激突する。二刀を用いた飛斬改式を、伊織は既に完成させていた。

吼える刃龍と、猛る蒼炎。二つの力が交錯し、天に閃く。

激しく鬩ぎ合い、炸裂する衝撃。そしてその斬撃は、魔力によつて生み出された閃炎を爆発させ消し飛ばした。

◇◇◇

轟音と風圧が、瞬く間に空間を埋め尽くす。

「どうなった……!?!」

戦場を包み隠す爆煙に、目を瞠りながら唸るように声を上げる啓治。観衆が息を呑む中で、次第に視界が晴れていく。

◇◇◇

そこに在ったのは、互いに背を向け立つ二人の姿。

しかし一方の呼吸は荒く、その足元には少くない量の血が流れ出している。やがて苦しげな表情で膝を突いたのは——日向の方だった。

一方で伊織は静かにその場に佇んでいたが、日向もまた意識を失う事無く持ち堪えている。そして、刀を地に突き立てた伊織が日向へ向けて口を開いた。

「……………俺の、敗けだ」

そう零しながら、仰向けに倒れ込み目を閉じる。その胸元には深々と、袈裟懸けの斬創が刻まれていた。

東帝戦トーナメント本戦、三回戦。

勝者、春川 日向。準々決勝、進出。

激闘は、此処に決着した。



「……………今何起きた……………!?!」

「速すぎて……………目で追えなかった……………!?!」

「……………」

戦場を注視していながらも、決着の瞬間を視認出来なかったアランがそう呟く。その隣の絵恋とハルも、最後の急展開を目視出来ない様子だった。

「……………視えたか?」

「ああ……………一瞬だったな」

一方で高速戦闘に長けた亜門と、狙撃手としての優れた動体視力を有していた湊はその一瞬の交錯を捉えていた。



「アイツ……………爆発の中から飛び出して来たな……………」

「だね……………どゆことよ……………」

唾然とした様子で、戦場を見下ろしながら奏と千聖がそう口にする。蒼達三年の面々は視覚だけでなく魔力知覚によって、日向と伊織の戦闘の最後を認識していた。

——瞬迅閃空破と飛龍が激突した、あの瞬間。日向は巻き起こった爆発の真つ只中へと突進していた。

通過する瞬間に奇しくも二つの攻撃が互いに相殺し合った事で、その威力は消失した。

「……もし一瞬でもタイミングを見誤れば、モロに爆発に巻き込まれて自滅していただろうな……」

「アイツは信じて賭けたんだ。……自分と伊織の技の威力が、全くの互角ってコトにな」とんだ博打ヤローだと呆れながらも、日向の胆力を認める蒼に奏が頷く。そして魔力爆発を突破した日向の右脚には、鋭く燃える蒼炎が纏われていた。

伊織が繰り出した迎撃の一刀より迅く、叩き込まれる渾身の足刀。

火属性攻撃術式

『瞬迅』炎刀』

明暗を分けたのは、刹那の読み合いか。若しくは僅かな勝機を掴み取る。嗅覚か。何れにせよ、勝敗は決した。

天堂 蒼。

黒乃 雪華。

諸星 敦士。

蛇島 司。

神宮寺 奏。

如月 士門。

風切 アラン。

春川 日向。

東帝最強の座を競い争う、八人の魔術師が出揃う。





——数時間前。

午前9時。魔術管理局内、シャワールームにて。

「つア~~~~~………ねっむ………たった40分しか寝られなかったっスよ」

「仕方ねエだろオが。今は状況が状況だ。一分一秒の態勢の遅れで結果が大きく変わって来る以上、俺達は警戒して備えるしかねエ」

「かくく、こんな時でも模範的正論ゴリラ。ブ^{ワーカホリック}ラック^{ホリック}体質を自覚出来ない日本人のサガってヤツですかね？」

「よーし国民を代表してお前は俺が殺す」

昨夜から明け方まで続いた緊急会議を終え、僅かばかりの仮眠を取った後本郷と柊は揃って湯を被っていた。

「……でも、良かったんスカ？」

「あ？何がだ」

「捜査課と情報共有したコトっスよ」

終からの口から出た疑念に、長く息を吐いた本郷が応える。

「……………相手は番号刻印だぞ。もう特務課だけでどうこう出来るヤマじゃねエっつーコトぐらいテメーも解ってんだろ」

「そりゃそうですねエ……………どうします？もし”彼女”以外にも内通者がいて、それが管理局内部の人間だったりしたら」

「ブチのめすに決まってるんだろが。分かり切ったコト訊いてくんじゃねエよ」

「おーこわ……………」



そして――

「速水さん!! 2分前に目撃情報が入りました！目標が動きますす！」

会議室へ飛び込んで来た北斗が、アイマスクを着けて椅子で休んでいた速水へと声を

掛けた。

「武装部隊は？」

「第一第二、共に準備完了しました。いつでも出撃出来ます」

「OK。てか帯刀ツキさんは？」

「丁度隊員の方々の食事を調達しに出て行きました……」

「コンビニか。沢村さんは多分喫煙所でしょ？こういう時ホント足並み揃わないよね僕等って……正と俊哉君は？」

「あの二人はついさつきガレージから飛び出して行きましたよ。現場付近の待機ポイントに急行してます」

「え、もう!?あの二人先に行かせちゃったら何しでかすか分かんないっしょ」

「なので急ぐべきかと……」

「間違いないね。よし、行こう」

席を立った速水は、髪を結び直しながら歩き出す。



東京某所、地下駐車場にて。

「……………ありがとう。来てくれて」

薄暗い空間に、響く声。そこに立っていたのは――

――魔術テロ組織、『刻印結社』に属する一人。JOKER達に、『ダイエス』と呼ばれていた少年だった。

「……………説明して。幽^{ユウ}」

そして彼と相對していたのは、一人の少女。動揺を隠すような声色で、“彼女”は問い掛ける。

更科 凧の姿が、そこには在った。

第42話 『訣別、急襲』

悲痛な表情で相対する風へと、デイエスは薄く笑いながら声を返す。

「説明も何も……全部解ってるから、僕の呼び掛けに応えてくれたんだろう？ キミを迎えに来た理由も……僕がやって来た事の意味も」

「解るわけない……解りたくなんか……ない……!!」

東帝学園に籍を置く風と、刻印結社に属するデイエス。かつて訣別した二人の過去を紐解くには——7年前に遡る必要があった。



——物心ついた頃には既に、『研究所』という自身を取り巻く異質な環境を”彼女は受け入れていた。

誘拐されるより以前、自分にはどのような家族が居たのか。どんな暮らしをしていたのか、何も思い出す事が出来なかった。唯一残っていた記憶は、『更科 凧』という名前だけ。

日々繰り返されるのは、自分達『被験者』へ”移植”された『術式』の”機能訓練”。与えられた力を上手く制御出来ない子供達も多かった中で、凧は魔術を操る己の才能を幼いながらに自覚していた。

そして彼女には、そこで出会った一人の友人がいた。

『——凧。今日のプログラムはもう終わったの?』

施設の図書室の隅で転た寝しようとしていた彼女へ、一人の少年が声を掛ける。

『ん……………あんたまた抜け出して来たの? いい加減にしないとプロフェッサーに見つかると幽ユウ』

『大丈夫だよ。僕、優秀だから。怒られたりなんかしないし』

凧へと笑い掛ける彼の名は、宵野ヨイノ 幽ユウ。彼女と同様に『術式移植手術』を施された、『被験者』の一人だった。

人よりも強く、畏るべき力をその身に宿していた凧。そんな彼女にとって幽は、初めて心を許せた『友達』で——側にいてくれる『家族』だった。

未来の見えない、この『箱庭』に囚われていても。彼さえ隣に居てくれれば、幸せだった。ずっと一緒にいられると、そう信じていた。

二人の運命が動き出す、”あの日”までは。



『もう大丈夫だ。お前達を——助けに来た』

凧と幽の”日常”は、突如として終わりを迎える。

7年前に決行された、魔術師協会七大支部による合同作戦。

協会に属する魔術師達によって構成された少数部隊が、拉致・監禁されていた被害者達を救出すべく『研究所』へと突入した。

凧や他の子供達を助け出したのは、刀を担いだ威容を誇る老年の男。日本支部支部長『鬼龍院 王我』は、研究所内の敵対者を次々と吹き飛ばし殲ぎ倒していた。

『龍臣はギデオンの班と合流して最深部に急げ。保護はクリス達に任せればいい、お前らは制圧最優先だ』

王我が矢継ぎ早に指示を飛ばす中、研究所各所での爆発による振動がここまで伝わって来ている。しかし凧は、何故か幽の姿が見えない事に言い知れぬ不安を覚えていた。

『つてオイ、ちょっと待てちっこの!!』

そして王我がの制止の声も聞かず、凧は研究所の奥へと駆け出して行く。今彼を繋ぎ止めていなければ——もう二度と、会えなくなってしまうような——そんな漠然とした、不穏な予感に駆られていた。

走る。

必死に幽の姿を探すが、彼の気配すら何処にも感じない。

しかし、その時。

燃え落ち崩れつつある廊下の向こうに——こちらに背を向けた、一人の少年の姿が見えた。

『っ、幽!!』

咄嗟に叫んだ風の声に反応し、瓦礫の向こう側で幽が振り返る。

『やっと見つけた……早く、逃げよう……!……ここも危ないよ……!!』

僅かに安堵したような表情でそう呼び掛ける風だったが、幽の口から告げられたのは彼女の予想に反する言葉だった。

『……………ごめん。僕は……………行けない』

『……………っ!?なんで……………!!』

幽の返答に動揺を隠せない様子 of 風だったが、彼は感情の読み取れない声で言葉を続ける。

『僕は……風と一緒にには、いられないんだ……そっちには、行けない』

『だから、なんでよ……そんな事言われても、意味わかんないよ……!!』

見えないその真意に風が焦るように声を上げるが、幽の仄暗い表情に変化は無い。そしてその間にも、火の手は彼女達のすぐ近くまで迫って来ている。

『だったら——— だったら、私もここに残る……!! 幽を置いていくなんて…… 私だけで逃げるなんて、嫌だ……!!』

必死に風はそう言い放つが、それでも幽の意思が変わる事は無かった。

『それでも……ダメなんだ。……ごめんね』

そして風に背を向け、ゆっくりと暗闇の中へと歩き始める。

『いつか……僕を、迎えに来てよ』

彼女にだけ聞こえるようにその声を零すと同時に——— 幽の姿は、炎の壁に覆い隠された。

風もまた爆発に呑み込まれようとしていたが、その瞬間。

爆炎が彼女に届く寸前、突如として一人の影が現れる。その男は凧を抱き上げると同時に、目にも留まらぬ速度で掻き消えるようにその場を駆け抜けた。

『あつぶなかつたなア。……大丈夫か?』

魔術による超高速移動で凧を救い出したのは、サングラスを掛けた黒髪の人物。『桐谷 恭夜』と名乗った青年だった。

そして――

――完全に崩壊した研究施設から、宵野幽が発見される事は無かった。



それから6年後。

救出され保護された凧は、日本の魔術都市で暮らしていた。

数年の月日が経って尚、忘れる事が出来ない空虚な傷跡。伸ばした手を拒絶されたと

いう事実は、彼女の心の片隅に未だ暗い影を落とし続けていた。

そんなある時、魔術界に一つのニュースが届く。

魔術犯罪組織『刻印結社』に属していると思われる、新たなテロリストの出現。その“少年”は、強大かつ凶悪な術式を有しており多くの民間人を殺害していた。

瞬く間にその情報は魔術都市を通じて、全世界の魔術師へと知れ渡る事になる。しかし、風はその真偽を深く探ろうとは思わなかった。

——信じたくなかった。”彼”と同じ術式チカラを持つ人間が、残虐非道な魔術犯罪者と成り果てているという事実から、必死に目を背けていた。

1年後。

それでも、残酷な運命は決して止まる事は無く。

『久しぶりだね——風』

再び彼女の前に現れる。



「なんで……なんで、テロリストなんかになつてんのよ……!!アンタはそんな、最低な人間じゃなかったでしょ……もうやめてよ、こんな事……!!」

溢れ出す感情をぶつけるように彼を問い糺すが、凧の言葉を受けて尚デイエス幽は微かな笑みを浮かべたまま。

「悪いけど……理屈じゃないんだ。もう決めた事だからさ。僕達は————この世界を、壊す。その為に、僕はこの力を受け取ったんだ。……自分の意思でね」

その意思は変わらないように見えたが、不意にデイエスは真つ直ぐに凧と向き合い口を開く。

「だけど………凧だけは、僕のそばに居てほしい」

「………え………?」

突然の言葉に、思わず声を零す凧。

「あの頃からずっと……僕にとつて、大切な存在だから。例えこの世界が壊れても……風だけに、幸せでいてほしい。僕が守るから……一緒にいてほしいんだ」

そう言つて手を差し出した幽の笑顔は——あの頃と変わっていないように見えた。

「ふざけ、ないでよ……私は、あんたと心中する気なんか……」

拒絶しようとする風だったが、思うように言葉が出てこない。

どれだけ望んでも、取り戻せない筈だったあの日々を想う。ずっと追い求めていたその手を——彼女は振り払う事が出来なかった。

「私は——」

「二人共その場を動くな」
その時。

鋭い警告と共に、こちらへ銃を向けた一人の男がその場に現れた。

黒のスーツを身に纏った、桔梗色の髪 of 青年。管理局の魔術捜査官、北斗 玲王の姿がそこにはあった。そして彼の背後には、術式付加装甲服アーメーサーズに身を包んだ魔術管理局の戦闘部門『武装部隊』が、自動小銃アサルトライフルを構え控えている。

更に彼等のみならず、別の二方向からも姿を現す二人の捜査官。北斗と同様のスーツを纏った沢村 秀一と速水 流星が、それぞれ武装部隊を率いて凧とデイエスを取り囲んでいた。

「……『番号刻印N.O.4』、デイエスだな」

銃口を向けたまま、最大限の警戒と共に北斗が開口する。しかし魔術師の集団に包囲されながらも、デイエスの表情に焦りは見られない。

「更科凧ちゃん……だね？キミが何故特級の魔術犯罪者テロリストと内密に接触していたのかはともかく……まず一つ。キミにはある『容疑』が掛けられている」

一方速水は冷静な口調で、凧へと問いを投げかける。

「ある一般女性からの証言でね。……7月5日の23時から0時に掛けて、池袋と新宿の二ヶ所で東京23区内のどの高校にも該当しない制服を着た学生が目撃情報があった。そしてもう一つ。翌未明、学習院下通りのガード下で意識不明の獅堂が発見された……と」

そして速水の言葉を引き継いで、沢村が彼女へ向けて淡々と言い放った。

「動機に関してはさっぱり不明だが……更科凧。お前には今、殺人未遂の容疑が掛かってる」

状況証拠から鑑みて、魔術捜査課が導き出した一つの推察。

姿を消しての犯行を可能にする、『隠密術式』の能力。柊の知人が偶然目撃していた、その『学生』と特徴が一致する人物。そして捜査線上に、一人の少女が浮上した。

——目的は不明だが、更科 凧は大文字 獅堂を殺害しようとした可能性がある。

「同行を拒むなら……こちらも相応の手段を取る」

強硬な態度を崩さない北斗。しかし彼と対峙する風の様子に、何故か異変が生じ始めていた。

頭の奥深くに走る、鈍い痛み。記憶を辿ろうとする程に、謎の疼痛は悪化していく。「う、あ……………私、は……………」

その小さな異常に早く気付いたのは、彼女に最も近い位置にいたデイエスだった。

「風……………どうし——」

しかし彼が頭を押さえる風へと一步踏み出した瞬間、北斗が躊躇無く拳銃の引鉄を引いた。放たれた銃弾は、デイエスの頬を僅かに掠める。

「動くなと言った筈だ」

「チツ……………」

有無を言わさぬ北斗の牽制に、舌打ちを漏らすデイエス。

恐らく管理局は風の連行よりも、デイエスの拘束を優先している。——ならば、

この状況を打破する手段はただ一つ。

「だったら仕方無い……強行突破だ」

「やっばこうなるか……!!」

デイエスの指先が僅かに動くが、それより速く沢村が魔術を発動する。

無属性魔力×形成術式

『^{ブラスト}弾』

驚異的な速度で撃ち放たれた魔力の弾丸が迫るが、デイエスはその一撃を見向きもせずには掴み止めた。そしてもう一方の手に、蠢き揺らぐ暗色の魔力を収束させる。

この場で武装部隊を率いる三人の捜査官の内、最も脅威度の高い『敵』をデイエスは即座に見極めていた。

「まずは……アンタから消す……!!」

そして狙いを定めたデイエスは、左後方の沢村達へと狙いを定め魔力の奔流を炸裂させる。

「ツ!!クソ……!!」

一方で沢村より僅かに遅れながらも、北斗もデイエスの攻撃に反応した。グリップの

レバーを瞬時に切り替え、再度トリガーを引く。

北斗の拳銃には実弾発射の機能に加え術式付加機構が搭載されており、放たれたその弾丸には被弾者を捕らえる『縛』^{バインド}が付加されていた。

「沢村隊長ッ!!」

「バカ、退避しろ!!」

襲い来る膨大な魔力の波に対し、隊長の沢村を守るべく数名の武装隊員が前方へと飛び出す。しかしディエスが放った”異質”なエネルギーは、地下駐車場のアスファルトを一瞬にして”削り剥がし”、武装部隊が展開した魔力盾^{シールド}をも”喰い潰した”。

万物を”崩壊”させるかのような脅威が、沢村達へと迫っていたが――

――その時、一人の少年が彼等の前に躍り出る。

「徹彦!!」

「グッ、ヌ……!!!」

包围部隊の後方にて待機していたその少年、古田 徹彦は咄嗟に飛び出しディエスの

攻撃と激突した。彼が全身に纏う『絶対防御』の術式は、その実態不明の魔力をも防ぎ止める。

そして北斗が撃ち込んだ『拘束術式付加弾』^{バインドバレット}は、死角からデイエスへと迫っていた。しかしその銃撃に対し、動きを見せたのは——風だった。

「っ、く……」

頭の奥底の痛みに耐えながら、地を蹴りデイエスへと駆け出す風。そして彼女は右脚を振り抜き、蹴りで北斗の弾丸を迎え撃った。

着弾と同時に付加されていた術式が作動・展開し、魔力の帯によって拘束された風が地面に倒れ込む。

「っ、風……!?!」

「何のマネだ……!?!」

背後で自身を庇った風にデイエスが瞠目し、北斗もまた彼女の予想外の行動に動揺を隠せずにいる様子だった。しかし錯綜するその状況下で、戦闘を完全に俯瞰して動いていた人間がいた。

「———今だ、結城君」

徹彦による防御、風の想定外の行動。場が乱れ生じた一瞬の隙を、速水の眼は逃さず捉えていた。そしてその指示に即座に対応したのは、卓越した技術を持つ空間操作術式ホト使い。

「デイエスが徹彦や北斗に注意を向けたその一瞬で、結城 結弦は転移ホトによつて風の身柄を確保していた。

「速水さん、今です!!」

結城が気絶していた風を抱え上げその場から離脱したのを確認すると、速水は高速移動で一気にデイエスへと距離を詰める。そして接近しつつ抜き放つた長大な太刀を、渾身の力で叩き付けた。

「オイ……殺す気かよ……!!」

振り下ろされた刃を黒い魔力で防御しながら、デイエスが速水を睨み付ける。

「キミらは国家に仇成す大罪人、『表』の法に守られない事なんざ百も承知だろうに。魔術師僕等は危機を排する為なら手段は選ばない。……抹殺も、止む無しだ」

「舐められたモンだな……!!」

恐ろしく冷徹な声でそう告げて来る速水を、デイエスは再び魔力を炸裂させ強引に押

し返した。

「……僕等に与えられた『番号刻印』^{ナンバース}の名前は、おたくら協会のS級と同格の力を持つて
るって意味だ。アンタらは自分達だけで、あの辺の連中を相手取れるとも思ってたの
？」

「何だ、見通しが甘エとでも言いてエか小僧。大人つてのはな、上から命令されりや無理
でも何でもやるしかねエんだわ。組織つてのは理不尽だよなア全く」

「……そうか……」

依然として余裕を見せるデイエスへと、沢村が淡々とした声を返す。速水や北斗、結
城に徹彦もまた油断無く再び包囲網を形成しようとしていたが、その時デイエスは不敵
な笑みを零した。

「これから起こるのは……その傲慢が招いた結果だ」

その瞬間。凄まじい衝撃を伴った轟音が、地下駐車場に響き渡った。

「ッ、何だ……!?!」

突然の出来事に北斗達は僅かな焦りを見せるが、沢村はすぐさま何が起きたのかを察

知しインカムへと叫ぶ。彼の予想が正しければ、轟音と振動の発生源は恐らく――

「地上班、何があつた!! 応答しろ!!」

◇◇◇

「帯刀^{ツッキ}さん!!」

叫ぶ本郷達の頭上を吹き飛んで行くのは、A級魔術師の実力を有している筈の捜査官。

突入班のバックアップとして地上にて待機していた管理局の部隊は今、一人の魔術師による急襲を受けていた。

「なんで”アレ”がココに……!?!」

睨む終の視線の先にあつたのは、武装部隊を単身で次々と蹴散らす圧倒的強者の姿。装甲車は炎上し、建造物は破壊されている。

突如としてその場に現れたのは、魔術界に『暴君』の悪名を轟かせるテロリスト。刻印結社の”番号刻印^{ナンバースタンプ} N.O.5”、『バスター』だった。

「ハハハハハ!!この国の魔術師はこんなモノか!？」

「クソが……援護しろ俊哉!!」

「マジで戦^やるんスカ……!!」

力の限りを尽くし暴れ回るバスターを制圧すべく、本郷が真つ向から突撃を仕掛けその後方で柎が術式を展開する。

「ほう……俺に向かつて来るか。その意気や良しッ!!」

突進して来る本郷に対して、バスターは膨大な魔力を右腕に纏わせ迎え撃つ。隆々とした肉体から放たれるのは、暴風をも巻き起こす豪快な一撃。

無属性攻撃術式

『シヨウオウケン
衝王拳』

バスターの持つ特殊魔術『アヒリテイマジック衝撃術式』インパクトフォーミュラによって、爆発的威力を得た拳の“圧力”が本郷へと襲い掛かる。

咄嗟に防御の構えを取るが、その一撃はガードの上から易々と本郷を吹き飛ばした。防護術式を施されている筈の特殊スーツの左腕部分は跡形も無く消し飛ばされ、魔力で

強化した頑健な肉体にまでその衝撃は到達する。

「正さん!!」

柵が叫ぶ中、吹き飛ばされた本郷は崩落した建物による瓦礫へと突っ込みようやく停止した。

「クツ、ソが……」

（一撃で、折れた……!!）

起き上がりつつ悪態を吐く本郷の左腕は、バスターの剛拳を受け完全に折れていた。片腕が使い物にならない状態で番号刻印を相手取るなど、最早自殺行為に等しい。

相手の規格外の攻撃能力に戦慄する本郷だったが、彼の左腕へと後方から柵が魔術を投射する。『縛』^{バインド}の応用と思われる魔力の帯は、本郷の腕へと巻き付き患部を整形した。

『一応固定しましたがけど、あくまで応急処置っス。治したワケじゃないんで、出力は抑えてくださいよ』

「ああ、何も無エよりはマシだ……!!」

インカムからの柵の声に応えた本郷は、再びバスターへと距離を詰めるべく駆け出しに行く。

戦場と化した街に、激突音が響き渡った。



『「刻印結社」の「バスター」の出現により地上にて待機していた第四・第五武装部隊が壊滅!! 現在本郷・柊の両名が交戦中です!!』

「何がどうなってるんだよ……!!」

通信共有デバイスからの叫ぶような報告を受け、混乱する状況に焦りを見せ始める結城。一方で現場を指揮する三人の捜査官は、最早事態は一刻の猶予も無い事を感じ取っていた。

「……僕は右から仕掛けるよ」

「了解です」

そう言葉を交わし再度長刀を構えた速水と、拳銃を収め手元に刀を召喚した北斗が同時に走り出す。疾走する二人は挟撃を仕掛けるべく、左右から全く同じタイミングで斬り掛かった。

無属性攻撃術式

『一刀流・飛燕』

無属性攻撃術式

『星劍・魁』

同時に攻撃魔術を発動する、極めて高度な連携戦闘。しかし双方向からの剣撃を前にしても、デイエスが不敵な笑みを崩す事は無かった。

繰り出された双撃は、デイエスへ届く寸前で”止まる”。

「!?!」

指先一つすら、動かさない。

それは——”理”へと手を掛ける禁忌の力。

『時間操作術式』。

その場に新たに姿を見せたのは、一人の美女だった。

刻印結社の最高幹部、その一人。彼女の名は——

「間に合ったみたいで良かったわ」

——”
番号刻印ナンバーズN0.8エイト”、
『クロック』。

第43話『二つの脅威』

「コリヤまた状況が変わつて来るぞオイ……!!」

『刻印結社』に属する魔術師クロックの登場に、ここに来て初めて沢村が僅かな焦りを見せる。

一方でデイエスへと双方向から同時に斬り掛かった速水と北斗だったが、割つて入ったクロックの”時間に干渉する魔術”によって完全に動きを止められていた。

彼女はその手に持っていた、『懐中時計』へと視線を落とす。その針が勢い良く逆回転すると同時に、速水と北斗は立っていたその場所から突如として吹き飛ばされた。

「ッ!!」

原理不明の反撃を受けながらも、咄嗟に体勢を立て直しつつ警戒する二人。

「これが『時間操作』……!!」

「記録上でしか見たコトは無かつたけど、実際喰らつてみると一段と厄介だね……!!」
「……お前ら一旦退がれ」

余裕の表情を見せるデイエスと妖艶に笑うクロックに対し、再び突撃を仕掛けようと

した速水と北斗だったが沢村がそれを制する。

「お前さん方……揃いも揃ってこの国に一体何しに来た？ 恭夜が居ねエこのタイミングで攻め込んで来たのはまア理解出来るが……戦争仕掛けて来るにしても、流石にちつと動きが性急すぎやしねエか？」

世界に散らばる国家級戦力『S級魔術師』ランカウイザードに匹敵するとされる、刻印結社の『番号刻印』。国際的テロ組織の最高幹部らが複数人で日本に上陸して来た目的を探る沢村だったが、デイエス達はその問いに応える事は無い。

「さあ……？ ボクらは“閣下”の命令に従ってるだけだからね。あの人が考えてるコトに興味も無いし。……JOKERならなんか知ってんじゃないの？」

「そうかよ。ならあのピエロ野郎に言つといてほしいんだが、ウチの学生連中にちよっかい掛けようとすんのはやめてくんねーか。わざわざアイツらを狙う理由は何だ？ 能力か？」

「それこそ知るワケ無いでしょ。……僕は一人でも多く“壊して”“殺せれば”、後は全てどうでもいい」

「貴ツ様……!!」

嘲笑うような声音で沢村へとそう応えるデイエスを、北斗が忌々し気に睨み付ける。

「デイエス、そろそろ時間よ」

「あーはいはい。それじゃ、時間稼ぎに付き合うのもここまでにしとこうか。鬼龍院王我に応援要請を出したのは分かってる」

「バレてんじゃないの……」

会話を引き延ばそうとする沢村の目論見を、クロックとデイエスは看破していた。咳く速水の視線の先で、二人は背を向け歩き出す。

「ッ、待て!!」

「やめとけ玲王。深追いすんな」

「ですが……!!」

「奴さんが退くつつつてんだ。これ以上被害を出さねエに越したこた無エよ」

追いかけてようとする北斗を沢村が制する中、デイエスは振り返り小さく笑いながら口を開いた。

「ま……しばらくは派手に戦り合うつもりは無いから安心しなよ。今はまだ……:…:…:だけどもね」

そして彼等の姿は、景色に溶け込むように揺らぎ——その場から、消えた。



無属性魔力×形成術式

『スパイラルレインズ』

柊が放った無数の魔力弾が、全方向から螺旋状に襲い掛かる。しかしバスターはその包囲爆撃を、豪快に右腕を振り抜き発生させた『風圧』のみで尽く吹き飛ばし掻き消した。

「術式も使わずにコレか……!!」

「クソツ、タレがツ!!」

「足りん足りん、もつと来いッ!!」

本郷の渾身の蹴りを掴んで防ぎ止め、投げ返したバスターは柊へと突進する。

繰り出されたその豪腕は、柊が構築した魔力の防壁^{バリケード}を一撃で打ち砕いた。突き抜けるような衝撃がそのまま叩き込まれるが、真正面から爆圧を受けた筈の柊の姿が”ブレて”消える。

「幻術か。小癩な……!!」

一瞬で幻像を形成しその隙に距離を取るが、バスターの魔力知覚は後退する彼の位置

を捉えていた。

「油断したな……」視^スえているぞッ!!」

風景に紛れるような幻術で自身を覆い隠していた柊へと、バスターが再び一直線に突撃する。しかし――

「――油断してんのはテメエだろバーカ」

突然立ち止まり振り返った柊は、不敵な笑みを浮かべていた。

無属性 罨^{トラップ}術式

『ライジンググバレット』

その瞬間、バスターが踏み抜いた地面から突き上げるような連弾が発射された。柊が咄嗟に設置していた地雷魔術によって、バスターの足が止まる。

直後。

無属性攻撃術式

『剣槌^{ケンツイ}』

遙か上空から、渾身の二刀が撃ち下ろされた。凄まじい轟音と衝撃が、空間中へと伝播する。

「遅くなつて悪かつたな、本郷、柊」

降下して来ると同時にバスターへとその攻撃を叩き込んだのは、本郷達と同じ管理局所属の魔術捜査官。A級魔術師、ダテワキ帯刀 タツヤ達也だつた。

「待ちましたよ達也さん。流石に吹っ飛ばされすぎでしょ」

「ちつたア効いたかボケが!!ワキさんナメんな!!」

帯刀が本郷の手を掴み引き起こしている後ろでは、柊が荒々しく叫んでいる。

「ほう……誘導して罫と追撃の二段構えか。悪くない連携だが……この程度の威力では、俺には脅威足り得ない」

しかし帯刀の強烈な双剣撃を受けて尚、バスターは平然と起き上がつて来た。

「成程……カ正攻法押しではまず勝てない、か。柊、何か策はあるか?」

「いやア、正直もう手に負えないっスよ。俺らじゃ無理っしょ。あのレベルのバケモンと張り合えるとしたら、王我さんかスバル君か……それか零児レイジさん達ならワンチャン

……」

帯刀へお手上げだと示しながら、バスターと渡り合える可能性のある人間を柊が挙げていたその時。

「ム……今日はここまでのようだな。また会おう、勇士達よ」

バスターの魔力知覚が、デイエスとクロックの撤退を感知する。そう言い残すとバスターは、魔力によって強化した爆発的な脚力を以て豪快に”跳躍”した。

「オイ待てコラア!!クソツ、俊哉!!」

「ダーメっスね……」瞬で射程の外まで”跳”びやがった……」

爆風と衝撃波を撒き散らしながら、その姿は瞬く間に空の彼方へと消えていく。

「負傷者の手当と現場周辺の結界封鎖だ!!急げ!!」

本郷達が悔し気に空を見上げる中、帯刀は部下へと矢継ぎ早に指示を飛ばしていた。



「三人共、ご苦労サマ。首尾はどうだった?」

撤退し拠点へと戻って来たデイエス・クロック・バスターの三人をJOKERが出迎

える。

「貴方に言われた通り、直接戦闘は避けておいたわ。……私達は、だけど」
「ハツハツハ、まアそう言うなクロック！正直俺はまだ暴れ足りなかつたが、中々楽しめた」

クロックから咎めるような視線を向けられながらも、バスターは豪快に笑い飛ばしつつ帯刀達との戦闘を振り返っていた。

「OKOK、第一段階は上手くいった。ここからは……時間との勝負だ」

二人からの報告を受けたJOKERは、椅子に腰掛けていた一人の青年へと声を掛ける。

「そろそろキミらにも働いてもらおうよ」

「さっさと戦わせろ。……待ちくたびれた」

JOKERの言葉にそう応えるのは、『火竜』の異名を持つナンバースエブン番号刻印N0.7。閉じていた目を開きながら、『紅蓮』は好戦的な笑みを零す。

そして癡猛に笑う彼の背後には、四人の影が控えていた。



魔術管理局、会議室。

「更科風の容態は安定しているようですが……まだ意識が戻っていません」

「そうか……分かった、下がって良い」

沢村へとそう報告した局員は、一礼すると踵を返し忙しなく退室して行く。

一つ溜息を漏らしながら沢村が室内を見回すが、現場から戻って来た捜査官達は皆一様に表情に疲れが見えた。

「結局アイツらの目的は何だったんスカね……」

「それを知ってるかもしれない、”彼女”の意識が戻らない以上……今は待つしかないね」

ナンバーズ達の目的について言及する終に速水が応えたが、その時北斗が静かに口を開く。

「……それよりも、問題は更科以外でしょう」

その言葉を受け本郷らが訝し気な視線を向けるが、沢村が続けて補足する。

「四人までなら更科が単独でナンバーズの密入国を手引きしてる可能性もあったが……」

五、六人目の登場となるといよいよ話が変わって来る。最低でももう一人、”内通者が居るのはほぼ間違い無い”

重い空気の中で告げられた事実、部屋の中の全員が沈黙した。

再び浮かび上がった、更なる『内通者』への懸念。そしてその疑惑は不信感を生み出し、軋轢となって顕在化する。

「……一ついいですか」

再び北斗は声を上げると、本郷と柊へと目を向けた。

「……本郷さんと柊は、東帝の久世さんと協力して以前から極秘捜査を行なっていたそうですね……ギリギリまで我々への情報開示を遅らせた理由は何だったんですか？」

「……オレ達が疑わしいってか？」

あくまで冷静さは保っていたが、僅かに怒気の見え隠れする表情で訊き返す本郷。

「気を悪くさせたならすみません。ですが今はあらゆる可能性を考慮しておくべきだと思います。当然俺の事も疑ってもらって構いません」

「あー、ちよつと良いっすかレオさん。そりゃ俺らも勿論捜査課と共同の方が効率良いとは思ってましたけど、王我さんに止められてたんすよ」

その剣呑な声に怯む事も無く平然とそう応えた北斗へと、横から柊が弁明を述べる。

特務課が王我からの密命で動いていた事を明かされ、速水が腑に落ちたと言った様子で口を開いた。

「成程……ま、捜査課は局の中でもそこそこ規模がデカいからね。裏切り者にとつては格好の隠れ蓑だろうし、信用されてないのも無理ないよ」

誰もが疑心暗鬼に陥り掛けていたその時、それまで口を噤んでいた帯刀が不意に声を上げる。

「———この中には居ない可能性も当然あるだろう。考えてもキリが無い事に頭を使うより、今は持てる力全てを明確な敵にぶつける事に集中すべきじゃないか？」

「……ワキさんってめっちゃ冷徹人間みたいないな見た目で中身ガチ熱血キャラなのオモロいっすよね」

「それは良い意味で受け取って大丈夫か？」

「あ、ハイめっちゃ褒めてるっす」

帯刀の言葉にニヤニヤと笑いながら柊が同意し、速水や本郷達も表情に幾らか余裕が戻っていた。

しかし再び結束しつつあるその場の雰囲気とは裏腹に、依然として考えに耽るように

黙り込んでいる沢村。

もし仮に管理局内部にいないとすれば、協会上層部、もしくは東帝学園に、結社と協力関係にある人間が潜んでいる事になる。

内通者と六人の番号^{ナンバー}刻印。内側と外側から二つの脅威が迫っているこの状況の危険性を、沢村は強く感じ取っていた。



「……何で更科はあのデイエスって奴を庇ったんだろうな……」

「わっかんないですね……そもそも風ちゃんや彼と知り合いだった事に俺は驚きましたよ」

管理局の廊下を歩く結城と徹彦。作戦は終了し二人は学園へと戻る事になったが、風の身を案じる一方で新たに生じた疑念に考えを巡らせていた。

「お前は“研究所”に居た時に会った事は無かったのか？」

「見た事すら無かったです。多分、あんな強い術式を持たされてたなら、他の被験者との接触をかなり制限されてたんじゃないっすかね……」

「それならお前の術式も大概だと思っただけ……」

徹彦もまた凧やディエスと同様に術式移植実験の被験者であった過去を持つが、研究所時代に彼とは面識が無かった事を思い起こす。

「でも……そう言えば凧ちゃん、最近なんか考え込んでるコト多かつたっぽいですよ……時々フラつと消える事もあつたみたいですよ」

「……やっぱアイツが内通者で確定だと思うか？」

「じゃないとあの場面で彼を守つた説明がつかないでしょ。ただ……そうだとしても動機つつーか、理由が分かんないんすよね……」

凧とディエスの関係性について考えを巡らせている内に、何故彼女が結社に協力していたのかという最初の疑念に立ち戻る二人。

「……アランにも伝えとかねーとな……」

「……………」

結城のその声に応える事無く、徹彦は険しい表情のまま沈黙を貫いていた。



東帝学園にて。

東帝戦本戦トーナメントの三日目と四日目は、それぞれ3回戦・準々決勝と準決勝・決勝を行う為に、一日二試合と^{ダブルヘッダー}という過密日程が組まれていた。勝ち上がる程に出場者の体力面・魔力面での負担は大きくなるが、万全の状態で彼等が試合に臨めるよう医学科などによる手厚い回復支援が為されている。

そして、一年生の中で唯一ベスト8入りを果たした春川日向は――

「オイ……オマエそろそろ会場入らねエと間に合わねエぞ……」

「モゴモガまだモガモガ食えるモゴ」

―― 呆れる啓治達の前で、控室に注文した大量の出前メニューを爆食していた。

「あんだけ伊織と戦り合った後によくそこまでメシ詰め込めるな……」

「なんでテメエも当然のように食ってんだボケ」

「流石というか、普段通りの春川君だね……」

数時間前に伊織と激闘を繰り広げたにも関わらず、一切食欲の衰えない日向の胃袋と回復力に感心する沙霧。その横で出前のカツ丼を勝手に平らげている創来の後頭部へと、啓治が蹴りを入れていた。

そこから少し離れた場所では、伊織と天音がその様子を眺めていた。

「……悪かったな」

「え……？」

「……………アイツに勝てなかった」

「……………ひよつとして、私が言った事気にしてたの？」

不意に口を開いた伊織に対し、軽い驚きと共に彼の横顔に目を向ける天音。

「……………バーカ。アレは別に、私が勝手に言っただけなんだから……………アンタが気にする必要なんて無かったわよ」

試合前の言葉を気に留める必要は無かったと告げる天音だったが、僅かな悔しさが見える伊織の表情に変化は無い。

「……………私だつて、アイツに敗けた天城に勝てなかった。だから私も、春川に勝つ事をこれからの目標にする。私達の中で、今一番強いのは……………アイツだから」

「だな……………」

強い決意を感じさせる天音の声に、伊織もまた静かに頷いた。しかし彼女が浮かべていた、微かな感情に伊織が気付く。

「……………何だ？」

「いや……………アンタとはこれまで張り合う事が多かったから——」

そう言つて天音は、嬉しそうに微笑んでいた。

「——同じ方向を向いていられるのは……………ちよつと、嬉しい」

「……………何言つてんだ……………」

その笑顔に思わず一瞬言葉を詰まらせる伊織だったが、すぐに普段の冷静な表情に戻る。二人の様子にその場で唯一気が付いていた沙霧は、離れた場所で笑顔を浮かべながら彼等を見守っていた。

「さっすがにそろそろ行くか……………」

ラーメンを一気に啜り切つた日向はようやく食事を持ち上げると、会場フィールドへと向かうべく席を立つ。

「オイ、日向」

その背中に掛けられた声に日向が振り向くと、そこには彼を送り出す仲間達の姿があった。

「……………勝てよ」

静かながらも力強く伊織はそう言い放ち、天音はその隣で不敵に笑っている。

「ここまで来たら頂点搔つ攫つて来い」

「不甲斐無エ戦い見せやがったら承知しねエぞ」

創来と啓治もまたエールを送り、沙霧は小さく頷いていた。

「おう。行つて来る」

”最強”へと、駆け上がる。彼等から託されたその思いを受け取り、少年は戦いへと赴く――



7月19日、東帝戦四日目。

20時、第一演習場スタジアムバトルフィールドにて。

見上げると視界を覆うような夜空が広がっており、観覧席はベスト8の強者達に注目を寄せる観衆によつて埋め尽くされている。

「遅エぞ日向!!」

「ゴメンて……てか司って時間はちゃんと守るっつーか、その辺意外とマメだよな」
 「オイ反省してんのかテメー……」

到着早々蛇島に怒鳴られている日向だったが、その場には既に準々決勝へと進出した面々が集結していた。

「いや、やっぱナイターはワクワクすんね」

その傍らではアランが、照明に煌々と照らされる場内を見渡している。

東帝戦で行われるタッグロワイヤルや本戦トーナメントの大部分は日中に実施されるが、試合数やタイムテーブルの都合上四日目のトーナメント準々決勝のみが夜間に行われていた。

「見とつたで日向くん、伊織くんと中々エエ戦いしとつたなア。オレは多分今日で負けるやろけど、お互いベスト尽くそや」

「おー士門も残ってたのか!つかカード組み合わせつてもう出てんの?」

「なんや氣イ付いてへんかったんかい。上空うえ見てみ」

そこへ声を掛けて来た士門に促され、フィールドの直上に視線を向ける日向。

そこにあつた浮遊モニターの画面上には、準々決勝・準決勝、そして決勝と続くトー

ナメント表が映し出されていた。

第一試合、『天堂蒼』VS『風切アラン』。

第二試合、『春川日向』VS『諸星敦士』。

第三試合、『神宮寺奏』VS『如月士門』。

第四試合、『黒乃雪華』VS『蛇島司』。

「俺はアツシ君か！」

モニターを一瞥し振り返った日向の声に、諸星が眼鏡の位置を直しながら静かに応える。

「お前とは戦った事が無かったな。……如月と結城が敗れている以上、俺も本気で行かせてもらうぞ」

「あつたりめーよ。オレもガチで獲りに行くからな」

意気揚々と言葉を交わす日向だったが、その時最後の一人が会場へと足を踏み入れた。

「うーいお待たせお待たせーツと」

既にその場に揃っていた七人に目を向けながら、天堂 蒼が姿を現す。

『さアお待たせしましたツ!!東帝戦四日目「夜の部」、本戦トーナメント準々決勝!!いよいよスタートですツ!!』

『第一試合は天堂蒼VS風切アラン!!間も無く試合開始となります!!』

実況アナウンスが場内に響き渡る中、突然日向の近くへと一人の少女が歩み寄って来た。

「ねーねー、春川 日向くん。キミさ、蒼さんに勝ちたいんでしょ?」

「え?あー、うん。そだけど……アンタ誰だ?」

唐突に話し掛けて来たアランに対し、面識が無かった日向は僅かに面食らう。

「……あたしの戦い、よく観察しときなよ。あの人の手札、引つ張り出したげるからさ」

意味深な笑みを浮かべつつアランはそう言い残すと、日向の肩を軽く叩きその場から去って行った。

「何だあの人……」

アランの背中を不思議そうに見送っていた日向だったが、その横で彼女と同学年である土門が口を開く。

「アイツはオレらの中でも結構な変わり種やからな。中々オモロい戦闘モが見れると思うで」

「マジ?」



対峙する両者。

「……お前、今回は意外と戦う気なんだな」

「まーね。面白そうな一年君ルキたちに興味あったつても大きいかな。それと……」
そう言つてアランは、銃のような形を作った右手を差し向けた。

「……あたしが直接ダイ戦闘マン苦手と思つてんなら、思わぬ大ヤケドする事になるから気をつけなよ」

「クソ生意気な……」

大胆不敵な宣戦に対し、緩やかに一刀を抜き放つ蒼。

準々決勝第一試合。

『天堂 蒼』VS『風切 アラン』

『最強』と『未知』が、ぶつかり合う。

第44話『ワンダー・アンダー・ランダーズ』

「風切先輩の能力って結局何なんだ？」

「えっと……そんなに珍しい魔術はここまで使っていないみたいだけど……」

伊織の疑問に対し、沙霧が端末から学園の生徒情報データベースにアクセスしながら応える。

「つーかこんな時こそあの緑頭の出番じゃねーのかよ。アイツどこほつつき歩いてんだ？」

「確かに……そう言えば最近陣を見てないな」

仲間内でも随一の情報通である人物について言及する啓治と創来だったが、ここ数日彼は姿を見せていなかった。

「まあ一文字はともかく……風切先輩は春川とか神宮寺先輩みたいな前衛タイプでは無かったと思うわよ」

「天堂さん相手に近接戦の手札カードが無いのはかなり無謀なんじゃないか？流石に何らかの対策は取っていると思うが……」

沙霧と同様の端末画面へ目を通しながらそう口にする天音に啓治が言葉を返すが、蒼の弟子である伊織がふと声を上げる。

「……寧ろあの人に二対一で真つ向勝負仕掛けてもまず戦いにならねエだろ。絡め手主体で挑んだ方がまだ幾らか勝機はある」



「——開始早々斬り込んで来るかと思つたけど、思いの外慎重じゃないの」

ここちらの出方を窺うように、抜刀したまま動きを見せない蒼にアランが語り掛ける。

「オマエみたいな術師タイプと戦り合えるのも珍しいしな。わざわざ決着を急ぐこたアねエだろ」

「余裕だね。んじゃ、楽しんで行ってもらおうとしようか」

蒼の挑発的な笑みに対し、彼の周囲の空間をアランが指差した。

その瞬間——視界は突如暗転する。

「はアい一名サマごあんなーい」

アランの声が響く。

そこに広がっていたのは、何処かで視た方があるような。思い描いた事があるような景色。

「——あたしの力が映すのは……心の内側」

燃え広がる一面の炎から現れるのは——甲冑を纏った巨大な餓者髑髏。

「それが蒼さんにとつての、『絶対的な力』の象徴であり偶像^ジつてことね……あんな興味良くないな」

何処かから反響する、呆れたようなアランの声。潜在意識を投影し、他者の内在領域を引き摺り出す彼女の能力の名は——

「まア、何はともあれ……夢^{ワン}と不思議^{ダー}の心象世界^{ランド}へ、ようこそ」

——『幻術』。

火車を背負った骸武者の軍勢が、蒼へ次々と大太刀を振り上げる。

しかし、その斬撃が振り下ろされる事は無かった。

「そりやつまりただの……目眩し以外の何でもねエってコトだ」

振り抜かれた一刀。一瞬にして幻像を尽く斬り捨て、そう告げた蒼は——目を閉じていた。

『幻術はあくまで、視覚的誤認を誘発する力に過ぎない』。

圧倒的攻撃力と共に並び立つ、彼の戦闘能力の根幹を支えるもう一つの『武器』。蒼はその優れた魔力知覚のみで、空間を認識しアランに応戦していた。

「成程、ね……視なけりや問題無いと……」

歩を進める蒼に対し、アランは静かにそう零す。

「……古いね〜！その戦術観」

その瞬間、蒼の魔力知覚が感知した気配。

叩き斬られて尚、蠢き立ち上がる屍の群れ。そして再度振り下ろされた巨剣が、蒼の刃と激突し轟音を響かせた。

自身の手へと確かにのし掛かる、攻撃の『重量』。

「幻術は目だけと思つた？ 甘いよ」

意趣返しのように、挑発的な笑みを向けるアラン。

『魔力』に『仮想質量』を持たせ臨界させる事で、聴覚・触覚・そして魔力知覚をも欺く精巧な実像を創り出す。それは“可視化”のみならず、“実体化”する幻惑魔術。

無属性魔力×形成術式

『ファンタズマル幻質量』

「中々面白エ術式を……開発つて来やがったなア……!!」

豪撃を平然と受け止めながら、蒼は不敵に笑いその刃を撃ち返した。



「何だあのムチャクチャな魔術……何でもアリじゃねエかよあんなの……!!」

『実体を持つ幻像』の召喚という、あまりにも強力なアランの魔術に驚愕する創来。

「けど、あんなペースで『イリュージョン幻』を使ってたらあつという間に魔力切れになるんじゃない……」

「いや……当分は大丈夫だと思っ。多分あの人、意図的に魔力の配分を崩してる」

彼に続いて声を上げた沙霧の疑問に、フィールドを注視しながら戦闘を分析していた天音が応える。

蒼へと斬り掛かっていく、巨大な鬼武者の軍団。その実像を構成している内部の『魔力密度』を、アランは敢えて箇所によってバラけさせる事で最適な消費効率を保ち続けていた。

更に視覚を自ら封じ魔力知覚のみで相手を認識しようとしている蒼は、その密度配分の“陽動”によって、実体幻像の『核』を正確に捕捉出来ずを絞り切れていない。

卓越したパフォーマンスを見せながら複雑な術式を自在に操る、紛れも無い幻術の天才^{スペシャリスト}。その真髄を今、彼等は目の当たりにしていた。



「いいねいいね。湧いて来るよ創造性」
イマジネーション

蒼へ絶えず連撃を叩き込む骸武者の後方で、アランは掌に魔力を集め一つの球体を形成する。

「まごころ第一球、振りかぶってエ……投げましたッ！」

そしてアランはその魔力球体を、蒼目掛けて投げ放った。

飛来するそれを迎え撃つべく、餓者髑髏を軽々と押し返した蒼は刀を構える。しかしその球体は突如、空中で粉々に砕け散った。

「……………」

意図の読めない攻撃に一瞬疑問符を浮かべる蒼だったが、すぐにアランの狙いを察知する。

空間中に散らばった無数の破片が、気付かぬ内に彼の周囲を覆い尽くしていた。

魔力による慣性干渉と軌道制御。そして空を掴むような彼女の手掌操作によつて、そ

れら全てが蒼へ襲い掛かる『刃』と化す。

無属性魔力×形成術式

『スクランブル集束点・”サイキョク砕玉”』

上下前後左右、360。全方位から迫り来る鋭利な魔力の欠片。その包囲攻撃を、目にも止まらぬ無数の連斬で一つ残らず叩き落とす。

しかしその隙にアランは、更なる追撃の術式を構築していた。

重ね合わせた両の掌に反応するように、創り出される二つの魔力領域。幻術が生み出す空間は、存在する筈の無い『非合理』をも現実として描き出す。

”無属性”魔力×形成術式

『エレメンタル幻霊属性・”ブレイズフロスト氷 焰”』

それは”燃え上がる冷氣”であり、”凍て付く熱波”。認識に干渉する事でアランの幻術は、無属性魔力から架空の属性を創り出す事も可能としていた。

相反する性能を宿した二つの魔力が、左右から蒼を挟撃する。『砕玉』を迎撃した直後の急襲を咄嗟の魔力盾展開によって防ぐが、アランの波状攻撃は着実に蒼を押し込み始めていた。

しかし。

「まだだ……もつと、見せろッ!!」

東帝最強の男の、戦いへの欲望に際限は無い。

蒼の刀刃から撃ち放たれた魔力斬撃は、『冰焰』諸共骸武者を豪快に吹き飛ばす。

「全く欲張りだね……分かった分かった。遊んであげるよ、お望み通り……!!」

対してそう応えたアランは、再び『幻質量』ファンタズマルによって形成された無数の実体幻像を召

喚した。

——— 斬撃によって防衛出来^{カバ}る範囲には限界がある。蒼の殲滅能力をも上回る、『攻撃総量』で圧倒し削り切ろうとしていたアラン。

そして彼女が見出したその勝ち筋を、蒼もまた当然看破していた。

次々と迫り来る武者の猛攻を、手当たり次第に斬り飛ばしていく。互いに別ベクトルの突出した戦闘技能を持つ蒼とアランだったが、魔力保有量に於いては実は拮抗してお

り両者の差はほぼ無かった。

両手から投射した魔力による斬刃を躲し、捌かれたアランは、ふと攻撃の手を止めると蒼へ向き直る。

「どうした。もう終わりか？」

「はー……………仕方ないなア。ここまで来たら……………見せたげるよ、とつておき」

ここに来て初めてアランが明かした、更なる『奥の手』の存在。満を辞して解禁されたその魔術は、発動すると同時に周囲の空間を再び創り換える。

炎に揺れる戦場から一転したその場所は——

——止まない雨の降り続ける、一つの街だった。

『エクトプラズマ幻創領域』

それは、そこに確かに“存在”しているかのような質感を持った『世界』。『認識』が『現実』を侵食していく魔術領域の中で、蒼はビルの壁面に立つアランと相對する。

「また随分と……大掛かりじゃねーか」

「蒼さんを抑えとく為の『檻』だよ。どうせコレでも足りないんだらうけど……」

そう言つてビルから降り立つたアランは、屈み込むと右手を地へと突き刺した。水面のように揺らぐアスファルトから引き抜かれた、その手に握られていたのは一振りの刀。

蒼と対峙する少女は、駆け出しその刃を振り翳す。

繰り出された斬撃は、空を裂く爆発的な剣風を巻き起こした。吹き飛ばされた蒼は、海底に浮かんだ空へと沈んでいく。

規格外の膂力と、理解の範疇を超えた空間。

広大な術式範囲を誇るこの世界に於いてのみ、アランは法則すらも自在に操る万能の存在となる。

振れる列車、引き延ばされる建物、裏返る交差点。展開される『歪んだ街』が、空中の蒼を押し潰すべく襲い掛かる。

絶対的勝利を齎す最強の武器も、魔術である以上イメージが無ければ実現する事は無い。起こる事象全てがアランの想像性に委ねられたこの世界で、その術式を発動出来るのか。

———そんな疑念は、蒼の頭には僅か足りとも存在しなかった。

彼の思考に存在し得るのは、勝利という結果へ至る道筋のみ。

全方向から押し寄せる『街』を、球状に展開した盾で防ぎ止める。そしてその数秒の内に、蒼の刀には膨大な魔力が充填されていた。

『斬界』の術式構築には魔力圧縮の為の時間が足りないが、ならば必要な“威力”を“手数”で補えば良い。その術式は、彼が弟子へと授けた『魔術剣技』。

無属性魔力×形成術式

『飛斬・双連』

超剣速によって全く同時に撃ち出された、二つの斬撃が迫る包囲を十字に引き裂き消

し飛ばす。そして斬り開かれた突破口の先には、この領域を創り出した術者の姿があつた。

彼女を視認すると同時に、高速移動を発動し瞬く間に空間を駆け抜ける。驚異的な速度で一氣に距離を詰めた蒼の刃が、容赦無くアランへと振り下ろされた。

しかしその剣撃は、彼女の身体を通り抜ける。

（デコイ 囷か——!!）

幻像によつて誘き出されたと、即座に察知する蒼。しかしその幻術には、更なる罠が仕込まれていた。

斬り裂かれたアランの姿が、霧散し別の術式へと変形する。そこから現れた無数の魔力帯によつて、その刀身は一瞬にして縛り上げられていた。

無属性魔力×形成術式

（チェインバインド 『連縛』）

『幻像への攻撃』という条件を満たし作動した拘束術式が、蒼の武装を封じ込める。そしてその時アランは既に、遙か後方で最後の術式一撃を完成させていた。

「……………Check」

魔力によって形成された『弓』の、引き絞られた弦がその手を離れる。

無属性攻撃術式

ストライクシューター
『破撃弓』

放たれた必殺の一矢が、凄まじい速度で蒼の背後に迫る。

（射線が通った——）

（決まる——！）

最後の一手まで隠していたアランの遠距離^{飛び道具}攻撃に、天音と沙霧は瞠目していた。回避
不能なタイミングで、死角から撃ち込まれた一撃。

しかし、直撃の寸前。

——その魔力の矢は、阻まれる。

「ッ!？」

完全に虚を衝いた筈。

瞬時に考えを巡らせるアランの視線の先では——蒼が振り返りすらせず、首の後ろへ魔力障壁を展開し防御していた。

刃に絡み付く拘束帯を強引に斬り裂くと、再び発動した『瞬間』^{ソニック}によってアランの眼前に姿を現す。

「……人間の反射神経じゃ説明つかない反応速度だったね……」

「お前の用心深さを相手^{オレ}が理解してるってコトも、頭に入れとくべきだったな」
溜息混じりにそう零すアランへと、鋒を突き付ける蒼。

幻像による陽動、武装の制限、死角からの急襲。何重にも張り巡らされたそれらの策全てを先読みし、予め対応手段を用意していた。

戦略を上回る戦略が、そこには在った。

「はー……はいはい参った!あたしの負け!!」

その宣言と共に、戦いが決着する。

風切アラン、準々決勝敗退。

天堂蒼、準決勝進出——



”自分の領域”^{フィールド}、”行動予測”、”勝利への戦型”^{パターン}。
恭夜から教わった戦術全てが、この二人の戦いには詰まっていた。

「つし……………行くか」

ゲート前通路の壁面モニターを見上げていた日向は、ベンチから立ち上がると歩き出す。

(まずは……………一つずつだ)

階段を昇り戦場へと上がって来た日向を待ち構えていたのは、『軍師』の異名を持つ実力者。

準々決勝、第二試合。

『春川 日向』VS『諸星 敦士』

烈戦の火蓋が、切って落とされる。

第45話『軍師』

先に動きを見せたのは、日向。

試合開始と同時に、地を蹴ると上空へと跳躍する。冷静に術式を構築する諸星へと、先制攻撃を撃ち込むべく双腕を振り抜いた。

火属性攻撃術式

『戟衝破・双連』

放たれた二つの熱線は魔力による防壁を一瞬で打ち破るが、僅かに威力が落ちたその攻撃を諸星が蹴りで迎え撃ち叩き散らす。

「まだまだア!!」

そのレーザーを見せ技に、日向は左脚へと収束させた魔力を術式に換えて蹴り込んだ。

火属性魔力×形成術式

『大輪破』

追撃の炎輪をスウェーで躲した諸星は、その背後で形成していた無数の魔力弾を一気に撃ち放ち反撃する。

無属性魔力×形成術式
チェインブラスト
 『連弾』

開始早々に、激しい乱射戦撃ち合いを展開する両者。しかし弾幕に包まれた筈の日向の姿は、無数の弾丸に穿たれた制服をその場に残し空中から忽然と消えていた。

装衣を囷として敵の攻撃を回避する体術。忍法『空蟬』。

そして後方に出現する、収束した膨大な魔力の気配。渾身の一撃を叩き込むべく日向は、高速移動で相手の背後を取り肉薄していた。

火属性攻撃術式

『爆皇破』

発動する超火力攻撃。対して諸星は――

◇◇◇

旧校舎裏スラムにて。

東帝学園に属する生徒達の中でも、一大派閥を形成する不良集団『大文字一派』。彼等

の多くが一堂に会し、騒がしく語り合いながら一つの映像を注視している。

映写機から巨大な壁面へと投影されていたのは、現在演習場スタジアムで繰り広げられている日向と諸星の戦闘中継だった。

集結している不良達の中でも、一際強い存在感を放つ四人の二年生。中央のソファに座る壬生 閃九郎と愛染 光陰、そして積み上がった廃材ジャンクの山に腰掛けている斯波 一太郎と鬼丸 コージ。

彼等は大文字一派でトップ3である獅堂達三人の三年生に次ぐ、学園内でも屈指の実力者だった。

「やっぱ強エな、春川……!!」

「……そのキミは、日向君が勝つと思うかい?」

周囲の不良達の中で、ふと声を漏らした一年生らしき少年の声に愛染が反応する。

「あつ、いや……諸星先輩が敗れるとか、そんな事は全く思っていないんですけど……正直言って、春川とか御剣は一年オレの中でも頭一つ抜けてると思うんで……」

「近接戦クロスレンジじゃ敦士先輩に分が悪いんじゃないかねエか、ってか? つか……なんも分かってねーなオメーらは」

「つってもまあまだ新入り^{一年坊}だしな。知らねエのも無理ねエだろうよ」
 頭にバンダナを巻いたその少年の意見に鬼丸が呆れたように言葉を返すが、斯波が愉快そうに笑いながら彼を諫めていた。

「……技巧派^{テクニカル}なイメージが先行してんだろオが——」

そして刀を抱えた壬生が、壁面の映像に目を向けたまま口を開く。

「——あの人は元来、ゴリゴリの武闘派^{インフアイター}だ。殴り合いはクソ強エぞ」



叩き込まれた筈の、爆炎の剛拳。

しかしその一撃が届くより速く、日向の身体は吹き飛ばされていた。

正確無比なカウンターの後ろ回し蹴り。

射撃魔術で相手を釣り出し、背後からの攻撃を敢えて『誘導』して近接格闘で反撃す

る。高度な『予測』によつて成り立つその戦術は、単純ながらも極めて強力だった。

「クツ、ソガツ……!!」

(完ツ全に、読まれた……!!)

悪態を吐きながらも、咄嗟に体勢を立て直そうとする日向——

——の、顔面を容赦の無い衝撃が再び襲う。

「ッ!?!」

理解するよりも先に、日向は後頭部から地へと叩き付けられた。

疾走して来た威力を余さず乗せた、鋭くも豪快な膝蹴り。相手に隙を与えない連続追撃が、次々と日向へ撃ち込まれていく。しかし学園内でも指折りの体術使いである、日向の実力もまた伊達では無い。

攻撃と攻撃の隙間、諸星の僅かな予備動作を阻害する牽制の蹴りを放ち、そのまま大きく距離を取る。

「痛つてーな……ハナ折れちゃったぞコノヤロー」

少し曲がった鼻を力技で元の位置へ戻すと、再び突撃を仕掛けるべく駆け出した。そして交錯の寸前、再び掻き消える。

しかし真横に現れた日向の攻撃もやはり回避され、代わりに諸星の三連撃が叩き込まれた。

鼻柱、顎下、鳩尾。正中線の急所を的確に撃ち抜く拳撃。更にそこから畳み掛けるように、周囲全方位に展開していた魔力弾丸を収束させるような軌道で撃ち込む。

「……お前は近接戦では絶対に真正面からは仕掛けて来ない。が……それはつまり、死角に防御を回しておけば大方は対応出来るという事だ」

『必ず真横もしくは後方から攻めて来る』と判っていれば、直線的な攻撃よりも寧ろ却って回避は容易い。

諸星の静かな独白に対し、日向は全身に連弾を浴びながらも辛うじて包囲網から飛び出していた。



「何をやってんだアイツ……いきなし出バナ挫かれてんじゃねエか……!!」

「まだ始まったばかりか……ここから巻き返して来るだろ」

序盤から怒涛の展開を見せる両者の戦闘に、啓治は苛立たし気に呟くが創来は日向が持ち直すと予想していた。

しかし現状では、オーソドックスながらも弱点の無い安定した戦闘スタイルの諸星へと戦勢は傾いているように見える。「弾」や「盾」といった魔術戦闘の基盤技術のみならず、肉弾戦に於いても卓越した技量センスを持ち併せており付け入る隙は一切無いと言っている。

（総合的な戦闘技術なら間違いないが諸星先輩だけ……振り幅を考えるなら、春川が勝つ可能性も十分ある……！）

日向の戦闘能力は、コンディション状態と状況によって大きく変動する。勝敗の分かれ目は、日向が諸星の計算を上回る『進化』を戦いの中で起こせるかどうか。カギを握るのはその一点だと、天音は戦場を見下ろしつつ考えを巡らせていた。



「クッソ……」

魔力弾掃射を紙一重で躲し切った日向は、滴る血と汗を拭いながら前方を睨んでいた。

(こつちからは一発も当たらねエってどういうこつたよ……!!)

——あらゆる戦闘行動が先読みされ、次の一手を尽く潰される。思考を見透かすかのような諸星の分析力を前に、日向の攻撃力は完全に封じ込められていた。事実諸星は、これまでの戦いで日向が見せた全ての技を研究して来ていた。

基本技の『炎撃』と『炎刀』。

『戟衝破』は速度はあるが決定力に欠け、『散輪破』は炎輪の軌道制御が不安定な為手数重視の陽動用。

『大輪破』と『豪嵐破』は威力はあるが速度が無い為回避が容易く、主に地形破壊に用いられている。

そして『爆皇破』は日向の全術式中最高火力を誇るが、構築時の隙が大きく『忍法』や高速移動と併用される事が多い。

ここまで徹彦、亜門、伊織といった強敵を相手取って来た日向は、緻密な戦略を立て戦いに臨むタイプ術師の諸星に対しあまりに手の内を晒しすぎていた。

「フリー………よし、やめだ」

「……？」

その時、日向が唐突に放った声が諸星の足を止める。

「……どうせ全部読まれるなら、もう小細工は使わねえ。こっからは……魔術一本で勝負する」

「ほう………アドバンテージ自分の武器を棄てるという事か」

日向のその宣言の意味を理解した諸星は、小首を傾けながら言葉を返した。

これ以上囿や陽動を多用しても、全てを分析する諸星には意味を成さない。ならば、捨てる。

日向は最も得意とする戦術である『忍法』と『武闘』を融合させた隠密格闘術を使わず、魔術のみによる真つ向勝負で諸星に挑もうとしていた。

掌へ打ち合わせた拳から、全身へと展開されていく蒼色の炎。

火属性魔力×強化術式

『形態変化・斬蒼炎』

「……………それがお前の切り札か」

鋭く輝く刃の如き炎を纏う日向に、諸星が眼鏡の奥で僅かに目を細める。

「正面から——ブチ、抜く」

日向はそう言い放つと同時に、予備動作無しで爆炎を放出しながら地を蹴った。

一直線の最短距離を、一瞬で駆け抜ける超高速突進。そして斬炎を宿した諸手の拳撃が、唸りを上げて突き込まれる。

火属性攻撃術式

『瞬迅』双烈破』

吹き抜ける熱風と、衝撃。

「大した速度だ。だが——」

その猛炎を前にして尚、諸星は平然とした様子を崩す事無く静かに開口する。

「……………対策を取っていないと思っただか？」

無属性魔力×形成術式

『双盾』

日向が叩き込んだ渾身の双撃を、展開された二重の魔力障壁が受け止めていた。その凄まじい攻撃速度に対して、完全に防御のタイミングを合わせて来た諸星。しかし。

「んなこた最初から織り込み済みだ」

不敵に笑った、その瞬間。

受け止められていた日向の双拳から、二発の戟衝破が撃ち放たれた。零距离から炸裂した爆速の熱線は、魔術防御ごと諸星を押し込み吹き飛ばす。

「クツ……………」

（速度、威力……………性能上昇が著しい。全ての術式が強化されていると考えて良さそうだな……………）

超至近距離からの砲撃を受けつつも『斬蒼炎』の術式効果を分析する諸星へと、更な

る追撃を仕掛けるべく日向が再度駆け出した。

突撃しながら同時に放たれる、五発の戟衝破。その内急所へ迫る二発を魔力盾シールドで防ぎ、残りを身体操作のみで回避する。

空中で不安定な体勢ながらも全ての追撃を捌き切った諸星だったが、その時既に日向は彼の眼前まで距離を詰めて来ていた。

日向の右腕へと収束する蒼炎の魔力。炎拳を迎え撃つべく諸星もまた、右の拳へ魔力を集め即座に『ストライク撃』を発動する。

違和感。

斬蒼炎を纏った日向の速度スピードなら、諸星の迎撃を相殺する事は可能な筈。

——ならば何故、諸星の反撃の方が先に到達しようとしているのか？

(ツ)—— (!!)

その狙いを察知した瞬間に、互いの拳撃は交錯する。

意図的なタイミングのズレ。

敢えて攻撃を1テンポ遅らせた日向に対し、僅か一瞬速く攻撃を打たされた諸星は反撃に対応出来ない。

火属性魔力×強化術式

『瞬間』炎撃』

撃の軌道を見切り躲した、日向のクロスカウンターが突き刺さる。遂に渾身の一撃が、諸星の頬を捉えた。

（入った——！！）

「マジか……！！」

スラムでは愛染が目を見開き、斯波が驚きの声を上げる。

叩き飛ばされた諸星は、切れた口の端の血を拭いながら立ち上がっていた。

「先読みは……アンタだけの武器じゃねエ」

『体勢を崩された諸星は、ノータイムで反撃を繰り出して来る』。 ”予測” に基づき『後の先』を取る諸星と同様の反撃戦型を、日向は戦いの中で体得していた。

「……俺の攻撃が先に届くよう誘導したワケか。悪くない発想だ」
「んなクソ余裕かましてられんのも今の内だけだ」

相対する二人は言葉を交わすと、高速移動を繰り返し同時に掻き消える。

現れては消え、衝突する両者。魔力波動が空間に散る中で、彼等の戦闘速度は更に引き上げられていく。

しかし展開される高速戦闘に於いて、亜門にも匹敵する瞬間速度を誇る日向の近接格闘は次第に諸星を上回り始めていた。

分析され防御・回避されようとも、その上から密度で圧倒する超連撃。烈火の如き猛攻に少しずつ押し込まれていた諸星へと、薙ぎ回すような日向の蹴撃が叩き込まれた。

防御体勢の上から吹き飛ばされるも、両足で地を削りなんとか立て直す。その時日向は高速移動を発動させ、周囲の空間全方位を跳ね回るようにして諸星を包囲していた。それは亜門が見せた、超速一撃ヒットアンドアウェイ離脱の応用。

目にも留まらぬ立体機動に追い込まれていく諸星だったが、その表情に変化は無い。

「一撃で片アつけてやる……!!」

「面白い……受けてやる」

日向の一発KO宣言に、諸星は不敵に笑い返す。

そして――

――空を駆ける、爆炎の一撃が撃ち込まれた。

◇◇◇

全身に蒼炎を纏った日向が、弾丸の如く突撃を仕掛ける。

真っ向から疾駆するその姿に――

――観戦していた蛇島は、その戦いの結末を確信した。

攻撃経路を一本道に絞り、純粋な速度勝負で決着をつけようとした日向。斬蒼炎の加
速力ならば、諸星が防御を展開するよりも速く仕留められると恐らく判断したのだろ
う。

ただ一つ、誤算があつたとするならば。

東帝学園の中でも、特に魔力知覚に長けた魔術師は“二人”いる。その内一人は、広大な索敵範囲を誇る天堂蒼。そしてもう一人は――

(精度に関しては……天堂より敦士アイツの方が上だ)

――一定範囲内の全魔力を、極めて精密に感知出来る諸星敦士だった。

目元へと魔力を集中させ、術式を発動する。

無属性魔力×強化術式

『センサー覚』

魔力によって強化された、諸星の視力と魔力知覚。

斬蒼炎の驚異的な攻撃速度を以てしても――『真正面』は、完全に諸星の『反応可能領域』だった。

轟音。

高速移動と共に繰り出された、瞬迅爆皇破。その一撃を掻い潜った諸星の、反撃カウンターの掌底が日向を叩き伏せていた。

「ガッ……………!!」

痛烈な一打を受けながらも、飛びそうな意識を気力で保ち起き上がろうとする。しかし——

「終わりだ」

その場から消える、諸星の姿。

瞬間、空を見上げた日向の腹部へと。踏み潰すようなドロップキックが、上空から叩き込まれた。

「ガハッ——」

自身の骨が押し折れる音、吐き出される夥しい量の血。

魔力で強化された諸星の両脚は、戦場を砕き割る程の凄まじい衝撃を炸裂させる。

爆煙が立ち昇る、ヒビ割れたフィールドの上で。首元を掴まれ、吊り上げられた日向の手は——力無く垂れ下がっていた。

「10カウントは……要らないな？」

諸星の声に、返答は無い。

観衆が息を呑む中で、戦いは凄絶な決着を迎えた。

諸星敦士、準決勝進出。

春川日向、準々決勝敗退——



ここまで快進撃を続けて来た日向の敗北を受け、スタジアム演習場各所で多くの人間が少なからず衝撃を受けていた。

「マジか……………」

愕然とした表情で唸る創来。あまりにも呆気無い幕引きに、伊織達もまた言葉を失っていた。

「ま……………妥当な結果だわな……………」

「諸星クン、座学はともかく実技では全然本気出さへんからなア……………」 8位” も実際サバ読んどるやろアレ」

一方で湊や亜門達は、然程驚いた様子も無く戦場を見下ろしている。常日頃から『風紀委員会』として『大文字一派』と交戦している彼等にとって、諸星が順位以上の実力を有している事は周知の事実だった。

「エッグいね……………アツ君……………」

「……………」

凄まじい威力を見せた諸星の最後の攻撃に、苦笑を浮かべる千聖と沈黙する未来。

「陽動射撃の魔術戦で誘き出して、自分近接戦の土俵闘に引き摺り込んだ……………終わってみれば、敦士の完勝だったわね」

「日向も一年にしてはよくやった方でしょ……」

頬杖を突きながら冴羽がそう口にするが、久世は健闘を称えるように言葉を返す。

「……………行くか」

そして席を立った蒼はその場に背を向けると、ステイプを伴い歩き出した。

第46話『蛇の道』

夜、魔術都市歓楽街エリアにて。

「オイもつと飛ばせよ!!司さんの試合始まつちまうぞ!!」

「わーかつてら焦^{あせ}らすな!!つか最初に空き時間でラーメン行きてエとか言い出したのはオメーだろがイ!!」

鬼丸が運転するバイクの後部座席で、急かすように斯波が声を上げている。スラムで東帝戦を観戦していた彼等は、諸星の第二試合終了後魔術都市へと繰り出していた。

「まさか第三試合がここまで早くケリが付くたアな……」

「だね。瞬殺だったみたい」

騒がしい二人の横では、同様にバイクを走らせる愛染が後ろに座る壬生の声に応えている。



『神宮寺家』

国内最大の魔術旧家であり、日本魔術界に於いて絶大な影響力を有する一族である。百練の武技の使い手として知られる達士『神宮寺 叡山』。

魔術科学の若き権威『神宮寺 時雨』。

藤堂流、如月流の二大流派を極めた劍豪『神宮寺 澄香』。

分家筋すらも優れた才覚を誇る人間を多く輩出して来た、生粋の『魔術師』の血統。その名門に生を受けた『神宮寺 奏』は、生まれながらに魔力保有量が少なかった。

魔力量とは、その人物が秘める術師としての実力の指標そのもの。属性性質すらも与えられず、魔力を多く持たない人間に神宮寺家での価値は無い。しかし、彼女に『欠陥者』の烙印が押される事は無かった。

奏が有していた力、それは――

――類稀なる『身体能力』と、強靱な『肉体』。

近接戦闘能力も必要とされる現代魔術師にとって、その力は凡庸な人間には得難い『才能』であった。



東帝戦、準々決勝第三試合。

『神宮寺奏』VS『如月士門』。

卓越した格闘術と剣術を以て風紀委員会を束ねる『剣鬼』と、学園最速の『風神』に匹敵する力を持つとされる『雷神』の戦いは——瞬殺と呼ぶに相応しい決着を迎えた。

試合開始直後。

短期決戦で勝負を決めるべく、形態変化を発動しようとした士門。雷属性術式の構築に要した、僅かな時間。その一瞬の隙を、奏が逃す筈は無かった。

雷鳴すら凌駕する、超速の一閃。振り抜かれた居合の一刀は、魔力が収束しつつあった士門の胸元を深々と斬り裂いていた。

「……………遅い」

「もうちよつとありますやん……手心とか……」

倒れ伏す士門へと冷淡にそう告げた奏は、鞘へとその刃を収める。

如月士門、準々決勝敗退。
神宮寺奏、準決勝進出。



「いやー……あそこに立ってんのがオレ達じゃなくて本当に良かった」

「もうアレ容赦無いかかそういう次元とちゃうやろ……」

フィールドに転がっていた士門が回収されていく様子を、湊と亜門は同情するように見下ろしていた。

「そーいや……ハルと絵恋はどこ行ってん？」

「そりや当然、先輩の応援だろうよ」



「気を付けて下さい、会長。あの男の事です、きっと悪辣な奸計を巡らせて来るに違いありません」

「んもおく心配しなさんなってハルう。どーせ雪華が勝つかからさあ」

「副会長はちよつと、黙ってて下さい……!」

蛇島との第四試合へと向かう雪華を送り出すべく、千聖・ハル・絵恋ら生徒会メンバーが彼女の元を訪れていた。注意を促していたハルだったが、千聖に抱きつかれ鬱陶しそうに押し退けている。

「蛇島先輩は手強いでしょうけど……頑張ってください」

「ありがとう、絵恋。ハルも、心配してくれてありがとう」

絵恋からの言葉を受け取った雪華は、入場ゲートへ赴くべく歩き出した。



中央フィールドへ続く通路を進んでいた蛇島だったが、ふと廊下の壁に背を預けていた一人の人物の姿に目を留める。

「……お前がここまで積極的な姿勢を見せるとはな。正直、意外だった」

「るッせエなア……あの獅堂しかたかが寝てる以上、俺達わががやるしかねエだろオがよ」

声を掛けて来た諸星に応えながら、彼の前を通り過ぎる蛇島。

「旧家連中にも生徒会連合にも、もう一度理解させとく必要がある。俺達の力と……アイツらの下らねエ体制の、脆弱さをな」

そう言い残した蛇島は、歩を止める事無くゲートの先へと向かって行つた。

◇◇◇

そして始まつた第四試合。

『黒乃雪華』VS『蛇島司』。

その戦いは奏と士門による第三試合とはまた別の、意外な展開を見せる事となる。

フィールドの端から端まで吹き飛ばされるも、魔力によつて創り出した冰山に着地し体勢を立て直す少女。その眼前に立ちはだかつていたのは——

——暴れ弾ける魔力を纏つた斧刃を手にした蛇島だつた。

「……………」

蛇島は口を開く事無く、一つ首を鳴らすと再び地を蹴り疾駆する。振り抜かれた片手斧から繰り出されるのは、荒れ狂う魔力斬撃の嵐。

無属性攻撃術式

『セイバーツイスター
刃廻乱』

雪華は氷属性を帯びた防壁を展開するが、蛇島は既に脚力強化によつて跳躍しつ
つ再びその斧刃を振り上げていた。

無属性攻撃術式

『ギガントキリンジ
巨人殺斬』

片手斧に纏われた魔力が形成していく、追撃の巨刃。対する雪華もまた、斬り上げる
ような大鎌の一撃で迎え撃つ。

氷属性攻撃術式

『アイシクルセイバー
氷斬鎌刃』

空中で衝突する双撃。

”因縁”を持つ二人の戦いは、互いに一步も退く事無く更に加速していく。



「——ッ……!」

鈍い痛みと共に、覚醒する意識。

第三試合で諸星に敗れ気絶していた日向は、スタジアム演習場の医務室で目を覚ました。

「日向君……!もう意識が戻ったの……!?」

「おお、居たのか未来さん。うん、なんかアバラがクソ痛エけどまあ、大丈夫」

ベッドの傍らで治療を行っていた未来は、起き上がったて来た日向の様子に目を見開きつつも通信デバイスで医療主任の篠宮と連絡を取る。

「あ、楓さん。日向君もう目が覚めたみたいです。……はい、私も驚いています」

その異様なタフさに通話口の篠宮も驚愕していたようだったが、ひとまず安静にして彼女の到着を待つ流れとなった。再びベッドに寝転がった日向だったが、ふと壁面に掛かったモニターの映像に目を留める。そこには現在スタジアム演習場で進行中の、雪華と蛇島による第四試合が映し出されていた。

「今戦つてんのはあの二人か……」

中継を眺めている日向の横顔を傍目に、治療を続けながら未来が口を開く。

「日向君も惜しかったね……一年でベスト8まで行けたのもそうだけど、諸星君とあそこまで戦えてたのは本当に凄いと思うよ」

「うん、ありがと。つつても正直完敗だったわ。……また鍛え直してくよ」

そう応える日向だったが、雪華達が繰り広げる戦いに目を向けながらふと未来へ問いを投げ掛ける。

「それよりさ……司って、あんな強かったのか？」

「ああ、そっか。日向君は多分知らないよね」

その視線の先にあつたのは、学園”2位”の実力を持つ雪華を相手に互角以上に渡り合う蛇島の姿。彼の強さは理解していたつもりだったが、その戦闘能力の高さを改めて目の当たりにしている日向に未来が意味深な言葉を放つ。

「私達の代で、三強って呼ばれてる三人のことは知ってるよね？」

「あーうん。確か……蒼と雪華さんと、あと獅堂だろ？」

「そうそう。だけど、私達がまだ一年生だった頃は——」

そして未来の口から語られるのは、志を抱き東帝の門を潜った彼等の『過去』。

「——そのビッグ3の内の一人が、雪華ちゃんじゃなくて蛇島君だったの」



二年前。

「ゆーきーかーっ♪」

「おはよう、千聖」

学園前の街道を歩いていた黒髪の少女、『黒乃 雪華』。彼女に背後から抱き付いたのは、パンダを模したパーカーを羽織った少女『白幡 千聖』だった。

「入学式の挨拶、やっぱキンチョーした？」

「うん、まあ少しはね。無事に終わってほっとしたわ」

「まーたまたあ。首席の余裕が滲み出ちゃってますよお？」

入学試験でトップの成績を収め、先日の式典にて新入生代表挨拶を務めた雪華。千聖に軽く茶化されながらも、二人は桜並木に囲まれた正門通りへ入って行く。

「あたしのクラスでね、むっっちゃ可愛いコいんの。多分雪華とおんなじくらいモテてるよ。髪はふわっふわで胸もデカかったし」

「朝から何言ってるの……」

「や、マジで。ぶっっちゃ感触的にDはあったよ。アレでまだ伸び代^成あり^長そう^中なの^っが未^ぽ

来の恐ろしいとこだね」

「私に紹介するよりまずその子に謝りなさい」

彼女達と同様に、真新しい制服に身を包んだ初々しい多くの生徒が登校していたが――

――その時。

遠方から聞こえて来た、謎の破砕音。

「…………え、何の音コレ」

続けて学園の方角から伝わって来る微かな魔力の余波に、何らかの事態発生を感じ取った周囲の生徒達が次第に騒めき始める。そんな中、向こうから走って来た事情を知ると思いき一人の男子生徒が、息を切らしながら声高に叫んだ。

「喧嘩だ喧嘩!! 一年が二人、正門広場で戦^やり合ってる!!――『蛇島』と『天堂』だ!!」



女子生徒達の悲鳴と、魔力による斬撃が飛び交う正門広場にて。

吹き飛んで来た茶髪の少年の身体が激突し、広場の噴水がへし折れる。その付近の正面ロータリーへ轟音と共に着地したのは、片手斧を担いだ白髪赤眼の少年。

「テメーのツラと名前は知ってんぞオ!!随分とハバ利かせてるらしいなア、おオ!?!天堂蒼イ!!」

「そういう熱烈なアプローチは女からしか受け付けてねーんだわ。つーか反射シールドは反則じゃねーか?」

荒々しく叫ぶ『蛇島 司』の声に、瓦礫の中から平然と起き上がりつつ『天堂 蒼』が応える。彼等二人は入学時に筆記試験と同様に行われた魔術技能試験魔術試験にて、首席の雪華をも凌ぐ成績を収めていた鳴り物入りの“新星”だった。

「誰か終先輩か一条君連れて来なさいよ!!早く!!」

「トシさんは屋上だろうけどカズヤはこの時間まだ寝てんじゃねーか?」

「オイ!!なんかスラムでもつとんでもねエ一年が暴れてるらしいぞ!!一人で五十人くらい薙ぎ倒したライオンみてエなデカブツがいるってよ!!」

「なんソレ比喩?」

「いやマジで。ホレ、ムービー動画」

「あーイーナルホドまんま猛獣だわコレ。うーわ片っ端からノされてんな。悲惨」

「どいつもコイツも怪物バケモノすぎんだろルーキー世代……こんなんでも東帝ウチは大丈夫か……？」

「今年は特に収集つかなくなりそうね……」

「久世テイT達に頑張ってもらうしかないでしょ……」

「昴さん居た頃は平和だったな……戻って来てくんねエかなア……」

蛇島と蒼が乱戦を繰り返している周囲では、歓声を上げる者や鎮圧出来る人間を呼びに行く者など、上級生達が多様な反応を見せている。

鮮烈なデビューを飾った二人を筆頭として、彼等新世代は目覚ましい活躍と共にルーキーイヤーを駆け抜けた。

東帝戦では、蛇島の『反射術式リフレクトフォーミュラ』を破るべく、術式切断術式』『斬界』を開発した蒼が、一年生としては若狭憲吾以来十一年ぶりとなる個人戦優勝を成し遂げる。

一方で雪華と同様の高い実務能力を見出され抜擢された『綾坂 未来』と『神宮寺 奏』の三人が生徒会役員に選任され、また絶対王者の蒼と引き分ける程の“怪物”『大文字 獅堂』を始めとした実力者が学年全体を牽引した。

しかし――

――学園の影で、悪意と陰謀は蠢く。

◇◇◇

魔術都市、某所にて。

「『表』の人間というのは、何時の世も目障りなものですな……」

「いやはや、全くその通りだ……」

薄暗い一室で、談義を交わす男達。密かに会合を行っていたのは、魔術界に於いて多大な発言力と影響力を有する『旧家』の人間だった。

「東帝では外部出身の人間が力を付けて来ているようですぞ……特に『天堂』と『蛇島』、あの二人が厄介でしてな。どうにか排除できないものか……」

「大文字獅堂、奴と潰し合わせるのか如何ですか？」

「いや、止めておくべきだろう。あの男は戦国と同期の碓や城戸に目を掛けられている。

奴等を敵に回すのは得策ではない」

男達が話題として挙げていたのは、学園内部に於ける勢力図について。東帝は魔術界の縮図として捉えられており、術師の社会の舵取りは『名家』が担うべきと考える彼等にとつて、蒼や蛇島が台頭して来ているこの状況は快く思われていない。

「だが……このままでは均衡は崩れていく一方だ。何か手を打たねばなるまい……」

『『一条家』の嫡男に手綱を握らせておくのは如何です?』

「いや、あの男は使えんでしょう。第一『魔術旧家』としての自覚がまるで無い」

「ですが彼以外に奴等を止める事が出来る人間は居ないので……?」

「斯くなる上は、斥候を差し向ける事も検討すべきですな……」

「争いも止むを得んか……だかその機に乗じて、奴等の力を削ぐ事が出来れば……!!」

次第に男達の論題が、学内での派閥抗争を囁けるような内容に流れ始めていたその時。

「いやいや……有象無象を送り込んだ所で、容易く蹴散らされるのは目に見えてるでしょうに」

話に割って入るように、一人の青年がその部屋に姿を現した。

「君は……」

「神宮寺君……!!」

「嫌ですねエ、堅苦しい。シオンで良いと言った筈ですよ?」

周囲の人間にその名を呼ばれながらも、気に留める事無く双彩オットアイの瞳の青年は言葉を続ける。

「彼等は最早我々『旧家』にとって、紛れも無い障害ですが……困った事にこちらには、対抗出来るだけの力を有した手駒が無い。これでは彼等の専横を止める術が無い、と……現状はこんな所ですか?」

「そこまで解っているならば……是非とも君の考えを、お聞かせ願いたいものだな」

窮状を嘲るようなその言葉に男達が鼻白むが、青年は軽薄そうな口調を崩さないまま小さく嗤った。

「まずは……擁立するんですよ。我等の意のままに動く——傀儡を、ね」



『黒乃財閥』。

『表』の経済界と『裏』魔術都市の魔術界の両方にパイプを持ち多くの魔術事業を抱えるその企業集団は、『神宮寺家』に迫る程の財力・影響力、そして強大な支配力を有した一族だった。

邸宅の一室にて、長大な食卓に着く二人。

「……………学業は順調か？」

黙々と食事を続けていた伶俐な風貌の男性が、向かいに座る自身の”娘”へと不意に声を掛ける。『黒乃財閥』総帥であり父親でもあるその人物、『黒乃』クローン景一』ケイイチからの問い掛けに雪華は静かに口を開いた。

「ええ、勿論です。特殊魔術の修練も、恙無く進んでいます。安心して下さい」

「……………そうか。——雪華」

話を聞き終えた景一から不意に名前を呼ばれ、僅かな驚きを浮かべつつもカトラリーを置いて向き直る雪華。

「近く、会長選が行われるらしいな」

「はい……………恐らく、一条先輩が次期会長に立候補されるのではないかと思いますが……………」

景一が言及したのは、雪華が所属している『生徒会』の会長選挙について。

東帝学園に於いて、『生徒会長』という地位ポストが持つ意味合いは大きい。

諸委員会に属する全ての人員への強大な命令権限。そして多くの若く有望な魔術師達の先頭に立つ、次世代のアイコンとしての役割を担う事になる。

一条カズヤの名前を挙げつつそう答えた雪華に対し、景一が続けたのは彼女を更に驚かせる言葉だった。

「——お前にも、会長選に出馬してもらいたい」

「!?………私か、ですか………?」

予想外の要請に目を見開く雪華だったが、景一の表情に一切の変化は見えない。

「今日の昼、旧家の人間が訪ねて来た。……今の東帝には、腕の立つ『表』の人間が何人かいるそうだな」

「っ………」

雪華の脳裏に浮かぶのは、『三強』と謳われる程の実力を有した三人アウトサイダーの外部出身者。

「その状況が、どうにも奴等は気に食わないらしい。お前を学園のトップに据えて、そういった人間を牽制する狙いがある見える」

東帝内部のパワーバランスを憂慮した魔術旧家の人間から、この話を持ち掛けられた

事を明かす景一。

「はつきり言つて、東帝の内部抗争になど全く興味は無いが……連中に貸しを作つておくのは悪くない」

「それは……つ、ですが……」

逡巡しているような声を漏らす雪華だったが、言い淀む娘に対して景一の冷淡な態度が崩れる事はやはり無かった。

「——私はお前の力量ならば、問題は無いと考えていたが……見込み違いだったか？」

しかし。その言葉に隠された期待は、彼女を奮い起こすには充分なものだった。

「分かりました。御父様が望むのであれば……期待に添えるよう、全力を尽くします」



そして、来る^{きた}2月。

生徒会選挙にて、黒乃雪華が次期会長へと名乗り^{きた}を上げた。

異例の事態は当然物議を招いたが、当時の副会長であった一条カズヤが会長選を辞退した上で雪華を推薦。カズヤの副会長統投を条件として選挙管理委員会がこれを受諾し、全校生徒の過半数からの承認を得て雪華が当選する。

こうして東帝史上初となる、第二学年の生徒を体制のトップとした第一次黒乃政権が発足した。

この出来事は、東帝学園に大きな波紋を齎す事となる。



「よーバカ兄弟、読み終わったから返し来たぞーって……」

1—Bの教室へと訪ねて来たのは、漫画を小脇に抱えた黒髪の少年『湊 紅輔』。ドアを開けた彼の視界に飛び込んで来たのは——

「決める亜門!!」

「止めてくれ土門!!」

「どオツらアアアツツ!!」

——教室の内装をハーフコートに改造し、バスケットボールに興じている男子生徒達の姿だった。

そしてその少年達の中心で激しく競り合っているのは、入学してまだ数週間にも関わらず学園中にその悪名を轟かせている稀代の問題児兄弟。『如月 亜門』と『如月 士門』だった。

「何や、来とつたんか紅^{ベニ}。オマエもやってくか?」

「やるワケねエだろうが……つーかお前ら、また蒼さんにケンカでもフツ掛けたのか?」
ゴール前にボールを放り投げこちらへ歩いて来た如月兄弟に対し、湊は一連の奇行に呆れつつも彼等の包帯だらけの顔面に言及する。

「あー、今回はまア調子がアレやっただけや。次は勝てる」

”奥義”さえ完成すればあとはコツチのモンや。もう遅れは取らん”
「よくやるなホント……」

入学以降『大物狩り』を果たすべく、学園最強たる蒼へ幾度と無く勝負を仕掛けていた亜門と士門。しかしその都度派手に蹴散らされ、まとめて返り討ちに遭う二人の姿は最早生徒達にとって見慣れた光景になりつつあった。

「そーいや、お前ら大文字さんとか蛇島さんとは戦り合つてねーのか?」

性懲りも無く強者へと挑み続ける二人に対し、湊はふと生じた疑問を投げ掛ける。

「あー、獅堂クンにはこないだ半殺しにされたわ」

「あのヒマ潰しにスラムカチ込んだ時か。イツチとジーコには勝ったけどその後ボコされたやつな」

「やっぱイカれてんなお前ら……」

その真性の戦闘狂ぶりにドン引きしている湊だったが、土門は彼が口にしたもう一人の実力者について思い起こしていた。

「司クンとはあんまし会わへんからなア……そもそも学校来とるんか？」

「まアあの人も大概自由だしな……正直オマエら以上にやりたい放題やってんだろ」

これまで東帝学園の『負の側面』として暗に忌避されて来た、魔術界の特権階級『旧家』による学内差別の存在。しかし蒼や蛇島といった強大な力を持つ一般人の登場によって、その在り方はこの一年で大きく変化した。

階層意識に一切囚われる事無く、己の実力のみで横暴を蹴散らす彼等は今や多くの生徒達から支持を集めている。

『『反射』さえどうにか出来れば勝てそうな気はすんねんけどな……』

「お前らの属性術式の練度じゃまだ無理だろ。天堂さん以外にあの人が倒されるビジョンが見えねエわ」

一対一の戦闘に於いて、無類の強さを誇る蛇島の『反射シールド盾』。その防御を破るには属性魔力等を用いた全方向からの包囲攻撃によって防衛範囲カバを外すといった方法があるが、彼の高い戦闘能力がそれらの対抗手段を至難の業にしていた。

近代魔術史に衝撃を走らせた『斬界』のような規格外の特種戦術を除いて、蛇島司を倒す手立ては皆無に等しい。

そのまま雑談を交わしていたが、数分後。湊の携帯端末から着信音が鳴った。

「お、奏さんから電話だ。はアいもしもーし」

『湊貴様どこで道草を食っている!! 一条副会長と大文字が交戦中だ、さっさと合流しろ!!』

「ほっほオそいつは面白そ……じゃなかった、了解っス急行します。じゃあなクソ暇人共」

風紀委員会の上司に当たる人物からの要請を受け、腰掛けていた机から立ち上がった湊はそう告げると教室を後にする。そしてその場に残された亜門と土門は、去って行く彼の背中を見送りながら口を開いた。

「今日の夕飯どないすんねん」

「同時に案出すか」

「セーの」

「井」

「麵」

その瞬間互いへ叩き込まれる拳、揃って床にひっくり返る二人。

◇◇◇

校舎裏で、啜えた煙草に火を付ける蛇島。壁に背を預け静かに息を吐き出す彼の前に、三人の少女が姿を現す。

「……何の用だ」

宙を仰いだまま口を開く蛇島に対し、雪華は立ち昇る煙を意に介する事無く薄い笑みを浮かべていた。

「……皮肉なものよね」

「……………あ？」

何の脈絡も無く彼女が発したその言葉に、訝し気な目を向ける蛇島。

「誰よりも戦いを好む貴方の存在が……この学園に秩序を齎してる」

魔術旧家の人間をも脅かす程の蛇島の凶暴性によって、一般生徒達の学園生活が守られていた事実。

「おー……よく解つてんじゃねエか。ついでにあんなクズ連中に迎合する自分達の愚かしさも理解しとくか？」

「貴様……」

「おツと悪かった。どつちの矜持プライドに障つたんだ？」

蛇島からの返答に、雪華の隣にいた奏が一步前へ出ようとするが彼が続けた言葉に黙り込む。その苛立ちは学園の平和を保つべき『風紀』としての物か、若しくは『旧家』として弱者を守るべき自分自身への物か。

「その言い方は……ちよつと酷いんじゃないかな」

そんな彼女を庇うように、静かなながらも強い意志を感じ取れる声で未来がそう言い放つ。蛇島は不愉快そうに視線を外すと、立ち上がり彼女達に背を向けた。

「要件があるならさっさと見え。本題に入る気が無エなら……今すぐ消えろ」

僅かな怒気を孕んだその鋭い声に対し、雪華は一切怖気付いた様子無く応える。

「学園の全生徒を守る生徒会として……特定の生徒に対する貴方の暴行を、これ以上看過する訳にはいかない。——蛇島君」

彼女の目に宿る光もまた、紛れも無い『戦意』。

「貴方に、決闘を申し込む」

「……………あア?……………本気かテメエ」

その言葉を受け、静かに振り返る。

「貴方が勝てば……………私は、生徒会長を辞める」

「なツ……………!?!」

「雪華ちゃん……………!?!」

『敗北したならば、学園のトップから退く』。雪華が提示したその条件に、傍らの未来と奏は瞠目するが彼女の表情に変化は無い。

「けど、もし貴方が敗けたなら——」

——その時は、私に従ってもらおうわ」

互いが懸けるのは、誇りか進退か。学内の勢力図を大きく書き換え兼ねない決闘だったが——その宣戦布告を、彼が受けない筈が無かった。

「フン……上等だクソカス。後悔すんなよ」

蛇島は不敵な笑みを貼り付けたまま、雪華へと煙草の火を差し向ける。

「だったら俺が敗けたら……東帝ココから出て行ってやるよ」

第47話『目醒め、羽搏く』

魔術旧家からの要請を受け、蛇島司を止めるべく彼との決闘に踏み切った黒乃雪華。双方の承諾条件によって、敗れた場合雪華は『生徒会長』辞任、蛇島は学園を去る事となる。強大な影響力を有する両者の戦いが近付くにつれて、学園は異様な空気感に呑み込まれつつあった。



そして迎えた、決闘当日。

学園の多くの人間が注目を寄せるその一戦に、闘技場には蒼や如月兄弟といった多くの実力者が姿を見せていた。

一方で観覧席の一角にて、凄まじい威圧感を放つ集団。その中央に座すのは、蛇島と同様に旧家の人間から恐れられている二人の人物。

「この戦い……どちらが敗けても失う物は大きいだろうな」

「フン……興味が無エな」

不良集団『大文字一派』のN.O. 2である『諸星 敦士』が示した懸念を、獅堂が無
関心に一蹴する。彼等の周囲には一年ながらも名の通った強者である壬生や愛染に斯
波・鬼丸といった、錚々たる顔ぶれが揃っていた。

「ただ、この戦いは……どうにも外野がキナ臭エ」

「……………？」

その時。退屈そうな表情のまま獅堂が口にした言葉に、諸星は訝し気な目を向けてい
た。



闘技場内、武装管理室。

決闘を行う両生徒の武器が一時的に預けられ、検査されるこの場所は、関係者以外が
立ち入る事は不可能である。しかしその一室へと、足を踏み入れる数人の影があった。

「なあ……本当に、やるのか……？」

「当たり前でしょ……今更怖気付いてんじゃないわよ……!!」

その五人程の人影は、小声で言葉を交わしながら部屋の中を進んで行く。

「こうするしかないんだ……じゃないと、俺達が標的にされる……!!」

「……………そうですね……蛇島君には悪いですけど……」

そして室内中央のスタンドに立て掛けられた、三つの武装の前で立ち止まった。

雪華の大鎌と——蛇島の片手斧とラウンドシールド盾。

攻撃反射障壁を展開する蛇島の術式は、盾へと付加する事で最大の効果を発揮する。

彼の戦闘能力の根幹を成すその装備フエクターを前にして——

——五人の生徒達は、魔術を発動しようとしていた。

「いいな……壊すぞ……!!」

緊張した面持ちで、その内の一人がそう口にする。

しかし。

「——っ……あのさ……!!」

魔術の発動直前に、別の少年が声を上げた。

「やっぱ……やめねーか？」

「ツ、アンタね……この期に及んでまだ……!!」

「分かつてる。分かつてるよ………けどさ」

その制止の声に少女は苛立ちを見せるが、少年は微かに笑ったまま続ける。

「蛇島は、いい奴だからさ。……俺らなんかの為に怒ってくれるような奴は、そうそう居ないだろ？」

彼が零したその言葉の中には、確かな尊敬の念があった。

「あいつみたいなの人間にこそ……ちゃんと、魔術師になってほしい。その方がきつと、良い未来に繋がる気がする」

「……ま、確かに……このやり方は流石に間違ってるわな……」

「正直、彼を裏切ると後が怖いですもんね」

そう言う周囲の少年や少女達は、緊張の糸が切れたように魔術の発動体制を解いていく。そして最後の一人となった少女も、長い溜息の後に無然とした表情で手を下ろし背を向けた。

「……これで全員、高校中退……晴れて経歴キャリアに傷入りつてワケね。上等よ……!!」
 「ハハ、編入先探さねーとな〜」

内容に似つかわしくもない明るい口調で言葉を交わしながら、彼等は揃って部屋から退室して行く。

遠ざかっていく足音。その通路の曲がり角の陰で——蛇島が一人、煙草を燻らせていた。



そして。

闘技場にて、雪華の前に姿を現した蛇島。しかし——

「……………どうして……………」

門ゲートを潜つて来た彼の手にあつたのは、一振りの片手斧。それだけだった。

何故最も重要な武装である筈の、『盾』を持たずにこの場に現れたのか。しかし蛇島が

その理由について、口を開く事は無かった。

そして、激闘の末に――

――蛇島は、雪華に敗れた。

◇
◇
◇

蛇島を破り彼に代わる新たな『三強』へと台頭した雪華は、生徒会連合という一大勢力の絶対的トップとして君臨し、蒼や獅堂以上の影響力を有する事となる。

その数日後。

蛇島司による、他生徒への暴行事件が発生した。

◇
◇
◇

「クソツ、巫山戯るなよ!!」

「漸く排除出来たかと思えば……あの小僧、一体どういうつもりだ……!?!」

魔術旧家の男達が憤慨していたのは、彼等の子息に対し蛇島が起こした暴行事件について。

雪華を動かし決闘によって彼を退学に追い込む事に成功したものの、ここまで直接的な報復に打って出る事は男達にとっても想定外であった。

「いずれにせよ……奴はもう終わりだ。これまで我々に楯突いて来た事、存分に後悔してもらおうではないか……!?!」

しかし自ら東帝を去る事を選んだ蛇島には今、バツクに付いているコミュニティが存在しない。旧家の権力を用いれば、捻り潰す事など造作も無かった。

その時。

「や、どーもどーも。中々物騒な相談をされてるようで……」

「ツ、貴様……!?!」

密談に割り込むように、突如その部屋に入室して来た一人の人物。

日本国内で三人のみであるS級魔術師ランカーウイザードであり、魔術界に彼を知らない人間はいない。

現在は東帝で教師も務めているその青年、『桐谷 恭夜』の登場に男達は動揺を見せる。

「桐谷……貴様此処へ何をしに来た……!？」

「お、それ聞いちやう？ まア俺もヒマじゃねーからな、サクつと本題行こうか」

そう返した恭夜は、徐ろに懐から何かを取り出した。その手にあったのは、一つのポイスレコーダー。

『——盾さえ無ければ、奴の強さは半減する。キミ達がやるべき事は……分かるな？』

『っ……けど……』

『ま、断つてもらっても構わないけど……もしあのクズを庇うと言うのなら、君らの居場所保障しかねるね。簡単な話だろう？』

そこから聞こえて来たのは、男達の子息である数人の生徒の声。その内容は誰が聞いても明らかで、旧家の人間による一般生徒への『脅迫』だった。

『一度しか言わないよ。……奴の盾を、破壊しろ』

自分達の子供の声を、聞き間違う筈も無い。捏造だ、などという弁明は無意味だろう。

「いやア、俺の教え子は優秀でね。旧家としての自覚はまるで無エんだが、煙の立ちそうなトコにはしつかりアンテナ張ってんだわ」

生徒会副会長である”あの男”に目論見を暴かれていた事を知り、その場の誰もが血の気が引いた表情で押し黙る。

「つつてもまー、アイツの素行にもちーつとばかりし問題はあつたと思うんですよ、ハイ。だから今回は、お互いしばらく停学つーコトで手打ちにしときませんかね？」

しかし恭夜はあくまで双方に非があると認めた上で、彼等が面子を保つ為に譲歩可能なギリギリの条件ラインを提示してきた。

主導権は恭夜が握っており、状況は完全に支配されている。『最強の魔術師』と謳われるこの男の提案を、彼等が拒否出来る道理は無かった。

「……余計な真似を……」

部屋から退室しようとしていた恭夜だったが、背後で男達が吐き捨てた忌々し気な眩きにふと足を止める。

「——何かカン違いしてるみてエだから、教えといてやろうか」

振り返った恭夜は、笑みを浮かべつつ滔々と語り出した。

「東帝^{ウチ}の生徒はこの国の未来を担う人材であつて、テメエらの足の引つ張り合いの為の道具じゃねエんだよ。雪華をトップに担ぎ上げたのも、メリットがあつたから見逃しただけだ。まア実際アイツには人を束ねる『適性』もあつた……ただ、司を勝手な都合で弾き出そうとしたコトについては別の話だ。俺の教育^{しごと}の……邪魔してんじやねエぞコラ」

その口元とは裏腹に、サングラス越しからは剣呑な眼光が向けられる。全身が粟立つような圧力に当てられ、男達は慄然とした表情のまま硬直していた。

「それから……テメエらのクソガキ共がデケエ面して好き勝手やれてんのは、澄香^{気紛れ}さんの温情で許されてるからつてコト忘れんな。俺はあの女^{ひと}ほど甘くねエぞ」

そして恭夜は恐ろしく冷淡な声音で、その場の全員を見下ろしながら最後の言葉を言い残す。

「今度またナメた真似してみる。……一族郎党、まとめて潰してやつからな」



「——結局アンタ、『盾』は使わなかったのね。あの子達は壊さなかったのに」

夕暮れ時の校舎裏に座り込み、一人煙草を吸っていた蛇島。彼に声を掛けたのは、白衣を纏い眼鏡を掛けた女性教師、『冴羽 怜』だった。

「一本寄せ。火も」

「……………」

特に咎める様子も無くそう要求して来た彼女に、蛇島は無言でライターと煙草の箱を投げ渡す。受け取ってその中から一本取り出した冴羽は、火を着けると彼から少し離れた場所に腰を下ろした。

「言つとくけど……………退学については受諾しないわよ。アンタみたいなロクでなしの役満ボンクラでも、貴重な人材は逃さないってのが東帝ウチの方針スタンスだから」

「……………」

「余計なコトしやがって、とでも言いたげね。アンタだつて”遊び場”が無くなるのは不本意でしょーが。つーか今回は久々に恭夜と大和さんが結構キレてたもんねー、今頃旧家連中はビビり散らしてると思うと良い気味だわ」

沈黙したままの蛇島の心中を察しながら、愉快そうに笑みを零す冴羽。

雪華に敗れた彼は自らの宣言通り東帝を去ろうとしていたが、その意向を学園が受け入れる事は無かった。しかし旧家の生徒による不当な介入が行われたアンフェアな決闘の結果と言えど、敗北の事実が消える事は無い。一連の事態が収束して尚、蛇島は鬱屈とした感情を持って余していた。

「気に食わないなら……もつと強くなる事ね。仲間の立場だけじゃなく、自分の面子も守れるくらいに」

「……………るつせエな……言われなくても解つてんだよクソババア」

「ハハ、まだ減らず口叩けるだけの余裕はあるみたいで安心したわ」

しかし冴羽の焚き付けるような言葉に、蛇島がここに来て初めて口を開く。その苛立たし気な声を聞きながら、冴羽は微かに笑みを浮かべていた。

「まーでもアタシは、アンタが人並みの情を持つてた事にちよつと驚いた。……見直したわよ」

「あ……………」

腰を上げた彼女は、そう言い残し蛇島に背を向け歩き出す。

「それは甘さなんかじゃない……強さよ。胸張んなさい」

遠ざかって行く冴羽の背中。陽が沈みつつある空へと、静かに長く煙を吐き出した。

「……………クソツタレが……………」

◇◇◇

そして――

「成程な……………つまり司にとっちゃこの勝負は、雪華さんとの再戦^{リベンジマッチ}ってワケか」

一年前に端を発する彼等の確執を未来の口から聞かされた日向は、この戦いが持つ『意味』を理解していた。医務室のモニターには依然として、フィールドにて激戦を繰り広げる雪華と蛇様の姿が映し出されている。

氷属性範囲術式

『コールドフォース』

雪華の膨大な魔力から変換された、爆発的な冷気の波動。空間を覆うように襲い来る氷属性の魔力を、蛇島は強烈な魔力斬撃で碎き散らす。

反射盾シールドによる防御の弱点であった範囲攻撃を、蛇島は更なる攻撃能力迎撃の強化によって克服していた。

攻守反転を防ぐべく氷の連弾によって追撃を仕掛ける雪華だったが、蛇島は戦場フィールドを跳ね回るように疾走しその尽くを躲し切る。

以前と同様に戦型スタイルは攻撃的であるものの、彼が得ていた“経験”はその戦闘能力に『合理性』と『戦略性』を齎していた。

しかし理論と根拠を有した戦略的な戦闘スタイルは、より優れた知力を持つ雪華に対しては予測と対応の余地を与える事にも繋がる。

現に蛇島の攻撃よりも、雪華の防御の方が一手早い。

次々と撃ち放たれる斬撃を、先回りするように展開された氷壁が防ぎ止める。しかし霧散し煙と化した魔力が、雪華の視界を塞いだ僅か一瞬。

次の瞬間には、上空へと跳躍した蛇島が渾身の一撃を振り下ろしていた。

そしてやはり雪華もまた、それより速く反撃の術式を繰り出している。

氷属性魔力×形成術式

『アイシクルバレット』

理論と技術に裏打ちされた、正確無比かつ無駄の無い一手。同時に彼女は思い出していた。

—— 『非合理』 にこそ愉悦を見出す、蛇島司の“戦闘狂”としての本質を。

蛇島は振り下ろした筈の刃をキャンセルし引き寄せ、ラウンドシールド円盾を突き出していった。

一瞬でもタイミングを見誤れば、勝負を決し兼ねないギャンブルめいた判断によるその戦闘行動は——結果として雪華の魔力弾に対する、完全なカウンターとして機能していた。

反射術式によって跳ね返された氷の弾丸は、凄まじい速度で雪華へと叩き込まれ彼女の身体を防御魔術諸共吹き飛ばす。辛うじて急所への被弾を防ぎながら体勢を立て直す、それまでに蓄積していたダメージは雪華の動きを着実に鈍らせていた。

着地し片手斧を担ぎ上げた蛇島は、首元から流れる一筋の血を拭う雪華と睨み合う。戦況は鬨ぎ合い拮抗しているように見えるが、連続攻撃によって雪華の反撃をも押し込みつつある蛇島が僅かに優勢とも見て取れた。

その時。

「一つ……訊いてもいい？」

「……………あ……………」

戦闘の最中にも関わず、唐突にそう切り出した雪華へと胡乱な目を向ける蛇島。この状況で問いを投げ掛けるなど、正気の沙汰ではない事を彼女自身も理解していた。

「天堂君や大文字君に有って……私には何が足りないと思う？あの二人に追い付く為に、何が必要なのか……考えてみても、分からなくてね」

同じ『三強』などと言われているが、今の自分は蒼や獅堂よりも“弱い”。雪華が彼等に対し明確に遅れを取っている『戦闘能力』は、現代魔術師にとって最も重んじられているステータスの一つである。

しかし自覚しているだけでは、その力量差は決して埋まらない。

「……………前提がそもそも間違ってるな。逆だ」

そんな彼女へと蛇島が返したのは、意外にも真っ当な見識だった。

”持つてる”のはアイツらじゃねエ。お前の方だろ。……下らねエ
「っ……………」

一度決別した関係性だからこそ、敵対しつつもフラットな視点から『黒乃雪華』という魔術師人を傍観し理解している部分があった。

「その程度の事も自覚出来ねエなら……この先オマエがアイツらに勝つ事は無エよ」

その言葉を最後に、蛇島は武装へと魔力を収束させ攻撃体勢に入る。撃ち出されるのは、これまでの術式とは一線を画す速度と威力の斬撃。

無属性攻撃術式

スキヤッフオールドスラッシュ
『斬首断刃』

迫り来る一撃を前にして、雪華の脳裏を数多の経験が巡っていく。

学園を束ねる者の責務として、総てに於いて傑れ、秀でていなければならないと考えていた。立場は雪華を確かに強くした——しかし同時にそれは、己を封じる『枷』となっていたのではないか？

疑念と共に彼女が思い起こしていたのは、巫門に勝利した日向の姿。

天を仰ぎ笑う彼の姿は、蒼や獅堂と同じ”強さ”を追い求め”勝利”を渴望する人間

の在り方だった。

戦いを愉しむ事など、許されないと思っていた。しかし優秀な後継は、着実に育ちつつある。ハル、絵恋、そして『神童』と謳われる少女。

蛇島が柵と断じたこの繋がりを捨てる事が、彼女自身に何を齎すのかは分からない。それでも次の世代を信じ、託さなければ——自分は先へと進めない。そう本能で、理解していた。

一秒にも満たない思考。過ぎ去る瞬間。

氷属性魔力×強化術式

『アイシクルレック
氷撃脚』

刹那。氷を纏い繰り出された雪華の蹴撃が、魔力斬撃を撃ち上げ吹き飛ばした。

「確かに——もう、任せていい頃なのかもしれない」

蹴り上げた左脚を引き下ろしながら嗤う雪華の表情には、今や一片の迷いも見えない。

「やっと……自分に我儘になるってワケね……」

その戦いを観ていた千聖もまた、静かに、しかし楽し気に笑っている。

「ありがとう、蛇島君。私は………私の為だけに、戦うわ」

蛇島と相對する彼女のその背中には、氷属性の力とは異なるもう一つの『翼』が揺らめいていた。

訪れる、覚醒の刻。

孵化した一人の魔術師は——羽搏き、翔び立つ。

第48話『氷刃闇翼』

雪華の背中から展開される、単翼のように揺らめく黒い魔力。

彼女が持つもう一つの属性性質、『闇属性』。制御難度が高い為これまで多用していなかったが、その威力は『氷』の魔力を凌駕する。

闇属性魔力×形成術式

『ナイトメアブラスト』

振り抜かれた大鎌の刃から撃ち出される、暗色の弾丸。咄嗟に蛇島は自身の得物で斬り払うが、霧散した魔力が黒い靄のように周囲の空間を覆っていく。

「ッ、クソが……!!」

即座に彼女の狙いを察知するが、その時には既に仕掛けられていた更なる術式が発動していた。

闇属性範囲術式

『ミッドナイトフィールド』

魔力弾から形を変えて展開された術式領域は、蛇島を包囲し全方向から絶え間無い連撃を炸裂させる。次々と襲い掛かる閻属性の刺突を片手斧で撃ち落とし、業を煮やした蛇島は独楽のように回転し力任せに刃を振り抜いた。

「鬱陶しいんだよ……!!」

無属性攻撃術式

『セイバーツイスター
刃廻乱』

薙ぎ払うような斬撃が、その魔術領域を吹き飛ばす。しかし雪華はそれより速く、魔力強化された脚力によって地を蹴っていた。

閻属性攻撃術式

『ナイトメアドライブ
暗速黒斬』

突進と共に振り抜かれた大鎌の一撃が、蛇島の喉元へと迫り来る。

「入るだろコレは……!!」

「いや、まだだな……」

観戦していた啓治は直撃を確信するが、伊織はフィールドを注視しながら小さく呟く。

そして雪華の斬撃は、鋭い剣戟音と共に弾き返された。

刃が届く瞬間、蛇島は『リフレクトフォーミュラ反射術式』による障壁を盾ではなく眼前の空間へと展開していた。

空中の反射障壁に渾身の一撃を阻まれた雪華を沈めるべく、蛇島の反撃が間髪入れず放たれる。

しかし。

闇属性の刃は打ち砕いた筈。にも関わらず、魔力の残滓が視界から消えない。

蛇島が違和感を察知した時——雪華は既に、彼の背後へと回り込んでいた。

再び振り翳された鎌刃が纏うのは、『氷』と『闇』。

(アレは——!!)

瞠目する日向と天音。それは天城鎧が使っていた魔術と同じ、『デュアルフォーミュラ双属性術式』だった。

氷十閻属性攻撃術式

『ダブルドライブ暗氷速双斬』

双つの力を宿した、より速く鋭い二連斬。その命を刈り取るかの如く、剛速の刃は撃ち込まれた。

「クソツ、タレが……」

地に膝を突き血を吐く蛇島へと、背を向けたまま雪華が開口する。

「——ずっと敗けているつもりは無いわ。天堂君にも、大文字君にも……勿論、貴方にもね」

蛇島司、準々決勝敗退。

黒乃雪華、準決勝進出——



雪華が蛇島を下しスタジアムの観衆が熱狂に包まれる中、門ゲートへと向かう三人の少女。

「流石ですね、黒乃会長……術式の余波をその場に残留させて、視界を塞ぐなんて……!!」

「それもそうだけど、雪華つてたしか二つ同時には使えなかった筈なんだよねー。魔力の出力がデカすぎてさ」

勝利を引き寄せた雪華の判断と機転に絵恋は感心していたが、千聖は戦闘を決着させた最後の魔術に驚きを隠せない様子だった。

双属性術式には繊細な魔力制御が必要であり、魔力量が多くなる程に難易度は跳ね上がる。しかし膨大な魔力を有するにも関わらず、土壇場で高度な術式を完璧に発動させた雪華の技術は圧巻と呼ぶに相応しかった。

「まあ、当てられたってコトでしょうね……あのぶっつけ本番組に」

愉快そうに笑う千聖が言外に示していたのは、『蒼い炎』や『飛ぶ斬撃』を操る二人の少年の存在。

敗退しながらも二人のルーキーが残した鮮烈なインパクトは、雪華を始めとした多くの人間に影響を与えていた。

「つ、会長……!!」

その時、ゲートを潜り通路へと降りて来た雪華が彼女達の前に現れる。感極まったような声と共にハルが真っ先に走って行くが、こちらへ駆け寄って来る三人の姿を見つけた雪華は笑いながら口を開いた。

「千聖——私、生徒会やめても良い?」

「え、何で? 去年も今回も司には勝ったじゃん」

唐突に告げられたその言葉にハルと絵恋は絶句するが、千聖だけは平然とした様子でその真意を問うように訊き返す。

「ああ、いや……ちよつと言い方が悪かったわね。今すぐ全部放り出す訳じゃないわ」

雪華は微かに笑ったまま、二人の二年生へと向き直る。

「まだ会期は残ってるから申し訳ないんだけど……執行部の職務をお願いしたくてね。これからは出来るだけ、戦闘演習に時間を使いたいの」

「はっはー、そういうコトね。んで、いつからよ？」

「我儘を言っても良いのなら……今日からでも」

そして千聖もまた頷きながら、彼女達の方へと振り返った。

「つつーワケで、後輩ちゃんズにはメーワクかけるかもなんだケド……ワガママな先輩のお願ひ、聞いてくんないかな？」

「はい！」



旧校舎裏、スラムにて。

「……来年は僕達も、頑張らないとね」

「だな……あの人達があんだけタマ張った以上、オレらが無様な戦い見せるワケにはいかねーわ」

旧校舎裏のスラムにて、蛇島や諸星の戦いを見届けていた四人。今年は欠場していたが、彼等の激闘に触発されたように愛染や斯波は不敵に笑う。

「面倒クセーけどな……一条やら如月やらに、デケエ面させとくのも気に食わねエ」
そして大文字一派の次代を率いる事となる壬生もまた、好戦的な笑みを浮かべていた。



「何なのアイツ……結局また敗けてんじやない」

「いやア、でも黒乃とあそこまで渡り合うってやべーだろ」

「やっぱあいつもとんでもなく強かったな……」

「凄かったです……」

一年前と同じ戦いを、今回もまた少年達は見ている事しか出来なかった。

あの時”守られた”自分達に最早、彼と向き合う資格が無い事は分かっている。それでも——信念を貫き戦ったその姿に、少年は憧憬の念を抱いていた。

「うん……やっぱ蛇島は凄いよ。アイツは……俺達の、憧れだ」



東帝戦四日目の全行程が終了し、残す所は最終日に行われる本戦準決勝・並びに決勝のみとなった。

「お疲れさん。……完敗だったな」

「おつ、伊織。ハラ減ったからラーメン食い行かね？」

「お前さつきボコボコにされたばっかでも食欲あんのか……」

医務室から出て来た日向を待っていたのは、腕を組み通路の壁に背を預けていた伊織だった。時刻は0時を回っているにも関わらず、夜の魔術都市に繰り出そうとしている日向に呆れる伊織。

しかし通路を歩いていたらその時、曲がり角の向こう側で何かを話している人間の気配に伊織が気付く。日向もまた魔力知覚によって同様の気配を察知したようで、二人は半ば無意識に息を潜め陰からその様子を窺った。

「——冗談っしょ？……なんであの子が……」

「うん……まあ、信じられないのも分かるよ……」

聞こえて来るのは、深刻そうな声音で交わされる『誰か』についての会話。そこに立っていたのは、アランと徹彦の二人だった。

しかし彼等が続けて放った言葉に、日向達は愕然とさせられる。

「風が結社と繋がってたとか……流石に笑えないわ」

「——は？」

「っ、おいバカ……!!」

思わず声を漏らした日向を伊織が小突くが、二人は既に隠れて見ていたこちらに気付いていた。

「日向君と……伊織、君？」

「……すみません。たまたま通り掛かったら、声が聞こえて来たんで……盗み聞きした

事は謝ります」

観念したように陰から出て行った伊織はアラン達へと謝罪するが、日向は理解が追いつかない様子で彼等へ問い質す。

「ちよつと待てよ。……どういう事だ？ 凧と結社がどう関係あんだよ」

「……聞かれた以上は話すしかないか……キミ達は凧の友達だしね」

そう言つて徹彦は、日向達へと今日起こつて来た出来事について語り始めた。

管理局と結社の戦闘、『デイエス』と呼ばれる少年と凧の関係、そして彼女達の過去。話を全て聞き終えた時、日向は険しい表情で考えに耽るように黙り込んでいた。



学生寮、第一学年棟ラウンジにて。

「更科さんが、刻印結社の協力者……!?!」

そして寮へと戻つた日向達は啓治ら四人を呼び出し、先程聞かされた凧を取り巻く状況について打ち明けていた。

「……でも、その事を私達に話して大丈夫だったの？」

「どの道、俺達にだけは教えるつもりだったらしい。他の人間に漏らさなかつたら問題は無エつてよ」

啓治と同様に驚きつつも沙霧が発した疑問に、アランから数人にのみ情報共有は許されていると応える伊織。

「最近見かけないとは思ってたけど……まさかそんな事情だったとはね」

ここ数日の間彼女が姿を見せなかつた理由を知り、天音も少なからず動揺を露わにしている。想像以上の事態の重大さにその場の誰もが沈黙していたが、不意に日向が何かに思い至つたように口を開いた。

「——風は……本当に俺達の敵だと思うか？」

「……さつき聞いたろ。管理局との戦闘でデイエスを庇つた以上、アイツが結社と組んでねエつてのは流石に無理がある」

発した疑問に伊織が渋面で声を返すが、日向は至つて冷静な様子で言葉を続ける。

「けど、アイツとそのナンバーズの奴が一緒に誘拐されてたのは七年も前の事だろ。そんなガキの頃から、ずっと結社側の人間だったとかあり得んのか？」

「……確かに、何年間も結社の間諜としてこの街に潜伏していられるのかと言われると少し疑問ね」

日向に同意するように、天音もまた凧が内通者であるとする推察の不自然さを指摘する。

「少なくとも俺は、アイツの口から直接聞くまでは……この話を信じる気にはなれねえ」
ナンバーズ番号刻印である少年と凧の関係性が、現在まで続いているとは限らないと断じた日向。

再び全員が黙り込むが、ここに来て創来が初めて神妙な面持ちで口を開いた。

「アイツが今まででなんで隠してたのかは知らねえが……もし助けを必要としてるなら、力になりたい。アイツも、俺を止めてくれた一人だからな」

——友として、恩を返したい。

力強くそう言い切った創来に対し、啓治が乱雑に頭を掻きながらもその言葉を肯定す

る。

「ンなこたアそもそも大前提なんだよボケ。問題はどうかやって更科さんの無実を証明するか、だ」

例え疑念があつたとしても、この現状から風を助け出すという意志に於いてはここに
いる全員が一致していた。その時――

「そこまで風を信じてくれてるつてのは……ちよつと嬉しいね」

聞こえて来た声に日向達が振り向くと、ロビーの入口には水色の髪の少女の姿があつた。

「まあ、状況をいくらかマシにする方法は……無いワケじゃないよ」

そこに立っていた風切アランは、普段とは違う真剣な表情で彼等へと一つの提案を持ち掛けた。



そして――

7月20日。

――この日起きた出来事は、魔術界に大きな影響を与えると共に、その歴史に深く刻まれる事となった。

◇◇◇

東帝戦最終日。

本戦トーナメントも四日目となる今日は、二試合の準決勝、そして決勝戦が行われる。これまでの全日程の中でも最も多くの生徒が注目しており、まだ午前9時前にも関わらずスタジアムは観衆によって大いに賑わっていた。

対戦カードは、

第一試合、『天堂蒼』VS『諸星敦士』。

第二試合、『黒乃雪華』VS『神宮寺奏』。

そして第一、第二試合の勝者同士による決勝戦。

また東帝戦は試合の中継映像が魔術都市内のネットワークを通じて配信されており、学園の内外を問わず多くの人間が次代の魔術師達の戦いに関心を寄せていた。

学園最高峰の実力者による魔術戦から、学び取れる事は計り知れない。観覧席に並んで座り試合の開始を待っていた伊織と天音だったが、彼等の背に少女の上機嫌そうな声が掛けられる。

「おんやー？今日は二人つきりじゃなくいい♡」

「ちーちゃん邪魔しちゃダメだって……！ごめんね二人共、すぐ行くから……」

「いや、別に居てもらっていいっすよ……」

ニヤニヤと笑う千聖の裾を未来が申し訳無きそうに引つ張っていたが、伊織は気に留める様子も無く隣の空いているスペースに座るよう促していた。

「つか、日向とかさぎりんとキミらが一緒に居ないってちよつと珍しくない？なんかあったの？」

「……ちよつと遅れてるみたいです。その内来ると思います」

「あ、そーなのね」

天音の返答に、千聖もそれ以上深入りする事無くスタジオムのフィールドへと視線を向ける。

しかし日向達は今、ある目的の元にアランと行動を共にしていた。



魔術都市『東京』、中央部にて。

「……………結構アケーな」

「管理局ならサムラさんに連れてかれたコトあつけど、協会コウは俺も初めてだわ」

創来と日向が見上げていたのは、聳え立つ巨大なビル群の一角。アランに連れられ彼等がやって来ていたのは、『魔術師協会』日本支部の拠点ビルだった。

「見物に来たワケじゃねエんだぞ。氣イ引き締めろ」

施設の頂上部を仰ぎ見る二人を注意する啓治だったが、彼もまた表情が硬く幾許かの緊張が見て取れる。

「ここに風ちゃんが居るんですね……」

「正確にはこの地下に、だけどね。まあ、手荒な扱いは断じてされてないから。あくまで重要参考人って立場だし、そこは安心していいよ」

沙霧の不安な呟きにそう応えると、アランは協会の入館ゲートへと歩き出した。

八時間前。

『……アンタならこの状況をどうにか出来るのか?』

『いや、どうにかすんのはあたしじゃなくてキミ達だよ』

寮棟で話し合っていた日向達の前に、突然姿を見せたアラン。伊織の疑問に対して彼女が示したのは、風が今置かれている状況を変える為の一つの『方法』だった。

『風が今、結社のナンバーズとかいう連中との協力関係を疑われて拘束されてんのは聞いていると思うけど……あの子の状態にちっとばかり問題が発生しててね』

『つ……風ちゃんに何かあったんですか……!?!』

告げられた不穏な言葉に息を呑む沙霧だったが、アランは冷静さを保ったまま続けて補足する。

『いやまあ、そこまで深刻なワケでも無いんだけど……意識が混濁してんのか、どうにも聞き取り調査が要領を得ないみたいでね。たぶん、何かしらの記憶障害が起こってる』
『ッ……!!』

その状態が指し示す意味を、早く理解したのは、過去に類似した経験を持つ創来だった。——”それは恐らく、何らかの魔術的要因による精神干渉。

『確証は無いんだけど、キミらなら何か引き出せるんじゃないかって話が持ち上がったね』

”親しい関係性の人間からであれば何か判明するのではないか”と言う、あくまで可能性の域を出ない憶測。しかし圧倒的に情報が不足している今は、方法を選んでいる場合では無いという捜査状況の難航具合が窺えた。

『それに創来君が洗脳の魔術で暴走させられた時、凧もその場に居たっしょ？些細な事でも良いから、その時気付いた事があれば教えてほしいのと……あわよくば、凧を弁護する上で有利になるような証言が聞き取れたら尚良いんだけどね』

凧がこの国と敵対する勢力に与していないと証明する為には、何よりもまず時間が必要である。証拠を集める猶予を引き延ばす上で、その証言が持つ重要性を日向達は理解していた。

『ただ……二つ理由があつて、伊織君と天音ちゃんは連れて行けない』

『それは……漆間と戦つた時、現場に居なかつたからですか？』

『うん、それが一つ目なんだけどね。もう一つの理由は、この聴取が一部の人達以外に極秘つてコトと関係してんのさ』

冷静に訊き返す天音へと、アランから彼等が同行不可能な事情について明かされる。

『日向君が戦つた「彼」の時もそうだったんだけど……学生が魔術犯罪と関与してるとつーのが、対外的に結構な厄ネタでね。一枚岩じゃないこの国の上層部からすれば、早急かつ内密に処理したい案件なワケよ』

『……更科さんの容疑をさつさと固めとこうつてハラですか』

『そうなる前に沢村さんが手を打ってくれた結果、キミらからも話を聞く機会が生まれた。とは言えそもそもあたしら学生に捜査情報を流す事自体に、懐疑的なオツサン連中もいるつてコトさ』

魔術界上層部の思惑に対し、怒気を露にする啓治。

『この聴き取りを隠してる理由は分かつたが……それとコイツらがついて来れねエ事には何の関係があるんだ？』

『あー、それは……申し訳ないんだけど、はつきり言っちゃうとあたしの力不足が原因だね。簡単に説明すると、二人の魔力量とあたしの幻術の相性の問題だよ』

創来の声に応えながら、アランは魔術を発動する。その瞬間彼女の姿が、黒いスーツを身に纏った中肉中背の男性へと変貌した。

『……こんな風に成り済まして潜入すんだけど……あたしの幻術って、外見しか変えられないんだよね。二人の場合だと、魔力に特徴がありすぎて誤魔化しが効かないだわ』

協会職員に扮して入館しようにも、天音は膨大な魔力が、伊織は生体反応だけがセキュリティゲートに異常検知されてしまう。

『分かりました。……ならそっちは任せます』

伊織は納得したように小さく頷くと、日向達へと向き直った。

『もし何かあったら俺達を呼べ。……すぐ助けに行く』

静かながらも力強くそう告げた伊織と、彼の隣に並び立つ天音。不穏な予感を押し殺しながら、日向は二人の仲間へと頷き返した。

『ああ。……頼むわ』

第49話 『決勝戦』

午前10時半。

スタジアム上空に浮遊するメインモニターには既に、その後11時から開始予定である決勝の対戦カードが表示されている。その周囲のサブモニターには、先程終了した第一・第二試合のダイジェスト映像が流れていた。

『天堂蒼』VS『諸星敦士』

初撃の『斬界』を回避した諸星が格闘主体の近接戦に持ち込むが、超至近距離から再び発動した斬界によって一瞬の隙を突いた蒼が接戦を制する。

『黒乃雪華』VS『神宮寺奏』

氷属性の防御を打ち破る程の攻撃能力を見せる奏だったが、近接攻撃闇属性の手刀によるカウンターが炸裂。範囲術式を警戒していた彼女の意表を突く一撃によって、雪華に軍配が上がった。

二つの準決勝が決着し、残る決勝戦を前に多くの生徒達が第一演習場へスタジアムと集結している。

「いやー、やっぱ最後はこの二人か。まア予想通りと言うか、順当に行つた感じだね」
「当然でしょう」

観覧席には既に、雪華を除く二、三年の生徒会メンバーが揃っていた。千聖の脱力気味の声にハルが応えていたその時、二年の風紀委員三人組も合流する。

「お疲れっス、奏さん」

「惜しかったなア。結構僅差やつたんとちゃうけ？」

「いや……完敗だったな。課題の見つかる一戦だった。私もまだまだだ」

湊と亜門に対してストイックな言葉を返す奏の隣で、未来はその一帯の中心部に座る少女へと問い掛けた。

「——天音ちゃんの予想は？」

「……………難しいですね。どちらの実力も、よく分かっているのです……」

「ま、天堂さんだろ。普通に考えて」

天音の返答に続けて湊が口にした予想に、ハルが鋭い視線を向ける。

「おー怖……でもあの人優勝候補ってのはもう揺るがねエ事実だろ。ねエ白幡さん？」

「んー、まアやっぱ大本命ではあるよね」

睨まれたつとも飄々と意見する湊に、頼杖を突きながら同意する千聖。その傍らでは土門と亜門が、朝食を貪り食いながら議論している。

「逆に蒼クンが敗れるとかあると思うか？」

「無いな、100%。もし敗けたら全裸逆立ちで校内一周したつてもエエわ」

「ハッハーこいつ言いよつた!!皆さん今の聞きましたア!？」

「まーじか亜門漢オトコだね。だつてさ奏」

「二言は無いな?自分の発言には責任を持ってよ」

「いやちよお待つて流石に恐なつて来たつて!!頼む蒼クン勝つてくれ!!」

「バカだろコイツ……」

「死ねばいい」

悪乗りするような笑みと共に千聖と奏からも喉けられ、試合前から必死の形相で声援を送る亜門の姿に湊やハルは呆れていた。

「つか天音つち、伊織はどこ行つたの?あいつ気付いたらいなくなつてっけど」

「さつきジャクソンさんに連れて行かれてましたよ。多分、天堂先輩の応援だと思います」



「……………目に焼き付けるぞ。今日、伝説が誕生する瞬間をな」

「アンタだけ熱量おかしくないっスか……………」

観覧席から真剣な表情で力強く語るステイブに、隣に座る伊織は軽く気圧されながらもフィールドを見下ろしていた。

「つーかそう言や…………ステイブさんつて、武者修行の為にこの国に来たんですよね？」
「そうだが…………それがどうした」

その時ふと伊織が、留学生であるステイブへと一つ疑問を投げ掛ける。

「元々あの人に弟子入りするつもりだったんスか？」

「いや…………向こうに居た頃から名前は聞いていたが、あの人の下で学ぶ事を決めたのは一度剣を交えてからだ」

剣士として戦いを挑み、敗れた事で蒼に師事する事を決めたと明かすステイブ。

「やっぱ海外でも有名なんスね、あの人。…………つってもまア、アンタの実家の知名度も大概だとは思いますが」

「…………それは俺の実力への当て付けか？」

「なワケ無いでしょ。謙遜のつもりなら寧ろ嫌味っすよソレ」
海外の魔術界にまで名を知られている自分達の師の実力と影響力に改めて驚きつつも、伊織はステイブの生家について言及した。

米国最強と目される魔術旧家の一角、『ジャクソン家』。

北米魔術界の中核を担う『クリストファー・ジャクソン』はその現当主であり、彼を父に持つステイブ自身もまたアメリカ合衆国で名の通った魔術師だった。

そして現行魔術師協会の創設メンバーの一人にして祖父である『オーウエン・ジャクソン』と、自らが師と仰ぐ男が同じ『剣聖』の異名を持つ事に、ステイブは謎めいた奇縁を感じていた。

「とにかく……俺達は、師匠の勝利を見届ければ良いだけだ」



協会拠点ビル内にて。

「……っしかしバレねエモンだな……」

「まーね。一応これでも、東帝では一番幻術に長けてるって自負してるからさア。そんなじよそこらの人間には見破られないと思うよ」

エレベーターで下層階へと降下しながら、日向が零した感心するような声にアランが自信有り気に応える。鏡張りの内壁に映っていたのは、彼女の幻術によつて黒スーツの職員へと『変身』していた五人の姿だった。

「それじゃ、みんな……降りたら打ち合わせ通りにヨロシクね」

「了解っス」

「おう」

「分かりました……!」

アランへ頷き返すのは、啓治・創来・沙霧の三人。潜入中の五人は他の職員に怪しまれる事を避ける為、エレベーターを降りた後に一度二手に別れる事になっていた。日向・アランと啓治ら三人はそれぞれ異なるルートから目的の場所へと向かい、入室直前に合流する手筈となっている。

「——それと、もう一つみんなに言つときたいコトがあつてね」

そして、アランが不意に発した言葉に四人が振り返る。

「多分なんだけど……いや、ほぼ確実に。仮に風がホントに結社と繋がつてたとしても

——最低もう一人は内通者がいる。もし風がシロなら、二人だね」

彼女が示唆したのは、未だ姿を見せない更なる『敵』の存在。最早否定する事の出来ないその事実が、この状況の危険性を彼等に突き付ける。

「ここからはマジで、何が起こるか分からない。……本当にヤバくなった時は、迷わず自分の身を守る事だけを最優先に考えて動いてほしい。OK?」

アランの警告に日向達は、緊張の見える面持ちで頷いた。それとほぼ同時に五人を乗せたエレベーターが、目的のフロアへと到着する。

「んじゃ……行こうか。また後でね」



『さあ遂にやって来ました……長いようで短かったと感じる方もいるかもしれませんが、東帝戦も今日この戦いを以て終幕フィナーレとなります——決勝戦です!!』

「今日のは流石に賭けにならねエな……オッズが完全に寄っちゃってます」

そんな独り言を吐きつつ、鬼丸は退屈そうに紙幣を数えていた。

スタジアムから配信されている実況中継を、スラムで流し聞きしている大文字一派の面々。諸星が出場していた第一試合は応援していたが、蒼と雪華の戦いは消化試合のよ
うな態度でほぼ興味を示していなかった。

「そうかな……？ 僕はこの勝負、中々面白くなると思うけど」

「あ？ オマエまた女鼻根か」

しかし愛染が零した言葉に、露骨に不愉快そうな表情で壬生が反応する。

「そういうワケじゃないけどさ……ココのN.O. 2とN.O. 3を倒した人同士の戦いだ
よ？ 少なくとも僕は興味があるね」



バトルフィールドへと足を踏み入れた雪華。こちらに背を向け彼女を待ち構えてい
たのは、真正正銘の『最強』の座へ至らんとする魔術師剣士。

「——来たな」

「……意外だった？」

「いや？ お前か徹彦のどっちかだろうとは思ってたよ」

そんな言葉を交わしながら振り返った蒼の顔には、普段通りの飄々とした不敵な笑みが浮かんでいた。

「貴方との力の差は……自分が一番よく解ってる。

——胸を借りるつもりで行くわよ」

雪華はそう告げると共に、双つの属性魔力を同時展開する。

片足を大腿部まで覆う『氷』の装甲と、背中から大きく広がる『闇』の単翼。己の身体に術式を纏う雪華に対し、蒼は刀の峰で肩を叩きつつ口を開く。

「相変わらずだな。いい加減、過小評価はやめたらどうだ？ 言つとくが……俺はお前を格下と思つた事は無エよ」

そして、双方から同時に放たれた魔力斬撃が激突した。



「———なア、アランさん。……一つ、訊きてエコトあんだけどさ」

廊下を進んでいた日向は、前を向いたまま後方のアランに対し声を上げる。

「……………俺達さ、前にどっかで会った事無エか？」

返答は無い。

何故か沈黙したままの彼女に対し、違和感を覚えた日向は振り返った。

「……アランさ——!?」

そこに在ったのは——倒れ伏していたアランの姿。瞠目しながらも日向は即座に状況を理解し、彼女の下へと駆け寄って行く。

しかしその瞬間、突如として。

視界は閉ざされ、意識は暗転した。



「ん……？何だ……？」

メーターの不規則な微振動。

魔術都市全体を覆う巨大結界を管理している、管制制御施設にて。オペレーターの男性は、計器が一瞬観測した奇妙な数値に眉を顰める。

故障もしくは誤作動が起こっていないのであればそれは、異常なまでの魔力密度を持った飛翔体が高高度からこの異次元都市へ落下して来ている事を示している。

そんな筈は無い。疲労から起きた、只の見間違いだらう。

そう考えたオペレーターが、再度計器に目を向けた次の瞬間。

メーターが一気に振り切れた。



「……ッ——！！」

最初に異変に気付いたのは、広大な索敵範囲の魔力知覚を有する蒼だった。急速に接近する巨大な敵意、そして殺意を本能的に察知する。次第に大きくなって行く、空を斬り裂くような異音に天を見上げた。その瞬間に——

——
学園上空の結界に、極大爆発を伴った『業火』が激突した。

第50話 『業火墜星』

轟音。

上空の防護結界を破壊し学園へと突入して来たのは、燃え盛る業炎の『彗星』だった。

火属性十衝撃十朽化”複合術式”

グランドクラッシュヤ
『隕撃天墜』

張り巡らされた多重障壁を一瞬で突き破った謎の飛翔体に対して、蒼以外に反応して
いたもう一人。

東帝学園学園長、神宮寺澄香はその危険性を即座に察知し迎撃行動を開始していた。

魔力強化された脚力で空中へ跳ぶと同時に、召喚した大剣を振り翳す。放たれるの
は、彼女を”剣豪”たらしめる至極の豪剣。

藤堂一刀流×如月一刀流

『双流、奥義、比翼双連刃』

空を翔る双翼の如く。一つに融合した極大斬撃は、業火の猛威を両断し消し飛ばした。しかし澄香はすぐさま振り返ると、急迫した状況を示すように地上へと叫ぶ。

「——天堂!!」

澄香の声が届くより早く、蒼は動き出していた。刀を投げ捨てると、一気に雪華との距離を詰める。突然の行動に狼狽する彼女を——蒼は強く突き飛ばした。

「逃げろ……………!!」

その瞬間、再び虚空から噴き出した猛炎の『幕』が二人を呑み込む。

上空の『隕石』から目にも留まらぬ速度で飛び出して来ていた、深紅の髪の男。灼炎を全身に纏い、“彼”は寧猛に嗥い叫ぶ。

「久しぶりだなア……………天堂、蒼イ!!」

『刻印結社』、番号刻印^{ナンバース}”No.7”。名を——『紅蓮』。

災厄の来訪を告げる尖兵は、両手を広げ堂々と地上へ降り立った。

明確な『敵性存在』による襲撃。

超一流の戦闘魔術師でもある東帝学園教員陣は、この異常事態を受け即座に行動に移る。

無属性攻撃術式

『ブレイクバレル・アトラスバースト』

^{スナバライフル}狙撃銃から撃ち放たれる、爆撃性能を付加された魔力弾。万丈からの砲撃を、紅蓮は渾身の力で殴り返した。

「ッ、ほオ……………ただのザコじゃア無エみてエだな。面白エ…………!!」

紅蓮が愉快そうに笑いつつ手首をぶらつかせる中、冴羽は全身に火傷を負っている雪華を抱き起こす。

「つう……牙羽……先生……」

「意識あるわよね？しっかりしなさい……！」

咄嗟に蒼が術式範囲外へ押し出した事で辛うじて直撃は免れていたものの、その爆発は余波だけで甚大なダメージを与える程の威力を有していた。

そして彼女を庇った蒼は、全身を焼かれ意識も朦朧とした状態で紅蓮の足元に横たわっている。

「よオ……会いたかったぜ？テメエをブチのめしたくてよ……仕方無かったんだわ」

「そう、かよ……コソコソ逃げ隠れてたのか知んねーが……俺はお前のコトなんざ、忘れてたわ……」

息も絶え絶えになりつつも挑発的な声を返す蒼だったが、紅蓮は笑みを崩さないまま倒れ伏しているその背を容赦無く踏み付けた。

「なら良かったぜ……ブチ殺す前に、テメエに絶望と恐怖を刻む愉しみが出来た……！！」
「ツ……！！」

僅かな呻き声を漏らす蒼を、嬉々として踏み躪る紅蓮。

「怪我人いたぶって楽しむとか、番号^{ナンバー}刻印^{イン}つてのは随分やる事がチンケじゃないと名乗

れないみたいね」

その矛先を変えさせるべく冴羽が嘲るように吐き捨てるが、彼の残忍な表情と余裕は崩れない。

「あゝゝゝ……悪いな、俺アどゝゝも羽虫の言葉は聞き取れなくてよ。なんか言ったか？カス女」

返されたその言葉に対し冴羽は、剣呑な眼光を向けながら立ち上がった。

「……雪華、楓さんが来るまでちよつと待つてなさい。アタシはアレブツ殺してくるか」

首を鳴らしつつ長剣を召喚した冴羽へと、背後から歩いて来ていた万丈が声を掛ける。

「俺が隙を作る。見逃すなよ」

「了解です」

眼鏡の奥から敵を睨み付けていた冴羽は、万丈に頷き返すと同時に目にも留まらぬ剣速でその刃を振り抜いた。

無属性攻撃術式

『藤堂一刀流・避天』ヒテン

放たれた魔力斬撃を、紅蓮は手刀によって力任せに叩き折る。しかし一瞬の陽動によつて生じたその隙を突き、全身を魔力で強化した万丈が突撃を仕掛けた。

屈強な肉体から繰り出される、重戦車の如き猛攻。射撃魔術のみならず近接格闘にも長けた『万能の術師』万丈を相手に、紅蓮は互角の肉弾戦を展開していた。

その背後から、高速移動で回り込んでいた冴羽の魔術剣技が襲い掛かる。

無属性攻撃術式

『藤堂一刀流・空吼裂』カラクサ

次々と繰り出される連刃を、紅蓮は見向きもせずに出した爆炎で迎え撃つ。そしてその上空から振り下ろされた澄香の剣撃をも、撃ち上げるような上段蹴りによつて叩き返した。

一人一人がA級魔術師を凌駕する程の戦闘能力を誇る、東帝教員陣。その彼等を相手取る紅蓮の力は、協会のS級最高戦力に匹敵するとされる番号ナンバー刻印の名に相応しい圧倒的な“脅威”だった。

そして三人を軽々と吹き飛ばした紅蓮は、その歪んだ笑みをスタジアムの観覧席へと向ける。

「俺に氣イ取られてるよオだが……ザコ共の方は留守で良いのかア？」

最悪のテロリストによる急襲を受け、逃げ惑っていた生徒達へと——炎の砲弾が撃ち込まれた。

しかし砲撃が迫る様を目の当たりにしながらも、冴羽達に一切の焦りは見えない。

次の瞬間、紅蓮の炎は突如出現した『氷』に阻まれる。

多くの生徒が残されている観覧席を業炎から守ったのは、戦場の周囲全方向を遮断するように構築・展開された巨大な防壁だった。

紅蓮の超威力の術式を封じ込める大氷壁を一瞬で創り出したその青年は、普段通りの眠た気な声と共に姿を現す。

「三人とも下がってなよ。……コイツとは俺がサ一対一シでやる」

「ああ？……なんだアテメエ……」

日本魔術界に於いて、”天才”と謳われる魔術師の一人。久世 宗一は澄香達の横を通り過ぎると、怪訝そうにこちらを睨みながら首を傾げる紅蓮と対峙する。

そして両者が同時に解放した、強大な属性魔力が衝突した。



「師匠!!クソツ、開けろ!!」無事ですか!!師匠!!」

「ステイーブさん!!落ち着いて下さい!!」

紅蓮の強襲を受け重傷を負った蒼の姿を、観覧席から目の当たりにしていたステイーブ。師を助け出すべくフィールドへ飛び降りようとしていたが、冷静さを欠いている彼を伊織が羽交締めにして何とか抑えている。

久世が創り出した大氷壁は緊急時に備え予め待機状態で展開されていたようで、その術式硬度はステイーブの斬撃でも一切傷付ける事が出来ない程の代物だった。

そこから少し離れた場所では、千聖と奏が生徒会を指揮して避難誘導を行っている。

「一瞬しか見えなかったが、あの男……!!」

「うん……間違い無い。あの『紅蓮』とかいうテロリストだよ……!!」

氷壁の向こう側で、久世達と交戦しているとされる『侵入者』。以前工業地帯で遭遇したその男の桁外れの強さを、二人は鮮明に覚えていた。

「……心配なのは分かるけど……今は楓先生と未来を信じるしかない」

「そう、だな……」

重傷を負っていた蒼と雪華の身を案じる奏だったが、冷静な千聖に諭され自分達が為すべき事を再認識する。

一方でハルや絵恋などの生徒会メンバーに帯同していた天音は、彼女達とは別の懸念に焦りを募らせていた。

(沙霧、春川……無事なんでしょうね……!?)



「なあ……なんか、変じゃねエか……？」

「あ？何がだ」

魔術師協会日本支部のビルの地下フロアに潜入していた、啓治と創来と沙霧の三人。アランと日向の合流を待つ中で、ある“違和感”を口にした創来に啓治が反応する。

「アイツらが遅すぎるのもそうだけだよ……ココ、人の気配が無さ過ぎねエか？」

「……まあ確かに、妙ではあるな……」

二人が一向に姿を見せない事に加えて、このフロアに入って一度も他の職員を見掛けている。人影すらも一切無い、不気味なまでに静まり返った長い通路を見渡していたその時。

「ッ!!……皇君、漆間君……!!」

その場に生じていた更なる異変に、沙霧が早く気付き声を上げた。

アランの幻術によって変化していた筈の、三人の外見が元に戻っている。その術式解除からは、術者である彼女の身に何らかのアクシデントが起こった事が推測出来た。

「……間違いなさそうだな」

「ああ……何か起きてんでコレ……!!」

根拠の無い不穏な胸騒ぎが、確信に変わる。最早疑いようの無い異常事態の発生を受け、三人はアラン達を探すべく動き出そうとした。

その時。

全フロアへ響き渡る轟音と同時に、ビル全体に凄まじい衝撃が走り抜けた。

◇◇◇

数分前。

魔術都市を覆う結界内部への物理的侵入という前代未聞の事態を受け、協会職員は皆が対応に追われていた。

侵入者についての詳細把握、現場付近の結界修復に忙しく動き回っている彼等は気が付かない。

—— エントランスに、ロープを纏った謎の人物が現れている事に。

フードを目深に被っており、その素顔は隠されている。

直後、何の前触れも無く——その身体から、爆発的な魔力波動が炸裂した。



意識を失った状態で、通路に横たわっていた日向。
足音が響く。

”誰か”が倒れ伏している日向へ近付こうとしていた、その時。

「——止まれ」

背後から掛けられた鋭い制止の声に、その人物が立ち止まる。

そこに立っていたのは、管理局魔術特務課の捜査官である本郷と柊だった。そして彼等の視線の先で振り返ったのは——奇抜な服装に身を包み、異質な魔力を纏った一人の道化。

魔術界の誰もが知る犯罪者——刻印結社の『JOKER』の姿がそこには在った。

「アレ？ 動ける戦闘要員は全員『表』に出払ってると思ってたケド……」

「オレ達は遊撃だ。万一内通者^ブがコツチに残ってる可能性を考慮して待機してたんだよボケが」

拳銃の銃口を向けJOKERを睨んだまま、油断無く声を返す本郷。

「何が目的で、どうやってここまで侵入して来たのか……洗いざらい吐いてもらおうぞ」

その隣では柊が、無数の射撃魔術を待機状態で展開していた。僅かでも動きを見せれば即座に術式を起動し制圧する構えを取っていたが、JOKERは一切焦る様子も無く悠然と語り掛ける。

「フフ……まアそう急かしなさんなつて……まだ少し時間がある。キミらが今、一番気掛かりなコトを一つ教えてあげるよ」

「あア……?」

怪訝な目を向けて来る二人に対し、依然としてJOKERの余裕は崩れない。そして道化は——その不気味な仮面へと手を掛けた。

色鮮やかな面が、音を立てて床に落ちる。

「ツ……………!?!」

「お前……………!!」

その人物が自ら明かした『正体』に、本郷と柘は瞠目し言葉を失っていた。

露わになった、その素顔は——

——薄く笑う、風切アランの物だった。

第51話『幻炎、鬼王』

道化の仮面を外した”その人物”を、本郷達は知っていた。

「風……切……!?!」

「ふふっ、やーっば——だーれ、も、気付——かなかったねー。これまで起こったおかしなコト、実はゼーんぶアタシの仕業でしたー??」

青年のような声が、雑音ノイズの後に少女の物へと変化していく。

そこに立っていた『JOKER』——『風切アラン』の言葉に、依然として銃口を向けたまま本郷が異を唱えた。

「ちよつと待て……この一年、各国で起こった魔術戦闘の現場でお前の姿は目撃されて来た。風切——お前はその期間、学園に居た筈だろうが……!!」

世界各地で魔術関連の事件が起こる度に、姿を現していたJOKER。”彼女”の正体が東帝学園に在籍する生徒であったとするならば、その間のアリバイによる矛盾をどう説明するのか。

「本郷さんねー……肝心なコトを見落としてるよ」

その指摘に対してJOKER^{アラ}は、平然とした様子で嗤っていた。

「学生が内通者なワケ無いって、心のどつかでタカ括ってたつしよ。固定観念は視野を狭めるから良くないよね」

響く声と、新たな足音。JOKERの背後から姿を見せたのは、東帝の制服に身を包んだ一人の少女だった。その手には、炎のような紋様が入った仮面を持っている。

二人は知る由も無かったが、その仮面は天城鎧を扇動した魔術犯罪者『陽炎』^{ミラーージュ}の物だった。

「理解出来た？」

「……本物の風切アランなんて最初からどこにも居なかったってワケ」

新たに現れた、もう一人のアラン。

そして本郷達の視線の先で、二人の身体は融け合うように重なり合っていく。始めからそれが、在るべき姿であったかのように。

彼女が告げた言葉によって全ての『点』は繋がり、一つの答えが浮かび上がる。それは余りにも単純であったが故に、思い至る事が出来なかつた真実。（事実からくり）

——『風切アラン』は、独立し行動していたJOKERの分身だった。

番号刻印の入国幫助、情報流出による追跡捜査の妨害、獅堂の殺害未遂と風への捜査誘導。あらゆる工作を可能にしていたのは、アランの規格外の性能を誇る幻術だった。

「んじゃ、余興の種明かしもこの辺にしとこうか。ショーの本番は、まだまだこつからだからね♪」

「ッ、待てコラ!!」

そう言い残し、二人の捜査官に背を向けるJOKER。

叫ぶ本郷の隣では、その返答を待たず終が射撃魔術と拘束魔術を同時発動していた。しかし、術式がJOKERへ到達するより速く——

——凄まじい衝撃が、彼等を襲う。

異常な膂力で首を掴まれ地に叩き付けられたと二人が理解したのは、そのコンマ数秒後だった。

「がッ…………!!」

「ぐッ…………」

血を吐く本郷達の前で、JOKERを守るように立ち塞がる一人の影。ローブのフードに素顔は隠されており、その表情を窺う事は出来ない。

そこに立っていたのは、以前JOKERとと共に出現した正体不明の番号刻印。ナンバーズ

——『ゼロ』と呼ばれていた謎の人物だった。

「クソ…………何なんだあの野郎オ…………」

「沢村さんから報告拳がってたつしよ…………ナンバーズの内の一人つすよ。只者タダモンじゃねエコトだけは確かだ…………!!」

使用術式は不明であり実力の底は未知数だが、少なくとも管理局の精鋭二人を一切気取らせず叩き伏せるだけの戦闘能力を有している事は見て取れた。

「いやーナイスタイミング、助かったよゼロ。あ、任せて行く前に術式付与エンチャントだけお願い出

来る?」

軽々しく声を掛けるJOKERに対し、ゼロは一言も発さないまま片手を差し出す。そして魔力を集めたその手から、他者へと向けた強化術式を発動した。

光属性魔力×強化術式

『光速』

JOKERへと翳されたゼロの手から光属性の魔力が放たれ、速度強化の術式が施されて行く。

「ホイありがと。それじゃ、お二方……またいつか会おうね」

そして術式付与が完了するとJOKERは、二人に再度言葉を残すと未だ倒れ伏している日向へ歩み寄る。そして魔術によって手元に召喚した、一枚のカードを差し向けた。

その瞬間、日向の身体が光子状に分解されながらカードの内部へと吸い込まれていく。

「確保、完了つと……」

日向を取り込んだカードを手にしたJOKERは、全身から魔力を放出し上空へと飛び立った。ゼロに強化された移動速度によって、瞬く間に天井を突き破り空の彼方へと

消えて行く。

「おいテメエ!!フザけんじゃね——」

追走しようとする本郷だったが、またしても強烈な一撃によって叩き飛ばされる。

「本郷さ——」

更に柵にも術式を発動させる隙すら与えず、視認出来ない程のスピードで蹴りを叩き込むゼロ。

吹き飛ばされた二人は通路の壁を突き破り、協会拠点ビルの最下層に存在する地下訓練場へと転がり込んだ。

「クッ……速過ぎんだろ……!!」

「光属性でしょうね……いや、問題はスピードよりあの威力っすよ……!!」

広大な空間に悠々と足を踏み入れたゼロに対し、本郷と柵は悪態を吐きながらも立ち上がる。

「速攻で倒して……取り返す……!!」

「了解……!!」

本郷は体表へ、柵は空間中へと魔術を展開し、迫り来るゼロの一撃を迎え撃った。



氷属性魔力×形成術式

『氷刀・陸連』
ヒタチ

氷の属性魔力によって創り出された、六つの刃が頭上から迫り来る。

叩き下ろすように繰り出された六連撃を、紅蓮は炎を纏った薙ぐような一蹴りで全て消し飛ばした。

「なんだ……もう万策尽きたかア!? オイ!!」

依然として余裕を崩さない紅蓮に対し、畳み掛けるように術式を撃ち込み続ける久世。

攻撃のみならず防御にも高い能力を誇る紅蓮の戦闘センスを前に、完全に攻め手を欠いている。しかし魔力属性の相性や生徒の避難完了及び増援が到着するまでの時間を稼ぐ為に、一対一で久世に任せるしかないというのが現状だった。

「……久世アイツの魔力が尽きたら、次はアタシが行きますよ」

「いや、時間を稼ぐなら俺の方が適正だろう。冴羽、お前はギリギリまで奴の能力を分析しろ。……必ず勝機はある」

「っ……はい、分かりました」

紅蓮の足止めを買って出ようとした冴羽だったが、戦況を静観したまま万丈が彼女を制する。

出来る限り敵の戦術カードを引き出し、最後に澄香に繋ぐ。勝利を捨てる気など微塵も無いと示す万丈に、冴羽もまた力強く頷いた。

しかしその時、久世の範囲術式を押し返した紅蓮が耳元のインカムに反応する。

『、——』

「……ああ、分かった」

何らかの通信を受けたと思しき紅蓮は、全方向へ牽制するように強力な熱波を炸裂させた。

「っ………?」

狙いが見えないその行動に警戒を強める久世だったが、戦闘を俯瞰していた澄香が一早く『それ』に気付き叫ぶ。

「久世口上だ!!」

その瞬間轟音と共に、上空から複数の人影が紅蓮の周囲へと降り立った。

咄嗟に魔力障壁を張り巡らせた久世に続き、僅かに遅れながら万丈と冴羽も更なる敵の襲来を察知する。蒼と雪華を守るように防御魔術を展開する彼等の前に現れていたのは、現代に見合わぬ”異様な”装備を纏った四人の『戦士』だった。

「よオ、邪魔するぜ」

最初に口を開いたのは、黒い短髪の東洋人らしき青年。目を引くのはその容貌よりも、全身を包んだ古代ローマ兵のような『甲冑』だった。

刻印結社の構成員であり紅蓮の部下でもあるその男——『ウォーリアー剣闘士』に続いて、新たに二人の人物が声を上げる。

「成程……此処がこの国の魔術師の養成機関か。至る場所から若き戦士の気配を感じるな」

「やーめとけつて。ガキと遊びに来たワケじゃねエんだぞ?」

興味深そうに周囲を見回していたのは、斧や槌の意匠を落とし込んだような奇妙な形状の全身フルプレート鎧の男。呆れながらも彼を諷めていたのは、吟遊詩人のような装衣に身を包み

巨大な笛らしき武装を背負った人物だった。

名を、『武闘家』と『笛吹男』。彼等もまた、紅蓮が率いる部隊に属する刻印結社の構

成員だった。

剣闘士とは異なり、武闘家は頭部装甲で、笛吹男は帽子と仮面によつて素顔を隠している。

そして最後の一人は、一言も発さないまま不気味に沈黙を守っていた。

藁のようなマントと帽子を身に付けており、顔を隠す布に書かれているのは——
『へのへのもへじ』の文字。

一際異質な存在感を放つ謎の人物の名は、その形姿を最も端的に表した言葉——

『案山子』、だった。

「……やっぱコイツ連れて来たのは失敗じゃねエか？ 一人だけ世界観がファンシー過ぎて敵さんがビビってくんねエよコレ」

「見てくれに關してはオメーも大差無エだろうが」

「戦闘力以外の要素など尽く些事だろう！ お前もそう思わないか？」

「……………」

笛吹男の所感を剣闘士が切つて捨てている隣では、熱く思いの丈をぶつける武闘家が案山子に完全に無視されている。

「何コイツら……………」

冴羽は怪訝な目を向けていたが、四人の向こう側で紅蓮は唐突に久世に背を向けた。

「……………逃げんのか？」

「ハッ、ほざいてろ。……目的はとつくに果たした。もうテメエらに付き合う理由は無エんだよ」

久世の挑発に対し、紅蓮は鬱陶し気に声を返す。

「何だ、気付いてなかったのか？お前らは今までコイツを足止め出来たワケじゃねエぞ。ヒマを潰す為にお前らで遊んでただけだ」

分かったかバカ、と嘲るように言い放ちながら、紅蓮の後に続き歩き出す剣闘士。

「JOKERは上手くやったようだな」

「ああ、ターゲット標的は捕えた。後はとつととズラかるだけのラクなミッション任務だ」

武闘家と笛吹男の会話を聴き取っていた澄香は、瞬時にある仮説を立てる。もしその推測が正しければ、想定を遥かに超える最悪の事態が既に起こっている可能性があつ

た。

『——白幡、聞こえるか』

「つ、学園長？聞こえてますけど、どうしました？」

唐突に通信端末から聞こえて来た澄香の声に、僅かに驚きながらも千聖が反応する。

『御剣と藤堂、それから春川。この三人は今どこにいる？』

「すぐ確認します……!!」

千聖は生徒会に所属する全生徒へ即座に指示を出し、魔力知覚による搜索網を形成した。

「伊織と天音たちは目の届く範囲に居ました。ただ——」

結果として、澄香の予感は的中する。

「——日向が見つかりません。多分学園の敷地内には居ないと思います」

切迫した状況下で発生した、日向の失踪。

報告を受ける澄香の視線の先では、剣闘士が全てを見透かすかのような笑みをこちらへ向けている。その表情を目にした瞬間、彼女はこの襲撃者達の目的と意図を理解し

た。

「クソ……そういう事か……!!」



協会ビルの地下訓練場にて、侵入者セロに応戦していた本郷と柊。しかし、管理局屈指の実力者である彼等を以てしても——覆す事の出来ない、絶対的な戦力差がそこにはあった。

「オイ……まだ生きてつか……」

「えエまア……辛うじて……」

度重なる過剰強化によって、本郷の肉体は限界に近付きつつある。その後方では強力な術式を連発していた柊が、鼻血を出しながら片膝を突いていた。

一方で二人と相対するゼロは一切のダメージを負う事無く、無傷のまま平然とその場に佇んでいる。

「コイツ多分……恭夜さんとタメ張るんじゃないスか？」

怪物揃いのS級魔術師の中でも更に、次元の異なる強さを誇る男。”彼”と恐らく同格と思しき規格外の力を、この眼前の敵も有している事を二人は感じ取っていた。

「つたく、毎度の事ながら……損な役回りばつかだな俺達ア……!!」

「でもまあ流石に、そろそろでしょ……!!」

しかし彼等の表情に、窮状を感じさせる焦りは見えない。その笑みの中にあつたのは、絶対的強者への『信頼』だった。

直後。

轟音と共に天井を粉碎しながら、一人の人物が地下訓練場へと降下して来た。

「遅くなった……生きてるな!? 正、俊哉!!」

猛々しく豪快な声が、空間に響き渡る。鍛え上げられた体躯に荒々しいオーラを纏つたその姿は、偉丈夫と形容するに相応しい。

協会内の級位に於いて、唯一ランキン順位制度が導入されているS級。その決定基準は、魔術師としての純粋な『実力』と級位取得後に認められた『実績』の二つによる総合評価である。

そしてS級ランカーウイザード魔術師である、その老年の男の序列順位は——

”1位”。

魔術界の頂点に立つその男の名は、鬼龍院 王我。

紛う事無き”世界最強”にして、『鬼神』の異名を持つ魔術師である。

「あと何分か遅かったら死んでましたよオレら。何してたんスか？」

「あー悪かった、何人か崩落に巻き込まれたのを運んでな。オマエらも出る時氣イ付ける」

半壊状態のビルから、怪我人を担ぎ出し救助していたと終に応える王我。

「内通者は風切でした。アイツの幻術に出し抜かれた結果このザマです。それと……春川日向の身柄ガラを持ってかれました」

「ハツハツハ、結構面倒なコトになってんなア!!やるじゃねエかアランの奴」

「どの辺が笑い事なんスかね……」

険しい表情で状況を伝える本郷だったが、その報告を王我は豪快に笑い飛ばした。

「やる事ア分かってんなお前ら。『表』で人員かき集めて、まずは何としても日向を奪い返せ。そしてその後ハ——」

魔術によつて手元に召喚した大太刀を担ぎ上げながら、王我は獰猛に笑みを深める。

「——この^俺国^達に喧嘩売つて来たカス共を、一人残らず叩き潰せ」

「ウス」

「了解……!!」

動き出す本郷と柊。そして渾身の力を以て、その刃は振り下ろされる。

「よオし、行け!!」

叫びと共に叩き付けられる、王我の一刀。巻き起こされた煙と塵芥が、瞬く間に視界を埋め尽くす。

しかし——繰り返された一撃は、ゼロによつて掴み止められていた。更に次の瞬間、その手に掴んでいた刀身を砕き折る。

やはりその力は圧倒的かと思われたが——直後、ゼロの姿が一瞬で掻き消える。そして遠方の壁際から聞こえて来る衝突音。

地下訓練場の端から端までゼロを吹き飛ばしたのは、王我が放った正拳の一撃だった。

”速く”、”硬く”、”重い”。その『剛撃』は、武装すら必要としない。魔術を構築せずとも、魔力を纏わせるだけでその攻撃威力は『必殺』の物となる。それが『鬼神』鬼龍院王我の、戦闘能力の根幹だった。

「成程なア、大方恭夜アイツの読み通りだ。物質破壊アヒリティマジックの特殊魔術ってトコか」

以前ゼロと交戦した恭夜から、その術式についての推測を聞かされていた王我。折れた大太刀を放り捨て、拳を鳴らしながら歩き出す。

「久々に本気で遊べそうだ……お互い、楽しもうぜ」

瓦礫の中から起き上がりつつ、嗤う王我と対峙するゼロ。

激突した魔力が、爆発的な衝撃を生み出した。



「――魔術管理局魔術特務課・本郷正、柊俊哉兩名より魔術師協会全エージェントへ通達。

現時刻を以て風切アランの魔術師資格並びに権限を剥奪、及び当該者を拘束対象とする。

以降、春川日向の奪還・保護を最重要目標として行動せよ――」